女鑑

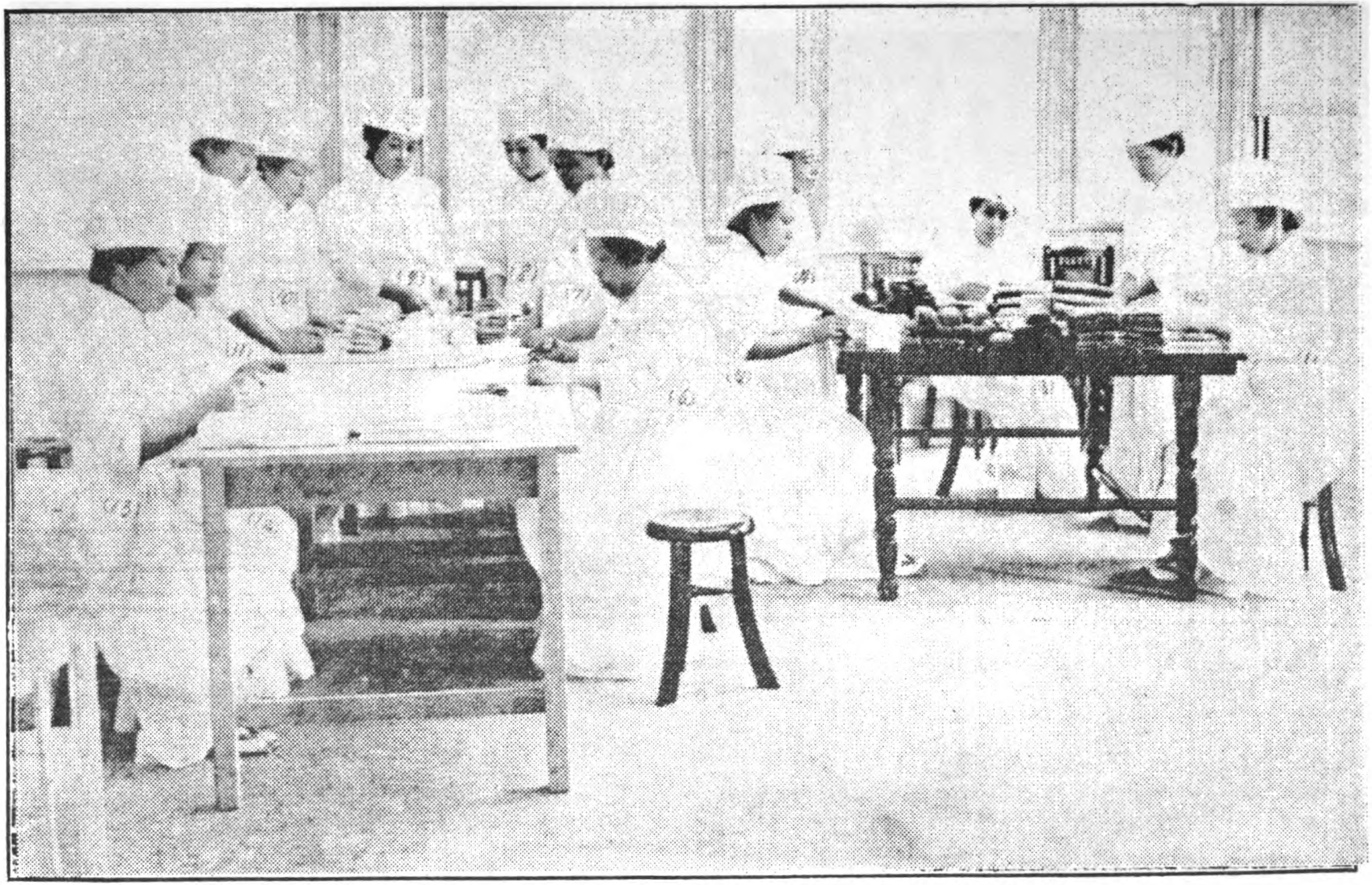



東京日本橋駿河町
三井呉服店
大坂高麗橋三丁目
地方よりの御註文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送仕る可く候尚ほ註文御案内書は御一報次第御送り可申上候
一切の商品は店内一面に陳列致し置候に付き御立寄り御縦覧被下候樣奉希上候

女鑑 第拾四年第九號 目次

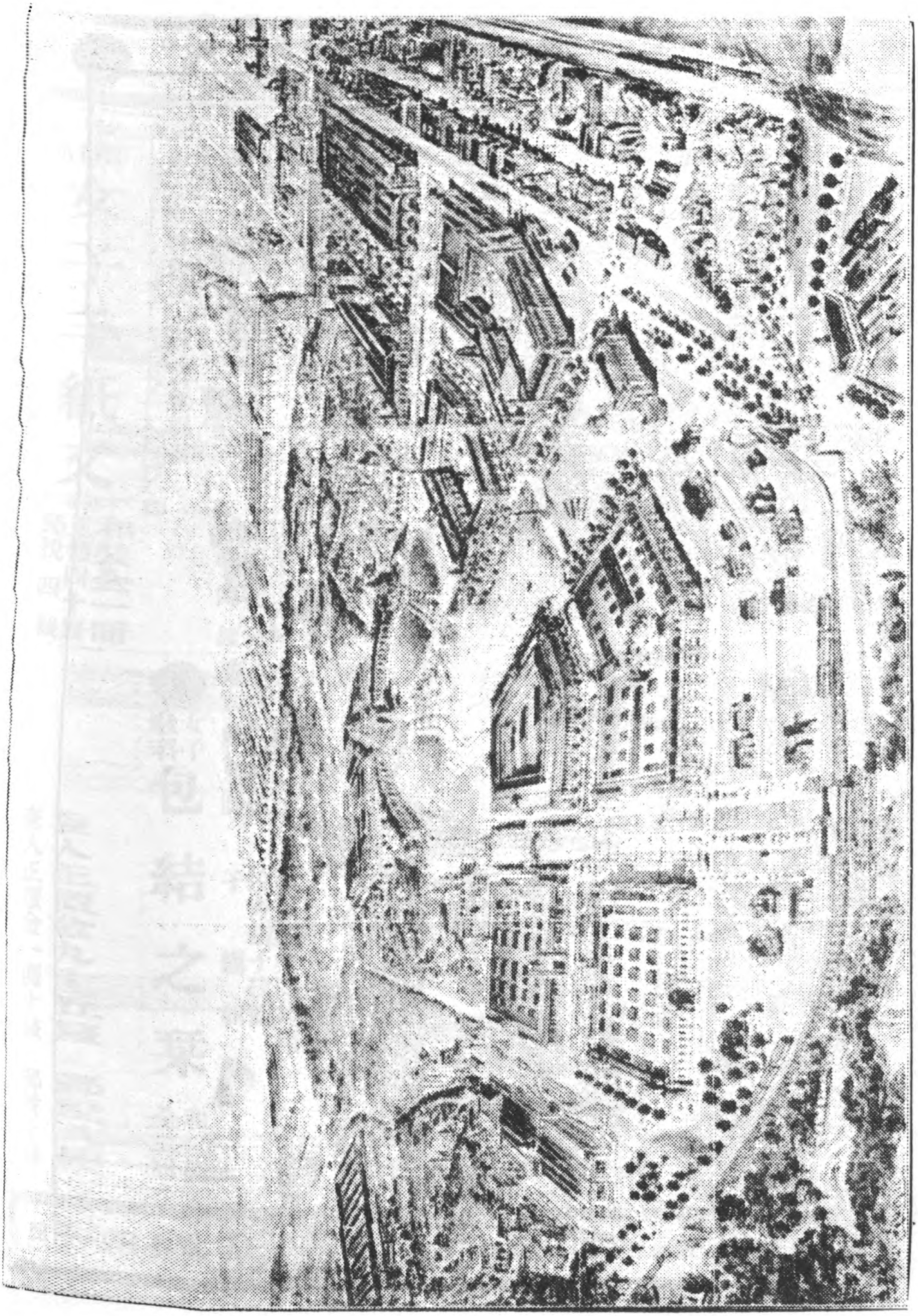
口繪

1 柳勝子 2 成田郷子 3 酒匂治子
4 子爵夫人山口谷子 5 久次米輝子 6 新山雅樂子



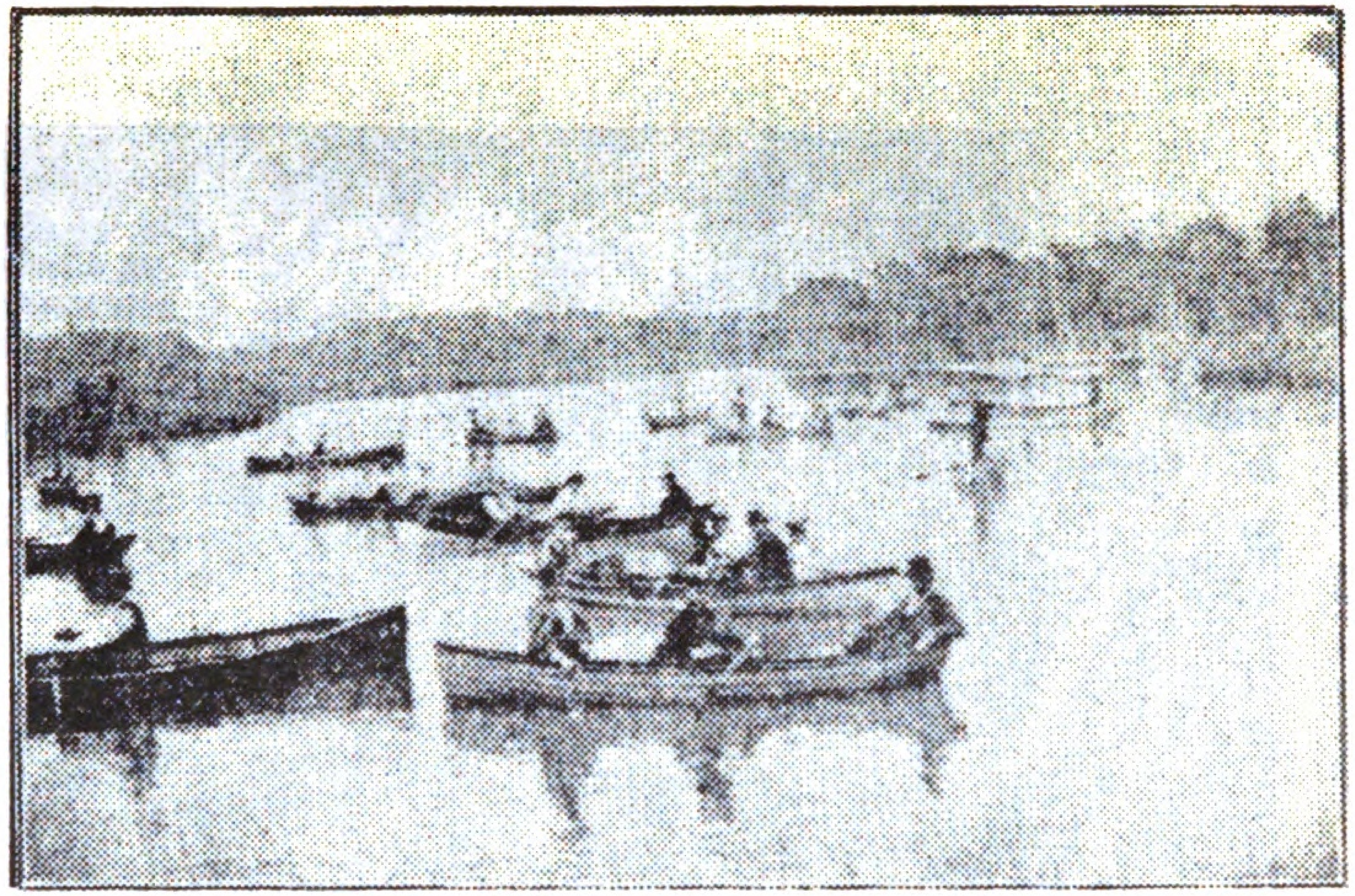
7 山上千世子 8 公爵夫人徳川泰子 9 侯爵夫人鍋島榮子
10 豊島文子 11 珍田岩子 12 足立小藤子
13 落合信子

篤志看護婦人會に於ける貴夫人の事業

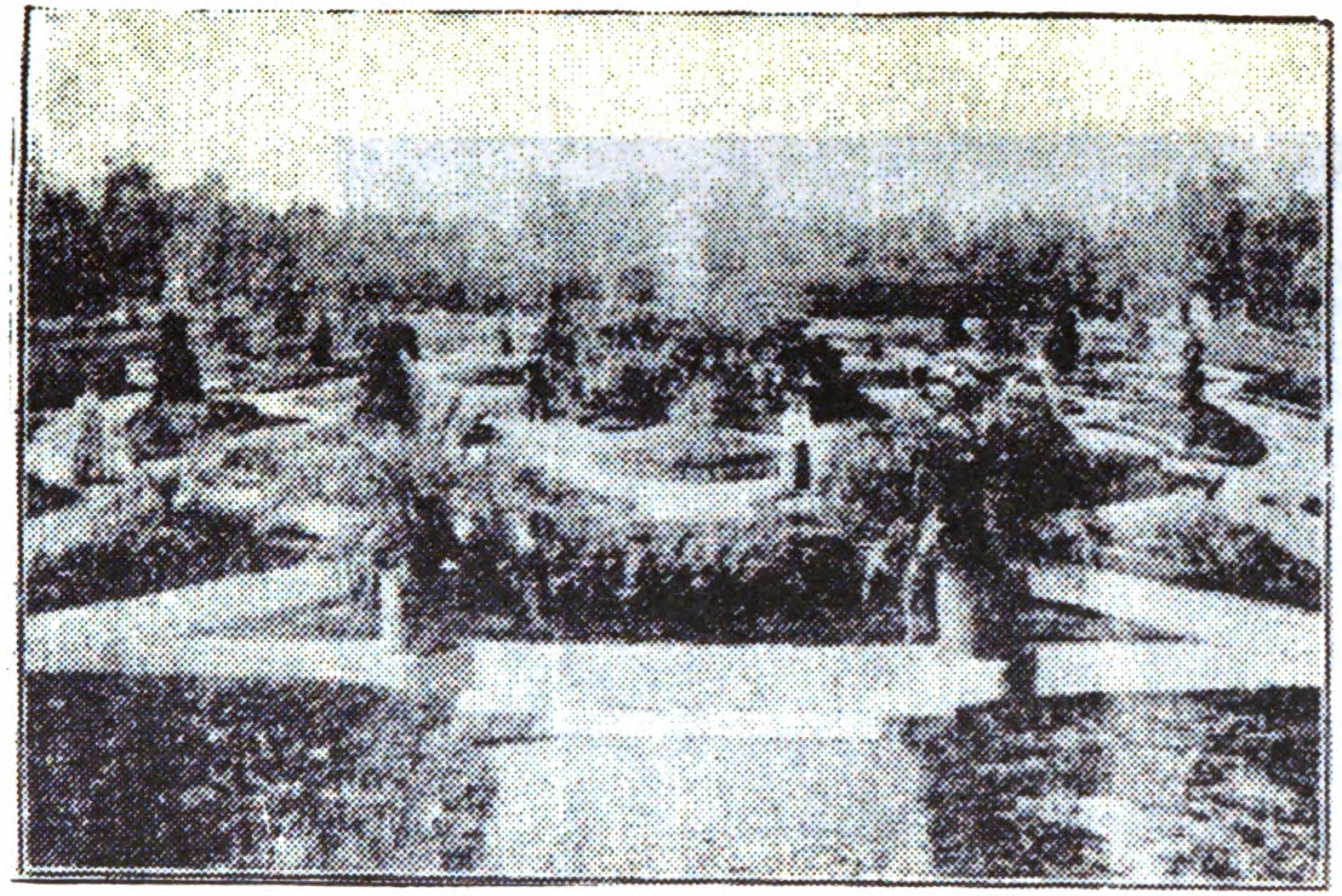




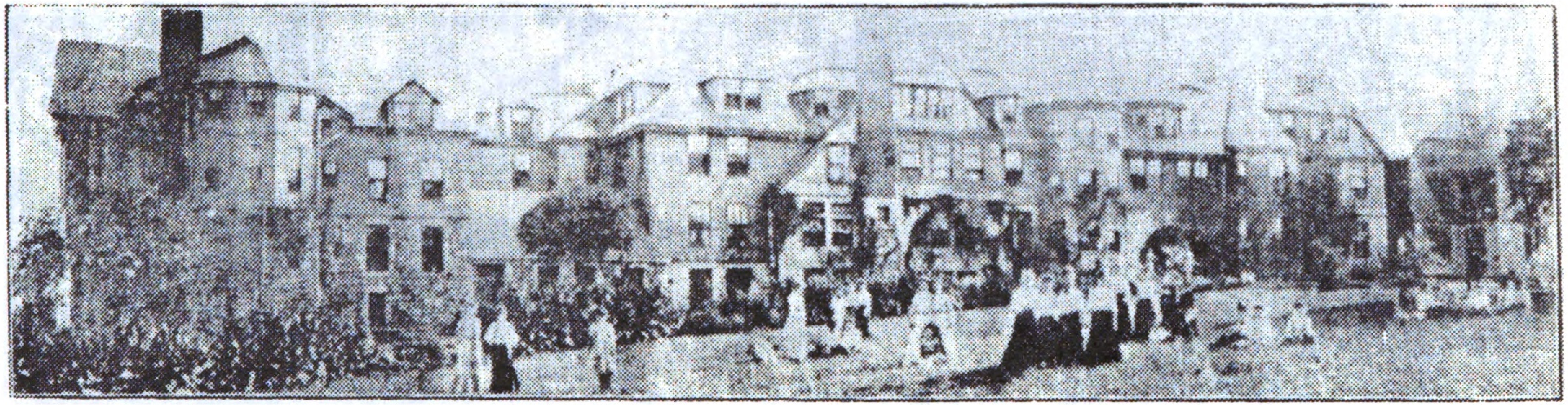
三輪田眞佐子刀自の家庭



聖路易フホレスト公園内の湖水



同シヨツ花園の景



同上フホレスト公園内女子大學校



島川陸軍大佐の家庭

のは一切採用せられざる筈なるも今回の申込に就ては特に詮議の上何分の挨拶に及ぶ由なり

拜呈私儀は帝國軍艦橋立乗組海軍二等兵曹島口一二の妻に御座候が島口事今回第三回閉塞船相模丸に乗り込み遂に生死不明と相成私事も愚夫が御國の爲め相勉め居り候折柄空しく消光致し居り候事は誠に不本意の次第に有之せめては看護婦とも相成奉公の萬分一なりとも申度存念に御座候間御採用被成下度切に奉懇願候敬具

○東洋婦人會と蒙古王妃　東洋婦人會は事業益々擴張せるを以て新に鍋島侯爵夫人を會長に推薦したるが蒙古王妃福晋殿下も同會の主意を賛成して今度入會を申込まれ且つ其事業費の中へ若干の金圓を寄贈せられたる由因に云ふ同會事業の概要は東洋諸國に廣く會員を募集する事、會館を設置して各國會員の音信、交詢、來遊等其他の便宜を具備する事、會館には客室及圖書室を附し四方來遊の會員に便じ又其共同智識に裨益する事、會報並に會の主旨に相應せる諸種の文書を出版する事、東洋婦人の福利と爲るべき諸種の研究を爲す事、東洋婦人の文化に裨補すべき學園及講話會を創開する事、留學生の爲めに諸種の便宜助力を與ふる事、會員以外と雖ども凡そ東洋婦人の遠來する者の爲に諸種の便宜を供する事、東洋婦人を代表して西洋婦人との交誼を計り世界女徳の圓滿大成を希圖する事、以上九種の事業に類し其主旨の目的に相應せるものは適宜着手すべきこと等なりと

○女子英學塾の美擧　麹町區五番町十六番地なる津田梅子女史の設立にかゝる同校にては此程來恤兵部へ献納せん爲めスコッチ製の腹卷五千個を調製しつゝあり右はスコッチ毛糸三オンスもて六十五の針目長さ二尺に製するものにて來六月十六日迄に製了する筈なるが同志の方は何人を問はず自ら來つて調製するも又金力上に寄附するも可なりと云ふ

○女子大學の養雞　日本女子大學に於ては本學期より實業部を新設し高級女學生をして實業を練習せしめんと先づ家庭的副業とも云ふべき養雞事業を試みん爲め小石川大塚阪下町の鹽田家禽場に委囑し同家禽場を摸範として十數個の雞舍を建設せしめたる由

○陋巷の孝女　京橋區鈴木町三番地森田方に寄留せる竹村きし子(十九歳)といふが孝行のことに就いては都下各新聞にも已も記せるところなるが麹町區有樂町一丁目土居香海氏が態々本社を訪はれて同女の行狀を物語られたるを聞くがまゝに詳記せんにきし子は三重縣士族竹村勗といふ人の女なるが父なる勗は明治十三年の頃一家を携えて上京し或時は官衙に仕へて書記となり又た會社の事務員など勤めしこともありしも兎角災難不幸のことのみ打つゞき家計最と困難を極めければ僅かの俸給にては家運の回復覺束なしとて飲食店を開き又た下宿屋業を營みしこともありしも馴れぬことゝて忽ち失敗し彌が上に困難ます〳〵加はりけりさる程に泣面に蜂の譬へに洩れず父三畏は久しく病に伏して醫藥の料の重みし末遂に黄泉の人となりしのみか妻わさは一女を産みたる後故ありて間もなく離縁となり後妻ひさは難産の末返らぬ旅路へ赴きければ重ね〴〵の不幸の爲め衣類を始め家財什具までも典賣し盡して一貧洗ふが如くなりけり搗てゝ加へて勗もまた昨年十一月より肺結核に罹りしさへあるに老母いか(七十八)は眼病にかゝりて盲目となり近ごろは肺炎に惱みて起臥自由ならざるに至りしはよく〳〵不幸の家といふべしされば初の程こそ親戚知人も見るに見兼ねて相應の救助もしたれ斯く長びきては力及ばざるが多く唯自然の成行に任するの外なかりき然るに女きし子は二歳の時生母に別れ八歳の頃繼母に別れて祖母と父との手に育ち別に教育など受けしことゝてはなけれど天性柔順にして善く親に事へ祖母を看護するなど幼き頃より早くも近隣の評判となりけるが今は恰かも妙齡十九歳大方の女子は髮の飾よ衣服よと立騒ぐが常なるに左る浮きたる樣は露程もなく頭は蓬の如くなれども梳らず顏は垢に充つれども浴みする暇なく兼て心臟病に苦しめるにも拘はらず身を棄て心を勵まし晝となく夜となく常に父と祖母との枕邊を去らずして介抱至らざるところなく又た洗ひ濯ぎなど家事一切を親らせるのみかその間隙には軍用ビスケッ

ト入れの紙袋を張りて百枚二錢の手間賃を取て醫藥の料となすなど其行狀洵に感ずるに餘あれば知るも知らざるも聞くものみな袖をしぼりて哀れまざるはなき内にも芝區琴平町の醫士仁保氏の如きは日々に往診して懇ろに治療を施し居れりといふ德孤ならず必らず隣ありとかやさし子の至孝大方の仁人の省みるところとなりてあはれ病父の一命救かりて祖母また餘命を繋ながんには孝女の悦びは之に優るものあらざるべし

○軍國の束髪　戰後の流行にて一番目立つものは婦人の束髪頭なり同じ束髪を結ふにも夫々心懸けの違ふ所あり某留守師團の下に在留さるゝ或大佐の夫人は今年二十八にて美人の評判高きが緑の髪の美しきを惜氣もなくグル〳〵と束ねて居らるゝを見或人がこれでは折角のおぐしがと言ふを待たで『イエ私の近處には大分軍人の奥様も被在いますが髷に結ふ方はお一人も見えません中には髪結錢を倹約して恤兵部へ獻納するといふお心懸けの奥様もおわんなさるさうですが私は夫よりも唯質素の誠心を持つといふ事に止めて置きました當節は海軍の方の軍港にても參つて見ますと束髪を派出に結んでさへ氣耻しい程で那處は一層軍人の奥様方の御心懸けが美しいさうで厶います何に致せ良人は海でも陸でも煙硝の煙で眞黑になつて働いて居るのですもの留主を守る妻は髪飾り化粧よりも尙大切な任務があると思ます』と語られし由なるが是等こそ軍事多端の際倹素を旨とする婦人の心懸といふべきなれ

○情の腕環　其名の分明ならざるが一入床しくも亦懷かしき心地ぞする我大御軍の幾度も戰ひて幾度も勝つを祝ぐ心最と深く又我將士の時には憂さも辛さも慰めばやの優しの思を西の方遠き印度のカルカッタより寄せて彼の四人の貴き婦人は王族タゴール氏の手を經て黄金製の腕環装飾品など數々を送りて我恤兵費中に其値收めてよとの事なりけり人の情は何國も變らざるこそ嬉しきものゝきはみなれ

○初夏と小兒の病氣

初夏となると自然氣候が不順になるので小兒など病に冒され安い市內でも殊に麻疹百日咳の流行は猖獗を極めて居るので此際小學校幼稚園等では一層注意を加へ少しでも發熱の氣味があるとか屢々目を擦するとか又咳き入る者には一層注意を加へて居るさうであるが是等の衞生法に就いて母親の心得となるべきものを云つて見ると痲疹は輕症なれば左して驚くべき病でない外氣に觸れぬ樣室內に靜臥させて置けば漸次發熱は降下するが重症にては發熱の爲め餘病を惹起し肺炎などを併發する事が多いから注意しなくてはならぬ百日咳は從來良藥に乏しく一歲未滿の小兒が此重症に罹ると咳が甚しき爲め乳を吐き營養の不足を來して疲勞性に陷り終に死に至ることがある左もなくば胸骨に異狀を釀し爲に步行する事さへ遲く發育を防げる事となる中には痲疹に罹つて百日咳を併發する如き事が往々ある斯は至極危險であるから親たる者は今日此頃の不順な氣候にはよく注意せねばならぬ

○露國女丈夫の遠征

哈爾賓車站の邊りに多數の武弁士卒相聚りて視線を那の一方に注げるあり諦視すれば即ち容姿端麗なる可憐の一少女驪駒に騎しつゝ車站の一遇に佇立せるなり渠れは身に離披たる輕裘を被り脚には長け高き革靴を穿てり衆相顧みて曰く女人の騎士なり騎士なりと偶々ノーウオ、ウレーミヤ新聞の通信員其前を過ぎたりしが同人を古昔の稗史小說中に女人にして戰亂の際自から進んで義勇軍に投せるもの往々之れあるを聞き渠れも亦必ず汗馬の勞を厭はす矢石を冒して名譽の場所に出陣せんことを志願したる女丈夫なるべき歟兎に角其實を質さんとて步を進めて渠れの馬前に至り其來歷を質したりしに左の如くなりしと云へり

少女名をアントニーナと呼び姓をトペローワと稱へワシリーエフ某の子にして歐露サラトーフ市の佳人なり渠は同地の某常中學を卒業し芳紀正に十九歲、

幼にして怙恃を失し零丁孤苦以て今日に至れりと會に我露國が日本に對し宣戰の詔勅を發表するやアントニーナ女は義勇奉公の念に驅られ慨然として是非とも壯兵の資格を以て遠征軍に加はらんことを希望せり會々其鄕里なるサラトーフ市より第三十六狙擊聯隊の第三大隊が極東の戰地に向ひ出征するを聞きアントニーナ女は其軍に隨はんとを請へり而して渠は素より煢々たる孤兒にして貧苦の中に生育したるものなれば發するに臨みて身邊復た一旅具を携へず左るにても渠れは其意志頗る堅剛にして動かすべくもあらざれば飄然馬に騎りて鄕關を出でたり然るに各地より會集せる露國の梯隊は貝加爾に於て一定の軍紀に循ひ進行せざるべからざるととなりたればアントニーナは一には一旦己れが身を託し其庇護に預りたる第三大隊を離るゝに忍びず一には旅行に利便なる馬車を賃借するの餘資なきより大膽にも兵卒と相伍して貝加爾を徒涉して跋涉することに決意せり是に於てアントニーナは征途に上りしが不幸にして其四十二露里の行程を通過する間は天候常に險惡にして寒氣殊に凜烈たり加之ならず飛雪繽紛として其紅顏を撲ち朔風獵々として蜷攣を拂ひ途上の困難言ふべからざるものあり況んやアントニーナは卒伍より輕き毛裘を以て其軟骨を被ひ襯衣を以て弱脚を纏ふに於てをや恪の如くアントニーナは備さに梳風沐雪の辛酸を經歷したるに格別の故障もなく哈爾賓に到着するを得たり然るにアントニーナは身に取りて玆に一大恨種を生ぜりと云へるは遠征軍の梯隊は渠れを哈爾賓より以東に同行するを許さゞるとなりてアントニーナは同所より再び歐露の鄕里に歸るか否らざれば哈爾賓に駐まるか孰れかに決するの已むを得ざる場合となりたればアントニーナは一旦志を決して義勇隊に別れ千軍萬馬の間に馳突して勁敵を披靡せしめんとの初心を飜へし驍勇を劍戟砲彈の間に振ひて百分の一にても武功を樹てんと欲せば壯圖を棄て野戰赤十字社の看護婦たることに決心したり然るに看護婦たらんとせば必ず何等歟の衞生部隊

に隷屬し而かも其姓名を編籍簿に公然登錄せざる可からざるの規定あれはアントニーナは資格其他入隊の手續等に關し又看護婦たるを得ざるべしとのことゝなれり

是に於てアントニーナ孃は今や俄かに一身を託する所なき天涯絕域の遊子となり其身跡恰も浮萍の岸際に漂へるが如し渠れ既に貝加爾行路に於て備さに跋涉の艱難を嘗めり而して今は復た遼遠なる他鄕に至りて一知己なく一哥なき苦境に陥れり玆よりアントニーナ孃は意氣日に揚らず見るものをして宛から愁雲其の眉尖を閉ざし悲火其心頭に燃ゆるの想あらしめたり適々嚢に孃が從ひ來れる第三十六大隊の或る士官は其境遇を憫察し哈爾賓駐在の赤十字社なる衛生部隊に入勤のことに百方盡力したりと聞たるが孃は不日同地より極東の或る野戰病院に向け出發すべき筈なりと云へり

○戰捷紀念簪　今回京橋區尾張町白牡丹本店に於て發賣したる戰捷紀念簪四種の內殊に日英米三國同盟の意を寓せしものは最も意匠嶄新にして精巧の品なれば賣行き最もよしと此四種はいづれも純銀にて製造し金色及び七寶を配合せし優美なる品にて束髮ピンの普通前差しに兼用する至極便利なる簪なり

○女子高等師範學校　今般校則第八章に基き私費數學、物理、化學專修科を開設し修業年限は二ケ年二學期にして官公立女學校卒業生及び之と同等學力を有する者より試驗の上入學を許し便宜實地教授法を練習せしむる由志望の者は來る八月廿五日迄に願出べしとなり

○篤志看護婦人會　同會は去十七日午後二時より赤十字病院內に於いて開會伏見若宮、梨本宮、久邇宮、山階宮等の各妃殿下を始め奉り鍋島會長以下百五十四名出席し足立軍醫監の病者看待法の講義ありたる後指頭人字帶の復習を爲し同六時過散會せり當日は英米貴婦人の參觀もありて近來の盛況なりき

（右六月十八日〆切）

新刊批評

△日露戰爭少年讀本(卷之壹) 特に少年の讀物にとて解し易き文章を以て開戰以來の事實を歴史的に記したるものにて處々に逸事軍歌などを挿み戰爭に關する挿繪なども入れたり口繪には重なる海陸軍人の肖像、軍艦及び地圖等ありて時節柄少年の悦ぶ讀物なるべし(定價十四錢京橋區銀座四丁目々々々堂書房發行)

△家庭日用理科しるべ(松本高等女學校長井田竹治氏著)石鹸、牛乳、猫、金魚、電氣、秋の虫、米、菊、白粉、酒など家庭日常の物品を理科的に解說したるものにて頗る面白味あり有益にして且趣味ある家庭の讀本といふべし(定價三十五錢發行所同上)

△家庭十二ケ月料理法 割烹の大家たる赤峰一家の著述にかゝるものなれば其の價値如何は更めていふまでもなし編纂の順序の整ひ居るのみならず索引によりて何品にても容易に其の調理法を知るを得るの便あれば研究上の必要のみならず家庭用として必ず一本を備え置くべく料理界に於ける近來の大著作なり(上下二卷各定價五十錢日本橋區通一丁目大倉書店發行)

△日本女子大學校學報(第三號) 校長成瀨仁藏氏の卒業生に告ぐの一篇は女子教育家の熟讀を要すべき價値あり西園寺侯爵大隈伯爵の講話中川篠田兩氏の講演また面白し文苑及雜錄には才媛達の傑作もありて往々感服すべきものあり但だ本誌の發兌が年僅に四回なるは惜むべしせめて隔月發兌とせられなば女子教育上の裨益更に大なるべし(定價一部十五錢小石川區高田日本女子大學校內學報編輯部發刊)

定價

一册	前金弐拾錢
三册三ヶ月分	前金五拾七錢
六册半年分	前金壹圓拾錢
拾弐册一年分	前金弐圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁 三十二行	金八圓
一頁 六拾四行	金拾弐圓
表紙二頁	金拾六圓

(色刷は特に御相談に應ず)

御注文規定

一切前金の事(但郵券代用一割增の事)●前金領收證は逐出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附ありたし

明治三十七年六月三十日印刷
明治三十七年七月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊業一

東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人 河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 株式會社 國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八番)

少年武士道史傳

菊判洋装各定價拾九錢郵税四錢

文學士 白河鯉洋著

五編 ●立花宗茂

▲飯沼珠城畫

碧蹄館の大決戰に於ける立花宗茂の働きは實に天魔破旬も面を向くべき樣なく、遂に大明五十萬の大軍を衝崩したるもの、實に宗茂の一條鎗の力と謂はざるべからず、本書は能く傳記實錄に據り該役の顛末を評記し、且宗茂が老後までの言行を細叙したれば、豐太閤に本多平八わり西に立花左近わりと賞讃せし武士道の眞髓を得たる英雄の面目紙上躍如たり

法學士 太田蒼淚著

六編 ●木村重成

▲飯沼珠城畫

大阪落城の歷史は、實に我國に於ける一の悲哀史なり、精忠日の如く、入つては幼主の傍に侍して群諛を鎭め、出でゝは老雄の陣に使して其膽を寒からしめたる重成は洵に城中の花といひつべし、其の貞淑艶美なる妻と華燭の典を擧げしより、名香をきき込めて、忍の緒を切りたる兜を戴き、從容として道芝の露と消えたるまでの悲壯淋漓たる經歷は、實に日本武士千古の典型たり本書文勢渾蓄く重成の面目を抽て、一讀悲憤の情に堪へざらしむ。實に少年必讀の好書なり。

文學士 中内蝶二著

七編 ●大石良雄

▲鏑木淸方畫

寛濶優柔、太平の世に馴れて酒色に沈湎し面に紅粉を施して、編笠越しに落花を詠じたる元祿武士の中にわりて、義を泰山よりも重んじ、命を鴻毛よりも輕んじたる、大和武士の精英は、鍾まりて赤穗四十七士となれり、松の廊下に血を濺ぎて、哀れ元祿十四年の春の花と亡せたる亡君の怨恨をば、同十五年の冬の雪に散じたる良雄以下の忠肝義膽は、三尺童子も知るところ、此書流麗の筆を以て華を撫り粋を拔きたれば、開卷忽ち落花粉々雪粉々の思わらしむ。

法學士 工藤重成著

臨時 ●藤田東湖

▲飯沼珠城畫

著者の東湖先生に私淑する茲に十餘年。「その言に曰く時てふ運命は遂に少年諸君をして、内閣總理大臣たらしめ、外務大臣たらしめ全權公使たらしめざるを得ず。これ予が政治家の好模範として近代の俊傑東湖先生を諸君に紹介する所以なり」と。既に此志を以て此の書を著す。又何ぞ字々飛動、句々活躍して、先生の眞面目紙上に現出するを疑はんや、弊社特に之れが發刊する所以のもの、亦聊か微志の存すれば也 乞ふ幸に一讀榮を給はらんことを

發兌元　東京築地二丁目　國光社

日露戰爭の正紀

幸田露伴監修

討露戰史

第貳編

定價 金四拾錢 郵税八錢 ● 菊版洋裝頗る美本參百餘頁

◉ **口繪** 我陸海軍の四皇族 ● 當局の三大臣 ● 征露軍の首腦 ● 時局の將軍 ● 東洋艦隊司令長官マカロフ中將と敗殘の旅順艦隊 ● 浦鹽市街 ● 軍神廣瀨中佐幷に其の遺墨

◉ **目次** 戰と詩歌 幸田露伴 ● 戰爭觀 阿多廣介 ● 嗚呼廣瀨中佐水丰靑眼 ● 吾が艦隊五たび旅順を攻擊す ● 吾が艦隊六たび旅順を攻擊す

◉ **旅順浦鹽大海戰記** ● 浦鹽斯德の大砲擊 ● 吾が艦隊四たび旅順を攻擊す ● 七星門外の戰 ● 博川江畔の戰 ● 定州南門の戰 ● 旅順口敵艦の全滅

◉ 附錄 **開戰前後內外の形勢** ● 總論 ● 歐米の外交 ● 列國の局外中立 ● 露國の海陸軍備と作戰計畫 ● 開戰後露國の形勢（其一）● 開戰後列國の評論（其一）● 開戰後露國の形勢（其二）● 日本人の露清韓引揚げ ● 日進春日兩艦の回航 ● 韓國の形勢 ● 清國の形勢 ● 西比利亞及滿州の形勢 ● 露國の通牒に對する我國の辨妄 ● 捕獲船の審檢 ● 軍資金の充實 ● 恤兵及び軍人掩護 ● 韓國特派大使 ● 帝國議會

◉ 本戰史の**特色**は**記事明確順序整正**恰も**歷史戰記**を繙くが如く**錯雜混亂**を讀んで要領を得ざる**雜誌類**と其撰を**異**にするは**第一編**を讀みし**各位**の熟知せらるゝ所也

發行所 東京京橋區築地二丁目 國光社

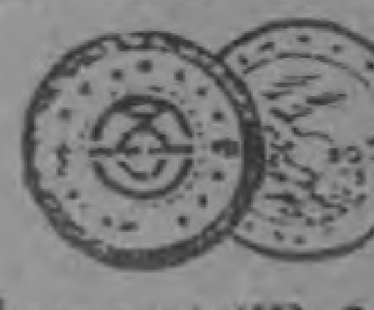
第五回內國勸業博覽會

銅牌幷に褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

五二會品評會功勞銅牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレット煉製
錫器附乳白硝子器入
壽美禮おしろい

壽美禮おしろい



●ねり製 定價 大壜二十錢 小壜十二錢

錫栓附乳白硝子壜入



ヴワイオレット水

水製 定價 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢

すみれ白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟體等を以て配劑しわるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顏肌等の色を白變せしめきめをこまやかに、にきび、そばかす、あせも等を生せず御肌へを清々しく天然の白色きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁長く保つが故宴會祝席雜踏い場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衞生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして其意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

●皮膚艶白劑壽美禮あらひ粉

●綠、藍、紅彩蝶畫ひボックス入三錢
鑵詰六錢五厘　袋入壹錢

●弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

●常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のねばりを取り油あかふけ等を生せず又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

●使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

登錄商標

洋色白くなろあらひ劑

SUMIRE.
WASHLNG IOWDER.

壽美禮あらひ粉



製造本舖

東京東兩國(兩國橋際)元町

伊勢吉壽美禮堂謹製

賣販所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

久遠
明治三十七年七月一日發行　毎月一回一日發行　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可
第拾四年第八號

東京築地株式會社國光社印刷

女鑑

毎月一回一日發行 明治廿四年八月創刊
明治廿六年三月二十四日第三種郵便物認可



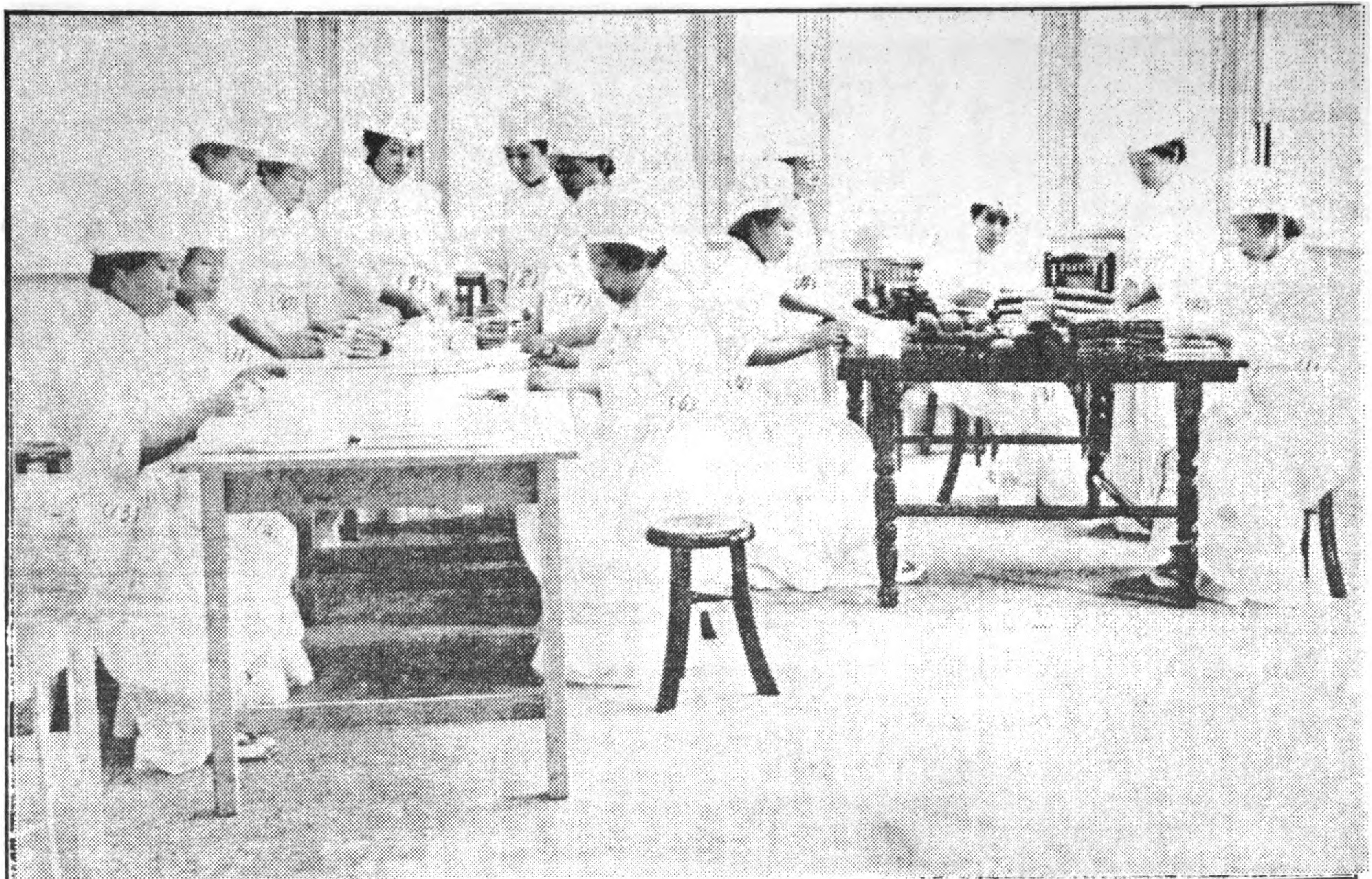


東京日本橋駿河町
三井呉服店
大坂高麗橋三丁目
地方よりの御註文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送仕る可く候尚ほ註文御案内書は御一報次第御送り可申上候
一切の商品は店内一面に陳列致し置候に付き御立寄り御縱覽被下候樣奉希上候

女鑑 第拾四年第九號 目次

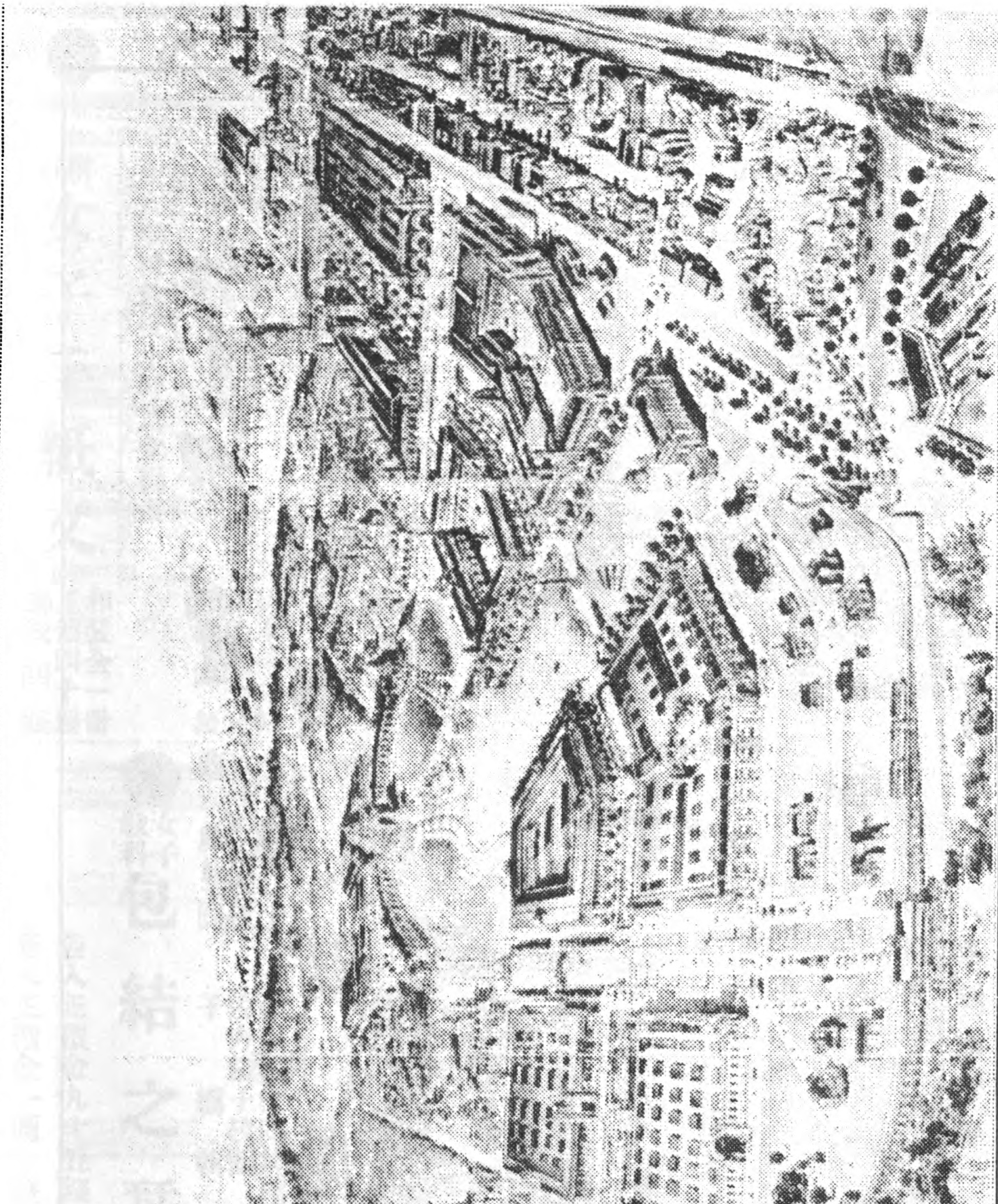
口繪

1 柳腰子 2 成田郷子 3 酒匂治子
4 子爵夫人山口谷子 5 久次米輝子 6 新山雅樂子



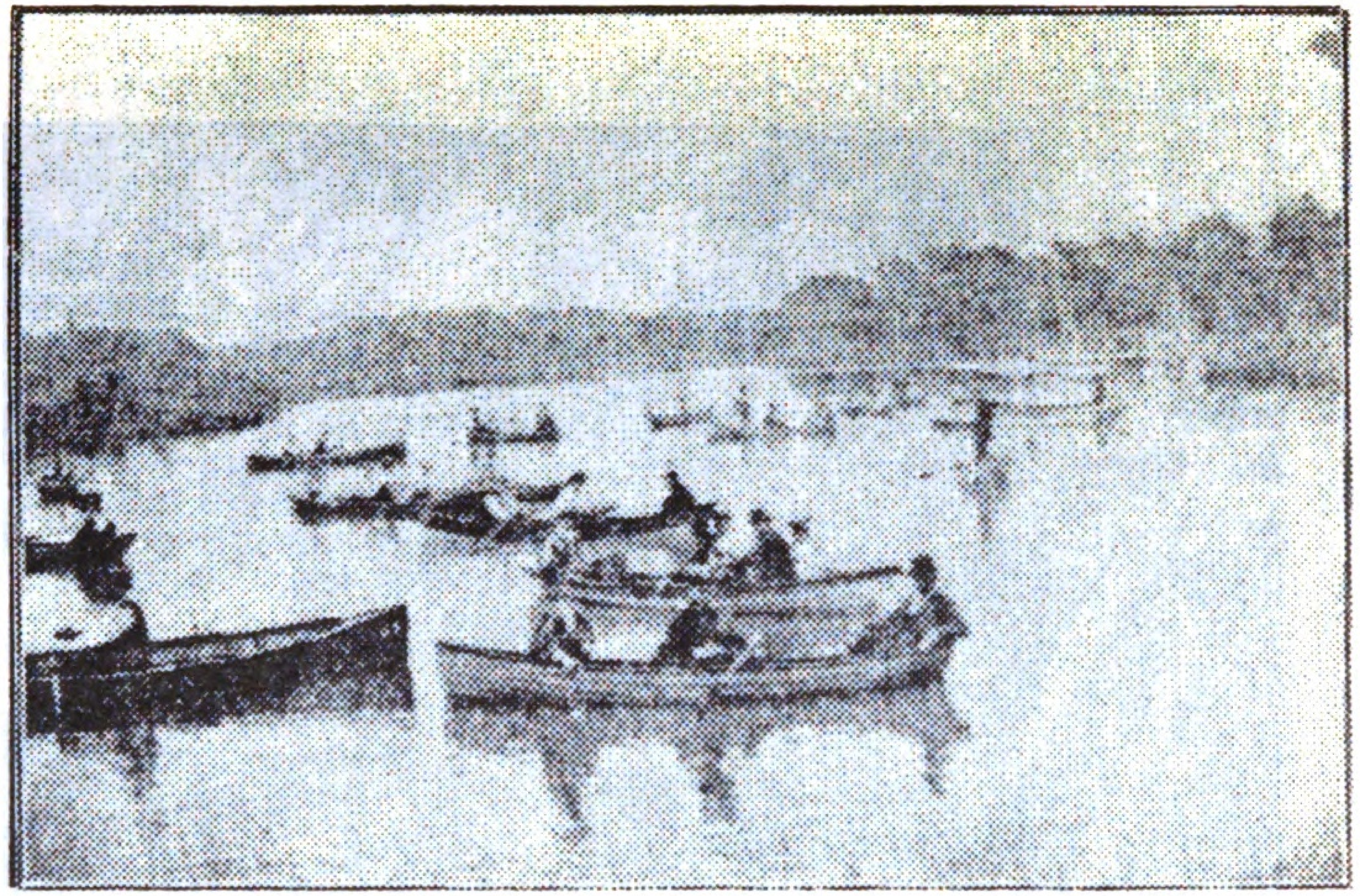
7 山上千世子 8 公爵夫人德川泰子 9 侯爵夫人鍋島榮子
10 豐島文子 11 珍田岩子 12 足立小藤子
13 落合信子

篤志看護婦人會に於ける貴夫人の事業

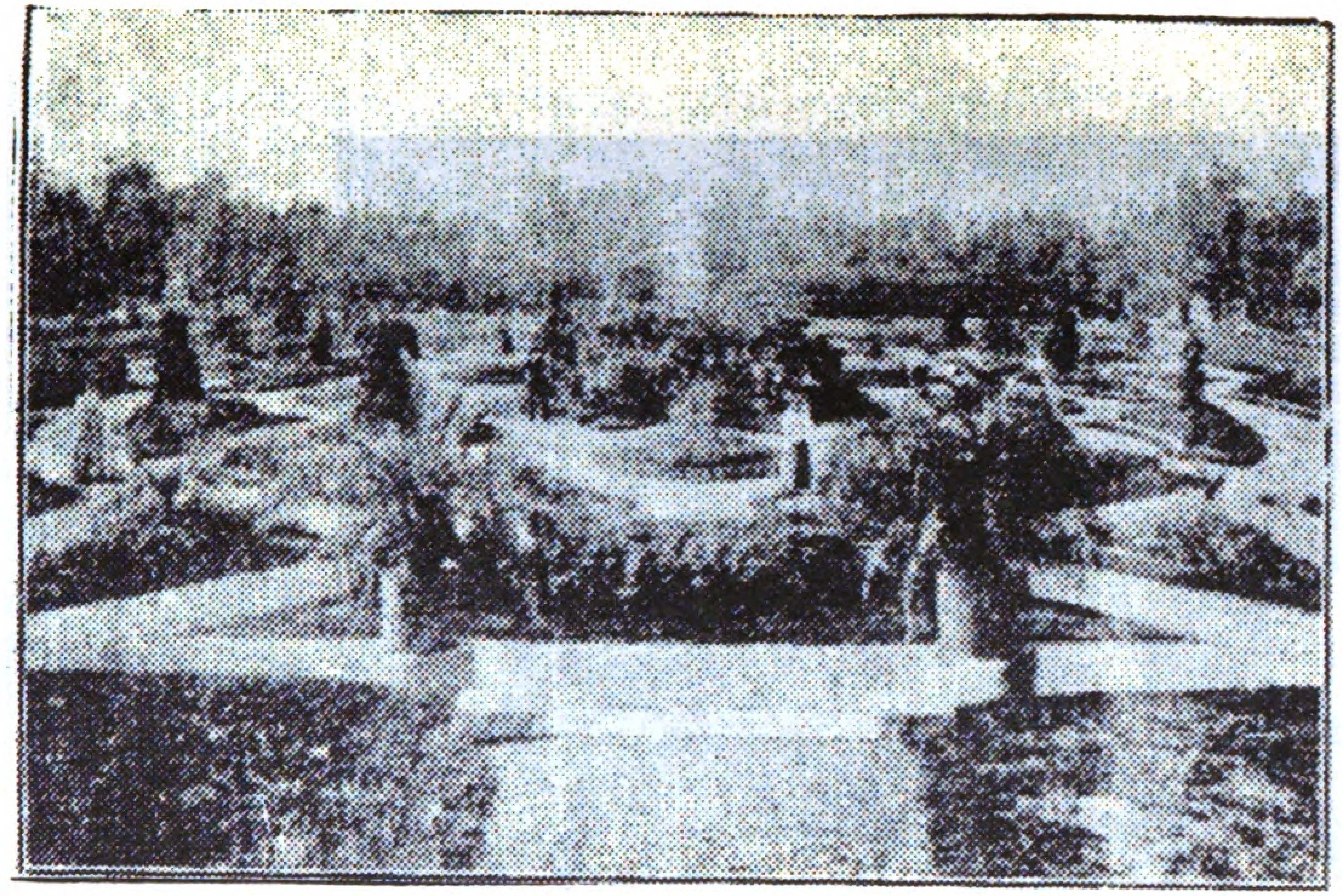




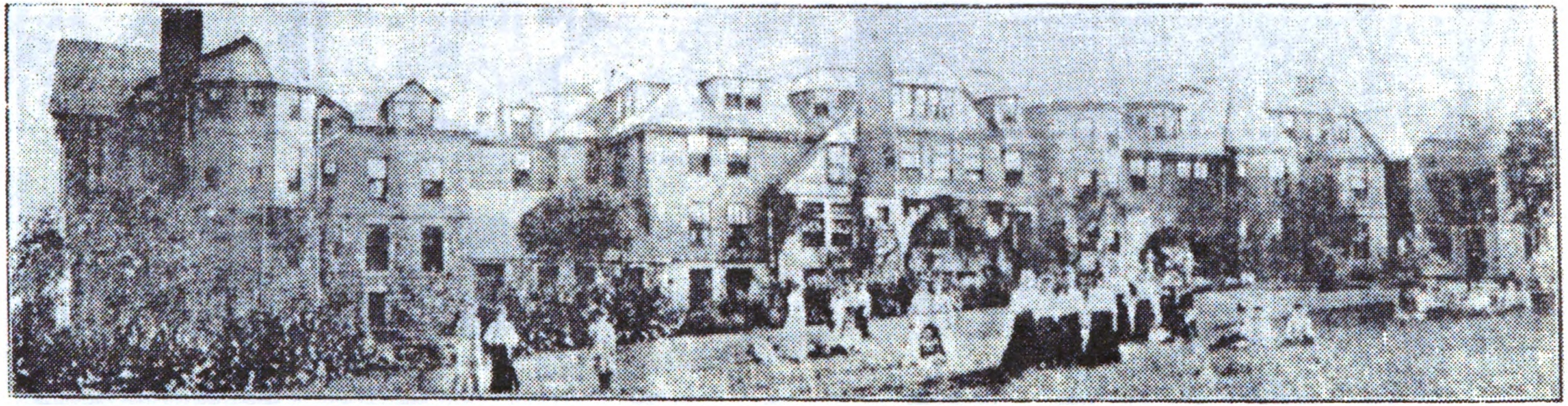
三輪田眞佐子刀自の家庭



聖路易フホレスト公園内の湖水



同ショウ花園の景



同上フホレスト公園内女子大學校

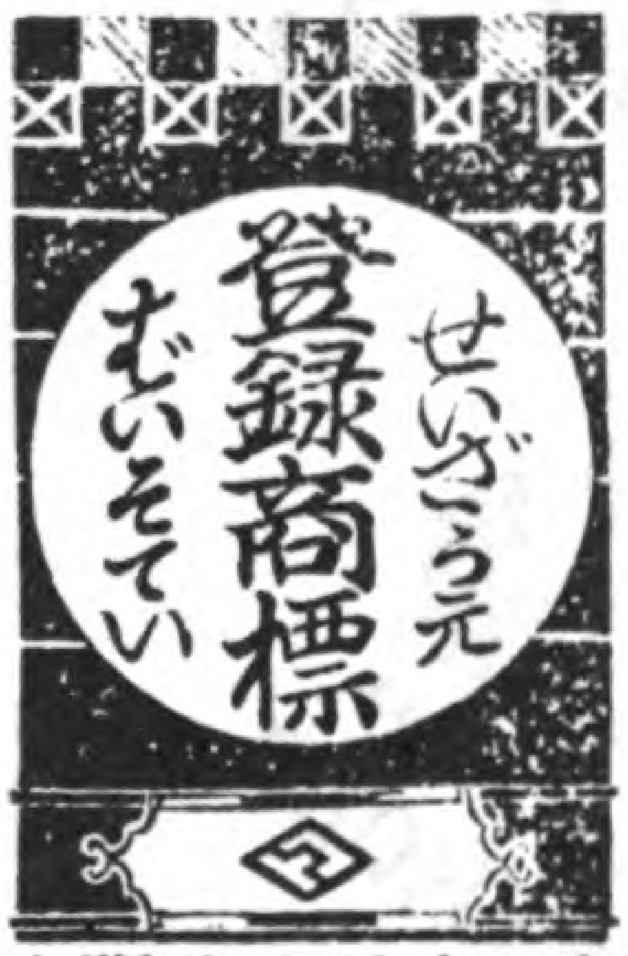


島川陸軍大佐の家庭

第五回博覧會

褒賞受領

定價 壹袋壹錢 罐詰五錢





此名題洗粉は皆々様の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の摸造品澤山顯はれ候に付弊舖製造品には袋の裏面に芝居櫓形の登録商標を相印し御座候間何卒御求の節は篤と御熟覧の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也

東京淺草區黒船町

梅素亭謹製

○夏期講習會教場規定

一開會場所（日本橋區平松町九番地赤堀教場 淺草區東三筋町廿七番地赤堀教場）

一開會期 八月一日ヨリ廿三日迄

○日本橋教場日本料理科一ノ組規定

一講習時間 日本料理科ハ月水金曜日ノ午前八時ヨリ十一時ニ至

○日本橋教場日本料理科二ノ組規定

一講習時間 日本料理科ハ火木土曜用午前八時ヨリ十一時ニ至ル

○日本橋教場西洋料理科規定

一講習時間 月水金曜日午後一時ヨリ四時ニ至ル

○和洋菓子科規定

一講習時間 火木土曜日午後一時ヨリ四時ニ至ル

一講習料各科共金貳圓五拾錢つヽ熊束修

一材料實費 毎回金廿五錢内外トス

○淺草教場講習時間規定

一日本料理科 一ノ組ハ月水金曜日ノ午後一時ヨリ四時ニ至ル 二ノ組ハ火木土曜日ノ午後一時ヨリ四時ニ至ル

一和洋料理科 月水金曜日午前八時ヨリ十一時ニ至ル

一和洋菓子科 火木土曜日午前八時ヨリ十一時ニ至ル

教授 赤堀喜久　教授 木村留吉　教授 赤堀きよ

教授 赤堀峯翁　教授 赤堀峯吉　教授 小林三内

輕便 瓦斯の煮燒＝德用

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮燒用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に人手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

○三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十八分にて炊くを得べし

○瓦斯竈は本社の發明品にて專賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく德用且便利なり

○工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す

○臺所竈、七輪、湯沸、風呂、並煖爐等に專用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

尚各種瓦斯器具は當社構内陳列所又は銀座所等へ陳列縱覽に供居候御立寄御一覽被下度候

神田區錦町三丁目

東京瓦斯株式會社

電話本局 一二三番、五四八番
二三〇三番



金製指環

●川端玉章先生考案並畫



●加納夏雄先生考案並畫



●一號ヨリ八號ニ至ル十八金目方三匁付片切彫刻代十八圓ヨリ二十三圓迄(ロ)同十八金目方三匁付平象嵌入代二十三圓ヨリ二十九圓迄(ハ)同二十二金目方三匁五分付片切彫刻代二十五圓ヨリ三十七圓迄(ニ)同廿二金目方三匁五分付平象嵌入代三十一圓ヨリ四十七圓迄(市外郵送料金廿錢)

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地

電話番號新橋三百三十三(長距離加入)

時計寶玉類と金屬美術品及銃砲火藥商 天賞堂

天賞堂出張所々在地

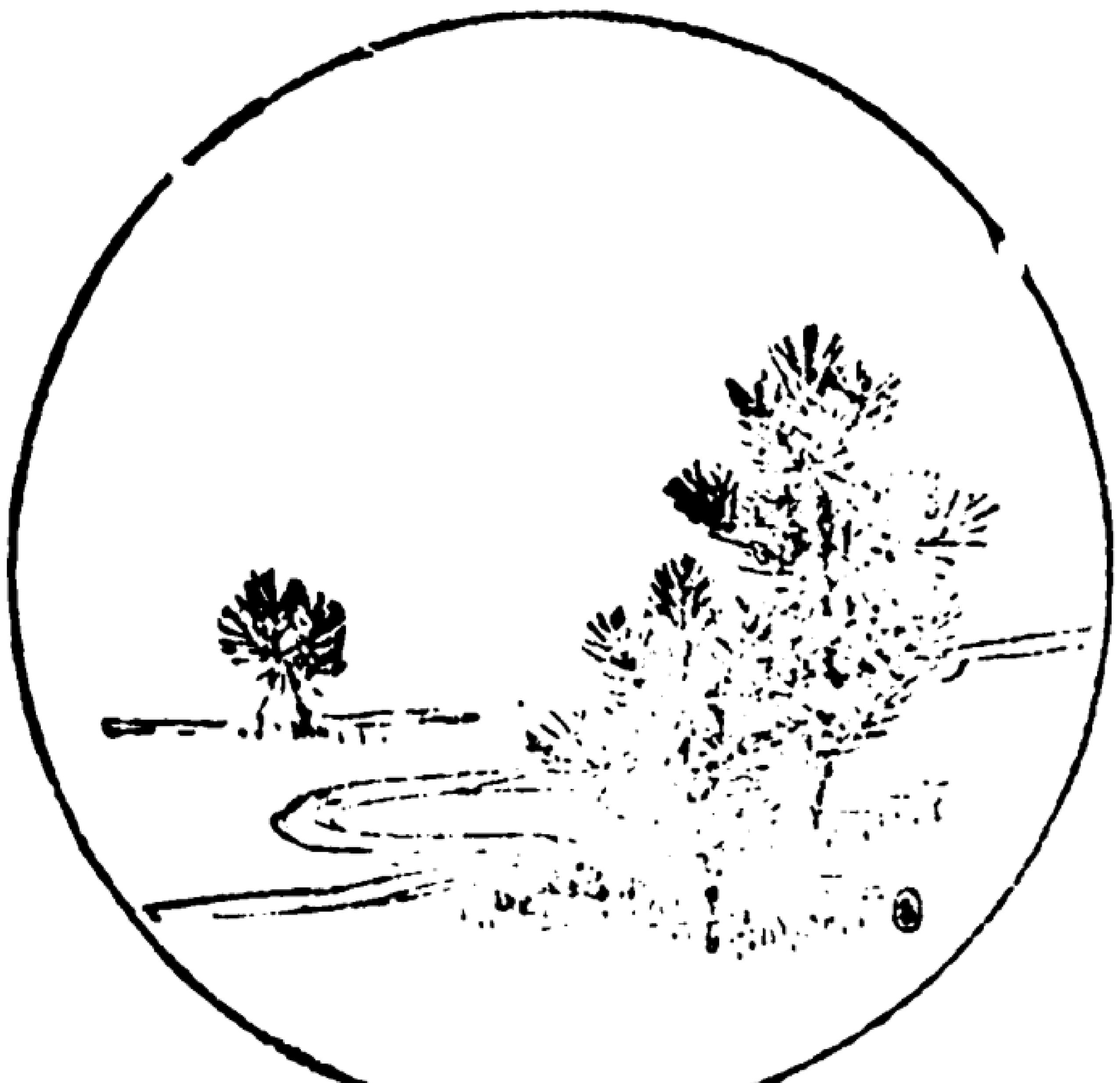
●東京市神田小川町●横濱市●名古屋市●大坂市●廣島市●熊本市●長崎市●小樽臨時

盃類圖案一班

(金、銀、輕白金、白銅、安質母尼杯及木盃製作應用)

●玉田先生畫

稚松細流圖



誕生ノ祝賀若クハ還暦ノ祝賀ニ適用ス

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地

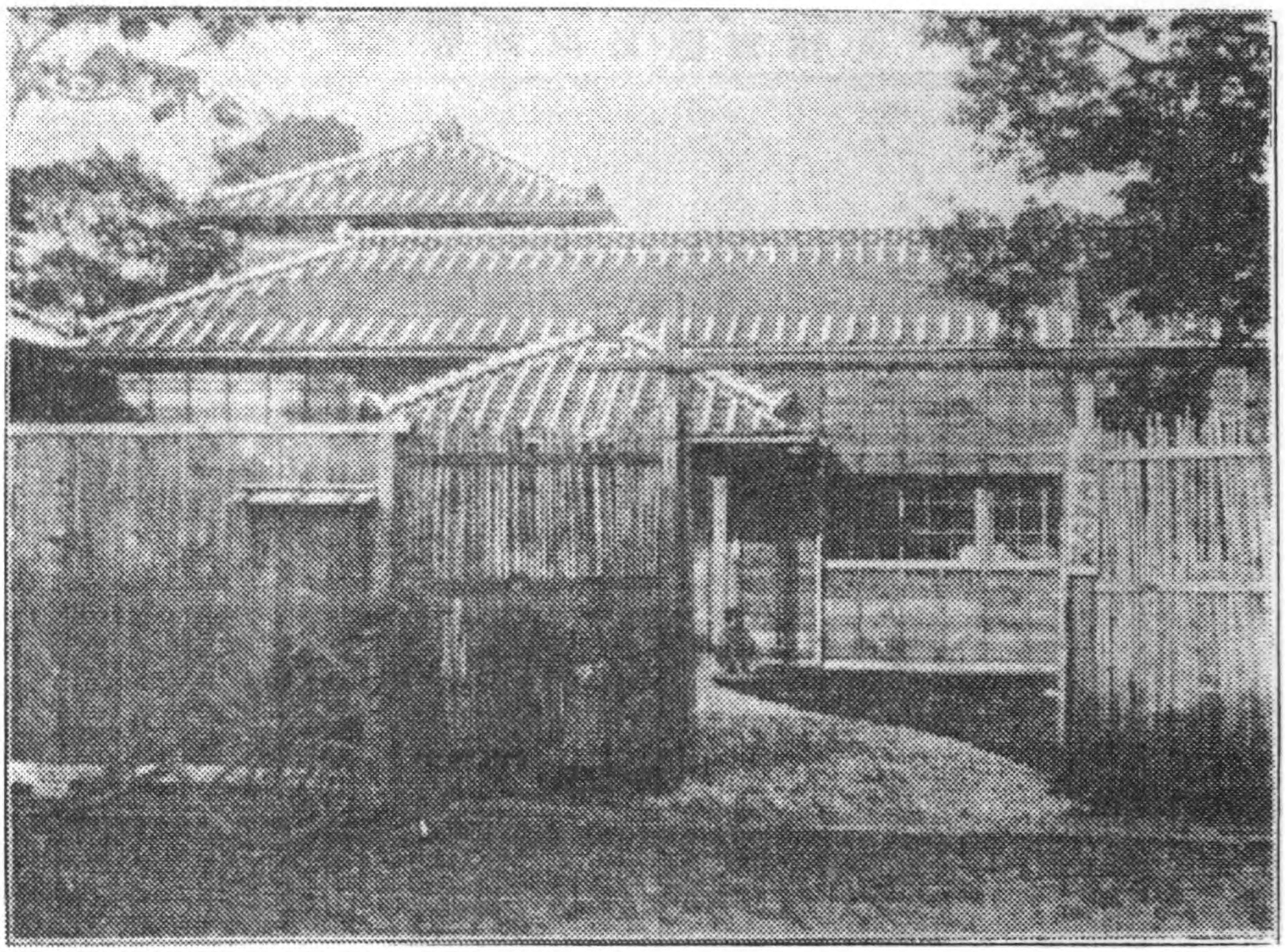
時計寶玉類貴金屬美術品及各種銃砲火藥商 天賞堂

(特電話新橋三三三)

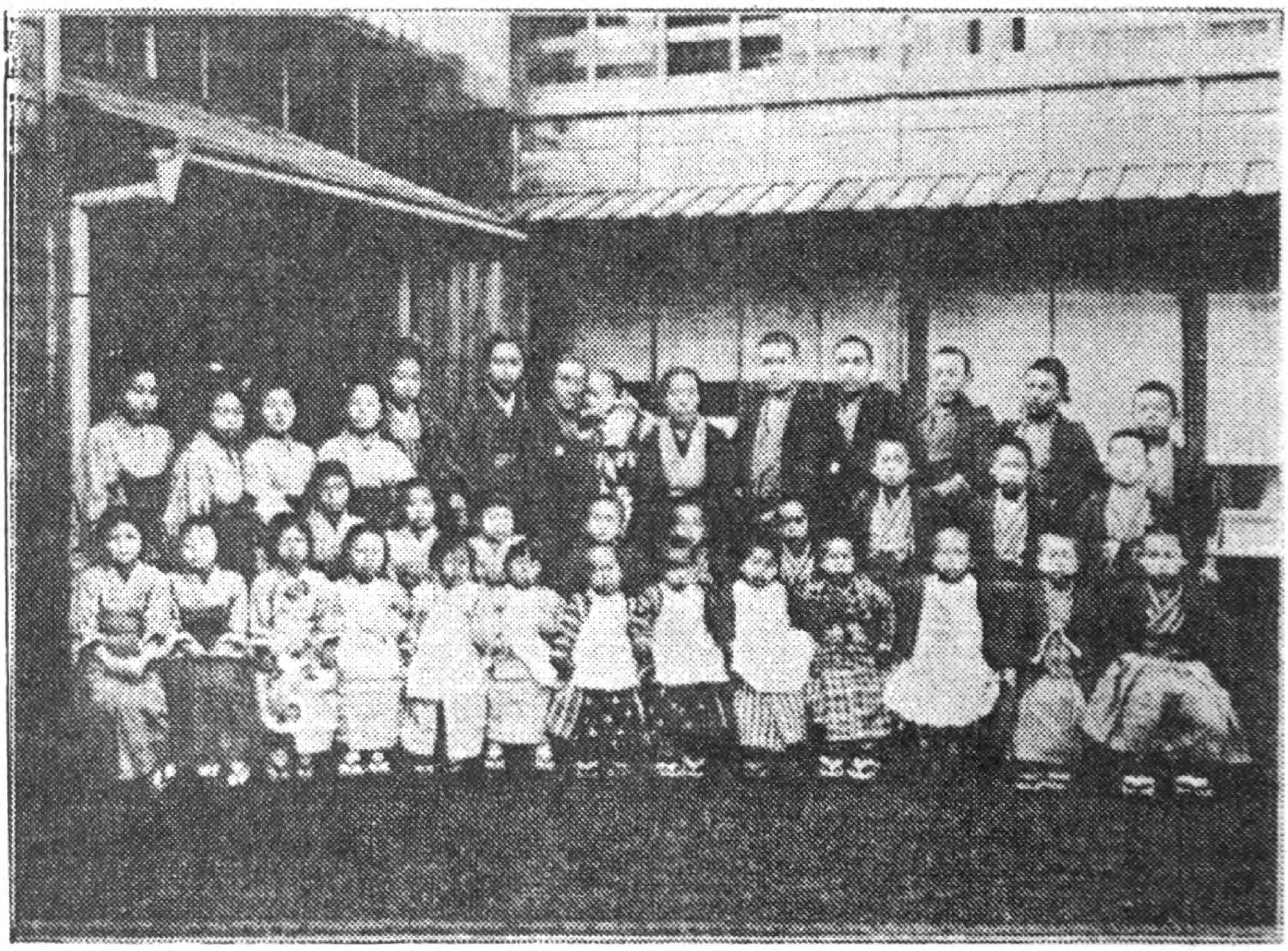
天賞堂出張所々在地

●東京市神田●長崎臨時●名古屋臨時●大坂市●廣島市●熊本臨時●長崎市●小樽臨時

無料贈呈 天賞堂營業一覽(送料四錢)



東京孤兒院の一



（中央に幼兒を抱いて立てるは院主北川はつ子なり）

東京孤兒院の二（家庭欄參觀）

女鑑兼題投稿優等者



松川ちよ子

田代綾子

東京高等師範學校敎諭　**樋口勘次郎著**

新刊

敎育者と國家社會主義

菊判洋裝美本
定價八十錢
郵税六錢

著者西歐に留學すること數年、或は碩學大儒に從ひて國家社會學の研鑽に努め、或は各種の官設事業、公共團體等に就きて、國家社會組織の實況を目擊して以爲へらく、文明の因、開化の源、主として玆にあり、富國の本、强兵の基亦寔に之に外ならずと、歸朝後乃ち敎育當局者の參考に資し、併せて國民の警醒を求めんとし、日夜黽勉筆を執り、稿を起して遂に此書を成せり、蓋し社會主義中尤も嶄新健全なる學說を根據とし、社會の利益を目的とし、國家の權力を方法として、現社會の缺點改良の方策を示したるものなり、徒らに社會主義の名義に醉ひ、好んで急激の議論を唱ふる者、及び社會主義の題目を嫌ひて、其の實際の如何に通曉せざる者、共に本書を熟讀せば思半に過ぐるものあらん、要するに敎育家は勿論、政治家、經世家、實業家及び一般學生の必ず一讀すべき國家社會學上の一大傑作なり。

發兌元　東京市京橋區築地二丁目　**國光社**



京都看病婦學校京都産婆學校卒業生



浦和高等女學校補習科卒業生



埼玉縣女子師範學校講習科卒業生



信州下伊奈高等女學校卒業生

第五回大競點短歌募集

題 戰爭

撰者 金子元臣君

取重 卅七年八月十五日限

料紙書式 半紙形を用ゐ竪詠草紙式に認めらるべし

緑規定購讀者（緑二冊分前納の方）は一人一首に限り印刷費補助を要せず

第五回大點短歌募集規定

○出詠數 制限を設けず

○撰拔法 始め出詠者の互撰投票をなしその點數の最高點より以下五十首を採りこの五十首につき更に撰者の精選を受くるものとす

○應募の歌 匿名にて八月發刊の緑に掲載し出詠者は各人五首宛精選し投票用紙に記入し九月十日迄にわかば會に到着する樣送付あるべし

○結果報告 十月發刊の緑誌上に於てすべし

○賞品 撰者精撰の一等二等三等及びこれに次ぐもの五首、互撰の最高點より八首計十六首を受賞の歌とし賞品は書籍と定む

○雜則 本競點出詠者は印刷費補助として出詠一首につき金五錢宛添付あるべし又臨時出詠希望の方は右の外に緑（投票用紙付）購讀の申込あるべし

以上

わかば會
京橋區本材木町
三丁目河岸十一號地

中橋本家

喜谷 實母散

我が喜谷家傳の實母散は元祿年間創製にして玆に二百有餘年男女諸症殊に婦人產前產後血の道子宮病寸白月經不順長血白血引風痰咳頭痛脊病腹痛等に用ゐて稀代の特効あることは普く一般の實驗上に確知せらるゝ所にして現時新藥新劑頻に世に出るの中に於て我實母散が益々盛に行はるるは實に此故なり是此實母散は無上の良方なるが上に其藥品は都て最上精良品を選び調製に尤も精密の注意を用ふるに因る世上の信用愈々篤くして江湖の使用益々加はり全國到る處は勿論海外迄に貴重せらるゝは素より當然にして敢て偶然に非ざるなり

定價壹貼	金七錢	郵送料貳錢
三貼入	金貳拾錢	同貳錢
五貼入一週間分	參拾參錢	同四錢
拾貼入二週間分	六拾五錢	同四錢
拾六貼入三週間分	金壹圓	同六錢

東京市京橋區中橋大鋸町

喜谷市郎右衛門 商標

電話特本局五十五番

第五回博覽會褒賞受領

東京市内に評判の能きおしろい



賣捌は諸々小間物店賣藥店に特約有

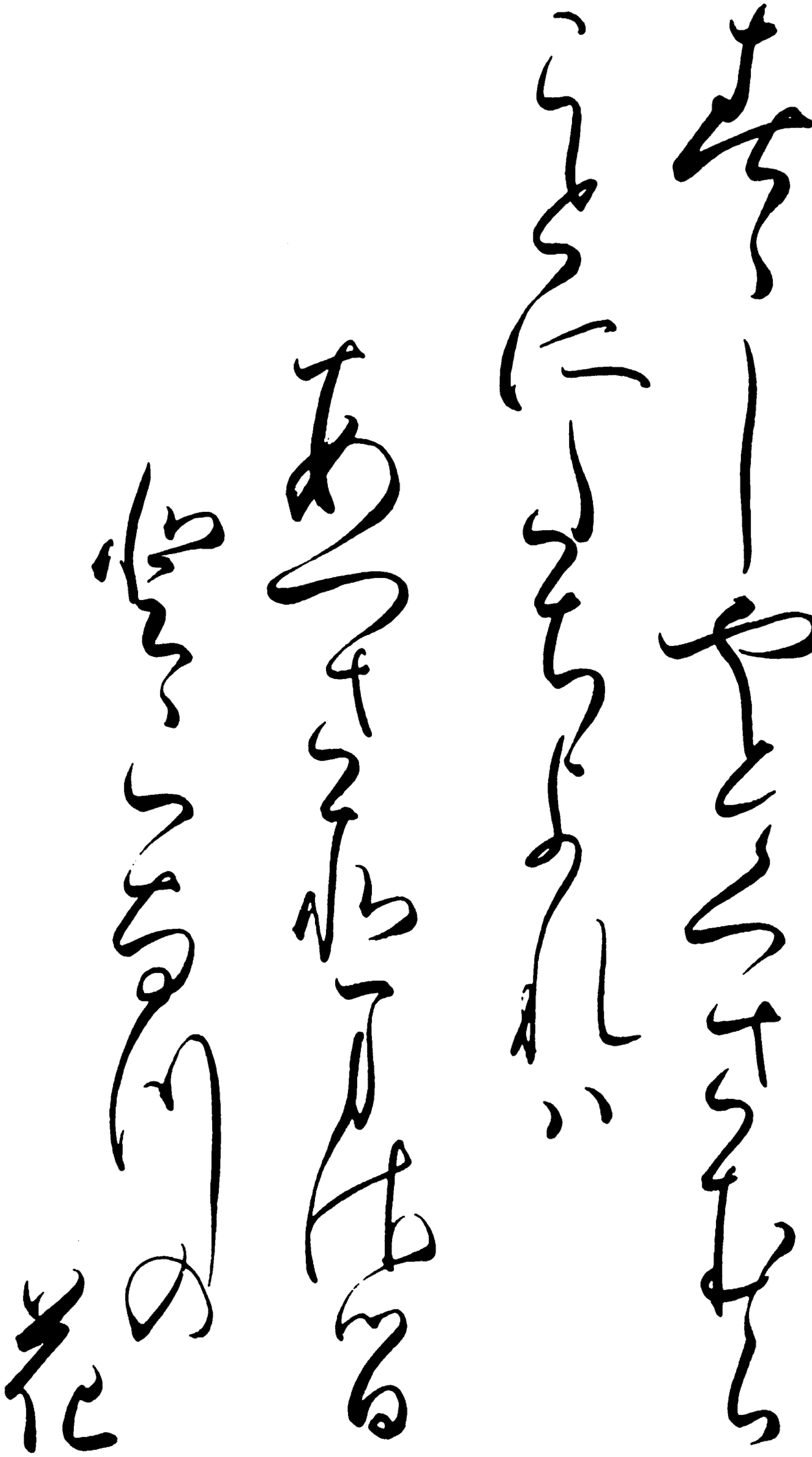
御髮のくせなをし

一名美男桂 東京々橋銀座三丁目

かつら

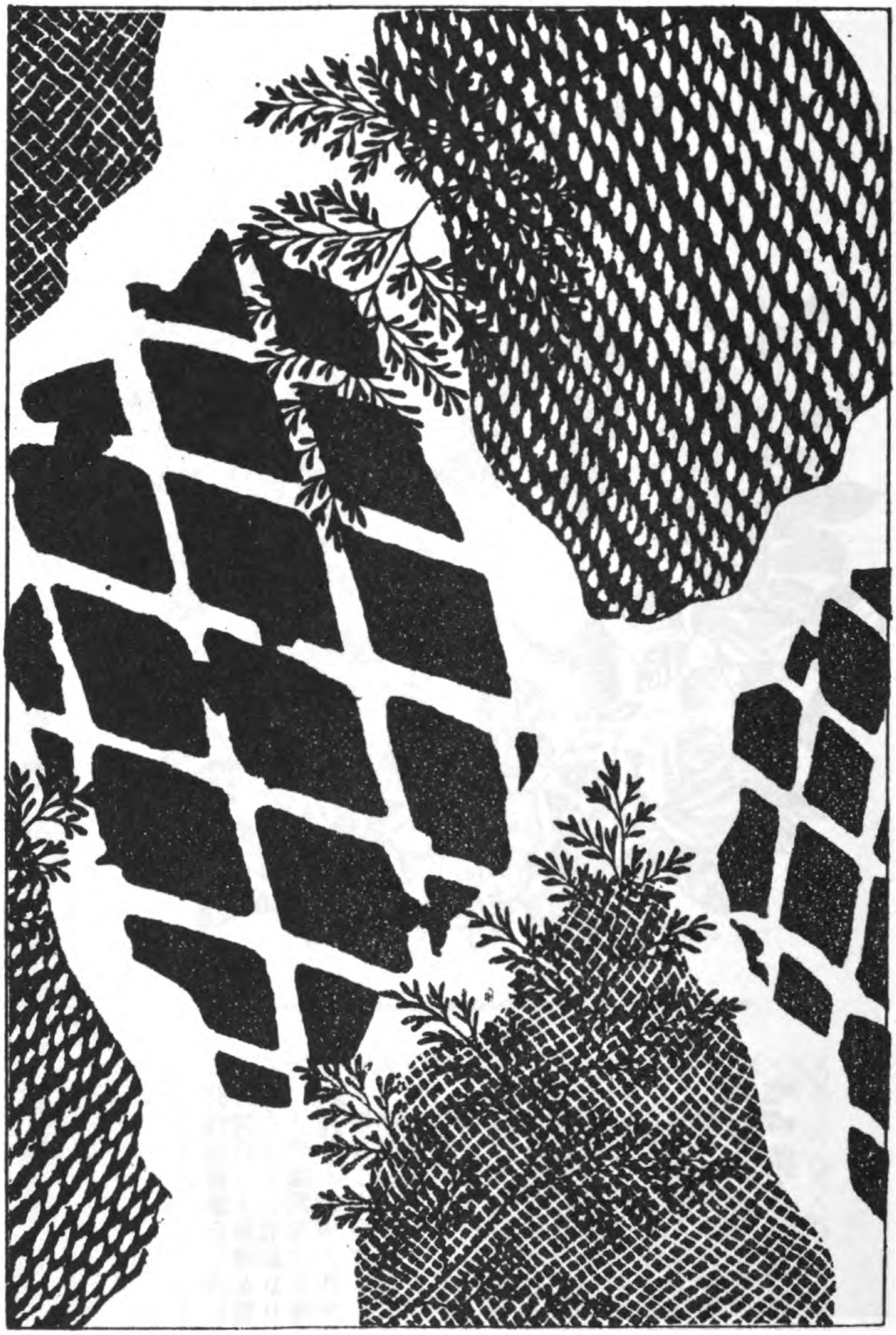
松澤商店

●賣捌に諸處小間物店賣藥店にあり



宮里三木技子書

國分寺摸樣（染織應用）



前田香雪考案

毎月一回廿五日發行

大日本圖案協會編纂

圖案

工藝上に應用すべき圖案の進歩改良を謀らんが爲め大日本圖案協會に於て編纂せる日本唯一の圖案雜誌にして毎號古今内外名家の精華を拔きたるものを其まゝ石版色摺に描寫して殆んど人目を眩惑せしむ殊に友禪更紗等の高尙なる模様を始め陶器織物の優美なる意匠は尤も巧緻の妙を極む而して斯業諸大家の意見説明等また大に見るべし美術工藝家はいふまでもなく斯業に志ある人々の必讀すべき良雜誌たるは**世間既に定評あり又贅言を要せざるべし**

第三卷第廿八號目次（八月廿五日發行）

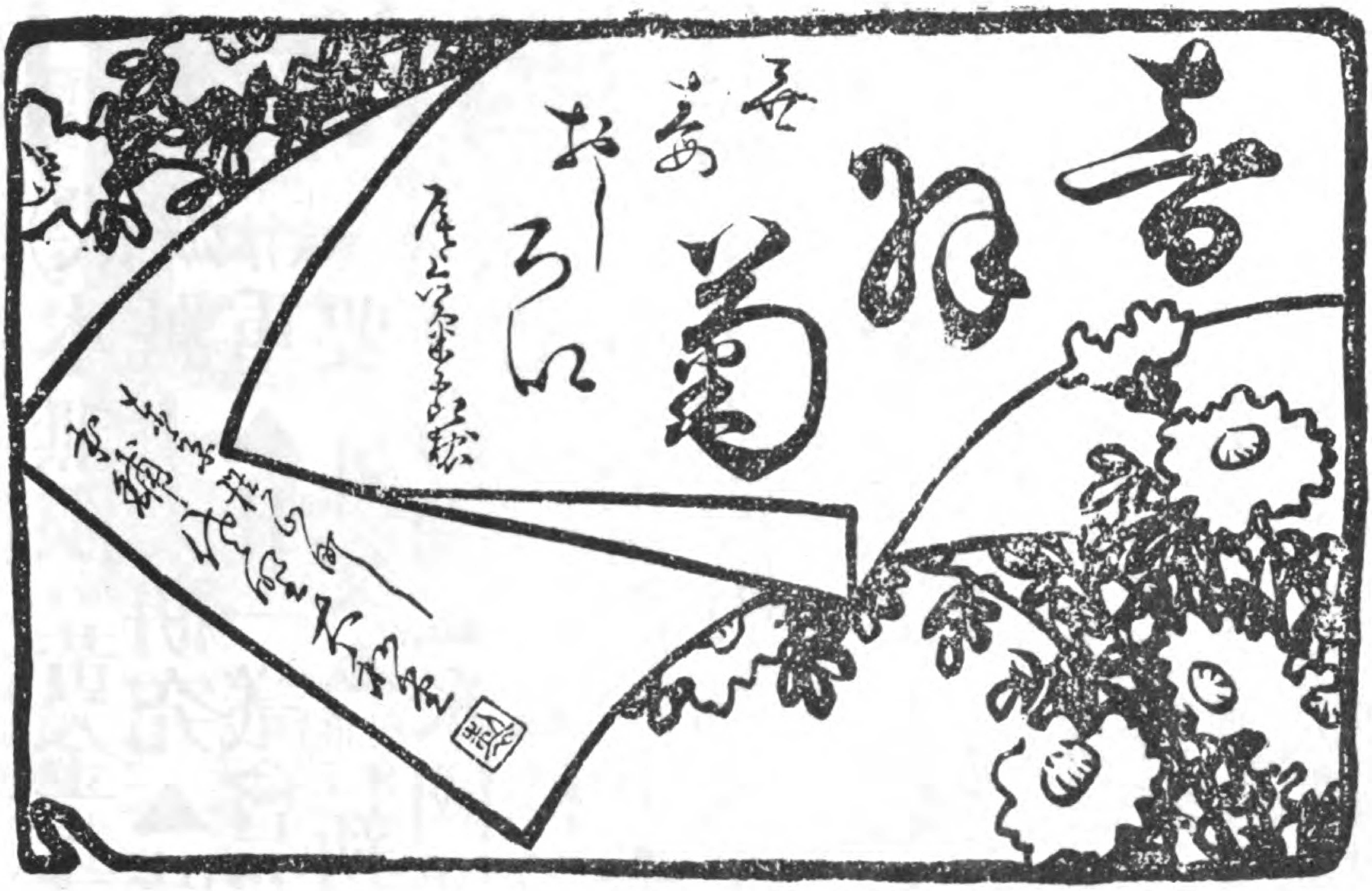
挿畫

●菊花敷物圖案（アートタイプ）●室内裝飾圖（寫眞銅版）●洋風棚飾圖（寫眞銅版）●コーシン（布團）圖（石版彩色刷）●時代蒔繪秋草圖幷に茶筥の金具（石版彩色刷）●光明皇后持佛輪後光香盒（同）●夏着透模様菱花（同）●夕空 友禪圖案（木版極彩色刷）

▲夏襦袢模様、光悅謠本表紙、洋式花瓶、

四六倍判一定價　一部卅錢　六部一圓六十五錢　十二部三圓十五錢　郵税一錢

發兌元　東京築地二　國光社





定價●金五十錢●金廿五錢●金十五錢●金十二錢

本年の夏季休業と女學生

一寸の光陰も輕んずべからずとは、古聖賢の規箴にして、何人も循守せざるべからざるところの道たるは論ずるまでもなし。而して前途に多大なる希望を有し居れる男女學生に在りては、一層此語の剴切なるを感ぜざるを得ざるべし。修養時代に於ける歳月は、設ひ零細なる分秒の時間にても、他日の成功を博すべき一大資本の幾分を形成するものなればなり。

然るに毎年暑中となるときは、公私の學校は何れも夏期休業といふ名義を以て、長きは三ケ月、短きも二ケ月間の授業停止を爲すを例とせり。分秒の時間をも爭ふべき學生に取りては、六十日若くは九十日は少なからざる日子なり。赫々として燬くが如き炎威は、固より學問の爲に心氣を勞するに宜しからず、執業の爲に腦力を費やすに害ありて、強て勉學讀書に耽らんか、忽ち氣倦み體疲れて、徒らに精神の衰耗を來すの恐ありと雖も、さればとて終日無爲にして遊逸し居らるべきものにもあらざれば、何等か消日の計を爲すにあらずんば、却つて學問執業にもまして、心氣倦怠し、身體疲勞して、轉た精神の困憊せるを覺えずんばあらざるべし。食に飽き睡に厭き、談話に

勞れ、小說に倦みて、幾回か茶を啜り、菓子を貪ぼり喰ふが如きは、寧ろ、一定の時間に、一定の課業を授かりて、朝夕の餘暇に遊樂するの勝れるに若かざるなり。故に暑中に於て、各學校が夏期休業を爲す所以のものは、徒らに放縱遊逸して、消日せよとの趣意には非ず。

青年男女を養成する學校としては、その男女學生の健康衞生の爲に、又た此の期間に流行し易き傳染病を豫防せんが爲め、將又た堪へ難き暑中の勉學によりて、腦髓を攪亂せざらしめんが爲には、二ヶ月三ヶ月の授業を停止するも亦惜むに足らざるとなれども、個人としての學生が、之が爲めに全く身心の優遊のみを謀りて、必ず海水浴に行かざるべからず、必ず温泉場の客たらざるべからず、必ず飽食貪眠せざるべからずとの謂れはなきなり。夜間の睡眠が體を安め氣を靜めて、復び晝間の事業に當るべき活潑なる生氣を備ふすに於て必要なるが如くに、夏期休業の日に於て努めて身體を保養し、精神を爽快にして、來るべき學期の勉學に資くるところなかるべからざれば、山靑潮白の邊に體を養ひ、茂樹涼風の間に氣を慰めんは固より不可なきことなれども、恰も日曜大祭日なる休暇の翌日の學科が、動もすれば、倦怠を招き易きが如くに、二ヶ月三ヶ月を悠々の間に送りたる後の一ヶ月二ヶ月は、往々にして勉學の舊に復し難ものあるを見るは、體を養はんが爲、氣を慰めんが爲にとて、不規律にして、殆んど懶惰なる生活を爲たる結果なり。

學は勉むるに精しく、遊ぶに廢むはいふまでもなく、多くの罪惡は遊ぶに成りて、勉むるに已むものなり。兎角人は間暇あるが爲に、諸の惡事を行ふの便宜を得るに至るものなれば、間暇の

多からざるは、其人の爲に取りて少からざる利益なり。夏期休業中に於て、勉强者の不勉强者となり。熱心家の不熱心家となるが如き例は稀らしからず。甚しきは品質一變して、光明ある前途多望の方面より暗黑なる墮落の境涯に向ひ、急に一轉下するものすらなきにあらず。故に本人は固より父兄及び教師の尤も注意すべき時期は、夏期休業の日にありといはざるべからず、殊に女學生に於ては、多方面に誘惑の乘ずべき機會を窺ふものを控へ居るが故に、此の間暇の日にありて、一層細心に注意せざるべからざるものあるなり。

以上は毎年の夏期休業の日に際して、予輩の常に憂慮するところにして、敢て本年に限ることにはあらず。本年に於て、予輩が女學生諸孃に向つて、特に勸めたきは此の休暇を利用して、軍國の今日に對する赤心を表せんことなり、或る學校にては授業の時間を割き、又はその餘暇を以て、一定の物品を製して、恤兵部に献納するものもあり。斯の如きは學校として、又學生として俄かに贊同すべからざる點なきにあらずと雖も、學校休業の日に於て、必ずしも爲さゞるべからざる程の業務なき時を利用しなば、一片の赤心を國家に發揚するを得るのみならず、自家また無聊に苦むの患なくして、心甚愉快なるを得べきが故に、或は團體に乞ひて、其の材料の供給を求め、或は出來上りたる品物を團體に送りて、献納方を依賴するときは、費用を要せずして、物品を製し得ると同時に、必ずしも數量の多きを要せざるべし。例へばシャツの材料を仰ぎて、之を縫ひ又は繕ふが加き、或は小切れを集めて、巾着袋物などを製するが如きは、別段費用もかゝ

らずして、且つ終日之に從事するにも及ばざる程のことなれども、女學生の多數が優さしき心根より、斯る美はしき業に從事しなば、其の出來上りたる物品の總高が決して寡少ならざると共に戰場に於ける軍人のこの贈物に對して感謝すべきと幾千ぞや。力を用ゆる少なくして、功を收むる甚だ多き斯の如きは、女學生が休暇中進んで從事すべき業にあらずや。

學生としては、寸陰をも惜みて、勉學執業するがその本業なれば、平素は一意專心孜々として勉强すべく、且つ休業の日に於ては、遊び且つ樂しむべしと雖も、その遊び樂む方法をば、カルタより手工に移し、遊戯より手藝に換へ、徒然なる避暑の無事よりして、有益なる恤兵の事業に轉じなば、其心の融々として樂しきのみならず、其の身體もまた常に健全なるを得べきなり。人は何事によらず、其身の爲め、若くば他人の爲め、有益なる事業を爲したる時ほど樂しきはあらず、況んや吾身の爲めよりも、他人の爲めよりも、幾層高尙なる報國的の事業を爲すに於てをや其樂み蓋し言ふべからざるものあらん。之を無事に苦しみては、午眠を貪ぼり、無聊怠屈の餘りに、茶菓子の類を多食多飮し、腸胃を害し、健康を傷ない、來るべき學期に際しては、懶惰の素を養成するが如きに比すれば、孰れの方面よりするも、霄壤の差あるを見ずんばあらざるなり。

若し夫れ故郷に歸省する人々に於ても、一家團欒、親戚故舊の情話、近隣來往の傍らに、其地の團體又は篤志者と力を戮せて、歸省中の日子の幾分を割き、或は一日中の數時間を分ちて、此事に當りなば、縱ひその數量は甚だ尠なきも、猶ほ赤心を表するに餘あるべし。

女子に付いて

子爵　岡部長職氏談

男女居室人之大倫也と孟子の曰れたることもあり、夫婦相信愛して、和氣藹然たるは、家庭の要件にして社會を健全にする所以である、然るに世間では、妻が大切だとか、妻を叮嚀にするとか云ふと、不審がる人が多いが、自分にはサッパリ分らぬ。

家庭を忘れて社會を立派に仕やうとするは、丁度、土で作つたデクの坊に白粉を塗付けた樣なものだ、棚から落つれば、破亂になり、水に入れば、融けてしまふ、ソンナラ、家庭は、どうかと云へば、夫婦が其中心で、それから小供だ、扨て小供を如何する、育てねばならぬ、敎ねばならぬ、其役目は誰がする、母親が其責任者である、俊才は、多く此の母の家に出づ、孟母三遷斷機の故事は、實に母敎の龜鑑ではないか、されば國民の基は、婦人であるといふも決して過言ではない、斯樣考へて見れば、夫の身としては、常に妻は大切にして助けていかねばならぬのは固より當然である。

夫婦の關係は先づ此位にして、次は自分が我國女子に對して、如何なる考へを持つて居るかを語らう。

目下我國は、萬事過渡の期間に在るに違ひないが、中にも、女子程其境遇に在るものはないと思ふ、殊に近頃の有樣は、急激なる潮流に激せられて居る樣だが、ウツカリすると由良の戸を渡る舟人楫を絶えになる、楫が最も大切だが、之を思へば思ふ程、中々心配である。

自邸の近處に設立せられたる日本女子大學校は、校長成瀨仁藏君が、多年熱誠と耐忍とを以て、百難を排し排して、トウ／＼社會有力者の同情を得た結果、今より三年前、鞏固なる基礎の上に建設せられたのだが、北は北海道、南は臺灣から立派な生徒が來て居る。

そして成瀨校長は如何なる方針に據つて教育を成しつゝあるかと云へば、先づ從來の社會各種の習慣と全然調和して然る後適順なる進歩を圖らねばならぬ、卒業後社會に出でゝ決して調和を缺いてはならぬと常々訓誡を怠らないが、本年四月第一回卒業式の時校長は言々涙を以て熱誠に卒業生の將來を誨へ、卒業生も亦親に別るゝやうに惜別の情に打たれて、其式を了へたが、自分は、其時師弟の情斯く迄も深厚なるかと思ひ、至情胸間に迫つて、辨慶に顏向の出來ない不覺の涙を落した、ナント、斯云ふ精神が世間の學校に普及したならば、日本の女子教育も大分賴しからうと思ふ。

又同校は、櫻楓多く趣味高尚の場所に在る故、同校生徒は、嚮に、同窓會を組織して櫻楓會と名づけたが、本年卒業の生徒が歸鄕して夫々責任を持つて働くことに成たので、學校内外の情誼を益々深厚ならしむるの目的と廣く家庭及び社會に對する抱負を以て、家庭週報と云ふ一

櫻楓

の新聞紙を發刊することになつた、今度其第一號を發行するので、自分も同校の創立委員であるから、此文を寄せて聊か祝詞に代へた。

櫻楓會に寄する書

家庭週報の發刊を聞き、櫻楓會會員諸君に向つて、余が祝意を表し、併せて言を櫻と楓とに寄せ、以て聊か將來の希望を述べんとす。

夫れ、櫻は、我國古來之を群芳の粹となす、其淡紅旭日に匂ふの清秀、其風前晴雪を飜すの瀟灑兩ながら、獨特▲



▲の氣韻を有せり、歌客花と稱すれば、即ち櫻花を意味す。世の中に絶えて櫻のなかりせばと在五の吟、能く古今櫻花に對するの歌意を代表する者の如し櫻花何ぞ多幸なる、余櫻花を愛する世人に讓らず、然れども、其短所を嘆ずるの情或は世人より切なるものなきを保せず、何ぞや余惟ふ、櫻花は開き易く散り易きの花なり、而して果實亦見るに足るものなし。是れ、余が櫻花を愛し且つ嘆ずる所以なり。

然るに、一種の櫻あり、海外より來る。其花美ならざるも、果實豐大、其食卓に上るや恰も鳳巔琥珀に似たり。而して味殊に賞すべきものあり。余は暫く內種外種孰れを選ぶかの間に答ふるを止め、切に和花洋實の結合を期せんと欲するものなり。櫻樹若し心あらば宜しく和花を以て文となし、洋實を以て質となすべし。

楓や其容態秀美、能く寒暄に處す、春苑雨霽れて嫩紅綠に映じ、夏徑陰深うして行人熱を忘る、金風樹を渡つて萬山錦を織り、霜氣膚に迫つて梢頭紅を留む、四時の變悠々自得の色あるは余常に楓樹を推す。

櫻楓の材たる品質精緻甚だ佳良と稱す。前者は丹心に富み後者は潤澤多し、以て王公の宮室に供すべく、以て民人の机榻に用ふべし。余が家文房の材亦多く櫻楓を取る、諸君曩に同窓會を組織し、櫻楓を以て之が名となす、今や新紙を發刊し、世人をして帝都の北櫻楓繁茂する邊好箇の學園あることを知らしめ、併せて、婦人前途の進運を圖る、其志や美、其擧や盛なり。然れども人生事を成す、當に幾多の辛酸を嘗めざるべからず。余は諸君が恒に心身の剛健を期せられんことを望む。

又體育と女子、宗教と女子、文學と女子、美術と女子、其他衣食住及び事務的材能等の問題に就ては、尙多少の卑見もあるが、這回は先づ此位にして置かう。（完）

（櫻楓優秀の四字は子爵夫人玉琴女史の揮毫せられたるものなり）

婚嫁前の修養と婚嫁後の家庭

寺田勇吉

結婚後作る所の家庭生活に對し、結婚前得たる修養の適否如何が與ふる効果は、何人も頗る注意を要する所であるから、此に現社會の實態を取りて論據とし、討査を試むと共に鄙見の一斑をも述べて、將來圓滿なる家庭生活を遂げんと欲する者の爲めに訓戒を與へて置かうと思ふ。妙齡女子の構成する家庭は一見單純なる如くにて、其の實隨分困難に且つ複雜なるものである。之が改善發達を企圖するに當りては、教育家と云はず、實業家と云はず、父兄たる者も、子女たる者も、相共に誠意熱心を以て盡さねばならぬとこ

ろの一大社會問題である。蓋し父母の子女に對するや、其男たると女たるとの別なく、均しく其子女をして外は十分なる學校教育を施し、內に在ては善良なる家庭に生長せしめて、將來其の子女をして世に立ち、事を爲すに當り、既に感化せられたる美風に從ひ、家事を整理し、圓滿なる家庭を作り、家運を隆盛に向はしめんことを祈らざるものはない。是れ固より父母たるもの丶一般に其の最愛なる子女に對して望む所であつて、實に當然な事である。男子は姑く措き、地方には未だ完全なる女學校の乏しきが爲め、妙齡の女子を遠く都會に出し就學せしめんと欲し、他家に托するものがある。又齡已に婚嫁期に近づける婦女子に對しては、父母は其の身上につきて千々に心を碎き、只管良緣を得んことを求め、幾多の愛情ある注意を加へて、他家の家庭に於ける風味を感ぜしめ、以て妻たるの資格を多少修養せしめんが爲め見習として他家に托するものもある。此の他家に托する瞬間の時期は、實に女子に取りて最も愼重に、且つ最も厳肅なるべき時期である。

父母は我子女が人の妻と爲り、一家を整理し、子女を生育し、夫を助け、舅姑に事ふる等幾多の事情を實驗せしめんことを是れ努め、之を他の善良なる家庭に托するのである。然るに世の父兄たる者其の親愛なる女子を托するに當り、或は單に親戚の名義あるの故を以て之を托し、或は知己たるの名の下に之を托し或は同鄉人たるの故を以て之を托し、或は知己の親友たるの故を以て之を托し、若くは單に其の主人を知り主婦を知るといふ一條件の下に、最愛の子女を托して深く顧みない樣なものもあるが、か丶る場合には其の職業、其の家庭、其の交際、其の事業等をも能く精査し、又一方に於ては父母自身の要求及び子女の性質意向等を察知し、總て此等の條件に適應する場合に於て、始めて之を托さねばならぬ。而も尙ほ實際は往々其の豫想に反して不測の禍を招くことが多い。世人が子女を托するに於て、他の善良なる家庭を望

まないことはないけれど、思慮粗漏にして往々其初め遣はさんとする時の目的に反するものがある。例へば其の子女の實業を好むの傾向あるにも係はらず學者の家に托し、學を以て身を立てんと欲する者をして。學事に縁からざる人に托し置くが如き其一例である。而して其の父兄等は完全なる教育を受けしめんか爲め、若くは單に見習の爲め他家に出せり、地方生活の陋習を洗はしめんが爲めに出京せしめたり、某博士の家に托せり、某教授の家に托せり、某華族の家に托せりと云つて安心して居る。是れ其の紳士紳商の名を聞きて、其家庭までも美麗なりとする迷想より來るものである。近時の紳士紳商なるもの、一部には、實に厭ふべき風習がある。其の言語其の家庭の如き、女子を托するもの、大に三省すべき所である。新聞紙に顯はるゝ醜陋なる事實は、下層無教育の車夫馬丁の徒にあらざれば、即ち紳士紳商の間に於て其多きを認むるを以ても之を察することが出來る。此等の他の家庭に子女を托するときは、女子は嚴肅なる父母の許を離れ、鄙より都に來り、學校生活より家庭見習の生活となり、時には茶の湯の作法を習ひ、挿花、割烹等の趣味的、技術的教育を受け、質朴なる境界を去りて漸々奢侈、驕恣なる區域の中に入るのである。女子一度び父母の膝下を離れては、父母の訓誡は直接に之を聞くことなく、監督者の家も亦之を訓誡すること熱情なる父母の如くなることは出來ない。是に於て其子女は、他家に於て見習するの案外心に苦しからざるの念を生じ、漸く父母の許にありしときの嚴肅なる性格を失ひ、其の重荷を下したるの感を爲し歳月の久しき、漸くにして其の四圍の境遇、家庭の風習、野卑なる言語、不作法なる行爲を朝夕見聞して之に感化せられんか、嘗て父母の膝下に於て受けたる家庭教育は遂に脱剝して、又舊觀を存せざるやうになる。又父母は我が膝下を離れたる子女の情況は仔細に知ることを得ずして、唯誇り顔に得々として人に向て我が子の他家に於ける熱心なる修養を語りて居る。然るに其子女も亦日夕厭ふべき風習に感化せらるゝ

をも知らずして、却て得々として他鄕に日月を送り、其實父母の膝下に歸へるを厭ふの口實として、茶の湯も挿花も、曰く何、曰く何と、修習して歸鄕の土產に爲さんため、尙ほ若干の歲月を延べられんことを請ひ、終に左迄必要ならざる事までも習得して空しく歲月を費し、その本を忘れて末に走るもの、方今に於ける他家見習女子の殆んど轍を同うする所である。彼の勞働者としての女子即ち下婢女中の輩に至りては、父母たる者其の雇主の家庭の善良なることを求めざるにあらざるも、善良なる家庭の雇主は思ふまゝ直ちに望み難い。又給金の多少等もあるを以て、左迄善良なる家庭でなくとも、比較的に給金多くして勞働の少なきものありて、父母の要求と其子女の意向の幾分を滿たし得る家庭なりと認むるときは、終に其の家に雇はれて勞役に服するのである。然るに下婢にして敎育なく、又父母も子女の爲めに深く將來を慮ることがなければ、純白なる彼女の頭腦は其の勞働に從事する歲月の間に、如何なる彩色を以て塗抹し去らるゝや測り難い。單に見習の爲め、勞働の爲めとは謂へ、父母が其子女を托すべき家を選ぶことは深き注意を要する。然るに一般の風習は往々是に反する傾向を呈するのは遺憾である。

父母にして子女を托するに深く選ぶ所なく、其子女も亦思ふ所なくして世の所謂紳士紳商の家庭に入らんか、彼れ子女の感ずる所のものは先づ外界よりの刺戟であつて、即ち衣服の美に心を傾け、諸器物の完備せるを見て粗野なる器具を厭ひ、食事の美に慣れ、金錢出入の多きに慣れて小使錢の濫出となり、器物の破損を顧みず、精神は放逸に失し、客觀的の奢侈に染み、而して其の內心を省みれば、勤儉質朴の風消磨し去るやうになる、勤儉質朴にして始めて能く女德を守るとが出來るものであるのに、彼等は之と反して嘗て村夫子及び父母の膝下に於て親しく聽きたるものを其儘墨守して漸次發育せば立派なる女子の性情を備ふるに至るべきものを、地方村夫子の訓言、及び質朴なる父母の敎訓は、半文錢の價値なきもの丶如く

心得て誤解を生ずるやうになる。爰に至れば却て立派なる肩書を有し、美髯を蓄へ、美服を着し、巧に泰西の諺を談じ、西洋の倫理學は云々、東洋の哲學は云々と吹き立つる高襟似而非倫理學者の口吻より出づる所の奇論を聞きて、さも耳新しく感じ、斯かる人の敎訓こそ眞に品性を高むる敎訓なりと信じ、甞て養成せられたる德風を棄て、淺墓にも昔日の淳朴を去りて、驕奢を慕ひ、遂に性情を一變するに至るのである。此等のことは靑年男子に於ても往々陷り易き惡習である。況んや父母の膝下を離れたる妙齡なる女子に於てをやだ。彼等は其の學說の如何杯は到底判斷し得るものでない。所謂權利義務の話を聽きては之を鵜呑みとし、男女同權論を聽きては之を男女喧嘩の唯一の資料とし、外部に顯はれたる厭ふべき風習のみを知覺して、順良眞摯なる美風をば却つて自ら厭ふべきものなりと爲し、頑陋として之を放棄し、以て文明的風俗に染めりと自稱し、地方の舊套を漸く脫せりと誇言し、都會生活に化せりと自慢し、而して監督者、雇主等の己の意に合せざるれば、辭を設けて其家庭に居ることの困難なることを父母の許に通じ或は歸宅せんことを請ふとか、若くは別家に托せられんことを求めるとか云ふ有樣である。然るに父母の方は如何かと云ふに、大抵子女の請を容れ其愛に引かされて言ふが儘に委せ、將來に於ける家庭生活の圓滿なるものを作らしめんが爲の見習は、實際却て其の身を過らしめるやうになるのである。かくて兩三年を經由せんか、各自が陷りたる放逸の結果は、如何なる狀態に於て彼等の身上に襲ひ來たるであらうか、日夕の事實、新聞紙上に散見する所、その實例擧げて數ふべからざる程ある。此點に於ては敎育あるものも尙ほ痴雲の蔽ふ所となり、容易に脫却し得ない。況んや無敎育の女子に於てをやである。かゝる場合に於ては、女子は屹然として我が身を修養し、自奮して黽勉するにあらざれば、夫の惡魔の襲來に遇ひ、迷路の中より離脫せんと欲するも出來難い事と思はれる。不良の家庭の中に人と爲れるもの　幸　に良緣を得て

一家の妻となるも、其の家庭に香る所の空氣は、果して純潔にして、馥郁たるや否や頗る疑しいものである、彼の我儘なる境遇を以て形作られたる女子は、一旦人の妻となると從來の他家見習に於ける如き自由生活を爲すことが出來ない、即ち妻として新父母の許に立たなければならぬ。良人の兄弟姉妹に對して適切なる處置を爲さねばならぬ。家庭の異風自己從來の境遇に反して、事々物々皆他家に於ける見習生活と違つて衣服の如き、器物の取扱の如き、裝飾の如き皆前日と大に趣を異にする。曾て奉公人、番頭、學生、友人等に對したる態度を移して、之を我が良人に加へんか、忽ち其の激怒を招きて大風波を惹起すに相違ない。學生として見習者として、女中として、下女として、他家に在りしときは、極めて眞摯なる性情を以て努め盡せるものも、一旦主婦の地位に立てる場合に於ては、其の缺くる所多きを自認するのは事實である。然らば其始め浮薄の心を以て輕々しく見習時代を送りたらんものは、其の婚嫁後に於て圓滿なる家庭を作り能はざるは固より當然である。女子として人の妻と爲り其家庭を托せらるゝに當りて、上に父母良人等を戴き、幾多の家人團欒の內に在りて、圓滿なる家庭を作ることは容易のことでない。女子の性情、如何に依りては、善良なる家庭を作成することも出來れば、又之を破壞することも出來る。唯だ女子にして、妻として圓滿なる家庭を作る能はざれば、是れ妻たるの資格を缺けるものと謂はねばならぬ。圓滿なる家庭を作らんには、其の主婦たるものは、言ふに忍びざる忍耐も要し、苦慮も積まねばならず、孝貞、敬愛等種々なる德性の修練をも實行せなければならぬ。此等の實歷、此等の忍耐、是れ實に圓滿なる家庭の要素である。然るに其の素地を修養時代に於て根底より作らずして、一朝忽ち主婦となりて、一家の幸福を計るの大任に當らんとするのは實に難事である。啻に難事たるに止まらず、其極は即ち破鏡の嘆となり女子として最も悲むべき不幸の地位に立たざるを得ないやうになる。而して其の因由する所は、實にその

婚嫁前の修養時代の行動如何に在るのである。此の修養時代は實に女子の將來に於ける幸不幸の依りて分るゝ分水嶺にして、女子は此の時代に於て自ら覺醒し、努めて德性の修養を勵み、能く圓滿なる家庭を作り、一家を隆昌ならしめんには、主婦たる者の心得は如何に爲すべきやを考へ、眞摯に其の監督家に於て善良なる空氣を吸收することを力めなければならぬ。然らずんば將來回すべからざる最大不幸に陷ることなしと限らない、實例は既に澤山ある。我邦に於て女子の離婚者の多きが如き之が適例ではあるまいか、累年の統計は最も好き事實の說明者であるが、此には之を省略する。

抑も離婚者の因て生ずる原因は其の類種々あるべしと雖も、婚嫁前に於ける女子監督者の不注意と、父母が雇主に對し十分なる精査を遂げずして子女を托せる事とは之が重なる原因であらうと思ふ。所謂見習間の歲月は僅々なれども、此時代に於て婚嫁時代の女子は謂ふべからざる惡風に感染し、他日の大害を釀すものが多いのである。女子監督者たるもの此點に關しては社會敎育の爲め、重大の責任あることを知りて之を訓誡し、之を監督し、其所謂人の子たるの故を以て對岸の火災視することなくんば、一は直接に女子敎育の振興を計り、一は將來に於ける淸温なる家庭を作の要素を得ことも決して難事であるまいと思ふ。

（本篇は寺田氏の談話をそのまゝ筆記したるものにて文責は記者にあり）

非風非幡の事に就て

棚橋絢子

此頃圓覺寺の管長を麟祥院に訪ひしに、あたかも無門關の提唱中なりしかば、幸に傍聽せしに、非風非幡の章なりき、此非風非幡の對論に於ける六祖の言は、我等敎育に從事するものを益すること多しと思ひしかば、今其本文を擧げて、其感せし處を述べんとす、曰く

六祖因風颺刹幡、有二僧、一云幡動、一云風動、往復曾未契理、祖云不是風動、不是幡動、何者心動、二僧悚然。無門曰不是風動、不是幡動、不是心動、甚處見祖師、若向者裏見得親切方知二僧買鐵得金、忍俊不禁一場漏逗

と是れ二僧が未熟なる討論をきゝて、六祖は默止するに忍びずして、覺えず不是風動不是幡動何者心動と說きしは實に六祖の六祖たる所以なり、若し六祖にあらずんば、必ず說くに更に高遠幽玄なる事を以てし二僧をして呆然たらしめ、以て自ら高しとせんに彼は敢て自己の才學を示さず、敢て高遠を衒ふことなく其志唯二僧の智を進むするに存して、其進んで解しうる程度に於て何者心動と說き、直に其以上を說くことなかりしは後進に頗る懇篤にして大に師たる者の宜しきを得たりと云ふべし、而して無門禪師はまた六祖の意を察知し、後世輕佻淺學の輩或は此言を以て六祖の識を疑ふ者あらんことを恐れ、若向者裏見得親切ならず買鐵得金と解き其奧義のある所を示されたり、亦其宜しきを得たるものと云ふべし。之を論語に見るに夫子の同じく仁義を說きたまふや、仲弓には出門如見大賓、使民如承大祭、己所不欲、勿施於人云々と答へ司馬牛には仁者其言也訒と答へ更に顏淵には克己復禮爲仁云々と答えたまへり、其問者の學の高下深淺其人格の如何に依て、其身に切なるものを說きたまへる夫子の用意の程寔に感ずべし、六祖が二僧に敎へしもの、無門禪師が更に之を註釋せしもの、共に其用意周到にして後進に懇篤なる皆符を合するが如し。

飜て今の教育者に見るに、其方法頗る器械的にして敎師は萬物の靈長たる人と云はんよりも、寧ろ無生非情の器械といふべきが如きもの多し、或は其嘗て聽讀せし教授法を其まゝに行ふこと、恰も酷吏の法を奉ずるが如く冷酷不親切を極めて、しかも得意なるものあり、或は生徒の心身境遇の如何を察せず小智小

才を奮うて自我一邊の教育をなすものあり、甚しきに至りては生徒を教育せんよりも、自己の學識を吹聽するに急にして、故らに高遠解し難きの言をなし、或は新奇俗を眩するの説を立て、以て生徒の耳目を驚駭せしむるもの、亦少なからず、少しく思ふ所なかるべからず。

夫れ慈母の子を養育するや思うて到らざるなく、其心其身を其子の心其子の身となして、寒暖に應じ飢飽に對する務を盡くし、飲食の供給宜しきに叶ひ、匍匐歩行各々序を以て敎へ、健全に兒女を育成すること、彼の女學校出のハイカラ妻君が學校授けの育兒法に固執し、時間が到らねばとて其兒の泣くにも叫ぶにも一とふくみの乳も與えず、又保姆が教育の順序は斯く〳〵と不完全なる机上育兒法の實驗に人の愛兒を損ふに比すれば、天壤の差あるものあり、彼の慈母の所謂當世の教育を受けたる人に少なくして、此妻君の學校出の人に多きは何ぞや、一に至誠の存すると存せざるとにあり、彼は專ら子を思ひ、此は專ら育兒法を思ふ、其差唯々玆にあるなり。

竊に惟ふに今の教育たる其學校の設備、建築、器械、制服等凡て外形に重きを置き、翻て其教師の如何には注意すること甚だ少し、獨り有司の然るのみならず、子女の父兄もまた唯々外觀を以て良否を測定せんとす、滔々として輕薄虚飾風を成し、俗を化し、既に痼疾となりし今の世に於ては深く怪むに足らずと雖も、亦痛嘆すべきの至りならずや、夫れ教育は兒女に其後來社會に立て、一方に於ては充分其社會の生存競爭に堪ふると共に、一方に於ては社會が絶えず生成する廢頽腐敗の氣運を革新し、是に淸新發展の勢を附與し、社會を革新し社會に貢獻するに足るの智識力量を附與するにあり、教育は決して社會に附阿適應する人を作るにあらず、一方に實用あり一方に理想あり、（吾人は之を理想と云ふ空想にあらず、之を實用と云ふ風潮に從ふにあらず）社會の弊風に染まず、能く之に反抗し之を匡正し、社會の良處長所を發展せ

しめ、以て社會の健全發展を維持進歩せしむるに足る、未來の社會の人員を作るを云ふなり、されば敎育は社會が其有機體なる性質として、一方には絕えず腐敗沈頽の傾向あるに對し、强く反抗の態度なかるべからざるに當り、敎育者却て社會の風潮趨勢に雷同盲從し、其要求に唯々として社會虛飾を喜べば、虛飾を以て之に應じ、新奇を喜べば新奇を以て之を迎へ、媚姇諂嬉の態をなすに至りては、豈に痛嘆すべきにあらずや。

夫れ斯の如く今の敎育は社會の放恣なる風潮に從ひ、唯外觀の整頓佳美を事とし、敎育の眞面目に至りては、殆んど放棄して顧る所なく、敎師は唯に器械の如く生嚙りの敎授法に固執し、生徒の心情をも察せず知らず〳〵冷淡不親切の敎授をなすこと、恰も彼のハイカラ妻君が育兒法に似たるもの多し、學校に於て唯一の大切なるは、敎師なり外觀の美にもあらず、器具の整理にもあらず、唯敎師あるのみ、而して敎師に重んずべき處は理窟的敎授法の知得にもあらず世俗の所謂博學多才なるにもあらず、唯其性情と人格とにあるなり、其人にして一片至誠の心あり、生徒に對すること彼の慈母の赤子に對するが如く、生徒の心を以て心とし、生徒の情を以て情とし、其心其情を挫傷せず、垢を去り塵を拭ひ、天賦の美質を圓滿健全に漸次發達せしむるを得ば、智德體の三育を全うし得ること少しも疑を容れざる處なり。

生徒を思ふの至誠ある敎師とは何者ぞ、生徒に幽玄を說き、新奇を敎へ、以て自己の博學多才を衒ふことなく、生徒のために生徒を敎ふるにて、自己のために之を敎ふるにあらざる所以を知り、生徒の耳目を驚駭せしめて、自己の誇虛心を滿足せしむることなく、漸を以て進み次を以て敎へ、諄々として倦まざること、亦慈母の赤子を育成するが如き者を謂ふなり。

予は智德廣大なる六祖が二僧に敎へられしものと、無門禪師が更に後進のために六祖の旨を說かれし言と

兩ながら其懇篤なるに感ずる處あり、高德の高德たる實に空しからず、一片至誠無我の精神の其言に溢るるを思ひ、今の教育者に望む所あり、敢て此一篇を草す。

女子教育の方針

二三年後からです

東京女子師範學校長
兼東京第一高等女學校長　林吾一氏談

女子教育といふ聲は、未だ若いです、ホンの二三年前後からです、海老茶袴の女が市井に頻繁往來するといふやうになつたのは、近く此間のやうです、已に年月が短かいですから、唯茫乎として、何になるか本色の分らぬものもあります、けれども、兎に角、女子教育が欝然として、勃興しつゝあること丈は、殆んど自然の數のやうで、それは全く社會の必要に迫られて居るものでありましよう、故に今日女子教育の要は、先づ、此大勢の趨く所に、夫々道を拓いて、此勃興を克く利用して、好い花を持せなければならむであります。

方針が未定である

今から開拓するといふ有様でありまするから、女子教育の方針といふものは、十人十色で、未だ確固となつて居ないです、尠くとも迷ひ子であることが多からうと思はれるのです、乃ち矛盾すること、誤解せらるゝこと、或は後悔すること、或は遣り過すことなど樣々ありましよう、即ち今は全く女子教育の過渡時

代であります。
其處で、女子教育家の間にも、種々と闘ひがあります、窮屈に舊套を墨守する輩もあれば、非常に新主義を鼓吹する向もある、又女子の父母の方でも、學問丈克く訓へて下され、家政は家庭で訓へるといふのもあれば、學問は少しは出來るが家事や人樣の交際にかけては、何にも分らぬと呟く人もある、此處も亦十人十色甲是乙非紛々として以て女子教育方針の那邊に定る乎を知らざるものであります。
併しながら今日の如き多數の女子を教育の下に集むるに當りては、一日も早く一般に通じて女子教育の方針を確定したいものであります。

失敗は仕ますまい

世間には、我女子教育が、曾つて舞踏に一失敗したことを引きて、這回は又候海老茶式部の失敗だといふものがありますけれども、私はもう這度は、大丈夫と安心して居るのであります。
何となれば、這度は根本といふものが深く地に入つて居るです、女子教育は女子から叫び出したのではなくして、社會から叫ばれたのであります、社會の需用からして教育ある女子を、造つて供給に充てなければならぬことになつたのです、蓋し事は萬事がさうですが殊に夫婦の如きが尤もさうであります、即ち均り合ふ、いひ換ふれば夫婦同等といふことでなければ、處世濟家の道が好く行くものではありません、人によりては、或は封建時代の女子の無教育を採り來りて、女大學尺牘文範位で澤山だといふのでありまするが、此時は男の方でも、學者といふが漸く四書が讀める位で、普通は今の如く東西の學はなかつたのであります、されば女子が女大學位の素養で好かつたです、けれども、今日は大に時代が違つて居ます、已に男

子と女子がどの位學問技藝上の差異がありますか否男の方の半面は、非常に急速に進歩したが女子の方は非常に遲れて、これでは男子の友となることは出來ぬ、男子とお話が同等には出來ぬ、夫婦になれば提灯に釣鐘といふことになつたので、これでは自然女子がたゞ男子の命下に勞役に服するばかり、さてもかくては文明國の名を肩に衣るべき國家が、女子といふ澤山な奴隷を養はねばならぬ、女子といふ奴隷を其國の肢に仰ねばならぬこと、なる、如何にも殘念ちやといふので、即ち今日の如く壯に女子教育が興つて來るのではありませんか。

けれども今日の女子教育は、未だ萌芽であります、從つて幼稚であります、今一歩進んで、男子の教育と並行する位に壯んにならなければならぬのであります、這回女子教育は斯ふいふ次第で興ましたのでありますから、もう大丈夫、失敗はしませんです。

私の方針

女子教育は社會の必需に迫られて興つた、然らば如何して其供給をなすか、女子教育を旺んにするは、勿論でありまするが、此教育にも種類が色々あります、私は今高等女學校に就て御話をいたしまするが、而して其方針といふものは、前に申したる如く今尙ウワ〳〵して居るのであります。

私は平生斯ふ考へて居るのです、即ち女子の中等教育は一般に奥樣を造るのであります、已に奥樣を造る所であれば下婢や或はオカミサンを造る所ではないといふことを承知して貰いたいものであります。

奥樣は、其良人の智識に比例して出來て居るとか必要です、良人は、奥樣が造るホームで慰藉せられて、克く社會に奮鬪し、且つ良人處世上の話に付いて、奥樣が向を張つて相談相手が出來るやうでなくてはな

らぬ、今時克くある例の如く、良人が堂々たるゼンツルマンであるのに、奥樣が新聞は其三面雜報のみを拾ち來りて御話をするといふやうでは甚だ不釣合のもので、否それでは眞に夫婦といふものではありますまい、奥樣は良人のために慰藉者となり、相談相手とならなければならないです、良人が外交官ならば、奥樣も亦外交の智識があり、良人が詩人ならば、奥樣も詩が分り、良人が政治家ならば、奥樣も政治運動が出來、良人が教育家ならば、奥樣も教育に盡さるゝといふ風でなくては、到底奥樣たるの役目をなし得るものでないのであります。

女子の中等以上の教育は、此奥樣を造る所でありますから、良人に同情を持てる丈の學問智識がなければなりません、理想も高くなければなりませんです。

家庭の力

今の女子は、學問は出來ても家がもてない、經濟が下手であるといふ人がありまするが、これは多く家庭の罪であると考へます。

學校は、其人の人格の凡てを養ふ所ではありません、中流婦人の面目を保つだけの智識の素養を與へる所です、其人が經濟が上手だとか洗濯や裁縫が上手だとか御茶を出すに行儀が正しいといふことは、固より學校にても教へますが、實地の活用は小供の時から習をなさしむ可きもので、家庭の力に仰ねばならないのであります、然るに、日本では家庭が善く發達して居ないからでもありましよう、各家庭が學校で何でもやつて與れるもの丶如く考へ、學校と家庭とが共力して教育の目的を遂げる事が出來ると云ふ事を御考へになつて居ないものが澤山あります、これが甚だ困つたものです。

今日の女子と男子との學問の差は、實に甚だしいものです、餘程女子が奮發しなければならんです、良人の爲、良人の相手となり得る奥樣は、甚だ尠ないやうです、でありますので、奥樣は單に人形の如く飾られてある乎、さもなくば下婢同樣炊事と小供の守位で濟して居て、世間、殊に東西國家の上や、人民の氣風など、ソンナ高尚なことは、何も知らないのが多いです、女子が男子に蔑視せられ、ホームが立派に成立たないのは、皆女子の地位が卑いのです、地位が卑いのは、全く智識の劣れる爲めです、男子と雲泥の差異がある。

結婚

結婚の如きものは、之をいへば、仲々面倒なものがありましよう、其内で、私が常に感ずるのは、彼の婿取と、許嫁、見合等が、どうも可くないと思ふのです。

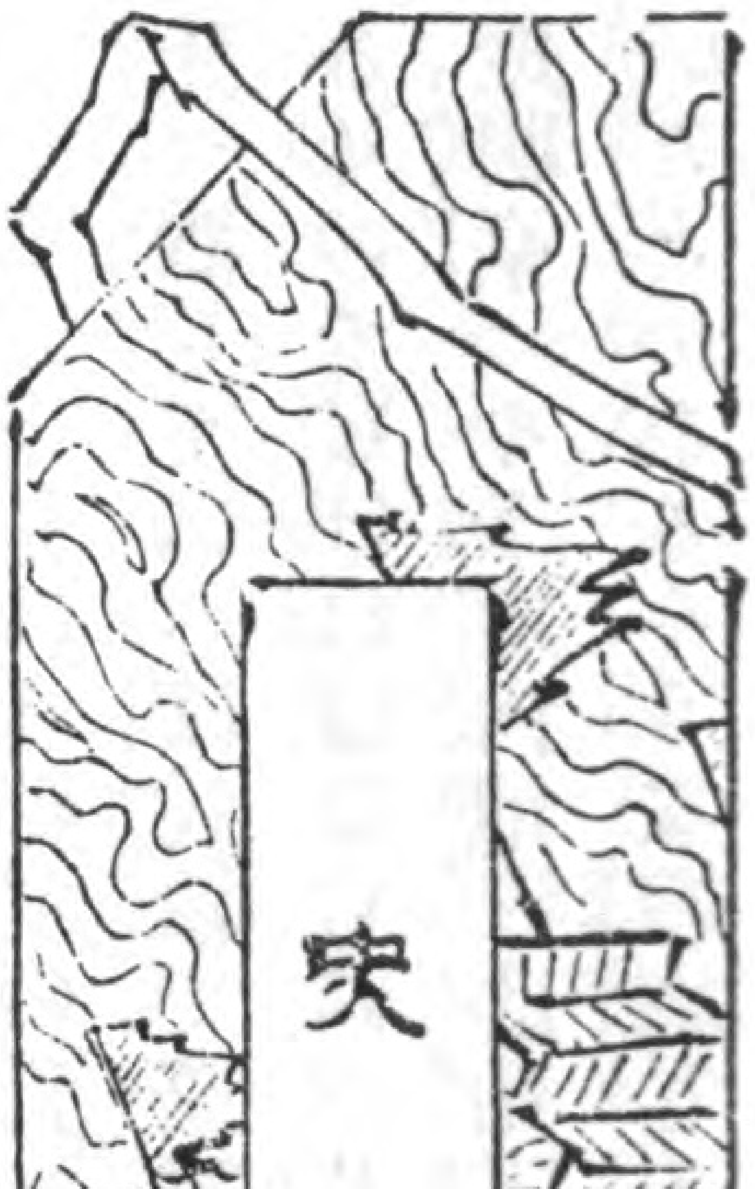
中等教育を受けて一人前の人となつた女子を、何か器械でも扱ふ積りで、其の本人の意思は何でも構はす、之を壓へ付けて居て、親達の氣に適ふた男子を其配偶に定めるのです、許嫁や聟取りにはこれが多いです、困つた話ではありませんか、ソレカラ見合の如きも甚だ無意味な方法であつて、あんな事では相方の人格が分るものではないです、これ等は、全く女子の自由を認めないものであつて、折角の中等教育も、此に至りては故紙同然となるやうな心持がします、尚これに付いては他日詳しく卑見を申しましよう。

故にこれ等の惡弊を除くために女子に十分に教育を仕込なければなりませぬ、女子中等教育は、女子を中等社會の婦人たる面目を保つやうにしたいのであります、故に學問を勸め、理想を高めたいのです。

（完）

海上の女丈夫

岫雲



我が國には其名が未だ能く知られて居らぬけれど、實はナイチンゲールと並び稱せられて居る程の名高い婦人が英國に一人ある。グレース、ダーリングである。彼は慈悲深き天女として、是は豪勇なる女傑として共に名を留めた。然るにナイチンゲールがクリミヤで人性の最も貴き美質を發揮したことは誰れも知らぬものはないが、ダーリングの偉績に至りては知るものが極めて尠ない。彼女は狂瀾怒濤の裡に於て人性の最も勇しき美質を發揮して居る。其の舞臺は海と陸との違ひこそあれ、何れも人の急に赴き難を救ふの精神に至つては彼と是とは全く同である。たゞ同じでないのは二人の身分で、彼は貴族の娘、是は卑賤の子であつた。併し彼女はナイチンゲールの如く貴となく賤となく社會のあらゆる階級の人から尊敬を受け嘆美を受けたのである。最も高貴な人イヤ王でさへもその異常なる功勳に打たれて彼女に値ひするの名譽を捧ぐべく人民と競ふ程の勢ひであつた。彼女の名聲は獨り自國のみでない、乍ちにして文明世界の到る處に鳴り渡るに至つた。彼女は抑も如何なる事をなせしぞ。今予の語らんと欲する所のものが即ちそれである。

グレース、ダーリングは燈明臺の監守をして居たウ

イリヤム、ダーリングといふ者の娘である。父ウイリヤムは頗るの子福者と見えて彼女は第七番目の子であつた。祖父はロバート、ダーリングと云つて原はバーウックシャイヤ州のダンスと云ふ土地で桶屋をして居たものであるが、後ノーサンバアランド州のベルフオードと云ふ處へ移住つて、それからとう〳〵其の州の沿岸にあるファーン島嶼中の一番外端なるブラウンスマンと云ふ島の燈明臺の番人に住込むことになつたのである。其子のウイリヤム、ダーリングも父の後を繼いで番人になつたが、千八百二十六年に同じファーン群島中のロングストーンと云ふ島の燈明臺に轉じた。

抑も燈明臺などの番人といふものは普通の性質の人では到底務まるものでない。それは特別の資格を要するものである。先づ概して云へば鋭敏で堅實で而して思慮分別のあるものでなければならぬ。其の上ロングストーンの燈明臺のやうな内地とは殆ど幾週間も全く交通のないことがあるやうな寂寞なる海陬に於ては、内に滾々として盡きない資源を藏して居るやうな性質が必要であらう。爾う云ふ氣根がなくては、殆んど社會を離隔れて、孤獨で、愉快に生涯を送つて行かれるものでない。普通の人では氣を振起てる事や、珍奇な事の缺乏に堪へないで心が直ぐにまいつて了ふ。處が上品の人は爾うでない。却つて斯ういふ場所を以て品性修養の用に供するのである。今茲に語らんとする女傑の父なるウイリヤム、ダーリングはこの氣根の上品な人であつたらしい。彼は非常に堅實で鋭敏で而して極めて沈着な謙遜な人として傳へられて居る。彼の爲人は其の兒女がすべて比較的立派に教育されて居たのを見ても大抵は察することが出來るであらう。例へば娘のグレースが走り書きの水茎否ペンの跡を見ても、其の手跡は世に貴女と云はるゝ人のにも劣らぬ美事なものであつたさうな。

グレースは千八百十五年十一月廿四日ノーサンバアランドの海岸なるバンボローと云ふ處で生れた。幼

い時彼女は內地で教育されたが、但しは少時も兩親の膝下をば離れず、常にその幽寂なる居宅、即ち最初はブラウンスマン島に、其後はロングストーン島に住んで居つたが、其邊の消息は得て詳かに知ることは出來ない。乍併年頃になつた時分より生を畢はるまでは常にロングストーン島の燈明臺に住んで居つて、母と共に僅かな家政を掌り、たゞ折々ノーサンバアランドの海岸を訪ふのみであつた。彼女は內氣で稍遠慮勝ちの性質であつたやうに傳へられて居る。體格は中位の方で、風丰は閑雅に、容貌は美はしく少しも雄々しいやうな姿勢はない。いかにも溫順で面相には柔和な慈悲深い色を浮べて居つたさうだ。彼女が其名を轟かす程の行爲をなした後に彼女を訪ふたウイリヤム、ハツイツトと云ふ詩人は之を見て、自分の腦裡に描いて居た理想のジエニー、デイーンスが實際世に現はれたのだと評して居る。ジエニー、デイーンスとは彼の有名なスコツトの小說中にある愛すべき忠實な人物で、不幸な妹のために一方ならぬ艱難辛苦を嘗めた所の女丈夫である。ハウイツトは云ふた、余は隨分多くの人を見て居るが彼女のやうに何とも云へない愛嬌を顏に湛へて居る者は未だ曾て見たことがない、彼女は眞に申分のなき善美な人間である、而して彼女の恭謙なる外面の底下にはいとも高く貴き獻身的精神が横つて居る、この獻身的精神は全く同情の心から起つて來るのだ、彼女は到底人の苦痛や危險を見て居るに忍びない性質なので、其の深き同情心は恐怖とか自身を考へるとか云ふやうな感情を一切呑み込んで滅絕して了ふ、即ち全く我を忘れて了ふのであると。あゝこれ程深き同情心、これ程完き獻身的精神が又と世にあらうか。

グレースが幼時の境遇にはさしでがましからざる熱中性を涵養したであらうと思はるゝものゝあることは蓋し疑を容れぬ所である。

抑もファーン群島と云ふは干潮の時は其の數が二十五あつて、而して其位置はノーサンバアの海岸より

今日の女子と男子との學問の差は、實に甚だしいものです、餘程女子が奮發しなければならんです、良人の爲、良人の相手となり得る奥様は、甚だ尠ないやうです、でありますので、奥様は單に人形の如く飾られてある乎、さもなくば下婢同様炊事と小供の守位で濟して居て、世間、殊に東西國家の上や、人民の氣風など、ソンナ高尚なことは、何も知らないのが多いです、女子が男子に蔑視せられ、ホームが立派に成立たないのは、皆女子の地位が卑いのです、地位が卑いのは、全く智識の劣れる爲めです、男子と雲泥の差異がある。

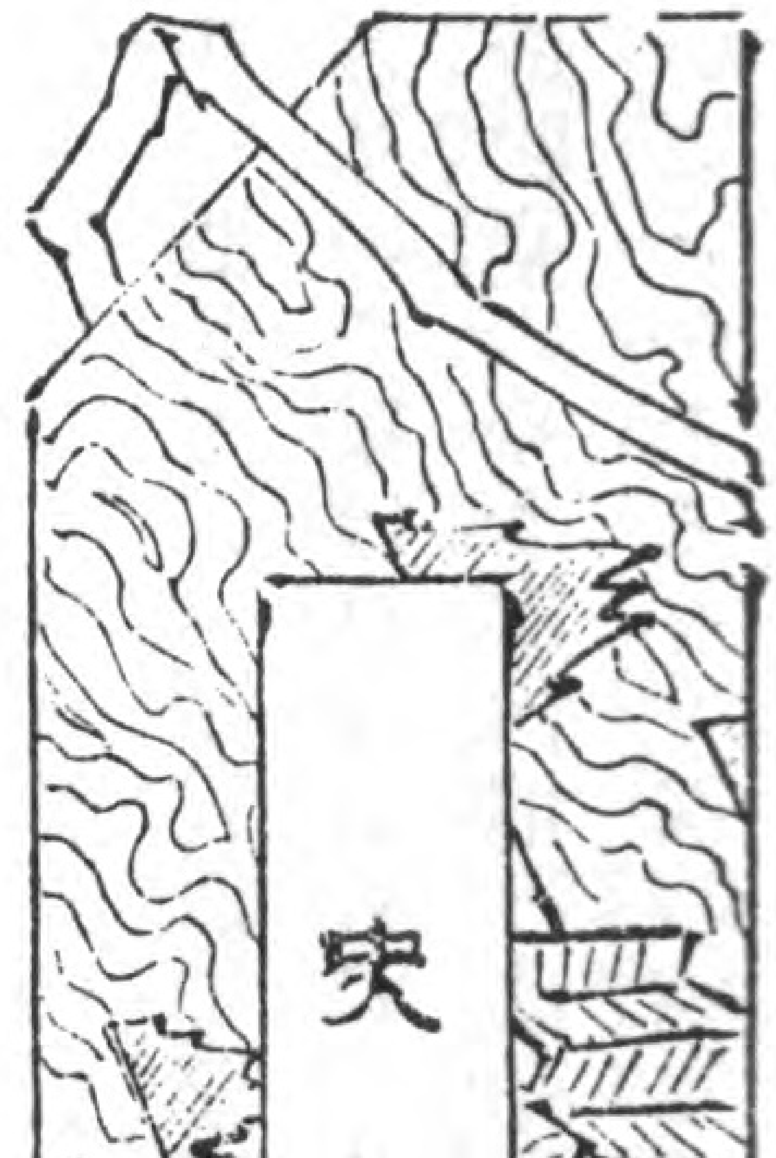
結婚

結婚の如きものは、之をいへば、仲々面倒なものがありましよう、其内で、私が常に感ずるのは、彼の婿取と、許嫁、見合等が、どうも可くないと思ふのです。

中等教育を受けて一人前の人となつた女子を、何か器械でも扱ふ積りで、其の本人の意思は何でも構はす、之を壓へ付けて居て、親達の氣に適ふた男子を其配偶に定めるのです、許嫁や聟取りにはこれが多いです、困つた話ではありませんか、ソレカラ見合の如きも甚だ無意味な方法であつて、あんな事では相方の人格が分るものではないです、これ等は、全く女子の自由を認めないものであつて、折角の中等教育も、此に至りては故紙同然となるやうな心持がします、尚これに付いては他日詳しく卑見を申しましよう。

故にこれ等の惡弊を除くために女子に十分に教育を仕込なければなりませぬ、女子中等教育は、女子を中等社會の婦人たる面目を保つやうにしたいのであります、故に學問を勸め、理想を高めたいのです。

（完）



海上の女丈夫

岫雲

我が國には其名が未だ能く知られて居らぬけれど、實はナイチンゲールと並び稱せられて居る程の名高い婦人が英國に一人ある。グレース、ダーリングである。彼は慈悲深き天女として、是は豪勇なる女傑として共に名を留めた。然るにナイチンゲールがクリミヤで人性の最も貴き美質を發揮したことは誰れも知らぬものはないが、ダーリングの偉績に至りては知るものが極めて尠ない。彼女は狂瀾怒濤の裡に於て人性の最も勇しき美質を發揮して居る。其の舞臺は海と陸との違ひこそあれ、何れも人の急に赴き難を救ふの精神に至つては彼と是とは全く同である。たゞ同じでないのは二人の身分で、彼は貴族の娘、是は卑賤の子であつた。併し彼女はナイチンゲールの如く貴となく賤となく社會のあらゆる階級の人から尊敬を受け嘆美を受けたのである。最も高貴な人イヤ王でさへもその異常なる功勳に打たれて彼女に値ひするの名譽を捧ぐべく人民と競ふ程の勢ひであつた。彼女の名聲は獨り自國のみでない、乍ちにして文明世界の到る處に鳴り渡るに至つた。彼女は抑も如何なる事をなせしぞ。今予の語らんと欲する所のものが即ちそれである。

グレース、ダーリングは燈明臺の監守をして居たウ

イリヤム、ダーリングといふ者の娘である。父ウイリヤムは頗るの子福者と見えて彼女は第七番目の子であつた。祖父はロバート、ダーリングと云つて原はバーウックシャイヤ州のダンスと云ふ土地で桶屋をして居たものであるが、後ノーサンバアランド州のベルフオードと云ふ處へ移住つて、それからとう〱其の州の沿岸にあるファーン島嶼中の一番外端なるブラウンスマンと云ふ島の燈明臺の番人に住込むことになつたのである。此子のウイリヤム、ダーリングも父の後を繼いで番人になつたが、千八百二十六年に同じファーン群島中のロングストーンと云ふ島の燈明臺に轉じた。

抑も燈明臺などの番人といふものは普通の性質の人では到底務まるものでない。それは特別の資格を要するものである。先づ概して云へば鋭敏で堅實で而して思慮分別のあるものでなければならぬ。其の上ロングストーンの燈明臺のやうな内地とは殆ど幾週間も全く交通のないことがあるやうな寂寞なる海陬に於ては、内に滾々として盡きない資源を藏して居るやうな性質が必要であらう。爾う云ふ氣根がなくては、殆んど社會を離隔れて、孤獨で、愉快に生涯を送つて行かれるものでない。普通の人では氣を振起てる事や、珍奇な事の缺乏に堪へないで心が直ぐにまいつて了ふ。處が上品の人は爾うでない。却つて斯ういふ場所を以て品性修養の用に供するのである。今茲に語らんとする女傑の父なるウイリヤム、ダーリングはこの氣根の上品な人であつたらしい。彼は非常に堅實で鋭敏で而して極めて沈着な謙遜な人として傳へられて居る。彼の爲人は其の兒女がすべて比較的立派に教育されて居たのを見ても大抵は察することが出來るであらう。例へば娘のグレースが走り書きの水莖否ペンの跡を見ても、其の手跡は世に貴女と云はるゝ人のにも劣らぬ美事なものであつたさうな。

グレースは千八百十五年十一月廿四日ノーサンバアランドの海岸なるバンボローと云ふ處で生れた。幼

い時彼女は内地で教育されたか、但しは少時も兩親の膝下をば離れず、常にその幽寂なる居宅、即ち最初はブラウンスマン島に、其後はロングストーン島に住んで居つたか、其邊の消息は得て詳かに知ることは出來ない。乍併年頃になつた時分より生を畢るまでは常にロングストーン島の燈明臺に住んで居つて、母と共に僅かな家政を掌り、たゞ折々ノーサンバアランドの海岸を訪ふのみであつた。彼女は内氣で稍遠慮勝ちの性質であつたやうに傳へられて居る。體格は中位の方で、風丰は閑雅に、容貌は美はしく少しも雄々しいやうな姿勢はない。いかにも温順で面相には柔和な慈悲深い色を浮べて居つたさうだ。彼女が其名を轟かす程の行爲をなした後に彼女を訪ふたウイリヤム、ハウイツトと云ふ詩人は之を見て、自分の腦裡に描いて居た理想のジエニー、デイーンスが實際世に現はれたのだと評して居る。ジエニー、デイーンスとは彼の有名なスコットの小説中にある愛すべき忠實な人物で、不幸な妹のために一方ならぬ艱難辛苦を嘗めた所の女丈夫である。ハウイットは云ふた、余は隨分多くの人を見て居るが彼女のやうに何とも云へない愛嬌を顔に湛へて居る者は未だ曾て見たとがない、彼女は眞に申分のなき善美な人間である、而して彼女の恭謙なる外面の底下にはいとも高く貴き獻身的精神が横つて居る、この獻身的精神は全く同情の心から起つて來るのだ、彼女は到底人の苦痛や危險を見て居るに忍びない性質なので、其の深き同情心は恐怖とか自身を考へるとか云ふやうな感情を一切呑み込んで滅絶して了ふ、即ち全く我を忘れて了ふのであると。あゝこれ程深き同情心、これ程完き獻身的精神が又と世にあらうか。

グレースが幼時の境遇にはさしでがましからざる熱中性を涵養したであらうと思はるゝものゝあることは蓋し疑を容れぬ所である。

抑もフアーン群島と云ふは干潮の時は其の數が二十五あつて、而して其位置はノーサンバアの海岸より

左程に遠く隔つては居らぬけれど、何しろ滅多に人の通はぬ處である。島は岩石から構成て居つて青苔の外には殆ど緑色といふものなく、周圍は削り成したる絶壁を以て廻らし、住むものとては海鳥の外に何もない。其のファーン島中での最大島に古昔一小僧庵があつた。その僧庵は六百八十六年に入寂した聖カッスバアトと云ふ聖僧の隱所として有名なものである。レーンと云ふ人の話に、ファーン島は閑居默想するには實に持て來いの幽境である、此處にて隱者の默禱や安息を妨ぐるものは、唯だ水禽の叫聲と風濤の鞺鞳たるのみである、時々は又島の鐵の如き斷岸に撞突して粉碎せられた船から阿鼻叫喚の聲を聞くこともある。併し乍らこは隱者をして益々遯世の志を堅くせしむるの縁となるのだ。なぜかと云ふに、旋風に乘り暴風雨を御する神の大事業に較べて見ると、人間も人間の所作も洵に哀れ果敢なきものであると云ふ實際の教訓を示すからである。ファーン群島中の小さき島の間の海峽には海水が非常

な勢を以て突入り込んで來るのであるが、以前航海者を導くべき礁標のなかつた時には、記錄こそなけれ、幾多の船舶が其處で難破したに相違ない。百何十年の昔、四十門の砲を有する和蘭の軍艦が、この島の間で其影を失ふて、乘組員は一人も殘らず海底の藻屑となつて了つたことがある。又千七百八十二年に兩桅の一大商船が亞米利加より歸航の途次、矢張りこの島の中間で粉韲されたが、其の時の樣は特別に悲慘であつたさうな。又千八百二十三年に一月卅一日より二月八日まで恐ろしき暴風の續いたことがある。其際にも兩桅船三艘と單桅船一艘とが島の近傍で難破した。けれども幸ひ乘組員は一人の外總て拯ひ上げられたさうである。其他サンダーランドの岬で兩桅船が粉碎されて船中のもの悉く魚腹に葬られ、又ハーカーの島影でも一大兩桅船と單桅船と難破したことがある。ファーン小群島は實に斯かく危險極まる處であるが、さて其中のロングストーン即ちダーリングの住んで居るロングストーンは一

體どんな處であるかといふに、曾て該島を訪ふた例の詩人ハウイットはこんな風に語つて居る。此島も他の絶島と同じく總て暗黑の綠石から出來て居て、方々に罅裂があつて、而して之れが世界開闢以來風や浪や暴風雨の作用で磨耗されて居る、見渡した處、島の大部分に一本の草もなければ一粒の土もない、到る處鐵の如き石で、周圍の海岸は滿潮の際潮水の屆く限り大小の貝殼をもて覆ふて居る、我等は黑い石から出來て居る皺襞だらけな小丘に登つて夫れから其小丘の幽陰な窄谷に降りて見た、その窄谷に入口のやうな處があると、潮水は得たりかしこしと狂ひつゝ怒りつゝ白く泡沫を立てつゝ流入り込んで來て綠石の碎片を圓い礫に攪動せつゝ海岸もて之を積上げて居るのである、又頭の上には幾百の鳥が翩々と皷翼しつゝ叫んで居る、その中には鷗の荒々しく物凄い笑聲も交つて居たと。ロングストーン島の荒涼たる光景はこれで察することが出來るであらうか。

グレース、ダーリングはかゝる茫々たる大洋の中間の寂寞たる海濱に、怖ろしい暴風雨を親しき心の友とし、窮りなき深海の濤聲を不斷の子守唄とし、瀰漫たる蒼海の水平線上に遠く見えつ隱れつする孤帆を眺めとし棲んで居つて、活動た社會からは殆んど閉出され、婦人としては好いたに違ひない交際といふものゝ快樂を全く知らぬのである。夫れは兎もあれ、ダーリングが其名を轟かすに至つた變事の起つたのは、彼女が恰も二十歲の上を二歲越した時であつた。

變事といふのは外でもない、ロングストーンの近傍で一汽船の難破したことである。其の汽船はフォーアファーシャイア號と云ふて、三百噸ほどの船であるが、ハルと云ふ處で貨物や鐵板を積んで千八百三十八年九月五日水曜日の夕暮六時半頃ダンディーと云ふ處へ向け出帆した。乘組員は船長のハンブル夫妻以下水夫が十人、火夫が四人、機關師が二人、石炭夫が二人、給仕が二人、其外に上等船客が廿二人

と下等船客が十九人とで、乘つた人の數は都て六十三人であつた。

フオアフアーシヤイア號は齡未だ僅に二歳に過ぎぬけれど、何故か汽罐に破損を生じて居つた。之を能く修繕しなかつたのは船の過ちである。尤もハルを出帆するに先ちて汽罐を檢査し小さき漏口をば塞いだけれどフランボローの岬頭を離れたときに復び水が洩れ始めて六時間ほどブツ通しに出て居つたが、喞筒で水をかへ出して居つた爲めに太した事もなかつた。やがて又檢査を行ふた時、機關師のアラン、スチユアートと云ふ男は、ナニ汽罐にこれ位の破損の入つたことは是迄も度々あつたと平氣で澄して居たけれど、火夫のダニール、ドノヴアンは、イヤ二個所の火が消えた程であるから、漏水が却々一通りのことぢやないと言つて氣を揉んで居たが、兎に角汽罐に一部の修繕を施した後、火は復び燃きつけられた船の進行は勿論以前よりも遲くなつた。それが爲め未だ幾干も駛らぬ内に三艘の汽船に追ひ越れた。船員があたふたとあちこちを驅廻はる騒動に乘客は何事や起りつると眼を張り耳を欹つるに至つた。下等船客で生存者の一人なるドウソン夫人が當時の光景を語つた話の中にかう云つてある。ハルを出帆する前でさへ船内の樣子がどうも變だと云ふ感覺が何となく起きたものですから、妾は良人が後れずに船へ來たら一緒に上陸して了はふと思つた位です。

フオーアフアシヤイア號はかく氣遣はしき狀態にあるをも顧みずに船を進め、木曜日の夕暮六時頃フアーン群島と本土との中間航路を通つて同じ夜の八時頃バアウイツク灣に入つた。北風強く波浪激しきために船の動搖は普通でない。夫れが爲めに漏水も漸々甚しくなつて來て火夫が火を燃くことが出來ぬやうになつた。乃で二人の水夫をして喞筒で汽罐に水を汲入れさしたけれど、入れるが早いか漏口から皆んな逃げて了ふのである。

十時頃聖アツプ岬の海上に船を留めた。暴風は益々其の猛威を逞しして少しも衰ふる樣子がない。やが

て機關は全く用を作さぬに至つた。陸に近く浮泛いて居るのは非常に危險であるので、船を風上に出してさうして陸から離れるために帆を前後に揚げて船首を廻した。まだ錨を投じもせぬのに、船は旣や運轉が能かなくなつて、唯だ激しく南方に流れて行く潮水に押されて其方に進むばかりである。猛雨は篠つく如く濃霧は濛々として咫尺を辨することが出來ない。其の間に風下近く破浪礁のあることが發見された。折しもファーン島の燈臺から朦朧と光明がさしたので、船中の人々何れも身が危機一髪の間に繋つて居ることを認めて顏色宛ながら土の如くに變じた。船長のハンブルは島と本土との間を駛つて悲慘の運命を避けやうと企てたけれど何の効も無い。船は舵の言ふ事を聽かないで狂瀾怒濤に飜弄せられつゝ唯だ波間に漂ふのみである。三時と四時との間に船は到頭船首を例の礁に撞着た。この礁は乾いて居る時に人が其上に直立することの出來ぬ程突兀たるものであるのだ。夫れに撞着つたのだからたまつたものでない。

此時に方りて乘組員の一部は不都合にも唯だ己が身を全うすることのみを先にして、少しも乘客を顧みず、左舷側の端艇を卸して船を逃出して了つた。ルースヴエン、リッチーといふ男は船が礁に撞突た響動に驚いて眼を覺まし、ガバと寢床から刎起きてたゞ洋袴を穿いたまゝ甲板へ飛出し、端艇の將に漕出でんとするを見るや否や投ぐるが如くそれに飛び乘つて、辛くも虎口否な船を遁れ出づることが出來たが、彼れの伯父と伯母は甥の爲に倣ふて端艇に飛び乘らうとしたけれど、誤つて海中に落ち、彼れの眼前で魚腹に葬られた。げに無慘といふも愚かである。船内は凄絕慘絕の光景を呈して、婦女子等みな悲痛の聲、絕望の叫びを發つて泣喚いて居る中に船長は途方に暮れて呆然立つて居つたが、其の細君は彼れに纏着いて宛ながら狂氣の如く力の及ばぬ保護を求めて居た。

船が破浪礁に衝突した後、程もあらせず猛烈なる濤

が寄せ來つて船梁と船尾の中邊を強く打ち、夫れから船を高く差上げて勢鋭く礁上に直下したから堪らない。船躰は尖々たる礁角に擊たれてあなやといふ間に美事真二つ。客房のある後部は船客を乘せたまゝ見る〳〵ビフア、ガットと呼ばるゝ猛烈な潮流に捲込まれて了つた。この潮流は好天氣の時でさへ危險に思はるゝ處である。船長と其の細君はこの捲込まれた後部にありて他の者と共に底の藻屑となつて了つたらしい。夫れから船體の前部は礁上に留つて居た。船が二つになつた瞬間に八九人の船客は船の前部なる絞繼の處に飛んで往つた。其處を最も安全な場所と考へたからであらう。又殘つた僅かの水夫は到底助かる見込はないけれど、兎に角自分等の持場を固めた。茲にいとも憐なるはサラー、ドウソンと云ふ婦人である。彼女は織物屋の細君で二人の小供と共に波濤の用捨なく浸入し來る前部の船房に畏縮んで居たが、救助者の來た時に彼女の玉の緒は胸の底で僅かに顫動いて居つた。けれど悼ましや二人の小供の身體は冷えて硬くなつて、母の腕に横はつてあつたさうだ。

五人の船員と四人の船客と都合九人の殘存者は黑闇く々の裡に波浪に洗はれつゝ、狂瀾怒濤の逆捲き來る度毎に懶破や海中に挪ひ去らるゝのかとあたら膽を冷しつゝ、懸命に船の破片にしがみついて一刻千秋の思をなしつゝ恐ろしい礁上に夜の明くるを待て居た。彼等が一浬程隔つて居るロングストーン島からダーリング一家の者によつて發見されたのは恰かも七日の朝で、夜がやう〳〵明け放れた時である。其時霧はまだ濛々として島を立罩めて居た。而して風力は稍々衰へたとは云ふもの丶、そよとだに風の吹かぬいとも靜けき日さへ波瀾の穩かならぬ海、鐵の尖塔閣の如く兀立して居る島々の間の峽路の海は尚恐ろしく荒れに荒れ狂ひに狂つて居る。その狂暴なる海の光景は、日も漸く闌けてからバムボロー城の執事なるスメッドルと云ふ人が五磅の懸賞をしたけれど、誰も船を出さうと云ふものがない、やつと

の事で一組の漁夫を説服けて本土から救助船を出させたといふ事實に因つて十分之を察することが出來る。

斯かる怖ろしい危險を敢て冒したといふことは、冒險者が鍛へて鍛へて鍛へ上げた筋肉の此上もない頑丈なさうして大膽不敵な男性であつても非常に名譽を博したに相違ない。然らば心の柔和い腕の纖弱い女性の力を以て、かばかりの冒險を敢てし、而して仁愛の使命を全うしたとすれば何うであらう。それは兎に角當時燈臺に居つたのはダーリング夫妻と其娘とのみであつたが、彼等は望遠鏡の助に依つて濛々たる霧を透して破船にしがみついて居る遭難者の影を發見した。けれども峽路の海は荒れに荒れ狂ひに狂つて居る。彼等遭難者を助くるために誰か敢て斯險を冒すことが出來やうぞ。父のダーリングは娘が冒險の企圖を聞いて畏縮つたといふことである。けれども娘の哀請の切なるに已むを得ず妻の手を借りて端艇を卸し、父と娘とかそれに乗込んで、各自に橈を取りつゝ逆捲く怒濤の中へ漕出した。茲に注意せねばならぬことは、グレースはフオアシヤイア號の破船せぬ中に、端艇を出して之を拯ふべき機會を有たなかつたといふ事である。

次にこの勇敢なる冒險者が戰ふた危險を思ふにつけ一の忘れてはならぬ事がある。それは他ではない、若しも干潮の時でなかつたならば、端艇は島々の間を通ふことが出來ないのである。而してダーリングと娘グレースが歸りは恰度潮の滿ちて來る時分であつたから、船を燈臺の島へ漕戻すことは、到底二人の力の能くする所でない。されば漕戻す時には殘存者の助力を借らなければ、彼等自身も亦復び潮の干くまで破船した礁の傍に留つて居なければならぬと云ふ樣な塲合であつたのだ。

扨て端艇を漕出した父と娘とはあらん限りの力を出し、且つあらん限りの勇を奮つて波浪と戰つたが、其の困難は普通りでない。やつとの事で礁まで漕着けたが、今度は礁に近く爲めに途に於て遭逢した危

險よりも一層酷い危險が起つて來た。夫れは端艇を定着させることゝ、それから寄せては返す巨浪のために、艇頭に衝突して舟を破壞せらるゝの虞を妨ぐことの困難からである。けれど、此の困難は遂に征服せられて、九人の殘存者は安全に助けられた。彼等が其時の歡悦はまあ如何なであつたらう。地獄で佛の體驗も僅かである。彼等哀れな者共がダーリングと其娘グレースの慈悲ある行爲に感じた深い眞情は、船の見えた時に彼等の眼が涙を堪へたのでも察せられる。かくて端艇が近づくと其中に思掛けなくも一人の女性が居る。即ち彼等の救助者の一人は女性であるといふことを見た時に、彼等が喜びの震聲は乍ちにして驚異の感情、何と言はうか言ふ語を知らぬ驚異の感情に變つた。彼等の驚喜は實に極點にまで達したのである。

殘存者は直ちに燈臺につれて來られた。言ふまでもなく此處は時に取つて彼等が唯一の避難所であるのだ。海の荒れが歛まらぬので、彼等は餘儀なく金曜日から日曜日まで逗留することになつた。ノーサンバーランドから救助に出て來た端艇の乘組員も亦た逗留すべく餘儀なくせられた。雙方の人數を合せると殆ど二十人に上るのである。小勢の家族のものゝ外にかく不意に多勢の人が殖えたのだから非常な不便を感じた。グレースはドウソン夫人の苦痛が心身共に烈しいのを見離ねて自身の寢床を夫人に供し、自分はテーブルの上に寢て滿足して居た位ゐである他の殘存者も夫れ〴〵寢床の代用物を供せられ、而して端艇の乘組員は爐の周邊の牀に眠ることにした。(因みに記す船が礁に衝突した時端艇を卸して逃出した連中は矢張九人であつたが、翌朝モントローズの單桅船に拯はれて、シールヅといふ處へ連れて往かれたさうだ、故に助かつたものは都合十八人で、其中十三人は船員、他の五人は乘客である)

却說グレースが身上には、其後何ういふことが起つたらうか。彼女の功績は其の名をして遂に全歐羅巴に轟かしむるに至つた。寂しい孤島の燈臺は新聞紙

のお蔭で好奇心と同情とに富める萬乘の心目を引着くる中心となるに至つた。幾多の富豪や大人はいづれも紀念品を贈つて年少烈女を尊敬するの情を表した。ノーサンバーランドの公爵及び夫人は彼女と父をアルンウイック城に招待して、金時計を贈り、彼女は其後訪問者の往つたときには必ず其時計を下げて居たといふことである。また仁愛協會は殆んど阿諛的の感謝狀を彼女に呈し、その會長は美しい銀の茶注を贈つた。其の他の嘆美者から彼女に贈つた頌詞も殆んど數ふるに勝へない程であつた。尚ほ又彼女の勇敢と仁愛とに酬ゆるために、公然義捐金が募集されたが、其の額は幾んど七百磅に達したといふことである。彼女の名は是に於て上中下各階級の中に均しく喝采を以て響き、其の肖像は熱心に世人に求められ、その熱心は終に極度に達して、首府の劇場主や、其他の興行場主から、一齣の演技中呼物として、唯だ端艇の中に座つて居て呉れゝば宜いといふやうな條件で、一夜何程と非常な額を捧げて彼女の出場を請ふものさへあるに至つた。けれども這麼樣な申込みは無論一言の下に何れもキッパリ刎付けられて了つた。グレースはヤンヤと四方より喝采さるゝ裡に在つても決して誇る氣色なく、謙讓の徳を束の間も忘れたことはない。又阿諛的頌詞は降るが如くに來たけれど、之を見て驚喜と感謝の意の外は心中に何の情をも起さなかつた。彼女は自分の身上の有樣の良くなつたにも拘はらず、人の群がる本土よりは寧ろ海中の孤島に於ける狹き家庭により貴くい、い、い、より正しき樂天地を見出したので、其の後も父母と共に相變らずロングストーンの燈臺に住で居つた。

吾等は玆に又詩人ウイリアム、ハウイット、が、ダーリングを訪ふた時の記事中より、一節を引かうと思ふ。予（ハウイット）が訪ねた時に女史の姿は見えなかつた。父ダーリングの語る所に據れば、女史は自分を眺めに來るやうな人物に面會することを痛く嫌ふて居るといふ事なので、予も亦面會を謝絶されはせぬかと内々氣遣つた。が老父は予と暫し言葉を交

へた後、起つて女史の室に行き、軈がて微笑しながら出て來て、直にお目に掛りますといふ返答であつた。乃で予は老父に導かれて燈臺の頂上に登り、其處に据置けてある機械やら、遠き海岸の好風光やらを眺め、更に老父の指顧するに從つて當時破船した場所や、父子が遭難者を救助するために往復した舟路やを眼のあたりに視た後、去て下に降りて行くとグレース女史は座つて何か裁縫をして居た。着衣を見るに清楚としては居たが極質素なもので頭髮は奇麗に辮んであつた。

女史は叮嚀に起つて快よき微笑を浮べながら、挨拶をした。「いらつしやい」。女史の容姿は決して人の眼に立つ程ではない。寧ろ反對であつたが、併しその顔面には眞に温良恭謙の相を湛へて居た。其の相は即ち正しく女史の性格であるのだ云々。是れ仁愛の行爲は眞誠なる精神より來るてふことの確證ではないか。

女史の偉勲に對する喝采の聲が未だ消えも去らぬ内に、天が此の烈々たる女傑を奪ひ去らんとするは何たる殘酷のことであらう。あはれや女史は自分の偉績に酬ゆる世間の評判がどれ程であるか、其の估價を知つて心に愉快を感ずるだけの時日もなく、恐ろしい死神に確かと摑まれた。昔時から善人は如何して夭死をするのであらうか、女史は肺病といふ不治の病魔の犧牲に供せられた。身體が次第に衰弱して行く徴候を呈したので、千八百四十一年の末つ方、女史は醫師の勸告に依つてロングストーンの燈臺からバンボローと云ふ處に轉地し、そこで暫時療養を加へて見たが、少しも快方に向ふ樣子がないので、今度は自から望んでウーラーと云ふ處に轉じた。空氣は極めて清良の地であつたが、併し矢張何の効驗もない。乃で今度は新城に行かうと云ふのでウーラーを去つたが、父の請ひに依つて途中のアルンウイックで父に會合つた。處がノーサンバアランド公爵夫人はロングストーンの烈女がアルンウイックに到着したといふことを聞込まれたものであるから

直樣この都會で空氣の清潔な流通の良い地點に小奇麗な住宅を搜して之を女史に供し、また日用の必要品をも何不足なく給し、且つ自分の侍醫までも遣つて種々療治に手を盡したけれど、矢張り何の効もなかつた。父はいたく娘の容體を憂へて家族の裡へ歸へることを望んだものであるから、女史は尚一度バムボローなる姉妹の家に移ることになつた。女史がアルンウイックを出發しやうとした其日、ノーサンバアランド公爵夫人は一人の從者をも伴れずいと質素な風でダーリング女史の住家を訪づれ、名殘を惜みつゝ最後の訣別をなした。

女史が白玉樓中の人となつたのは、バムボローに着いてから十日目であつた。傳ふる所に據れば、死に先だつて女史は自分の最後の近きつゝあることを能く知つて居たけれど、之が爲めに聊かも心緒を亂せしことなく、又病中も決して呻吟の聲を發したことはなかつたといふ事である。尚ほ臨終に際して女史は多くの親戚に訣別を告げたいと望んだので、親戚の人々は繰合せの出來る限り女史の枕頭に集つたが女史は驚くばかりの剛氣と我慢とを以て一人〱に永久の別辭を述べ、且つ銘々に紀念の品物を贈つて最早思ひ殘す所なきさまゝ靜かに死の至るを待ち、千八百四十二年十月二十日といふに到頭現世を去つた葬式の事などは管々しいから書かぬが、會葬者は貴賤尊卑となく、老弱男女となく非常の數でいづれも深き哀悼の色を浮べて居たさうな。

終りに一つグレース、ダーリングが爲人の解説として、斯ういふことを記さねばならぬ。女史は所々方々から結婚を申込まれた。其數は却々非常なもので其の申込の多くは勿論女史の利益と思はるゝものであつたが、併し女史は兩親存生の間は、決して其側を離れない積りであると云つて、悉く其の申込を謝絶して了つた。傳ふる所に據れば、女史がノーサンバアランド公爵及び夫人に始めて面謁した時に公爵は女史に對つて、斯樣な事には能く〱注意するやうにと望みたるに、女史は公爵の承允なくしては、

決して結婚せぬといふ事を約したさうである。邪は兎もあれ、これからが盛りの花を夜半の嵐こそ恨みなれ！。

八幡船

文學士　濱田紅於

前回には蝴蝶軍と題して、韓半島に於ける倭寇の概略を記せしが、今回支那に於ける倭寇を陳べむと欲す。

支那の倭寇は朝鮮の如く古からざれども、我邦に寇せし元の世祖忽必烈死して、その子成宗鐵木耳位に即きし時、わが邊民は早くも支那の海岸を侵せり、吾人は寧ろ彼等の大膽に驚かさるを得ず、されば元にては、千戸所を定海におきて、歲に至る倭寇を防ぎたり、これより彼我の位地は全く一變し、さきに我が九州の沿岸を侵しゝ元は、今やわが倭寇に對して、防禦的態度を執るに至りぬ、即ち元は務めてわが國人のその國境に入るを禁じ、又要所々々に都元帥府、行省を立てゝ海岸を警固し、一方に於ては使者を我邦に遣はして、交通貿易を許し、以て文永弘安の役の復讐を爲さざらしめむことを勉めたり、元の我邦を畏るゝこと、又甚しからずや、然れどもこれ等の防禦策は皆むだなりき、この後元は内訌連りに起りて國勢衰へ、遂に群雄蜂起して、濠州の僧朱元璋なるもの、元室を滅すことゝなりぬ。

朱元璋已に元を滅ぼして、中國に君臨し、國號を明と稱し、使者をわが太宰府に遣はし、國書を齎して即位を報じ且つ倭寇について詰問する所ありき、この國書はそのかみ筑紫におはしゝ征西府宮懷良親王に宛てしものなり、されど倭寇は親王の思召におらず、且つ書辭無禮なりければ、返書を下し給はざりき、此の間に倭寇は雷州を侵し金州を襲ひ、又浙東を掠めたり、然れども明は草創の際にして、勢甚だ強かりければ、よくこれを擊退し、我が將軍足利義滿は明と通じて逮捕に盡力し、鎮西探題今川貞世こ

れを捕殺すること多かりければ、倭寇も勢を逞しうすること能はず、忽ち商人と變じて、支那朝鮮の諸港に至りて、靜かに貿易に從事せり、然るに朱元璋死して、孫惠帝位に即きしが、叔父燕王棣靖難の役を興して位を奪ひ、國内やう／＼穩ならず、而して我邦にては南北朝合一して、天下漸く條緒に就きしかば、不平やるせなき宮方の武士共は、多く海賊となりて海外に雄飛せむと企てぬ、さればかつて商人と化せし倭寇も、再び干戈を執りて蜩起し、八幡大菩薩の大旗はまた明人の膽を寒からしめたり。加之足利義持の將軍となるに及び、明に諭して通信を絶ちしより、倭寇を制御するものなかりければ、その勢の強大なる前代の比にあらず、且つ明世宗の嘉靖年間には、その海賊汪直と相合して、大擧入寇せり、明の史に曰く、連艦數百海を蔽ふて至り、浙の東西、江の南北、濱海數千里同時に警を告ぐ、昌國衛を破り、大倉を犯し、上海縣を破り、江陰を掠め、乍浦を攻め、金山衛を刧かし、崇明を犯して常熟に及びぬ云々、大倉より蘇州を掠め松江を攻め復た江北に趣き、通泰に薄り、嘉善を陷れ、崇明を破りて、復た蘇州にせまり、崇德縣に入り、吳江より嘉興をかすめて還拓林に屯し、縱橫に來往して無人の境のごとしと、地理を按ずるに、これらは皆浙江省の島或は港にして、その一帶の海岸は、かくの如く倭寇の害を被りしなり、こゝに於て明は諸將をしてこれを征伐せしめ、兪大猷はこれを王江徑に破り、胡宗憲は汪直を降殺せしかば、浙江の寇はやう／＼平ぎしも、福建廣東の警報日に至りしかば、兪大猷は戚繼光と力を協せて、僅にこれを平定することを得たり、時に嘉靖四十二年にして、我が永祿六年にあたる。支那の倭寇に苦しむこと約三百年、而して豐太閤の朝鮮征伐に先つこと、約三十年なり

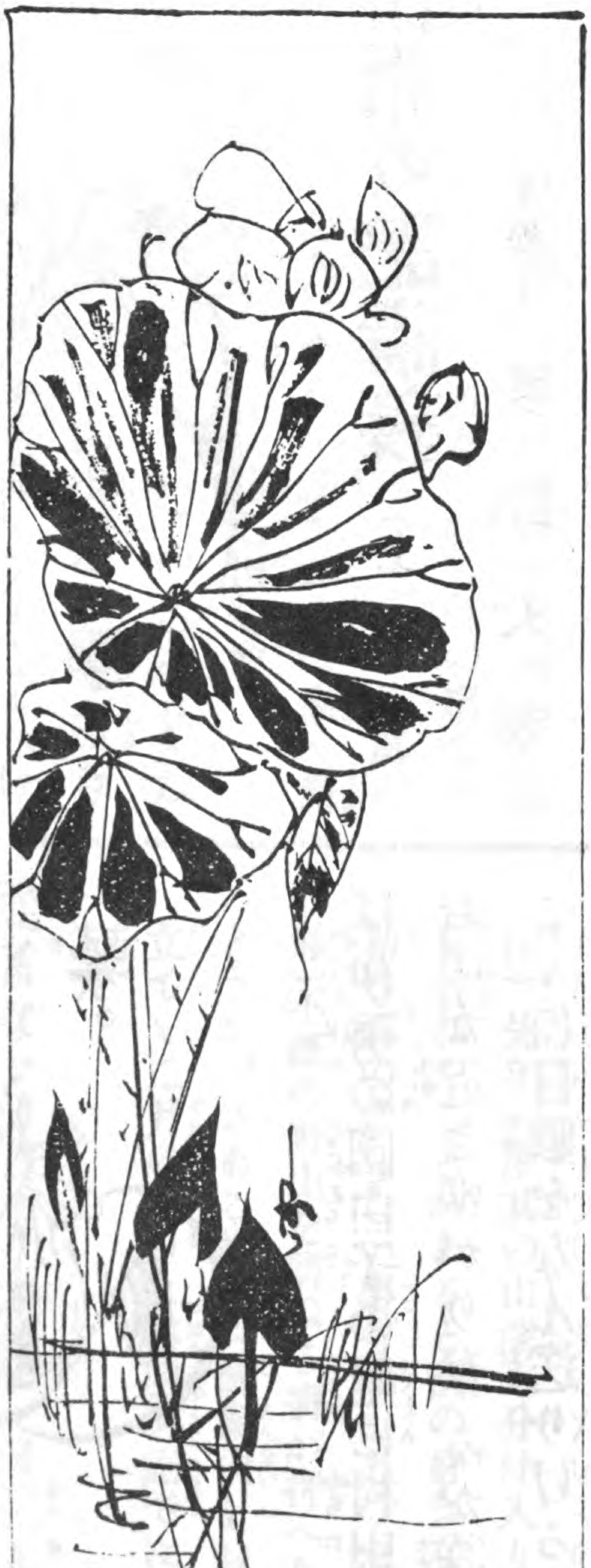
倭寇とは日本の海賊の謂なり、我邦海賊の起源は古し、昔王朝の頃、綱紀漸くゆるみて、京都にては延喜天曆の治を誇りぬれど、地方の頹廢の甚しく、豪族は王土をぬすみ、奸吏は王民を虐げし程に、海

賊もこの頃よりぞ起りける、すなはち瀬戸内海の惡漢どもが諸國の貢物を奪ひ取りしに始まりしものにして、その後その黨與は宛も一つの社會を成して、内海の處々に根據をかまへ、世治まりし時は、運送貿易を業とし、世亂れし時は、掠奪を事としたり、既にして我邦の元兵を破るや、我商業上の機運大に動きて、海賊はます〳〵勢を得、遂に、海外に遠征を企つるに至りぬ、而してその勢の强大なるは領主地頭等と比肩するに足るものあり、南北朝の頃伊豫國に村上三郎左衛門義弘あり、諸國の海賊を統一して大將軍と稱せしが、後山城守北畠師清これに代り、中國四國の間を橫行して、往來の船舶をおびやかし、或は支那朝鮮の海陸に活動せり、凡そ盜賊なるものは道德上にも法律上にも宥すべからざる罪人なり、然れども倭寇は我國力發展の一現象と見得べきものにして、これによりて我が海運の業が大に開けしを思へばその功やまた沒すべからざるものあり、後土御門天皇の頃朝鮮の諸港に於ける我居留民は實に二千人に垂とす、豈に盛ならずや、而してこれ等の居留民にして、一旦雲雨を得れば、忽ち變じて海賊となりしなり、朝鮮拒ぐこと能はず、國王の印を捺せし契劵を與へ、期を定めて來往貿易せしめ、又船の大小によりて、財貨を分ち與へければ彼等はその貨物を以て、支那の港に至りて交易し、兩國の貿易は殆んど倭寇の專有に歸したれば、海賊を營みし津々浦々は、頗る繁榮せしと云ふ、かくてその富みて力あるものは、おのづから船主となり、その資産を投じて業務を擴張し、力なきものはその手足となりて働きしかば、航海の術はます〳〵開けて、貿易の業いよ〳〵起りたり。

予尙ほ倭寇について記憶すべき事實を得たり、足利義滿既に南北を合一し、府庫を傾けて豪奢に耽りしかば、忽ち國用の不足を告げ、諸種の課税にてもこれを補ふこと能はず、遂に明に低頭して貿易の利益を得むとせり　試に應永十年の書狀を見よ、日本國王源道義表……臣源道義誠惶誠恐頓首頓首謹言と國

體を沒却し、異朝の君主に臣禮を取る、失體の極みと云ふべし、故に明は我邦をその藩屬とせむとせしも倭寇は却つて常に攻擊的態度を取り、我國威を東洋に震はしめたり、かの明の成祖即ち燕王棣は內政を整へて外國を征伐し、安南を服し、後印度及び南洋諸國を納貢國とし、又韃靼及び瓦剌を征して蒙古の族を殲したれど、我邦に對しては一矢をも加ふることの能はざりしは、倭寇の勇武彼を震慴せしめたるを以てにあらずや、然らば足利氏が失墜せむとせし國威は、倭寇によりて維持せられたりしなり、實に倭寇はかくの如き事業をなせり、故に吾人は孑々たる一介の草賊を以て、彼等を見るべからざる也。

（をはり）





椿詣の記講義（上）

文學士　境野天華

（作者は縣居門下の高足、歌文に於いては加藤千蔭と名を等しくした有名なる村田春海、其の年代は此の記の結末にもある通り天明七年になつて居る）

去年の秋、都にまう上りけるに、今歳正月のつもごりの日、都のうちなべて殘る方なく燒けて、かりそめの旅居も安からねば、伊勢の國白子の里に村田の橋彦とておのが近きゆかりなるが許をとひ來てこゝに日數をなん送りける。

天明六年の秋、江戸に上りてしばらく足を駐めて見たが、江戸では今年正月の晦日に大火があつて市街は殆んど殘る所なく燒け失せたので初から長く滯るつもりでもなかつた旅の身には一入尻が落ち付かず、とう／＼江戸を後に見て伊勢の國に下り、白子の里と云ふ所に居る自分の近い親類筋の村田橋彦と云ふ人の家を訪ね往き、其處に幾日かの日數を過した。

まうのぼる、　参りのぼるの意

橋彦が子なりける並樹と云へるは、みやび人にて何くれと古き跡など問ひもとむることをも好みけり。ひと日おのれに語らく、この白子の里より西なる方に遙にいと高う見ゆる山あなり。

其の橋彦と云ふ人の子息で並樹と云ふのは丁度自分と能く心が合つた人である。性來風雅の志があつて、考古の癖が強い。それで何かと云ふと古跡を尋ね昔の事を探がして居る。或る日の事であつた。此の並樹が自分に向つて語るには、此處の白子の里から西の方角に當つて遙か遠方に高く聳えて居る山が見ゆるがと云つて話し出した。

かしこに椿の明神、しやくたいじなど云ふ神なんおはすなる。その邊にしも古き跡は殘れり。あはれ見せまほしうこそ。おのれ先つ年、分けのぼりぬとてかたる。聞も及ばぬ事ども多かり。例の野山ふみ分くるすさみの止め難くて、いざ道しるべし給へなど言ひそゝのかして二月はつの九日かどです。

あの處に椿の明神樣としやくたいじん（石大神）樣とが鎭座されて御出になる。其の邊一帶の地には種々の由緒ある古跡が殘りて居る。それをどうか同じ心の貴方にも見せたいものだ。自分は（並樹）先年一度其の山深く分け入り其の古き昔の跡を尋ねたことがあると例の好きな道の話、種々と初つ耳の珍らしい事も澤山あつたので、自分も（春海）不斷の野山を尋ぬる癖が押へきれなくなつて、どうか、さあこれから御案内をお賴み申すと催し立てゝ二月の九日に椿明神詣でに出發することにした。

從者などはなくて、たゞ二人ともなひ出づ。橋彦はしばしのほどの別れ惜みける

にや、庭の櫻の枝を折りて、

山路ゆく君とゞめよと我やどの

花こそまたき咲初にけれ。

返し

契りおきてわれ見はやさん櫻花

かへり來ん間はちらすもあらなん。

と言ひすてゝゆく。

同行は並樹と自分と只二人、外に供の者も從へなかつた。並樹の父橋彥は只二三日の別れであるがそれも名殘惜しく思はれたのか、櫻の花の一枝を折りて來て、こう云ふ歌をよみ添へて示して吳れた。

(歌)今山深く分け入らんとする君等を引き止めて置きたいと氣早くも(まだきに)自分が家の庭にはこれこの通りはや櫻が咲き初めましたのに、それを見棄てゝ御出懸なさる御心はさても。

其の返歌に

(歌)いや見棄てゝ行く積りではありませぬ、こゝの櫻は歸りて來てからゆつくり見て飽くまで賞翫しやうと思つて居るので、どうか自分共が歸りて來る迄は散らずに居て吳れよと約束をして置きたいのです。

と云ふ歌を詠み其儘すぐと出發した。

里ぎは立ち離るれば春の海しづかに晴れて、松の嵐もうち霞めるに遠山まゆのかつ見え且隱れたる、繪にかゝまほしき朝なり。火うち取でゝ烟うちふきていにしへ今の事ども相語らひつゝ來し方のいまはるかなるさへ覺へず。

白子の里の村はづれ迄來て海の方を眺めやつて見れば春のことであつて波も立たぬ靜かな海の晴れたるながめ、四邊の松吹く嵐の音まで何處となく霞みかけて其の間から遠山の蒼翠は淡く眉墨を描いて、おぼろに見ゆるが如く、隱くるゝが如く、

此の儘そつくり繪に書いて見たいと思はれる面白い朝の眺望である。此の面白い景色を眺めながら腰のあたりから燧石を探り、煙草にすり付けて、ぷかぷかとやりながら、昔の事も現今の事も思ひ出すまゝに話しながら歩を運ばせたので、來路の遙かであつたヿも打忘れて何とも思はなかつた。

神戸の驛を過てかひ川を渡る。此川にそひて山の邊村あり。少し高き岡のもとに山の邊の御井の跡ありとてあるを立寄りて見れば、かたはら皆田につくりなしてわづかに井とおぼしくてあり。

神戸と云ふ宿驛を通り過ぎ、かひ川を渡りた。此の川添ひに山の邊村と云ふのがある。此の村に少し小高く成りて居る岡がある。其の岡の麓の處に山の邊の御井の古跡があるからと云ふので立寄りて見た、其の附近一帶は水田に開墾して只井の跡らしいのが形ばかり殘りて居る。

今は水もあせて、たゞ老木の松の枝二つにわかれたるが一本なん立てりける。萬葉集にこの山の邊の御井の事見えたるを、賀茂の翁はこの山べ村なるにはあらで、五十鈴の神宮の邊にありつらんと言はれたり。

井戸の水と云つても今では殆んど涸れ果てゝ居る只井戸に近く年經た松が一本、幹が二股に分れたのが立つて居る。此の山の邊の御井の事は萬葉集にも出て居るが賀茂眞淵(即ち春海の師)翁は此處の山邊村にあるのは萬葉集に出て居る山の邊の御井ではない。五十鈴川の大神宮の近くにありたものであらうと云ふ說を云つて居られる。

今並樹が言をきくに本居のぬしの考へけるは此山邊村なるが古の跡なるべしといへりとぞ。其のゆゑよしを聞くにいと道理あるやうに覺ゆれど言長ければ

こゝにはもらしつ。

處で只今並樹が云ふのに本居宣長氏（宣長も同じく賀茂眞淵の門人）は反つて此處を古の山の邊の御井の跡であらうと云ふ說を立てゝ居られる。其の理由はと云つて自分に話してきかせた並樹の言葉は極めて道理に協つて、間違ひない說であるやうに思はれたが、それを一々此處に書けば長くなつて面倒であるから略して省く。

石藥師の驛のなかばより道を西北の方にとりて廣き野に出づ。この野を鴨の長明が歌にはいつみ野と云ひ、烏丸光廣卿の歌にまりが野ともよみ給へり。今は廣瀨てふ村のあるより廣瀨野ともいへり。

石藥師と云ふ宿驛の中程の處から西北の方へ通じて居る道を步るいてある廣き野原に出た。彼の鴨長明の詠んだ歌に「いつみ野」とあり、又烏丸光廣卿の詠まれた歌に「まりが野」とあるのは此の野を云つたものである。現今は村の名が廣瀨と云ふに因んで此の野を又一に廣瀨野とも呼んで居る。

又のぼ野といへるは、いと古き名の傳はれるにて古事紀にも日本書紀にも日本武の尊の能褒野にて神あがりましつと記せしはこの野をいへるになん。

又此處の野をのぼ野と云ふのは極めて古き昔からの名が傳はり傳はりて居るので、即ち古事紀や日本書紀の中にも日本武尊が東征の歸途能褒野で薨去せられたと書いてあるのも此處のことを云つたもので、其の名が今日も傳はり居るのである。

かんあがり　人死すれば神となると云ふ太古の人の信仰から出た言葉。

ゆきゆきて打望むにたゞ目路のかぎり小松どもの立並びて、何處をかぎりともえわかず。ゆくての道の邊は桃櫻などかたぐ\に綻びて菫いとおほうさきたり。

歩を進めながら眺め出す四邊の景色、眼眸の及ぶ限りの小松が原、何處をかぎりと果てしもない。往くさきの道路に沿ふては桃と櫻とが咲きこぼれて、いづれもいづれも見事なもの、其の下には可愛らしい菫の花がどつさり咲いて居る。

しばしこゝにして草をむしろに休らはゞやなどいひて、並樹

見るたびにゆかしさそはる菫草
　つまではいかで野べを過ぐべき

手引きつれたる柴人のあまた通ふなるが、桃さくらなど手毎にとりてぞゆく。

　さく花を手ごとにとりて賤のをも
　　心ありげにみゆる野べかな。

餘りに可愛らしい菫の花、只見過ごして行くも殘り惜しい、此處等で一寸一と休み、草を藉いてゆつくり眺めやうと云つて並樹の詠んだ歌、

(歌)一度よりは二度、見る度毎に愈花のゆかしさなつかしさは添はる、此の菫草をどうして手にも摘まないで過ごされやう、此處の野邊を。

しばらく眺め入りて居ると野の路つたひに手引き連らねて來かゝる木こり柴刈の一と群、其の人達が桃の花、櫻の花を思ひ思ひに折りて手に持ちて居るのが面白い。それを見て自分はこう云ふ歌を口誦さんだ。

(歌)春に逢ふて咲き出した花、桃と櫻とを手に折り取りて野路をたどりゆく賤の男は、一廉の風流を解し、自分にも似合ぬゆかしい心を持つて居るやうにも見られる、實に面白い此處の野のながめ。

午の時過ぐる頃にたけびてふ所に出づ。松の村立たる中に白鳥の陵なりとて わづかなる塚とおぼしきが木立など うち茂りたるあり。前には鳥居をたてたり。

正午過ぎてたけびと云ふ名のある所に來懸つた。一村松の林の中に白鳥の陵と云ふ形ばかりの古さ

塚らしいのがあつて、周圍は種々の木がこんもりと生ひ茂つて居り、其の森の前には鳥居を立てゝある。

いゝたけび　景行天皇の皇子日本武尊東夷征討の歸途病に罹りて伊勢能保野に薨去し玉ふた。朝廷之れを追悼し諸國に建部の民と云ふものを置かれた事は歷史上の有名なる事實となつて居る。これは即ち其の名の傳はり存するのであらう。

いゝ白鳥の陵　日本武尊の御陵から白鳥が飛び立つたので其の陵を白鳥の陵と名づけたことも同しく歷史上の事實になりて居る。

こは古への跡ともえおぼえぬよと云へば、並樹がげにさる事なり。こは近き世に五天といへる法師のこゝを白鳥の陵なりとは定めつるなり。むかしは鳥居もなく只たけび塚と言へりとなん。

これが彼の有名なる歷史上の古跡、日本武尊の御陵であらうとは少し怪訝な事である。これは恐らく實際の御陵ではあるまいと自分が言ふと、並樹は對へて云ふやう。左樣如何にも御尤の御考へである。此處を白鳥の御陵だと定めたのは近世になつてからのことで五天と云ふ名の法師が此處が昔の白鳥の御陵と獨りぎめに定めたのであつて、必らずしもそれを信ずる譯には行きませぬ。御陵とは云ひながら、以前此處には鳥居も立つて居なかつたのでも確かにそれであらうとは云はれぬ。五天が白鳥の陵と云はなかつた以前は只たけび塚と名づけられて居たのである。

此の野には塚こそ多けれ車塚、ふた子塚ひよ鳥塚などいふがこの近き　ほとりにもあれど陵ならんとおほしきはあらず、いづれ此の大野の中にかの陵は　ありぬべきを年經て今はさだかにも知られ　ぬにこそ。

一體此の附近の野原にはこの種類の塚は極めて多い、近い處にも車塚、ふた子塚、ひよ鳥塚と云ふ名の塚もあるからして見てもこれもそれ等と同じ種類のものであらう。此のあたりに御陵とでも云ふべきほどのものは見當らぬ。彼の陵と云ふのも大方は此の野の何處にかあるのであらうが年經た今日となりては何處であらうか確かにはわかり兼ぬるのである。

又かの西の方に高き山をのゝぼりとなん云ふなる。山のかみつがたに大きなる石の櫃のあらはれ出たる所ありと云へり。のゝぼりは、のぼのをよこなまれるにてこれなん陵なるべきなど云ふ人もありとぞ。

彼の西の方に當りて高く空に聳えて居る山をのゝぼりと此の邊の人は名づけて居る。其の山の上部の或る所から石棺の大なる物が發見せられたことがあると云ふことであるが、のゝぼりと云ふのは能褒野を訛りて呼ぶのでこれが眞個の白鳥の御陵の趾であらうと云ふ人もある。(上の「げにさる事なり」云々より此の處まで並樹の言葉を記したものである)

かく打語らふほどに時うつりぬ。しやくたいじに詣で、とく椿の御社にこそ行かめとて急ぐ、山近くなるほどに、道やゝさかしう覺ゆ。あるは上りあるは下りて御熱川をわたる、

此のやうな話に實が入りて大分時が經つた。是から石大神を拜み、疾く椿明神の御社に參りたいと思つて急ぎ足に歩るいた。段々と山に近づくに從ひ道は次第に險岨うなりて來る。上るかと思へば下り道になり、御熱川と云ふ川を渡りた。

しばし松のたち並びたる陰をすぐれば山路いと廣く黑き岩どもこゝかしこに

亂れ立てり、歩みくるしなどいひてしばしこゝに休らひぬ。さてそばの陰を傳ひ行くに道いとせばし。谷ふところ深う見渡せば、流れゆく川水ははなだの布引たらんやうにて瀬々の波石に觸れて白う打烟り、とゞろ〳〵と鳴どよめる聲は高嶺の松にひゞきあひぬ。

それからの路は暫時の間松の並木の下陰を通りて居る。歩みゆく山路は幅廣く其處此處に眞黒な岩石が順序もなく横はり、聳え立ちて居るので、ごちごちして歩み難いことが夥多しい。歩み難いことことであるとつぶやきながら、其處等に一寸休息したそのさきは、崖道(そば)で道幅もずつと狹くなつて居る。歩るきながら足下の深い谷底を見下ろすと、下を流れて居る谷川の水は宛も薄藍色はなだの布を引きさらしたやうに、瀬の處は水、岩に激して白き波を揚げ、水煙立ち卷き、其の鳴動(なりどよめる)の響はあたりの山上の松の響と調子を合せて面白い音樂を奏して居る。

(次號完結)

漢文講義

阿井笛村

河瀨氏事事謹愼、內治甚美、最謹祭祀之禮、朔望忌日、必洒掃盥沐、手執饋奠、整肅蠲誠、有異味新果、必謹封藏、至期乃供、或遇私親之忌、唯心哀之耳、其儀不敢比舅姑、乃曰、爲婦之道、當如此也

此の文章は、近世叢語といふ本の中の、賢媛記事の一節であります、近世叢語と申す本は、其の昔、豐後岡藩の儒者、角田九華先生の、著はされたるものであります、扨て本文に、河瀨氏とあるは、江戸の人、稻生恒軒と申したる人の、妻君であり

まして、河瀬は、其の里方の名字であります、昔は婦人は、他家に嫁したる後も、矢張里方の名字を、名乗りたもので、此の風は、近年迄も行はれて居りました、此の河瀬氏の傳記は、後に述ぶることゝしまして、爰にては、前に掲げたる事柄のみに付きて、講述することゝ致します。

事事謹愼、内治甚美、何事にも、善く心を用ひ氣を附けて、内輪の治め方が、殊の外宜しくあります、すべて婦人は、物事に善く心を用ひ、家の内輪の治め方の善いのが、一番大切の行ひであります、今の世に云ふ、家庭の治め方の、極めて宜しいのを申すのであります。

最謹二祭祀之禮一　其の家の先祖や、世になき舅姑抔の、祭をすることに、取り分けて心を用ゆることであります、此の祭と申すことは、人間の最も大切の務めでありまして、古人も、終を愼み遠きを追へば、民の徳厚に歸すと、申されたる位で、又死に事ふること生に事ふるが如くせよ抔の、敎の言葉もありますけれども、とかく死したる人に事ふることは、疎略に流れ易きものでありまして、餘程これは、心を用ゆることが、深切でなければ、出來かぬる事であります。

朔望忌日、必洒掃盥沐、手執二饋奠一整肅竭レ誠　朔は月の第一日、望は十五日であります、忌日とは、死者の命日であります、是等の日には、必ず佛壇抔をふきそうぢして、盥沐＝盥は手洗ひ、沐は髮洗ふこと、＝己れの身體を、サッパリと清め、手執二饋奠一＝手は、手づからと訓むべし、人の手を借らず、己れ自づから、膳部其の他の供へ物をしつらへ、整肅＝きまりよく、取り揃へて、心おきなく、誠の限りを、竭くすのであります。

有二異味新果一必謹封藏、至レ期乃供　異味とは、珍らしき食品、新果とは、新らしき果物で、ヶ様なものが、手に入りたるときも、必ず大切に、包み込みてしまい置き、朔望忌日抔の期に至り、其の品を取り出して、之を供へるのであります。

或遇私親之忌、唯心哀之耳、其儀不敢比舅姑。
私親とは、己れの身内、即ち里方の親、兄弟杯であります、此等の人々は、己れの身近き血すぢの人であります故、何人も、情に於ては、丁寧に致したきもので、ありますけれども、己れは既に、他人の家に嫁したる身分であります故に、義理と云ふことに重きを置きて、私情をば後にせねばなりませぬ、夫れ故、己れの私親の忌日には、決して其の家の、舅姑を祭る如くに、丁寧なる儀式を用ひませぬ、去りとて、其情が薄い譯ではありませぬ、前に申したる、義理と云ふ二字の爲に、形ちの上では、故と之を簡略にして、只心の内にて、之を哀しみ弔ふのであります、斯樣に義理と私情とを、能く辨へ行ふと申すことが、並々の人には中々出來兼ぬることであります。
乃曰爲婦之道、當如此也
前の如き行ひを致して、扨て申す樣には、他人の家に嫁して、婦と爲りたる者の道は、ケ樣に致すのが、當り前の事であると。
右にて、此の一條の物語は終りました、是より河瀬氏の傳記を、原文に依りて、述ぶることゝ致します。

河瀬氏名春、江都人、父曰外記、五歲喪母、事後母一如所生、孝順婉娩、得其歡心、既終、撫育諸孤、幹理家事、咸得其宜、及歸稻生恒軒、終始敬愼、不敢少怠、謙遜自卑、克盡婦道、嘗言、人或以我爲愚、此吾所宜、舅姑在大阪、春自江都每裁書問候、甚得歡心、後從淀則舅歿矣、事姑朞年、奉養最摯、性儉素、不尙華侈、事苟利人、必竭其力、役使婢僕、悉加恩意、且善婦功、補紉裁縫、不委于人、至於書問往來、貨器饋遺、皆造一器、製一衣、皆設簿消注、不敢少失、早喪母、不及詳知其事、乃問之于

人略得其世系始末、性行、內治之大概、錄爲七册、且所以事父母舅姑、修身理家之道、亦具焉、常念觀音經、且崇信儒術、深好朱子小學、謂子婦之道、盡于此書、日教訓子弟、使讀書勵行、聞其所交者賢、則喜、元祿八年、終于京師寓居、年七十七、預裁後事、傚文公家禮、自製衣衾、屬托詳悉、靡有遺漏、又有訣子妹書、數通、及歿視之、皆修身齊家之要、讀者感泣、

河瀨氏は、其の名を春と申し、江戶生れの人であります、其父は、河瀨外記と曰ひます、春は五歲の時に、母を喪ひまして、後の母に育てられましたが、其の繼母に事ゆることが、まるで、生み出された、實の母の通りでありまして、孝順＝孝行にておとなしく、婉娩＝やさしく、すなをでありましたによりて、繼母の得惓心＝心に叶ふて居りました、既終＝繼母がなくなられましてからは、

春の手一つで、諸孤＝親に死に別れた、幼き子供即ち春の爲めには弟や妹に當る幼兒を、撫で育て、幹理家事＝家事の世話を、身に引受けて致しましたが、何もかも、都合よくまいりました、稻生恒軒と云ふ人に、嫁ぎましてからは、連れ添ふて居る間、夫を敬ひ、身を愼み、決して少しの間も、怠たつたことはありません、謙遜自卑＝身をへりくだりて、自らを卑しくし、克く婦たるの道を盡しました、嘗て春の申した言葉、世間の人が、自分の事を、愚かだと申すが、左様に人から申さるゝのが、却て自分のよろしき所であると」春の舅姑は、大阪に住つて居りました故、春は江戶より遙々と、每々、裁書＝手紙をかひ認めて、問候＝時候見舞の便りを致しました故、舅姑も大層嬉しく思ふて居りました今の文明の世の中には郵便と申す便利がありますから、手紙の往復などは、六ケしい事ではありませぬけれども、此頃は、江戶と大阪……百五十里も隔りたる場所にては、

中々に交通が不便で、餘程心に掛けなければ、折々の時候見舞杯は、出來かぬることであります、其れ故、此の一事にても、春の眞心が見らるゝわけであります、其後春は、傍に引き徙りまして、舅姑と同居することゝなりましたが、其折から舅は歿なられました、それより、姑の側に事ふる事が、朞年=一年の間で、其間姑に、奉養=孝養を盡すことが、最摯=取り分けて、手厚くありました。

春は性質が、儉約質素でありまして、不レ何二奢侈一=はでやかに、おごる事を、好みませぬ、されども、何事に依らず、假りにも、人の爲になることなれば、必らず其の力の有らん限りを、盡してやりました、男女の召使の者を、つかふにも、悉くなさけの意を加へました、又婦功=女の手わざを善く致しまして、補綴=古き衣服の取りつくろいや、裁縫=新しき切れの裁ち縫ひ杯も、一つとして人に賴む樣なことをしませぬ、書問往來=手紙の遣り取り、貨器=道具品物の出し入れ、それから、一つの器を造り、一つの物をこしらゆるにも皆帳面を設けて、之を消注=つけて置きまして決して少しにても間違へませぬ。

春は幼き時に、母を喪くしましたから、不レ及三詳知二其事一=母親の、世にある時の事を、詳しく知りませぬ、そこで、人に尋ね問ひまして、あらかた、其の世系=家すぢの始末=はじめをはり、性行=其の生れ付、平生の行ひぶり、內治=家の內輪の治め方などの、大概を知ることが出來ましたから、それを書とめまして、七冊の書物を拵へました、其書物の中には、父母舅姑に事ふることや身を修め家事を理むる所以の道が、亦具りて居ります、これにて、春の學問に深く、文筆に堪能でありました事も分ります。

春は平生、觀音經を絕へず讀みました、又崇二信儒術一　支那の聖人の敎を、崇め信仰して居りまして、中にも、深く朱子の小學と申す本が、好きで

ありました、それで申ましたのには、小學の書物の中には、人の子たり、婦たるの道が、なにもかも言ひ盡してあると、毎日々々、子供や弟を、教訓へまして、書物を讀ませ、行を勵まさせました其の子弟の交る所の人が、賢い人だと云ふことを聞きますと、喜びました。

春は元祿の八年に、京都にて歿りました、年が七十七歳でありました、歿りまする前に、後々の事を、夫々にさばきを附けましたが、倣㆓文公家禮㆒自製㆓衣衾㆒＝文公とは、朱子のことで、朱子の家禮とて、所謂家庭の教がありますが、其の禮式に倣ひまして、自分手に、死んで往くときの用の、衣服や、衾を作りました、屬托詳悉靡㆑有㆓遺漏㆒＝言ひ遺しが、誠に細かなる所迄行き届きて遺り漏れたる所はない、又子供や妹に、訣れの書き置が、數通あつたが、歿くなりたる後、披いて見ますと、皆身を修め、家を齊ふるに大切なる事柄斗りでありましたので讀む人々が、感入て泣きました。

よるの竹

井上頼文

狩野尚信は、名高き畫の工なり。その子、常信も、父が業をつぎて、丹靑にのみ、思ひをこらせしが、或時、竹の繪を書て、父にみせたりしに、あさましくつたなしとて、無興げに見えしかば、大に耻て、夫より日に〱描きけれども、とかく心落ゐず、あまりに、思ひうんじて、机によりて、打眠りしが、日暮て、いと寒くなるまゝに、めさめければ、月のひかり、窓にさし入て、軒端の竹の影、いひしらぬけしきなりければ、やがて筆を取て、そのさまを寫し見るに、心づからも、目出度覺し程に、いそぎ、父が許に持行て見するに、尚信大に喜びよくも書きたるかなとて、しばしが程、打詠て、是は夜の竹なり。葉の勢、みな隱になりたるはとぞ云ひける。

（落栗物語）



東郷海軍大將夫人を訪ふ

一記者

戰へは必ず勝ち、勝てば即ち天佑に歸す、剛にして驕らざる、我が聯合艦隊司令長官海軍大將東郷平八郎氏の如きは、實に不世出の名將の龜鑑と云ふべき方であります。今や大將の名聲は世界のあらゆる方面にあらゆる畏敬と賞讃とを以て迎へられ、新聞雜誌は競うて大將の經歴等を掲げて居りますけれども、多くは東郷大將の公生涯から見た所の材料ばかりで、私人として東郷氏は餘り多く紹介せられて居りませんが、これは必竟大將並に大將夫人の謙遜であつて、徒に名聲を博するとを好まれない所から、門戸を堅く鎖して、餘り世人と相觸接せられなかつた次第であらうと思ひますが、記者は幸ひに或る偶然のことから大將夫人を麴町上六番町の留守邸に訪づれまして、その夫人の話頭に登れる東郷大將を知りましたから、玆に紹介して置きませう。

六月二十四日の午後のことであります。記者は東郷大將夫人を訪れませうと思ひまして、車を馳せましたが、折しも、九段の邊より『海軍大勝利、旅順の大海戰』と號外賣の聲が、町から町へと傳へられましたので、まづ、東郷夫人には此上ないお土産が出

來たやうな心地が致しまして、早速號外一枚を買つて見ましたが『二十三日の夜、敵艦揃つて旅順を出で南下を試みたが、我が艦隊に邀撃せられ、戰艦一隻轟沈せられ、其他二三隻多大の損害を受けて、またも港内深く逃げ入つた……。』とのことで、繰り返して讀んでゐます内に、何時か既う、上六番町の保玄坂の上、即ち東郷大將の留守邸の前へ來ました。車を下りて、嚴めしき黑塗の門を仰げば、東郷平八郎と小さな表札が掲げてありますので、却て奥床しく、早や大將の剛にして而かも驕らざる武將たることが思ひ浮んで來ました、門より石疊を傳うて、玄關に訪へば、召使の下婢が出て來ましたので、記者は即ち刺を通じて夫人に面會を乞ひました。

やがて、玄關より右手の六疊の應接室に通されました。眞中には、赤模樣の氈を掛けた卓子があつて、その周圍に華車な椅子が三四脚、記者はまづ其一に腰を卸して、靜に仰ぎましたが、正面には二尺に三尺位な英姿颯爽たる將軍の寫眞額を掲げてありましたが、其風丰がまた如何にも沈勇にして犯す可からざる趣がありまして、記者は偉大なる或物に打たれたかのやうな心持が致しました、同時にまた、今度の連戰連勝、千古不滅の特勳偉功に就いて、思はず嬉し泣きに涙が零れるやうになりました。

右手の床には、何人の筆であらうか、淡泊とした山水の幅、その横には、無鷄頭の二連銃が二挺並んでありましたが、これは將軍が、銃獵を好まれる徵のそれとも推せられました。

召使の下婢が莨盆、茶を運ぶ内に、次の座敷の方から、悠然として出て來られましたのは、大將夫人で、年比は三十六七と覺しき、面長な、頭髮を洋風に束ねた、目鼻立の美しい、氣品いやしからぬ、すらりとした婦人、普通の裕衣に茶がゝつた夏帶、至つて質素な扮裝でありました。記者が椅子を離れて、挨拶致しまするると、『まア、何卒お掛なすつて……私も掛けまするから。』と、優しく言はれて、椅子に掛けられました。やがて、一通りの挨拶も卒へましたので、記者は、乃ち、

を取り出して、『只今出ました、號外でございますが、御存知でもございませうが……。』と、卓子の上へ置きましたので、夫人は、、、きつと柳の眉を引き上られて、『え、號外ですか、まだ知らないんです、何卒、拜見を……。』と、細やかな白き手に夫を取つて默讀せられ、莞爾と打ち笑まれましたが、如何に心嬉しく思はれたのでありませう。『まア、宜い號外でございますが、嘸、また、……御名譽のことでありますがお若い方で戰死なすつた方もございませう。』と、少し眉を顰められましたが、これは戰勝と同事に、我が艦隊の將卒、即ち大將の部下の戰死を悼まれるのでありませう。そして何詞を續れて、『それでも、敵もなか〳〵強うございますから、皆さんお骨が折れませう……』など、打ち語られました。記者もまた戰勝に就いて、夫人にお祝詞を申しまして、やがて、話頭を轉じましたところ、夫人は如何にも謙遜なる態度で、

▲私などは時代後れ

でございますから、迚も他の奥樣方のやうに、趣味のあるお話は出來ません。……これまで諸方から、主人不在中の私の覺悟とか、また家庭の模樣とかを聞きたいと云はれましたけれど、別に平生と變つたこともありませんで、何時も波風と戰爭して居樣な者ですから、本當の戰爭でもオホヽ、別に變つたやうな心持が致しませんのです。ですから、皆樣がお訪ね下さいますけれど、別段お話するともありませんから、何時も堅くお斷り申して、まだ誰樣にも御面會は致さないのです……ハイ、今度は幸ひに親戚の者も皆出征することが出來まして……。』

▲將軍の一門

こゝで一寸、東郷家の一門に就いて紹介し置く必要があります。東郷一家と申せば、大將平八郎(五十八)夫人哲子(四十三)長男彪(二十)二男實(十七)長女八千代子(十四)の五人でございます、大將は鹿兒島市加治屋町に住してゐられました舊島津藩士の東郷吉左衛門氏の子(吉左衛門氏は既う十數年前に病歿せられたさうです。)で、長兄を四郎兵衛(西南の役後病歿せられました。)と云ひ、次兄を小倉壯九郎(これは藩中聞え高き勇士でありましたが、西南の役に、西郷南洲に

從ひ、賊名を蒙つて、遂に城山に戰死を遂げた人であります。)と云ひ、平八郎氏は實に第三男に當るのです。一體この加治屋町といふのは、俗に加治屋町方限と稱しまして、西郷、大久保等の諸豪傑は皆この郷中から輩出しましたので、大將の如き方は、實に

▲先天的に豪傑

たるべき資格を備へて居られるといふも差支ないのでございます。

それで、また東郷家の親戚はと申せば、柴山海軍中將は大將と從兄弟の間であるさうです。其他長兄四郎兵衞氏の殘した吉太郎氏(海軍中佐で現に浪速の副長として戰地に居られます)吉四郎氏(〇〇師團砲兵中尉で、これも目下出征中です)の二甥、次兄莊九郎氏の遺孤莊吉氏(目下第〇師團砲兵少尉で、これも出征中)などであります。また夫人哲子は、彼の海軍中將の

▲海江田子爵の長女

で、妹榮子(これは陸軍少將税所篤文氏の夫人で、今や少將は第〇軍の一方の指揮官として出征中であります)春子(これは前記浪速副長東郷中佐の夫人で、東郷家と重縁の間となつてゐますので)秋子(第〇軍附として等しく出征中の砲兵少佐町田彥治氏に嫁してゐるのです)の三妹と一弟幸吉氏があります

そして、幸吉氏(三十)は元東宮殿下の御學友でありましたが、此頃大將の邸に起居して、帝國大學に通ひ、法學を研究せられてゐるさうです。又大將の長男彪二男實の兩氏は目下學習院に通はれ、長女八千代子は番町小學校に通つてゐられます。

▲更に夫人の談話

「……ですから、親戚中、皆望通り軍人の本分を盡せる譯でございますから、その家内の者は、皆互に打寄つて喜んで居るのです……ハイ、二人の忰も、是非とも海軍兵學校に入れたい積りですが、どうか甘く參けばよいと思つてゐます。……そして、私が先刻もお話し致しました通り、時代後で、十分に家庭教育を致す譯に行きませんから、大きい忰(彪君)

のまだ子供の時分から、ずつと

▲家庭教師

を雇ひまして、以來引き續き、子供三人とも、學校の方と宅の方と兩方で、學問と行儀を勵まして居るのでございます。その教師は立花（頼重氏）といふ方でございますが、良人も出征後は私どもには唯無事であるとばかり、何にも書いて寄越しませんが、この立花さんには倅や娘の事を何分お願ひ申すといつて度々手紙が參ります……。』

聞けば、東郷家には此の立花氏を優遇し、大將夫妻もこれを呼ぶに『先生』の語を以てし、切に息孃の育成を依托してゐらるゝさうですが、如何に其家庭教育に重きを置かれてゐるかの一端を知り得べきであります。

さて、また、夫人は記者の問に答へられまして、『まア、良人などは別に他人より偉いことはないのですが、あゝやつて、幸に勝利を得られますのは、全く良人の運の好いのと、ほかに

▲立派な將校方が

居られるからです、從來日清戰爭にも、北清事變にも、出陣しましたが、何時も皆さんの御蔭で……。』と、夫人は實に大將の成功を以て單に好運と部下の勳功とに歸し、大將の智謀膽略の卓絶してゐることは、これを度外に視て、少しも口にもせられぬことは、丁度大將が自ら發する幾多の勝利公報を徹頭徹尾天祐と部下將卒の勳功に讓るのと、兩々相照して見ると、互に優り劣りなく、謙讓の美の光が輝いて見えるのであります。さて次に

▲大將の平生

に及び『良人は平生宅に居りますと、唯默つて居つて用の外は、口を利かぬと云ふ風であります。ですから、一寸見ると憤つてゞも居るやうですが決してさうではありません、下婢や書生なども、滅多に叱つたこともありませんで、萬一惡いことでもありますれば、能く分るやうに說いて聞かせると云ふ風で御座います。……ハイ、嗜好ですか、良人の一番道樂

は先づ

▲銃猟

でせう、目今でも猟犬が四匹居りますが、これは餘程の秘藏のもので、宅に居ます時は、自分で一生懸命に世話を致して居りますが、犬の方でも大變馴れてじやれつく、それを揶揄つて見て樂んで居りますですから、休暇があつて、お天氣が宜しければ、早速銃を擔いで猟犬を連れて出掛けます、何んでも舞鶴に居ます時には、一番好い猟場があつたやうでした。……こんなに猟犬を大事にしてゐますから、今度出征の時も、他の事は別に云ひませんが、

▲たゞ猟犬を頼む

と、言つて參りました。……ハイ、其他盆栽も好きでありますし、釣魚も嫌ひではありません。……ハイ、御酒ですか、これも當今は餘り頂かないのです…………。」

斯様に夫人から其平生を承りましたが、その人物音容髣髴として眼前に現はれました。實に沈毅寡默な方で、又一面には温厚篤實な君子で、決して世人の所謂鬼平八と申すやうな方ではないと思ひました、また將軍は如何なる地位の低い人を呼ぶにも樣付で呼捨にするとはないさうです、況して戰場には古名將の如く恭謙自ら卒に下つてゐる風でありませう。必竟するに恩威並び行はれてゐる名將でありますから、部下將卒も相率つて大將の爲めには、一身を抛つと云ふ風であるさうですが、また偶然のことでなからうと思ひます。就中大將の知己に感じ、大將なくば、我なしと確信を以てゐる方々は彼島村少將、有馬大佐、廣瀬艦長(勝比古)その他軍神と呼ばれた廣瀬中佐等であるさうです。

▲大將と母堂

大將の母堂ます子は、去る三十二年の末九十の高齢を以て病床に就かれましたので、孝心深き大將は殆んど寢食を忘れて看護せられましたが、命數定あつて、遂に長逝された爲め、大將の悲歎は實に例へやうもなかつたさうです。折節大將自身も咽喉病

にかゝり、喪に服すると共に十日程も引籠つてゐられましたが、其當時突然北淸事件によつて、大將は海軍の司令長官として某艦に座乘を命ぜられました斯くと聞いて大將は俄に元氣づき、母堂の位牌に打ち向はれて、母上よ、私は今、君國の爲に喪を捨てて遠く出征の途につきますが、必ず一かどの勳功を立てゝ……せめて、お喜ばせ申しませう。と、生ける人に物いふ如く、懇に暇乞して勇しく征途に就かれましたと云ふことです。又、今回の日露開戰の時は、丁度感冒に犯されてゐましたが、出征の命下るや、即ち病の床を蹴つて起ち、指定の軍艦に座乘し「病氣などは艦に乘れば癒つて了まう」と、非常な元氣でありましたさうですが、如何に大將が、君國の爲忠節なるかは、此一事を以て見ても分ります。

▲夫人哲子

夫人は挿花を好まれ、また茶道にも精しく、和歌も筆蹟も共に達者で、女藝として何一つ心得て居られぬことはないさうです。そして、凡て質素に家政を掌られ、品性高潔なる家庭を形造つてゐられます。

▲令孃八千代子

これは過ぐる二月の中旬で、丁度第二旅順海戰のあつた後のことであつたさうです。八千代子孃は、相變らず、朝早く學校へ行かうとて、とある横町を曲らうとしますると、後方の方から、「東鄕さん」と呼ぶものがありますので、顧返つて見ますると、學校の男の○○先生なので、まづ丁寧に挨拶して、共に學校の方へ行きました。が、やがて、先生は八千代子孃に向ひまして、「東鄕さん、貴孃はびつくりなさつたでせう、先日新聞などが、貴孃の阿父樣が戰死なさつたことなど書きまして……。」と云ひましたが孃は何となく不平らしい語調で、「先生、可厭ですわ、そんなことを被仰つて、たとひ、戰死したつて、何にもびつくりは爲ませんわ……」と、云ひ返しました。軍人の家族たる者は是非とも此覺悟なくてはならぬのでありますが、○○先生も自分の尋問のまづかつたのを自覺してか、「おゝ、さうですか。」と輕く打ち

首肯いて、顔をはつと赧らめましたと云ふことですが、大方八千代子孃の此一言、胸に水雷と中つたのではあるまいか。

▲これだけあれば負けぬ

終りに將軍の逸話一つを記しておきませう。昨年の神戸に於ける觀艦式には將軍は御召艦に陪乘してゐられましたが、艦の一擧一動尚ほ之を忽にせず、就中浪速艦の行動に對しては最も多くの注意を拂つてゐましたが、此時陪乘してゐた露國公使館附武官は財部少佐に呟いて『將軍の浪速に於けるは二十七八年を當時追想しゐらるゝからではあるまいか。』と云つてゐたが、式終つて、將軍は財部少佐を顧みて『これだけあれば負けぬ。』と、云はれましたさうですが、一語頗る興あるではありませんか。今や、我が聯合艦隊、この好司令長官を戴いて連戰連捷を得るは、また宜也と云ふべきであります。(をはり)

島川陸軍大佐の夫人

菊池雪子

南山の激戰に天晴れの名譽を揚げられた島川砲兵大佐の夫人が麹町二丁目のお宅にお留守中でゐるので、此間訪問いたしました、格子戸を開けると、鈴の音チリンと鳴り、やがて取次の女中さんが見えて、奥へと記者を案内いたされました、蒸し暖いので、障子を開け渡してありますお座敷は、青葉繁つて居るお庭に面して、風そよ〳〵と梢を吹き、近隣靜かで何となうお留守宅の趣きもこそと思はれました、御主人は餘程鶴をお好みと見えまして、床間に鶴の掛物、額も浪越す鶴の繪畫でございました、夫人はまづ褥を下さいまして、時候の御挨拶をなさいまして、

留守中

『主人は昨年の四月名古屋に轉任いたしましたので、私共も彼方に越して參りましたが、戰地に行き

ますやうになりましてから、親類の近い所がよろしいと存じまして東京に參りました、私の親類は東京にばかりでございますものですから……」

御兩親

「私の實家でございますか、小西と申まして藤堂家の家令を勤めて居りました、……父の名でございますか、正職と申します母は久子と申ますが、兄は只今では赤十字に出て居りまして、それが相續いたして居るのでございます」とお話しかけになりましたところ、令息が片手に風呂敷包を抱へて、母さま、只今とお辭儀なさいました。

父さまへお手紙

『背ばかり高うございますが八才になります、今年はじめて學校に上りました、ぢきお向うの麴町小學校でございますから、近くて宜しうございますが、毎朝一時間も前から參る〳〵と申しまして、それであなた學校に參りましても、さぞ彼の通り惡戯ばかりいたしまして、先生も御迷惑で入らつしやいませう、先日私が主人に手紙を書きましたところが、自分も父さまに手紙を書くんだなと〻申まして、誰れも見てやりませんでしたが、何だか一人で書いて居りました、後に見ましたら、無難で歸つてくださいなど〻云ふことでございました、同封にいたして主人に送つてやりました、ハイ名は光雄と申ます。』

お馬に乘る

『次男は國雄と申まして五才になりますが、馬が大好きでございます、其のくせ犬や猫は怖はがるんでございますよ、名古屋に居りました時、主人がお役所から歸りますと、お馬に乘ると申まして、一人馬に乘つて、馬丁が付きましては、市中を廻つて居りました。』夫人の話を聞いて居られた三才の職雄さんもお馬〳〵と呼ばれました。

束縛せずに

『自由に子供を育てなければいけないと、主人が始終申されますから、關はず爲はうだいにいたして居ります、滋養物ばかり頂かせますが、どうも兄のは

うは瘦せて居りまして、他の二人は可なり肥つて居ります。』

御良人

『主人は四十一才元治元年生れでございます、二十年に士官學校を卒業いたしまして、二十四年白耳義から佛蘭西に綿火藥研究のため二ヶ年間留學いたしました、二十六年に歸朝いたしまして、板橋の火藥製造所に勤務いたして居りました、二十八年に私は島川に參りました、……、當年二十九才でございます。』

松岡夫人梅子氏

『松岡の奥さんとは板橋で御懇意いたしました、あなたは學校のお友達で……先日もお尋ね下さいました、彼方は空氣もようございます、また閑靜ですから、何んとなく住まつて居りました時は氣分もせい〳〵いたしました。』

速射砲發明

『有坂少將と御一緒に、主人は新式速射砲を發明いたしたとか申して居りました、板橋には三十三年の五月まで居りましたが、其れから砲兵工廠に轉任いたしました、そうして昨年の四月、名古屋師團に轉任いたしまして、當年まで皆あちらに居りました。』

御名譽の賞をお受け遊ばしましたとか承りましたが……と記者は夫人にお尋ねいたしましたれば『私共は存んじません、却つて外の方のはうがよく御存知で入らつしやいますから、他でお尋ね下さるはうが……』と夫人の御謙遜の言葉でございました、けれど記者は忙がはしくて松岡梅子樣にもお目に懸りかねますから、殘念ながら取り殘すと、いたしました。

そよ吹く風も音絕えて、草木は水ほしげにも成りまする頃、御家族のお寫眞を拜借いたしてお暇申しました。

リチャルドソン夫人を訪ふ

菊池雪子

白浪逆卷く遠き海路を渡りて、たゞ一人、けなげ

にも篤志看護を思ひ立たれ、戰塲の露と消えた背の君の無き跡ながく弔はんと、衣は黒染にやつして喪中の謹愼深かう、み國に同情一片の心もて、五月以來本邦に滯任せられたる英國リチャルドソン大佐の未亡人を記者は或る日お訪ねいたしました。

黄昏近く、夕日がいくつの色を殘して沈むも惜しげに、西の空さして、今日の名殘を告げんとする時でございました、麻布霞町に夫人が同居してお出になる外國夫人の客室に案内せられました、是時リチャルドソン夫人は二夫人の來客と對話の最中でありましたが、椅子を離れて丁寧に記者に握手の禮をなされ、今一人の夫人と共に手づから椅子をお運びになつて、記者を御自分の側近く座せしめられ『ドウ、ユー、スピーチ、イングリシユ』と仰せられましたが、記者は佛語ばかりを學びまして、英語の智識はちつともございませんから、私は佛語を話しますが、英語は存じませんと答へました。

すみれの花

記者今日お訪ねいたしました趣意は、夫人が我々同胞のため、うき旅路をもいとはせられず、しかも御自分の財嚢を傾むけて、馴れない土地に、馴れない氣候の下に、毎日繃帶製造の勞をお取りになつて入らせられますお心ざし、嬉しくも有難くも存じまして、いさゝか夫人の來歷を、お差支のないかぎり、承りまして日本の婦人方、處女方にお紹介いたしたいのでございますと申上げましたところが、夫人の仰せられますには『いや、あなたもマギーさんをお訪ねになりましたらうが、彼の方は學者でお出になります、また御良人は米國で人望あるお人でもあれば、種々とお話の種もありましたらうが、私は夫に別れ、猶又喪中の事とて、人樣に知られるのを憚り、公會の席にも臨みませんので、新聞にも載せて頂かないやうに、いつもお斷りいたしてをります位で、マギーさんとは違ひ、私は政府からの關係もなくてほんのもう一個人で、一個人の考へで參りました、お國に參つてから赤十字社へ行きまして、繃帶製造のお

手傳をいたして居りますが、皆様が、よく教へて下さいます、お國の言葉耳、鼻、口など申すのも、學んで居ります、お陰様で心配もうち忘れてしまいますやうになりました、返す〲も私を御紹介なさることは御無用です、私は何處までも人様に知られることを好みません、けれど、個人的ならば隨分訪問も受けますし、お話もいたしませう、……寫眞ですか！それも喪中ですから、度々新聞の方へも斷つて居ります、けれど喪が明くれば、あなたに上げませう…………お話には度々入らつしやい。』と夫人の決心なか〲動かし難うお見受け申ました、記者はそのとき感じまして『マダム、あなたは實にすみれの花のやうに陰で薫はしい香を發することをお好みで入らつしやいますね……私が書いて居ります女鑑と申す雜誌は、婦人方の讀物ですから、新聞のやうに公然廣まるものとは異なりまして、つまり範圍が狹いのですもの、お差支はなからうと存じます、けれど、御良人の喪のためと仰せでございませば、强てお寫眞はお願ひいたしませんが、軍國多端の今日、我が國婦人の勇氣と奉公の心を發揮いたしたう存じますれば、外國の夫人すらもわざ〲遠路お出になつて、御奮發下さることを是非とも紹介いたさずには居られません。』と申ましたところが『それでは少々ばかりは宜しうございますが、澤山はお書き下さいますな、……すみれのやうな謙遜の德とてもない私を……』と笑を湛へて、しとやかに仰られました。

黒い服の上、胸のあたりにきらめいて居りますのは、夫人が折々用ゐられる金縁の眼鏡でございますお年は五十七才と承はりましたが、あくまでお背の高いことは花散る里に獨り屹として立つて入らつしやるやうでございます『はい子供と孫もございます良人は數月前に戰死いたしました、以前は長くアルゼリアに私も共に參つて居りました、手前共の所有地もたんとございます、英國にも矢張所有地があります、……二十二才で結婚いたしました、一體私の父は英吉利國教の牧師でございましたが、私が二

才の折亡なられましたさうですから、父の顔は見覺えがありません、私は若い時分に專らピヤノ、刺繍、家政などを習ひました、私の國では女の子は十八才にもなれば主として家政學を修めさせるのです、私は學問といふ方面よりは、家事をよく治めて人樣と御交際を圓滿にいたしたい意です。

繁れる木梢をゆるがす風は、綠の芝生をにほはせて、暮んとする日の光は、室内の裝飾品を朧氣に照して、一種の彩色を耀かして居ります『昨今、日中のお暖さは英國にはございません、私來春あたりまでは日本に滯留いたすつもりですが、七月八月になりますと、大層お暑いさうですから、七月下旬にもなりましたならば避暑がてら日本の山水を見物いたしたいと存じて居ります、九月のなかばには歸京いたして多分今度はホテルに居りますやうになりませう、其時どうか又お訪ねを……』と仰せられ、記者も再びお目に懸ることをお約束いたしました。

後樂園で歡迎會の時お見えになりましてね……と申上げましたところが、夫人は『あゝ、皆さんがあんなにも大勢お出遊ばすとは存じませんで、ほんの少ばかりお集りになると思つて居ましたが、行つて見ますと御婦人方多く入らつしやいましたから驚きました、左樣承知して居ましたなら、喪中ですから御辭退いたしましたのですが……喪中謹みますために何卒餘りにお書き下さいますな、明きましたら寫眞もどうかいたしませう、いづれ避暑の歸りには又お出下さい』と仰せられ、夫人は私の柴の戸をおたゝきなさりたいとのお話でした『日本と英吉利とはお友達ですものね！』と微笑を浮べて車に乘る記者をお見送り下さいました。





家庭

三輪田女學校長と其の家庭

菊池雪子

をぐらき葉櫻の下蔭に、夏の日の暖きをも忘るゝやうなる九段坂の公園近くに一昨年新築せられた女學校がございます、これが則ち三輪田眞佐子刀自が多年女子教育に經驗をお積みなされて設けられた學校でありますから、刀自は全力を此の學校の發達の爲に注いで入らつしやいますのも御尤もでございます、特に又御令嗣元道樣は帝國大學を卒業遊ばされた文學士で、夫人は又明治女學校卒業の御方で入らつしやいまして、御兩人同じく御母堂の、この大事業を補佐してお出になるのは、何ぼう頼もしく又お嬉いことゝ存じます。

優れたる婦人は優れたる御家庭を作つてお出遊ばしますのは當然の事と考へまして、記者はお差支ない限り御話を承りまして、世の家庭の模範として紹介いたしたく、一日學校に刀自をお訪ねいたしました、けれど生憎刀自は御外出中でありましたから、お若い夫人に御面會を願ひましたが、愛兒の御不快の爲に、これまたお目にかゝれませんで、敎頭

三輪田文學士に御面會いたしました。

放課時間の鐘の音が響きますと、三輪田文學士は早速應接室にお出になりまして、記者が今日御訪問いたした趣意をお聞きになり。

折惡しく

「母が留守でございまして……また家内は子供の首に腫物が出來まして、まことに機嫌が惡るく、平常でありますと、下女と庭に遊んで居りますが、腫物を切らせましてからは、氣分が快くないと見え一寸も母の側を離れませんので、殘念ながらお會ひ申すことが出來んのです」。

家族的生活

「寄宿生は五十名も居りますが、私共は勤儉を主として生徒を家族と思つて、別に私共のために住居を充分廣く取るわけでもなし、又食物も生徒の食物と同じ物を食べて居りますから、不平を申す人はございません……家庭の事は只今まで手前味噌を付けること故他の方にはお話しません、母も自分から申すとは望まんのでございますから、私がお話して叱られますかも知れません……いや、何……差支はないと思ひます、母が居ればようございましたに……」

勤儉を旨として

「母をはじめ家族は皆……みなと申しても、三人です――いへ女子で當年三才になるのがありますから、都合四人で、……凡て自身出來るものは自身で致しまして、出來得る限り銘々勤めるといふ方針を取つて居ります、御承知の通り他の學校では事務員とか、何とか、多勢人を置きますのですが、手前の學校では其處に居ります三人の外には、母も氣を付けます、私も事務を取つて居りまして、結局人生は働かねばならぬといふ觀念を始終有つていたすのです、妻は家事一切の整理經濟と生徒方五十名餘のお

金を預つて銀行に入れたり、生徒方に帳面上の勘定をしたり、又銀行への出入などを負擔して居りますので中々面倒ではございますが、一切引受けて居ります、そこで生徒はまづ一圓以上のお金を有つて居ることはないのです、先日賊が入りまして、生徒のお金を一圓五十錢盜んだとがございましたが、あれは生徒が或る所に參る會費として有つて居つたのでさうでなければ一圓以上のお金を有つて居ることはございません、妻は學校に居りました時分、外國人に就いて外國語を學び、洋琴なども修めましたのですが、私の所に參りましてから、働かなければならないといふ主義に慣れて了いまして、洋琴も彈いたことがございません、尤も琴は小い時奥許を取りましたので、時々は彈じますこともございます、向ふに掛けてあります時間割の通り、母は一週二十四時間教授いたします、其上女子大學にも參つて教鞭を取つて居られます、私は二十時間教授いたし、後は事務を取ること丶いたしてあります、職員方の教授時間は凡そ一週十八時間です」

母は豪傑

『餘りお話いたして母に叱られるかも知れませんが、何も日本の家庭では婦人を奴隷視して居るんです、酒を飲む時は妻にお酌をさせ客が參つて日本酒を出す時には屹度長くなり、酒ばかりでなく、其に肴迄調へなどして、何うしても長時間を費す、其間妻は使はれて居り、また主人が碁を好むとすれば、好い相手客があると、夜の十二時迄も打續けて居る妻は居寢むりしながら、客の居る間は側に座はつて居らねばなりません、是等は全然妻を奴隷視した譯です、私共では家庭の專制政治を好みません、立憲君主政治の制度を取りまして左樣な個人的の樂みを取つて、主人一人で樂をして他の者を困まらせると云ふことはいたさんつもりです、夜分は主人も召使も九時を限りに寢む支度に取掛り、十時に成ると皆寢床に就きます、朝は 私 などは少々遲れ ます

が、母は夏冬とも五時の時計が鳴ると、直に起きて體を拭き、ちやんとして居りますことは、實に十年一日の如しと申してもようございます、これが母の豪傑なところでありまして、私共が眞似をしやうと思つても出來んです、母は清潔を尊びますから、學校に參りまして、塵などが少々あるのを見ると、すぐ言付けて掃除いたさせます、年齢の點から申しますと、六十も越しまして天保時代の人と云はれますが、其の割に人の話によく氣を付けて、隨分所々に參りますから種々の說も聞いて居ります、其の中善いと自分で思つたことは、歸つて來て話しまして、早速さういたさせます、ですから母は進取の氣象に富んで居る人といつて宜しいと存じます、そうしてまた今日唯今と云ふ主義であります、其れは何かと申すと、よく人は善いと思つた事でも、實際に施す時日を遲延することがありますが、母や私共は、今すぐに其れをいたすといふやうに、致して居るのであります』

勤儉の結果

『財産として金を殘すは好ましくないから、勤儉から積みましたもので、一の女學校を建て、生命ある限り力を盡して後世に殘したいと、遂に志望を達するやうになりました、親類の中では、老年に及んでから、何にも汲々として働かなくてもよい、閑靜な所に家を建て、風月を友として靜かに樂しく世を送るがよい、と勸める人もありますが、母の考へは何處までも働くといふ精神でありますのですから、赤坂、牛込、駿河臺などに有つて居りました邸宅を殘らず賣拂つて、六萬圓を擲つて此處の地所を求めて、學校を建てました次第です、親類の中には金滿家もございましたから、學校を新築するに就いては必ず我れに仰いで來るだらうなど〻思つて居りましたが、母の氣象といたして謂ゆる武士的氣象でもつて、聊も他に仰がず、生徒の父兄にも寄附金を募らず、勤儉一つで此の學校を建てられました』

家庭の寶

『私共家庭の寶は學校のほかに、小兒一人あります、これが何よりの樂みなのであります、特に母によく馴れ親しみまして、母が外出しやうと車に乘ればいつも後を追ひます位ですから、母もまた非常に可愛がつて居ります』

日本酒を廢しました

『自分でいたゞくにも、客が參つたとき出しますにも、日本の酒を用ゐますと、どうも時間を費して其のため家内の者を奴隷のやうにすることになりますから、私共では如何な場合でも、日本酒は一切用ゐないことにしてあります、其代りに麥酒か、葡萄酒をつかつて居りますから、何ういふ客が參られましても、麥酒葡萄酒ばかり上げるのです、で、時間も長くはかゝらんのです、御招待申した方でない以上は客來があつて、御飯を進めるにも、私共と同じやうな食物を上げます、別段御馳走はないのですが皆もう手前共の家風を御承知になつて居られますから、別段差支はない筈ですが、お呼びいたすときは此の限りではございません、其の時こそ身分相應の御馳走を差上げます』

散歩

『個人的の樂みを除いて家庭の快樂を求めたいと思つて居りますから、日曜には家内中散歩に出かけます、成るべく歩るくやうにいたして目黑邊に參ります、土曜の午後も天氣がよいときは、日比谷公園ぐらひに逍遥ますが、子供を抱へて參りますので、隨分腕がいたくなる事もあります、又ちと遠い所に行くには辨當を用意するといふやうにして、また成るべく車には乘らぬとにいたして居ります』

家庭の平和

他人がまぢれば、家に風波が起つと云ふことは、

世間一般の口にするところでありますが、私共の家庭では風波の起ることはございません、母は天保時代の人のやうでなくて、進取の氣象に富んで居りますし、妻は習つた洋琴も彈かなくて、毎日家事上凡ての整理を引受けて居りますし、また私は外出するときは必ず母や妻に何所に行つて何時頃歸宅すると申して出ます、萬一途中に用事が出來して、時刻が遅くなるやうな場合には、電話で以て何處其處の友達のところに寄ると云つて報らせて置きます、行先を家内に知らせず外出するといふことは私に取つて何うしても出來ません、尋ねられなければ氣に懸ります、又尋ねられない内に私の方から何處〳〵へ行くと知らせるのです」

社會改良は私の希望

此時三輪田文學士は徐々お話を進められて、社會改良と云ふ事に及ぼされました。『平和な家庭を作るには女子ばかり責任を擔うて居ると思ふのは誤です、男子も男子の勤むべきことをいたさねばなりません、よく世間で、主人の外出しやうと車に乘る時、妻君が、あなた何處へと尋ねますと、ぶう〳〵腹を立てゝ出る人がありますが、其れらは妻君を奴隷視して居るので、一體親子、夫婦の間でものを隱すといふことが家庭に風波の起る原因であります、私は何でも家内に打開けて話します、また家内も互に打開けてものをいふ、其れで平和なのです、尤も或る秘密は互に守つて居らなければなりませんがよしや其の秘密を知られたからつて何も愧ることはないのです、母をはじめ、妻や私も、金入の中には二圓以上のお金は有たぬやうにいたして居ます、其れは何故かと申すと、マー一寸した會費などは一圓か一圓を少々越した位いで、餘は車代に當てる覺悟として、それだけ持參して居ります、妻ならば之れで以て望む品などを買ふことも自由です、其等を買ひましたからつて私は何に用ゐるのであるなどと尋ねません、妻を信用しないで細かな事まで關係

するといふことは無いです、また妻も其れ程の信用を缺いて居ては、妻たるの資格のないものです』。

極端に走らず

『世間には取つた月給を一切自分で握り詰めて居て、妻君を困らせる人があります、子供のリボン一つ買ふお錢もくれないほど金錢を握つて放さない人があると思へば、一方では月給を取るとすぐ妻君に殘らず渡してしまつて小遣までも妻君から貰つて居る人があります、折々は妻君が會費もくれないなどと苦情を云つて居るのが、私の知己の内にも見受けるのですが、兩方とも極端に走つてるのです、前申しました通り、私共の家庭ではその中庸を取る積りで皆が二圓位の小遣を有つて居りますから、苦情も小言もなく、平和にやつて行かれるのです、どうも社會改良は婦人ばかりに、求められません、男子がまづ浪費をせず、家內に包み隱すやうな動作のないやうにいたさねば、到底改良は求められません、醜業婦の廢されないのは何故ですか、畢竟愚かな男子があるからです、それ故男子も共に社會を改良すべきもので、決して女子のみに求むべきではありません。

記者はア丶總ての家庭の御主人も奧樣も、此方のやうにあつたならば、立派な社會が成立つでございませう、と感歎して申ました、三輪田文學士が男子の方に重きを置いて、大いなる責任を擔はせてお話になりましたところを、充分御婦人方に味つて頂きたいと存じます。

敎　師

三輪田文學士は敎員室をお示しになりまして『總體二十餘名でございまして、內四名程男敎員です、婦人が多いとどうも學校などでも穩かには參らんのですが、私は敎員方に對しても家族的方針を取つて居りますためか、お互の間柄も至つて平和でございます』

男女書生

『學校の用事、家庭の事などを、手傳いさせる男子三名と、女子四名と置いてありますが、傭人でもなければ、女中でもありません、教育あるものです、高等小學を卒業いたしたものです、毎月與へます二圓か三圓を銀行に積んで置いて、毎日裁縫とか理科とか聽講をゆるし、二ヶ年使はれました後には、一年間私費で以て他生徒と同じやうに勉强いたさせますのです、別にまた御飯炊きがありますが、これには月給をやつて傭つて居るのです』

教場

記者は教場を拜見いたしたくお願ひ申しましたところが、御承諾あつて御案內下さいました暖い日には廊下や、教場で、放課時間を過すとのことでございまして、五百內外の生徒さん方が往來をして居られました、裁縫場は二室もございます、理科室の側に標本が飾られてありますが、三輪田文學士の仰せられますには『教科書の上に必要なものばかり置きました、他の學校には教科書外の標本を澤山飾付けてありますが、此處には教科書以外のものは置かないつもりです』それから彼方へと御案內下さいました。

寄宿舍

木立しげつて居る間から、彼方此方にちら〳〵見えるのは數軒の寄宿舍でございます、元ありました儘の家屋とは承りましたが、入口から椽までが備はつて居りまして、生徒方は幾人づゝと別れて住つて居られるのは、却つて他日主婦となりますときの見習のためによろしいかと存じました、若い夫人が總體の監督を遊ばして入らせられるのは、實に結構なことでございます。

刀自の生憎お留守で入らつしやいますのを惜まれて、度々殘念だとお仰つた三輪田文學士に深く御禮を申して、お暇いたして歸りました。

賑はしき家庭（口繪參照）

『北川東京孤兒院主を訪ふ』

中川愛氷

子を持つて知る親の心になつて見ると、われも人の子榾拾ひする身の上にも一顧を與へらるゝが、親知らぬ兒のあはれ一群。孤兒院と名を聞いても悲感を催すに、親はなくとも育つと世の諺に從へる、兒等の有樣を見たしと思ひたちて、青山の東京孤兒院を訪うた。

院主は北川はつ子、其語らるゝ所、わが見し所、隨つて感じた所を、いさゝか筆に言はせて見やう。

訪ねたは五月三十日、門をくゞる時午砲を聞く、折ふし大掃除の所であつた。院主は其の前日某所で初めて面會した人、目敏く拙者を見付けて、これはよくこそ、とて玄關を右に見た八疊の室に案内せられた。

この室に六組三並のガラス戸棚がある。これに造花花簪、編物、織物、繪畫等を美しく排列してある。これは院兒の成績品で、無藝の孤兒はこの院へ入つてこの藝を覺え、この藝が身を助けつゝある。されどこの二業は、この院の目的ではない。

東京孤兒院は、浮世のあはれを細き肩に擔はせられたる孤兒を、蓬をも麻の直きに導きて、立派なる人物に仕立上げるが目的で、以上の內職の如きは、世間の同情に酬ゆる、冥利の爲である。而して彼等の手に成れる美しき成績品は、悉く廢物を利用したのである。

これも院兒の一人であらう、茶を持つて來た十歲ばかりの小兒、行儀のよいのより、第一に感じたのは福々しくて、ハキ／＼して、これでも孤兒かと、疑はれたのである。それから院主と話をして居る所に、出代り入代り、おッ母さん／＼、と院兒が顏を見せにくる、就中あまへに來る、いづれを見ても、愛嬌があつて、親ならぬ親に懷いて、孤兒ならぬ孤兒の

己が不幸を知らぬ顔なる、これには涙を落さゞるを得ない。

ところへ植木屋が薔薇の鉢植、紅白の花今を盛りなるを擔ひ込みて、花はいかゞと云ふ。院主は院兒の目を喜ばせむとて、幾鉢かを買うた。成程小兒に駄菓子の味を教えるよりは、無論雲泥の
萬緑叢中紅一點、と小説家ならば評するであらう、大掃除に手拭をスットコ冠りにしたる妙齢の女子、その中の一人は、年廿を二つ三つ越えしと見ゆる、他はこの院で育てられた孤兒であるが、それはさる令孃が、この院の美事に感じて、終身寡居、慈善の事に從はんと、先づ以てこの院の保姆となつたさうな、これは大久保前代議士の令孃との事である。

そこで拙者の豫想と異つたのは、拙者は自分の營業に對しても申譯のない事であるが、孤兒院といふものを始めて見たのであつて、孤兒院といふものは、孤兒を許せるだけ集めて、其の人數に對する世話人を附け、牛にも踏まれぬやうになれば、奉公口の連絡でもつけて、多くは勞動者に終らせることゝ思うつて居たのは、全く間違て居た。

これに就て豫想の次第を述ぶるを許して貰ひたい。拙者は時々孤兒の大群を見ることがあるが、其の孤兒といふは、懲役人同樣襟に身分の證明をせられて居るばかりでなく、悲しげな顔根性のねじけたるを見せたるにも知らるゝ事で、これ等の新に父となり、母となりし人の慈愛の程度は別としても、これを日々世話する保姆の如きものは、生活問題の爲に餘儀なくせられたる人々であるといふことを疑はなかつた。

これは汚れたる荒席の上に死んでも、病院に行きたくないと、貧者が無情なる看護婦の手にかゝるをいなむ事を聯想せられる。一般の話によれば、以上の豫想は決して、外れた大地の槌でないといふ事である。

然るにこの院、即ち東京孤兒院は、院主即ち母は、院兒即ち子に對して、眞に母子として一家團欒し、

親の情として相當の敎育をされ、子もなか〱成績よく、一人二人の子供を持つて、子持だなど丶母親の不姓をきめる際に、藥に見せてやりたく思うた。目下三十六人の母となつて、云はゞ何處の馬の骨に生れたやら分らぬと世間で云ふ子が、食事其他の塲合に、お母さん〱とガヤ〱寄り附くを、一視同仁、一々返事をして、それ〱の要求に應ずる。慈善を離れた營業としては、なか〱一刻も出來ぬ藝當である。あはれ三十六人の不幸兒は、この慈悲深き母を得て、國家に有用の人となりつゝあるので、これを目擊し、又今日までの成績を見て、拙者等同胞の一人として、院主北川はつ子氏に感謝せざるを得ない。

そこで拙者は、今日に至るまでの來歷を問うた。其の答を簡單に記述して見やう。

東京孤兒院の創立は、去る明治三十二年の四月で。其起因はと云へば、廿九年三陸大海嘯のあつた時、不幸にして孤兒となつた廿六名を、浮世の大海嘯にあはせるに忍びず、一掬の涙かた手に收容したのであつた。

この急に赴いた北川氏は、自分の富の程度を顧るの暇はない。斯う引取つては見たもの丶、二十六名といへは大勢、その朝夕の世話に忙殺せられる位で、俄に多人數の子持になつた事であれば、不經驗、大まごつき、されど厭にもならず。どうか斯うか慈愛心が親となつた丈の働きをされたのであるが、翌三十年の冬には、臺所が續かなくなつた。以上の一年半を渡る間に、世間の同情に依賴したが、其の効いまだ現はれず、北川氏までも寄邊なき身となつたのである。

世間の同情を待つ事業は、なか〱謹愼せねばならぬもので、やゝもすれば事その物より、自分の鼻の下を建立すべく奔走する形になる。

北川氏が手しほに掛けた愛兒廿六人は、彼が無心の目にも映ずべく貧苦を親の心勞と丶もに見た。北川氏は皮を去り、身を剝ぎ、大根を買ひてそれを笹切

にし、水澤山に鹽を入れて煮立て、それを甘酒と稱して飮ませるなどの苦[illegible]を演じ、喜んで子供等の食するを見ては泣きし事もありしが、もはや大根の經費も續かずなりし或一日、北川氏は餓に泣く院兒に圍まれて百計盡きた。時に一人の客が來たのである客は北川氏の浮ばぬ顏を見て仔細を問うた。北川氏は餘儀なき次第を物語る、客も與に泣いて嚢中を空くし、大に慰め、この孤兒院の[illegible]となつた。これに依つて一時の急は救はれ、更に新らしき天地を見初めた。その客といふは、石川喜三郎、殘月と號する哲學者で、なか〳〵慈悲心に富まるゝ人である。その石川氏は偶然にも、拙者が畏敬する友人である所より、一層この事を懷かしく思うたのである。

北川氏は座して死を待つの愚をさとり、自勞自活でなければ安心が出來ず、且つ子供等に依賴心を起させるは、策の得たるものにあらずと、何くれと思案して、平易の勞働を探したが、相手が子供の事ゆゑ、一向よき思案も浮ばず、止むを得ず新聞賣を始め、自ら先に立つて『新聞、新聞』と呼歩いたが、甚だ成績がよくないので、思ひ附きたり、納豆賣を始めた。三十六錢の資本で、問屋より七十二錢、即ち倍價の納豆を問屋より請けて來たのが始まりで、毎朝夕、北川氏先達となつて賣歩いた。

商賣が朝夕の事故、子供等を學校に通はせる便もなし、其の當時子供には小さきもの多く、商に出るもの僅に六人。それが學校に通ふ餘暇、つまり朝夕丈で毎月十六七圓から二十圓位の純益があるので、利益と時間の兩點ともに、先づ申分がないのであつた。

されど利のある所害生じて、遂に廢業することになつた。其第一の害ともいふべきは、子供の性質を惡くすることである。それに直接金錢を取扱せる事ゆゑ害を助ける。なか〳〵その防ぎが出來ぬ、或は彼等が商賣の途中、慈善家の同情心より金品を惠むことがある、それは精神敎育上妨げともなれば、故なく勞なくして金品を受くべからず、と申渡し

た所で、今度は貰うても隱す、サア淺ましい泣くてとが續々沸いて來る。猶一つは彼等が學校に行けば、他の生徒は名を云はずに、『納豆賣、納豆賣』と呼ぶので、實は當然の事で耻づることはないのであるが、子供の身になつて見れば、甚しく辛く感ずるので、考へて見れば不憫と云ふ所より、院兒の性質の野鄙になるのと、經濟上の困難を天秤にかけて、三十三年の二月、斷然其行商を廢したのである。

それから內職を初め、慈善家の喜捨せる反古紙をよつて織物をした、これが初めに記する成績品である。造花、編物等は、目下實踐女學校に通學する二院兒が重に拵へるのである。さりながら當初反古の織物位では、經濟の困難な所から、この院の幹事とも云ふべき桂木賴千代氏と、院主の二人で牛乳を配達した、この桂木氏は拙者一面の識もないが、東京孤兒院月報を見て、其文や編輯の手際を見ると、充分體裁よく、筆で飯の食へる人と思うに、慈善の爲に、牛乳を配達する、雜誌をつくる、寄附金を集め歩く、晝夜所謂氣の利かぬ仕事に齷齪する、實に奇特の人たるを疑はぬ。藝を樂むより慈善を樂む。我は人格に於て、後者に敬意を拂ふのである。

院兒孤ならず、德孤ならず、今や前記の所に院兒は五千金の家屋に、慈愛の母とゝもに住はるゝ幸福を與へられたのである。

北川はつ子の責任はこれより益々重し、拙者は氏のます〳〵健全にして、多くの不幸兒が、一人も多く國家有用の人となるべく、氏の慈愛心に待つのである。

辭する時午後三時。談話中、北川氏は一つの編物を仕上げたのであつたが、これは銀貨入である。



家庭理科 水雷の話

菅原倭翁

軍國家庭の談叢として少し水雷の御話を致しませう此回の日露戰役に付て海軍の重なる勝負は殆んど水雷で決せられた趣きがあります、第一回の海戰に當て露艦レトウヰザン、パルラダ、ツアレウヰツチを斃したは我が水雷艇でありまして、我が初瀨、宮古のかゝつたは敵の布設水雷でありました、ボベーダ、ペトロパウロスクを撃沈し、彼の名にしおふ世界の海軍戰術家たるマカロフ提督をして敢へなく底の藻屑とならしめたは、我が機械水雷であります、甚しきに至ては殘忍なる敵艦が武裝なき通信船繁榮丸、商船奈古浦丸或は御用船金州丸、常陸丸等に對して暴戻を逞ふした、最後の武器は水雷でありました、爲に日清戰後に於ける黄海々戰のやうな堂々たる大決戰を見るの機會がなかつたは、我が國民が聊か張合ひぬけのしたやうな氣味もないでもありませんが何と申しても連戰帝國の勝利とは、御目出度武運ではありませんか、先づ萬歳と御祝ひ申しませう。

扨一萬噸以上の大戰鬪艦を一發の下に轟沈せしめるやうな、絶大なる爆發力を有して居る水雷とはそも如何なるものでありませうか、もとより我が海軍で採用せる水雷は全部秘密にしてありますから伺ひ知ることは出來ませんが、今英國海軍士官の著書にあつた、水雷に係る一節に依つて、その一班を記して見ませう。

水雷には攻擊水雷と防禦水雷との二樣ありまして、攻擊水雷とは軍艦又び水雷艇に備へて直接攻擊の用に供するものでありまして、彼の敵艦レトウヰザンヤツアレウヰツチを斃したはこの水雷であります、又防禦水雷とは港灣水道などの防禦に用ゐる布設水雷と云ふものであります、不幸にして我が初瀨のかかつたはこの布設水雷でありました。

何によらず最初は幼稚なものでありまして、水雷も初期の装置と云ふものは極單簡なものでありました

稍々水の侵入せないやうに造られた樽の内に通常火藥を裝入して、海峽又は港灣の入口に、水面下五六尺の位置に沈設して、船艦の通航に當つて艦底の之れに觸れたら、その震動で樽内に裝置してある機械的作用に依つて、その火藥の爆發し艦底を破ると云ふやうな仕掛けでありました、然るに樽の構造が粗惡な爲め完全に防水を保つことが出來なくなつて艦船の之れに衝觸しても往々發火せないものもあつたのであります、而して水雷が始めて實戰に用ゐられたは、西暦一千八百六十年より六十一年に亘れる亞米利加南北戰爭でありまして、斯る不完全な水雷でも、その功を奏したのであります。

外裝水雷

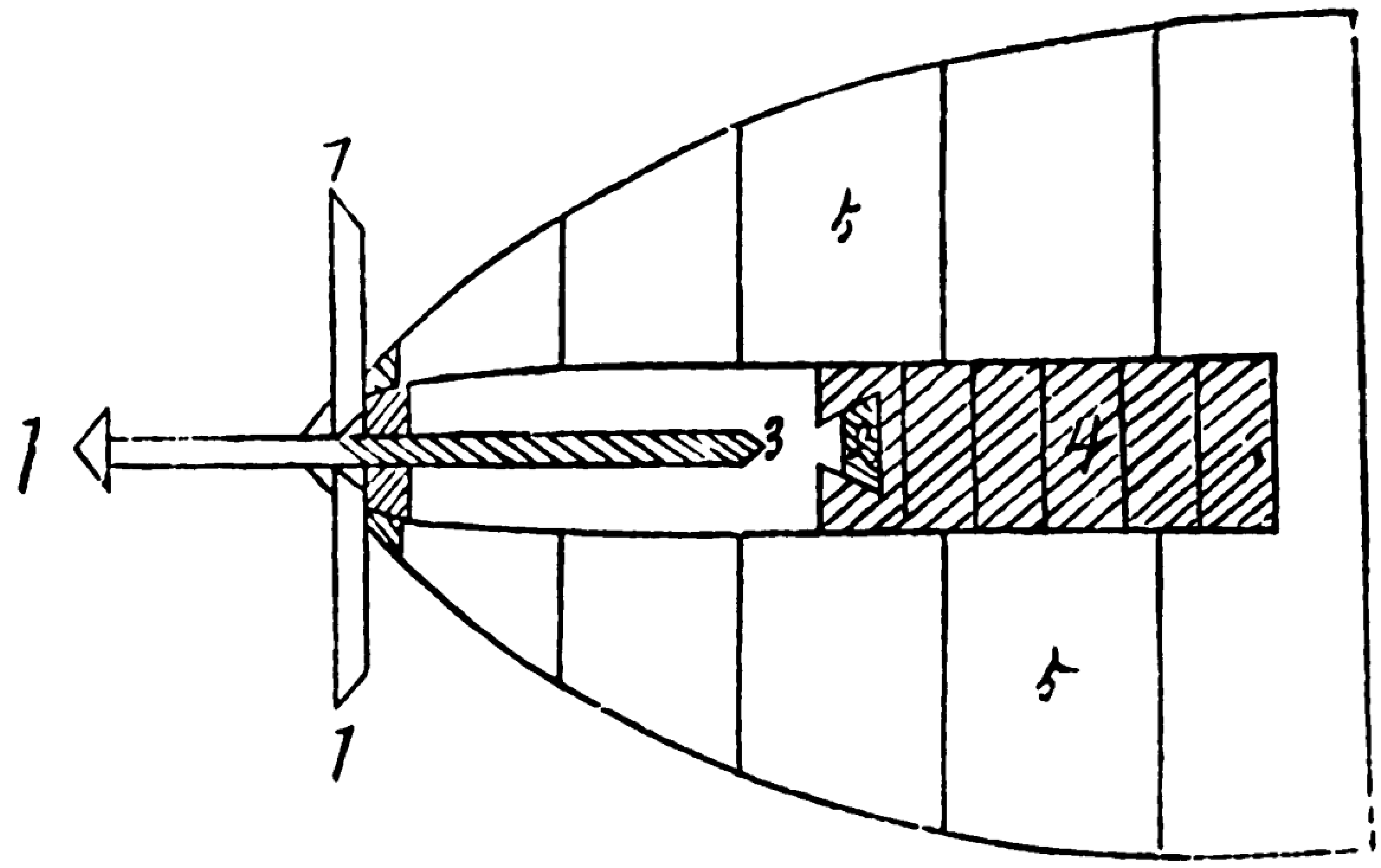
この布設水雷が發明されて、間もなく外裝水雷と云へるが顯はれました、此水雷は小蒸汽船の船首から長き木竿、約三十呎もあらうと云ふのを突き出し、竿頭に綿火藥罐を附け置きて、電線で以て船内の電池に接合してある、そこで平常は船内へ引き入れてあります、いざ敵艦を攻擊せんとする場合には、全速力で敵艦間近く進み寄り、兼ねて引上げある木竿を突出し、竿頭の綿火藥罐水面下約十呎の處で敵艦に觸れしめ、直ちに發火せしむる仕掛けであります。

この外裝水雷は今日でもなほ小汽艇に備へ付けてありますが、速射砲や機關砲の使用せらるゝ今日でありますから、外裝水雷を發火し得る距離に近寄る前に、汽艇は敵の砲火の下に沈沒せしめらるゝ危險が免れられなくなりました。

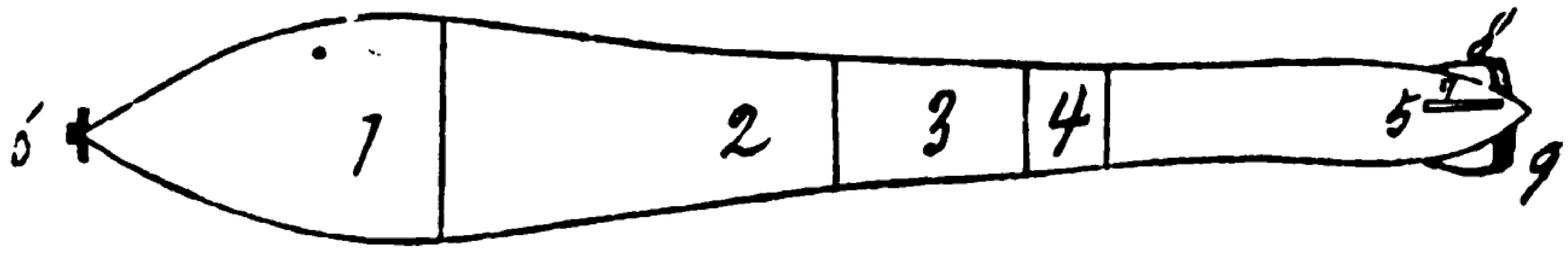
魚形水雷

外裝水雷で以て攻擊する危險に代ふるに、澳國の一海軍士官は、時計のやうな裝置で進行させる自働的水雷を造る考を起しましたが、その研究がだん〳〵進みまして、遂にホワイトヘット氏が魚形水雷を發明いたしました、世に所謂保氏式魚形水雷であります、即ち左圖に示すはその構造の大略であります。

(甲)保氏式水雷頭部



(乙)保氏式水雷



(甲)

(1)爆發尖　(2)雷酸水銀

(3)爆發尖の內端(水雷の艦底に接觸するや雷酸水銀を打ちて爆發せしめ次で裝藥を爆發せしむ)

(4)乾綿火藥　(5)濕綿火藥

(乙)

(1)頭部　(2)氣室　(3)秘密室

(4)機械室　(5)浮室　(6)爆發尖

(7)橫舵　(8)縱舵　(9)推進器

この魚形水雷は文字の如く其外形は魚に似て居て、鋼鐵で拵らへられてありますハその長は十四呎乃至十九呎、直徑十四吋から十八吋までありまして、內部は幾室にも分たれてあります、その氣室內には壓搾空氣を有し、又氣室は機關室に連り、氣室から來た空氣が機關を運轉するのでその運動が二個の推進器を回轉せしむる仕掛けであります、さて此水雷は實質が鋼鐵なる上に、機關の重みも輕からず、例へば壓搾空氣の重量のみで以て、大形の魚形水雷に在つては、六十三英斤計りあります、故に浮室とて空虛の一室を設けて、水雷を水中に浮遊せしむるのであります。

水雷の進行は、その縱舵の働きで、靜水ならば發射された軸線と眞直の針路を保つのであります、又橫舵の作用で、水雷調整者の意のまゝに水面下一定の深さを保たしむることが出來るのであります、而して縱舵は發射前に調整せば變ることなく、常に其位置を有して居り、橫舵は秘密室內にある巧妙な機械の働きに依て上下に運動するものであります、故に魚形水雷は發射前に豫め水面下幾許の深さを以て進行さすべきかを定めて調整せねばならぬ、通常は十呎乃至十四呎でありまして、その調整は秘密室の機械と橫舵の作用に依て出來るのであります。

魚形水雷は、その頭部の所に爆發藥が裝置しあるので、最新式水雷は百斤計の綿火藥を包藏させてあります、而して此綿火藥は水雷頭部の尖端に螺旋でとめてある爆發尖の作用で、艦底に衝き當ると、直に爆發する仕掛になつて居ります、故に平常操練の爲に水雷を發射する塲合には、頭部なる爆發藥を取除け、且つ水雷が豫定の距離を進行すれば、自然と水面上に浮上るやうに取扱ひますから、發射後端艇でこれを引揚げ、再三再四使用して演習に供するのであります。

魚形水雷の構造裝置は、前に述べましたやうなものでありますが、さて如何にして發射し命中せしめ得るかと云ふに、水雷方位盤と云ふものがあります、

これは水雷發射管の照準器であつて、大砲の照準器のやうに照星、照門を有する黄銅製の器であります之れで敵艦を照準し正しく照準線に來るや、方位盤の士官が電鈕を壓し電氣作用で水雷を發射するのであります。

又水雷發射管と云ふものがあります、恰も發射管は水雷を發射する大砲であつて、水雷は發射管の彈丸であります、若し水雷を發射せんと思はゞ、先づ之をこの發射管に裝入し、少量の火藥若しくは壓搾空氣で發射せしむるのであります、最早や水雷が水中へ這入りましたら、其上は水雷自己の力で以て、自働的に發射された方向へ進行するのであります。

英國の海軍では、大抵の軍艦に、皆な保式魚形水雷を搭載してあります、從つて數門の水雷發射管が設けてあります、この發射管にも、水面上と水面下との二種ありまして、一を水上發射管と云ひ、他を水中發射管と云ひます。

さて水上發射管には、固定及び旋回裝置の二樣ありまして、固定發射管は、通常艦首又は艦尾に備へてあります、水上旋回發射管と水中發射管とは、共に舷側に設けてあります、これ等水上發射管は、何れも敵の砲火に露出して居ることでありますから、その水雷を裝塡してある場合に、敵彈の射擊を受けるやうなことがあらば、綿火藥は爆發して、自ら災を招く危險の虞れがあります。

戰鬪艦等に魚形水雷を備へてありますのは、唯だ敵艦が接近し來りて衝突を仕掛けやうと云ふ場合の防ぎに充つる爲めの用心であります。

△水△雷△艇

水雷艇は戰鬪艦と異つて、直接攻擊の用に供する目的にて作られたのであります、水雷艇には二門乃至四門の發射管があります、又その防禦用として、數門の小口徑速射砲又は機關砲を備へてあります、この水雷艇は艇隊もしくば單獨で、多くは夜間敵艦を襲擊するものにして、全速力にて敵艦の錨地へ進航し三百乃至四百米突の距離に達すれば、水雷を發

射するのであります、而して命中すれば必ず敵艦を沈没せしむること丶なるのであります。

我が海軍の水雷艇進撃は、陸軍の突貫と同じく世界に比類なき特色であります、先年日清戦役に當ては、夜陰に乗じて威海衛に突入し、支那艦隊は戦闘艦一隻、其他艦船三隻を擊沈せられ、二百の兵員を溺死せしめましたが、之に反して我が艇隊は二艘の小艇を失ひ、戦死者九人、負傷者三十六人を出した位で極めて僅少なる損害でありました、又日露戦争の第一回海戦の劈頭に露軍に大打撃を加へましたのは、即ち我が水雷艇隊の襲撃であります。

○○○綿火薬　水雷をして絶大の爆發力を逞ふせしむるものは、中に包藏して居る綿火薬によるのであります、さてその綿火薬とは如何なるものかと云ふに、これは通常火薬と異つて之に點火いたしましても爆發するものでありません、故に掌の上で點火して之を燃焼せしむることも出來ます、されど如何にして爆發せしむるかと申さば、急激に打てばよろしい、然らば瞬く間に爆發して、且つ其破壊力も中々強いのであります。

綿火薬は小平扁板、又は小鼓形に製造されてあります、乾いたものも、濕つたものも共に使用せられまして、その濕綿火薬は少量の水分を含ましめたもので乾綿火薬に比べては取扱上安全なる上に其爆發力は反て強大であります。

綿火薬を爆發せしむるに用ゆるものは、雷酸水銀と云ふ化合物であります、此の雷酸水銀はよく些少なる震動で以て爆發するものでありますから、水雷の艦船に觸る丶が最後、雷酸水銀はその震動の爲に忽ち爆發し、其力に依て更に綿火薬を爆發させるのであります。

○○○探海電燈　水雷艇の攻撃に對する防禦の爲に探海電燈を備へてあります、此電燈は背後に大鏡を有する圓筒の内部に裝置してある電燈であつて約二萬五千燭力に等しい長き白光々線を發射するのであります、而して數百米突の距離内にある總ての物

體を明瞭に視察し得るものでありますから、若し水雷艇の來襲と知れたら、直にこの燈光で海面を搜索して、速射砲を以て砲撃せしむるのであります、故に現今軍艦には二個乃至四個の探海電燈を檣上の如き便宜の場處に備へ付てあります。

○○○○
水雷防禦網　これは魚形水雷の防禦として軍艦に備へられたるもので長さ二十呎巾十五呎の鋼鐵線の網にて拵らへ、數個連接して、舷側から出て居る三十呎計の長き鋼鐵竿の端に垂れて、軍艦の周圍を包み捲くのであります、この網の目的は魚形水雷をして艦底に觸れさせない工夫でありましたが其後水雷には防禦網切斷器を附せらるゝやうになつて、水雷は容易に網を切斷して艦底に衝突するから、其功用甚だ薄弱になつたと云ふことであります。

△△△布設水雷

初めて亞米利加南北戰爭に使用されましたが、その當時よりは非常の進步いたしまして、樽に代ふるに圓筒形鐵鑵を以てし、砲火藥の代りて綿火藥を用ひ電氣で發火させる仕掛となりました、現今英國軍用の布設水雷には二種あります、一は五百斤の綿火藥を有して居るものと、今一つは七十二斤の綿火藥を藏するものとであります。

その防禦用としては海軍並に工兵士官によつて用ゐられ、攻擊用としては獨り海軍に使用せられて居ります。

△△△防禦水雷

防禦水雷は港灣及び海峽の防禦に用ゐる水雷でありまして次の三種あります。

○○○○
視發水雷　通常六個の水雷を一線に布設したもので錘重で海底に繫ぎ措くのであります、而してその位置を表示する爲に兩端の水雷上に小さき浮標が附けてあつて、電纜を以て水雷と陸上衛所の電池との間をつなぎ合せ、衛所に居る監視者が常に布設面を監視して居るのであります、若し敵艦が水雷布設線上へ來たらば、直に電氣作用で六個の水雷

を爆發せしむるものであります、此水雷の危害を及ぼす半徑は三十呎でありますから、艦船水線部の巾を六十呎とすれば六個の一線にて七百二十呎の海峽を防護し得らるゝ次第であります。

○○○○○

電氣觸發水雷　この水雷は、水面近く布設し、艦底に觸るゝや、直に電氣作用で自働的發火するもので、通常三個を一組として布設するのであります、而して陸上衛所の監視者が任意で以て電路を開閉し、或は危險ならしめ、或は安全ならしむることが出來るのであります、此水雷は僅かに七十二斤の線火藥を有せる位ですが其船艦爆發の功果には敢て劣りはありません。

此布設水雷の功果は、艦船に觸衝した上でなければ顯はれないは、勿論でありますけれども、苟も世に水雷を防禦用として使用する間は、艦船は濫りに水雷の有無を確めずして、海面を航行したり、又錨地へ入る譯に參りませんから、隨つて敵艦をして機敏なる運動を爲さしめざるなど、間接に充分牽制するの功があります、

○○○○○

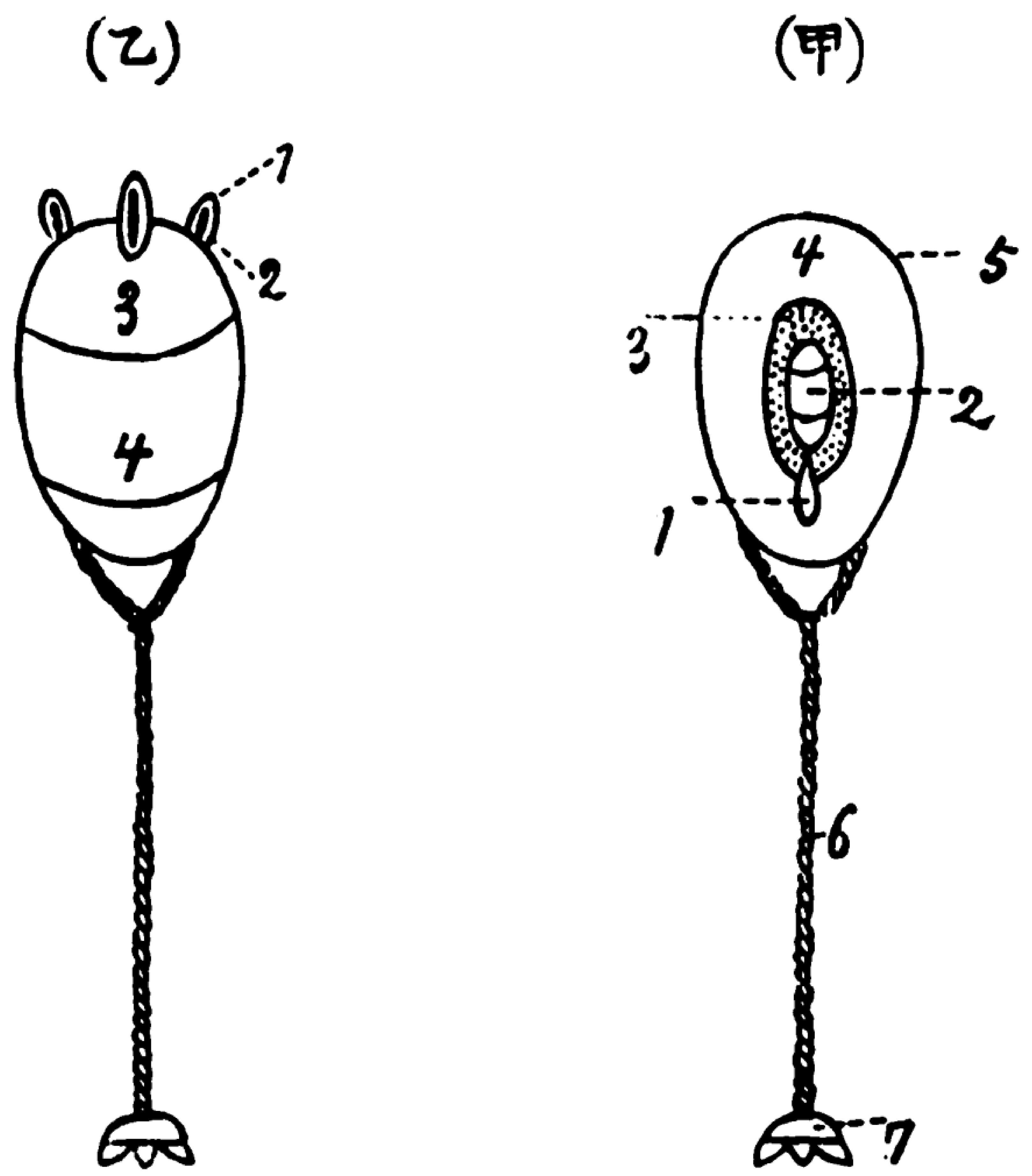
電氣機械水雷　敵港の封鎖即ち敵の港内にある艦船の出入を防ぎ止める爲に、七十二斤水雷の一線を布設するのであります、この水雷は監視者を要せず、水雷各個特意の動作をなし、沈設後數分時間を經れば、自ら危險なる性質を呈し來り、艦船の之に觸るれば忽ち機械的作用で發火するのであります。彼の旅順口に敵艦ペトロパウルスクを始め巡洋艦、驅逐艦杯を轟沈せしめたは我が機械水雷でありました、併しこの水雷は一たび之を沈置した上は、再び之を引上げることは甚だ危險でありまして、此場合には只破壞するより外はありません。

機械水雷略圖

機械水雷の構造は次の略圖にて示さん。

甲圖の發火原動機は(1)の部面に仕掛けてある電池で若し何物か來つて、水雷に觸るれば、直に流電作用を起しまして、陰陽の二線が接續して忽ち導火藥が

（甲）
(1)電池及び電線　(2)雷管
(3)導火線　(4)爆發藥
(5)鐵罐　(6)繫維索
(7)錘爪



（乙）
(1)觸接角（脆き性質のものにて作る）
(2)化學的發火材料
(3)導火藥　(4)爆發藥

發火し爆發するやうになるのであります。

又乙圖の方は、艦船の觸衝によつて容易に壞はる、脆き材料で拵へてある(1)の角がありますから、此の(1)の角で包まれ、平素海水と離隔されて居る內部の化學的發火材料(2)が、一たび包皮の角を破壞せられて、海水と相觸接することになると、忽ち化學的作用を起して、導火藥に發火せしむるのであります。

右のやうな構造と、働きとを以て居りますから、之を沈設するには、種々注意を要することあるは勿論でありますが、之れには相當なる安全裝置が附けてあるから、その沈置事業は比較的容易でありますが、一旦沈設した以上は少し重い物が觸るれば、直に爆發いたしますゆゑ、之を取除くことは全然不可能のことで、たゞ遠方から砲彈で破壞する一方あるのみと云つてよろしい。

攻擊用水雷

さて敵の水雷布設面を打ち破ぶるには、三つの手段があります。

◎◎◎反裝水雷　これは全布設面の水雷と同時に盡く破壞する手段でありまして、此の法は五百斤水雷十二個を一線となし、それを敵の水雷布設面に接して布設し、直に爆發せしめ、以て敵の布設水雷を破壞し去るのであります。

◎◎◎掃海法　この方法は先づ二艘の端艇をして、綿火藥罐を有する掃海索を曳かしめて、敵の布設水雷繋維索を搜索するのであります、若し敵の水雷を之に引き釣け得たときは、その綿火藥罐を爆發して、敵の繋維索及び電纜を切斷し、水雷をして發火裝置を絶縁せしむるのであります、此事業は中々危險でありまして、先きに我が宮古艦の不幸はこの掃海作業中の珍事でありました。

◎◎◎探海法　これは端艇をして、海底に沿ひ綿火藥罐を附けたる探海錨を曳かせて、敵の布設水雷用電纜を引きかけて取り上げ、綿火藥罐を爆發せしめ、電纜を切斷して全線の水雷を無効に歸せしむるのであります。

凡て水雷布設面は、敵の最も依頼して居る防禦法でありますから、常に完全に保存せんと勉むるは勿論のことでありますから、時に海岸砲臺によつて保護し、又軍艦の援助を借りて保存を計ります故、反裝水雷と云ひ、掃海法、探海法と云ふも、中々危險の仕事であつて、非常の膽力と熟練とを要する次第であります。

（完）

夏の水

梅の舍主人

おさんが、竈の前で面を膨らして

「五月雨に火のつきかぬる燐寸かな」

など〻、ぢれた容子や呟いた小言も、早や昨日の夢と消えて、今日しも焦げるやうな暑さ。彼れが太々しい其手足、汗にあせばみてホノボノと立上る鼻峰の蒸氣に、ソレ〳〵きつい辟易。水一杯柄杓かてらグット一ト息。胃の腑の幽門縮み上つて、臍の凹

み遠に冷谷と成るばかり。去りとはけたゝましい振舞では無からふか。之はおさんが此頃水に對する活劇の滑稽。シテ大方誰れも亦コンナことでお茶を濁ごし居るに相違無からふ。

うるさいには違い無い。なれど五月雨とて、サウ無氣に嫌ふたものに非ず。見やうに依ては一種の趣味がある。文士は之を以て初夏に於ける好個の詩題として居るでは有りませんか。畫家は之を以て卯月の好畫題として居るでは有りまなんか。氣象學者はココ力の入れ所と思ひ、農家は水の取入の分け目時と焦ら立つ。地文學者さては物理學者、ソレ〳〵手ぐすね引て此問題に向ひ犇々と責め掛けて居るではありませんか。然かも此うるさい天氣からの間にも、澄みわたる池の汀に、錦の鱗輕く振うて、徐ろに河骨の間、花菖蒲の邊りに浮遊する金魚を見ば、如何に梅雨の水の床しさが忍ばれるで有りませうか。水浴々として柳絲堤を拂ふ所、白髮翁が釣糸を垂るゝ樣に至ては、塵外の眞趣が、自ら流露するではありませんか。

扨又た、夏の水が全盛を極むる時。おさんの徒までが、もてに持噺す時。お冷水は當時何よりの御馳走ならうことなら氷水かレモン水、さてはラムネ衛水などゝ中々の騷ぎ方。追々東京などは皆さんが炎帝に敗北して海水浴に逃げ出す。山陰の瀑布の邊りに「たきつぼは銀のたらひや水すゞし」など、お濟まし召さるも是れからである。跡に殘た吾々は空をにらんで夕立の降るのでも待つ外、サッパリ甘い考案も出ないので夏の水なぞ、研究して見るのも、又たせめてもの一興であらう。

夏の水と申せば、秋の水、冬の水、さては春の水と四種にでも分類をしたくなる。が、ソンナ定めは聊か極つて居る次第でない。唯々私が便宜上こぢつけた題目で、玆暫くは、皆さんが水に接する場合が多く、從て其趣味、其知識、其研究、何れもが水に向て居ることゝ存じます。同じく海水に浴するものでも、水の研究に趣味を持ち、其知識が豐かなれば、一入

の興味を感じてザブ〳〵泳ぎ廻る裏に、海の水は何故に鹽からいか。鹽水は人の皮膚にドンナ影響を與へるものか。此一浴が健康の上に何程の値が有るかなど、自ら問ひ自ら答へながら、行ふ時は、其結果の上に一段の効力を現はすもので、丁度サンダーの體操を練習するにも、形式にのみ運動するばかりでなく、豫め生理上の知識を有すると、運動しながらに此肉を縮むれば、彼の肉が伸びて、古い細胞は新しい細胞と新陳代謝して、更に體力の發育に幾何の増進を促すなど思ひめぐらす時は、運動の上に興味を覺えるのみでなく、其結果もまた著しいのと同樣であると存じます。

デ、是れより此問題に就て、先づ物理上の研究に取りかゝりませう。

物理上の夏の水

一般の上から、水は天地の中に於て二ヶ所に分れて居る。其一つは、地上の水で、即ち河海湖沼などにあるもの。其次は、地下の水で、即ち雲霧雨などを云ふ。シテ、夏は四方山の雪解から、水の量が著しく地上に增加することは、誰れも能く知て居る。かやうに地上の水が增加するので、地下の水も殖えて來る、從て空中の水も多くなるので、四季の中最も水の活動が盛んな時である。之が夏の水の第一の特徴で、彼の五月雨は此期に魁として空中に現はれたもので夕立はソレニ續いて殘暑の頃まで現はれるもの扨て、此五月雨の影響として吾々を圍繞せる四方八面は、トント濕り氣がち、即ち濕度が高まつて來て、濕度の變化が著しいので。所謂濕氣を喰いてお腹を痛めるものなど輩出して、全く醫者の當り時である。私の知人に、至つて風流家で、然かも潔癖家がありました。いつぞや梅雨の折、獨り椽先に座を占めて茗茶をすゝり、庭園を眺めながら、淸らかな室や、美はしい庭や、然かも此シト〳〵と降る雨に、草木の色の一入艶々として居るところが、痛く興に入たものと見えて、先生いつしかゴロリと華胥の國に遊んだ。頓て起き上つて見ると着物も濕氣を含んで

居る、何となく體が熱々しい。夜に入りてから時々悪寒がする。明日又翌日と形勢が次第に悪しくなり、五日目には遂に疫痢と相定り、慘々な目に逢ひました。油断大敵とは此事で、慥かに夏の水に祟られたのであります。誠に恐るべきことではありますまいか。

ソレカラ、梅雨明けになつて俄に暑さが増すと胃腸の働が鈍るから消化の力が減て來る。デ、飲食物に分けて注意せねばならぬが、先づ第一に生水を飲んではならぬ。次ぎに氷水などを飲むことが病を釀す基になることを忘れてはならぬ。分けて子供は夏になると、兎角水を飲みたがるものであるが、ソレを為せない用心が大切です、其れゆゑ適當な飲料を與へなければなりませんが、ソレには麥湯の冷したものなどは至極宜しうございます。大人でさへ消化の力が衰へる時ですから、子供は尚更のことであります。一旦病を起すと夏の中、體の衰弱を取返すことが六ケしい。若しも其時赤痢コレラなどが流行したら、

忽ち取りつかれることになる。モウ一つは臺所の清潔法だが、誰れも手數がりて等閑がちに打ちやつてある。ナガシ、戸棚は梅雨に黴び易いものゆゑ常に清潔にすべきは勿論、梅雨あけには、晴天の日を見ては大掃除を施し間接に食物の安全を計り、衛生の無事を未然に防がぬと頓でもない疾にかゝります、次ぎに申し上げたいのは、夏の水の洪水のことであります。均らし一年の中で夏が一番洪水の多い時で、從て其被害も頗る夥しい。先づ第一は氾濫の害で、早くもゾツトする話が幾らもある。今知人の私記の一節を借りて其の慘狀を記して見ませう。

……予が校門に駈けつけたる時は、奔波躍て門脚を抹し、北窓の壁堊點々蝕却せられて、我校の危急は呼吸の間に逼らんとす。此時早し。彼時遅し。一大木橋横さまに流れ來り、水勢一轉見る〳〵門前の老松數株を搦し一擊して校門を奪ひ去る。アツト思ふ間に水は激して奔勢急にドツト校壁に突進せり。何かは以て堪るべき。實に物凄き響と共に

黒塵渦を卷てほどばしり、一百餘坪の校堂は激流の中に沈沒せられたり。何たる暴力ぞ。何たる怪威ぞ。予は神飛び氣失して殆ど策の出る所を知らざりき。………

と。第二は侵蝕の作用である。昔は川筋で有たものが今日桑田と變て居るもの、沃野が水域に成て居るもの、偖また、谷間山合の一水ごとに岸を削り底を刳りて、巨大の岩石が山中より下流に運搬せられ、村人が「辨慶の携へて來た石」「天狗の持て來た岩」など稱へるもの、多くは此侵蝕に伴へる現象で有ります。ソコデ一つ注意を願ひたきは此侵蝕の作用でも、彼の洪水の被害でも、何時と限る譯でありませんが、夏の間は水の活動力が多いから、分けて著しい反應を現はすといふことであります。

此二つの作用が相待て山谷平野を荒らし廻るので、沿岸のものは常に奮て此水と戰つて生存を致さなくてはなりません。御覽なさい。木曾川や信濃川などの沿岸の地方が如何に多くの土木費を要して居るか地方經濟の半ばを擧げて之に投ずるも、尙大に不足を感じて居るではありませんか。茲に甚だ不幸なるは、此沿岸の國々が其他の府縣に比して、民力が疲弊し貧弱に陷りさうな筈であるが、却て生計が豐かであると申すことです、一度濃美越後の平野に足を運ばゝ、沃土千里如何に其生産力の多大なるかを知了するでありませう。越後米や美濃米が天下の米勢を左右するに多大の關係を有することは能く人口に膾炙して居るではありませんか。之は彼の洪水の作用と侵蝕の作用とが働いて、木曾川や信濃川の河源たる、信濃國の山々を崩潰し運搬して、下流に沈澱堆積したもの、彼の地質學で所謂沖積層と云ふものを構成して、此兩大平野を現出した結果なのであります。

以上は空中の水と地上の水とに就て、ホンの一端を申し述べたもので、若しソレからソレと研究の範圍を擴め行けば、限りのないことでありますから、是れより地中の水のことを略述致しませう。

泉の口、井の中、瀧の水、川の流などが、夏に及んで、メッキリ水嵩が殖えるのは、果して如何なる理由であるかは、前に述べたとほりで最了解せられたことゝ存じますので、茲には水が地中にわりて、ドンナ旅行を致し居るのか。委しく申さば、五月雨や夕立で黒濁りになつた水が、再び水晶のやうな泉になるまでには、如何なる變遷を重ぬるものかを研究致すのであります。偖是等の雨水は地上に落ちて、直に地中に侵み込むものと、河川によりて池沼湖海に流れ入るものと、其行衛が二つに分れます。池沼湖海に注いだものは、其濁分の塵土を沈澱して清水となる。地中に侵みたるもの、上層の眞土より、次の砂層に入り、礫層を通り、次第に下層〳〵と降下する間に水質も従て清らかになり行く、此各々の地層は丁度漉紙のやうな働をなすもので、地球の上皮の部分は、恰も一大水漉機械と申して差支がありません。尤も此地層と申すものは、甚だ不秩序がちで、前申したやうな順序を追ふものと限りませんが兎に角深き下層に至ると其目が細やかに成て、水が湛えられるやうになる。ソコデ、水は互に押し合ひへし合ひ込みあつた上句居所もなくなるので、彼方此方と頭を擡げ出す。其中に地層の裂目などを穿鑿して、是れ屈竟の抜け穴とチヨロ〳〵かけ出して昇り詰めた出口が、所謂泉であります。

かやうに、水は地中から地上に、地上から空中と、三界の間を横領し活動して、一時も止むものでないが、是等は要するに水が物理的範圍に支配せられて居る現象に過ぎません。

次ぎに來るべき問題は、夏の水と、衛生との關係を今少し委しく申し上げたいのである。否此一段こそ本題の主眼でありますから、充分化學的の研究を致さなくてはなりません。

水の化學的研究

由來東洋では火水木金土を以て物質の元素とし、所謂る五行説といふ、ノンキな學説を極め込んで濟ま

して居た。勿論西洋でも、其昔は化學が幼稚で有て水の化合物であると云ふことはトント考へ及ばなかつた。然るに千七百八十一年、カヴエンデッシユと云ふ人が、始めて空氣中に於て、水素を燃せば酸素と化合して水が出來ると云ふことを發見いたしました。所が當時は、尙人智が進歩しないので、此の發見を信ずるものがない。のみならず却て異端邪說として、嘲の裏に葬られたと云ふ情ない時代で、今から考へて見ると、何より殘念の次第でありました。が、其後千七百八十三年再び此試驗を繰返して、酸素と水素と化合すれば、水を生ずると云ふことを確證し、當時の學界に向つて大に警告を與へて、熱心に其の所信を透徹することに力を竭くされた。氏の熱心は反對の議論を征服したのみでない。遂に尊い發明として持囃され、爾來幾多の研究を積み今日の如き完全の域に進んだ次第であります。

ソコデ、水素を燃せば、酸素と化合して水が生ずるとは、甚だ無造作に見えますが、中々容易くはまゐらない。篤と次の圖のやうな仕掛と手配とに依て、丁寧に實驗をして御覽なさい。

裝置、

一、先づ二口瓶を取り其中に水と亞鉛とを適度に入れ置く。

二、二口瓶の口にキユルク栓を箝め一方に漏斗を挿込み、一方に硝子管を出し。

三、硝子管の先きに太い管を仕掛けて、鹽化カルシウムを入れ置く。

四、鹽化カルシウムを入れた管の先きは、また硝子管を仕掛け置く。

五、管末に冷い瓶を覆ひ、其下に皿を置く。

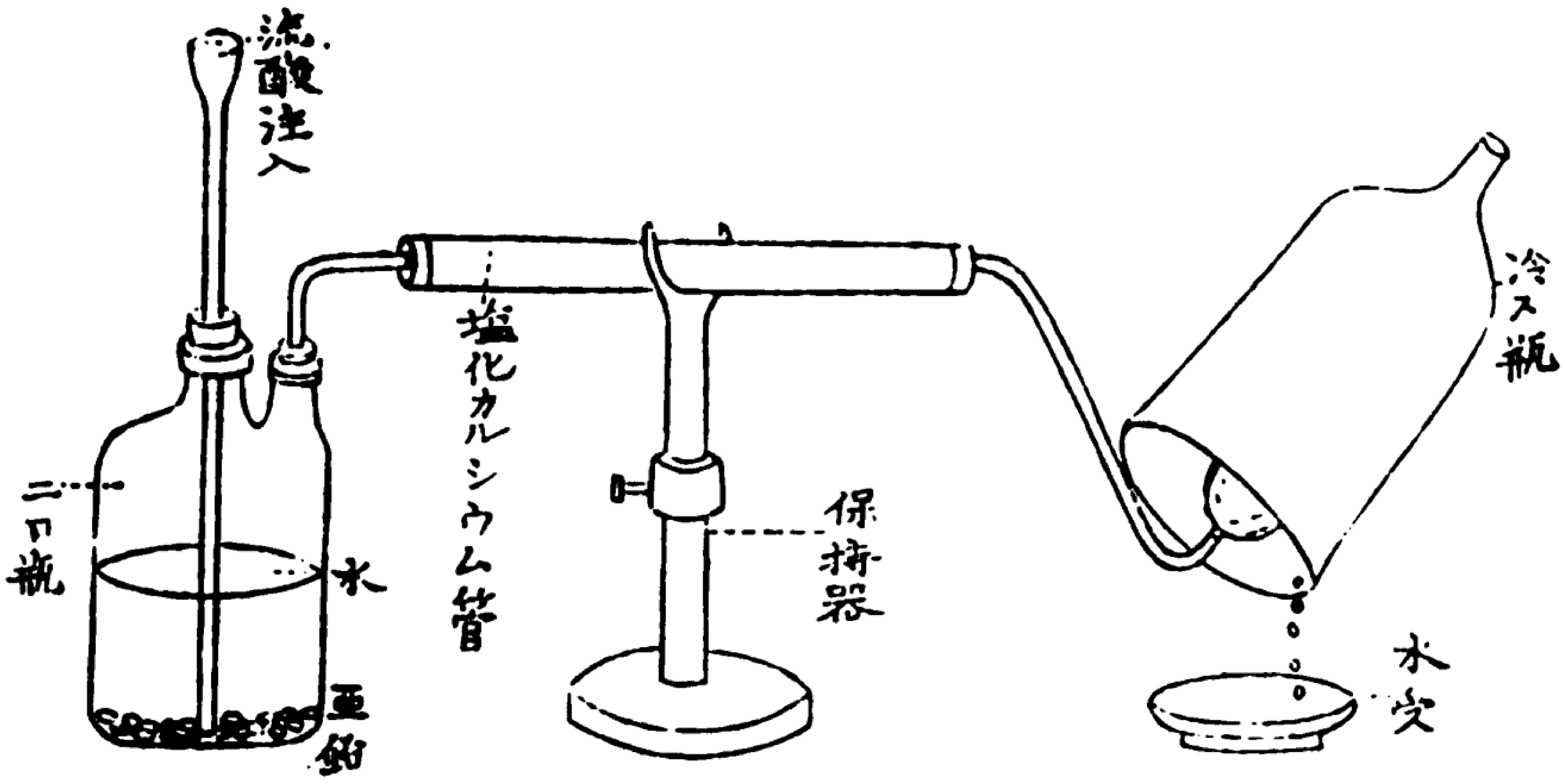
實驗、

一、漏斗に少しの硫酸を注ぐ。

二、硫酸を注ぐと忽ち激しい熱を生じ、硫酸中の硫黄と酸素との團體は亞鉛と化合して硫酸亞鉛となり、水素を遊離す。

三、遊離した水素は、瓶から硝子管に向て發

第一図



散す

四、其際水素は鹽化カルシウムを通過するので、よく乾燥した純粹のものとなる。

五、其水素に火を點ずると、空氣中の酸素と化合して燃燒する。

六、燃燒する際に、冷い瓶に觸れて水が出來る。

七、落ちた水は之を皿に受ける。

此試驗に由て出來た水、即ち純粹の水をば、化學上の水と申します。河海池沼などの水は、大に之に異り、何れも不純の水である。分けて夏の水は不純の度が甚しい、中にはソラ恐しい有機物が潜り込んで居て、吾々を酷い目に合せるとは、物理的研究の際にも陳べた通である。箇樣な不純の水でも蒸溜器で蒸溜いたせば、化學上の水即ち純粹の水に變へるとが出來る。醫者が藥用に使ふ水は、是非蒸溜水に限ります。ソコデ化學上の水とは、ドンナものであるか、ザット分りましたと存じます。是れより更に

其委しい研究に入りませう。

水の性質(一)

水は通常の温度では、色もない。臭もない。彼の小川の水、淺池の水などは、水層が薄いゆゑ、少しも色を現はさぬが、舞子の濱、鎌倉の海などを見渡すと其水が暗綠色を示して居る。即ち水は或る程度の水層に及ぶ時は、一種の色を現はして來る。學者の調査に依れば二十六メートルの厚い水層になると、其水の色が暗綠を負びるさうで有ります。

水の性質(二)

攝氏の寒暖計が零度を示す時は、水が始めて氷となる。此零度を名附けて、氷點と云ふ。シテ空氣の壓力が七百六十ミリメートルに於て、攝氏百度の時は水が始めて煮え立つ。之を沸騰點と云ふ。攝氏の寒暖計は即ち此二つの標準に基いて拵へたもの。又水は物の重さを量る單位として、攝氏の凡そ四度の場合に一立方千チメートルを一ガロンと名附けて、衡の本家本元となつて居る。吾々が四季の温度を考へ利用厚生の道を講じ、若しくは日常至微の公平をも保ち得るもの、其の元は唯此水の性質を應用したのに過ぎません。

水の質性(三)

凡そ物は熱を受けると膨脹し、冷えると收縮する。此一般的原則は、水に於て全く當て篏まらぬ。言葉を代へて云へば、水の性質のみ此原則を背いて、獨得の特性を持て居る。即ち水は攝氏の三、九四五度の場合に最も濃厚の體となるが、零度に至ると、却て其容積を膨脹して氷となるものでわります。論より證據、長野縣や秋田縣などのやうな寒い國では、嚴冬の際、瓶中に水を充てたまゝ、一夜を過ごせば忽ち凍つて瓶が破裂して仕舞ふ。特に甚しい時には、ビールが凍つて其瓶を打ち破るなど決して珍しくない事である。ソハ申すまでもなく、水が從來の

占領區域では所切れぬので、パチンと硝子瓶の抑壓面を突貫して、其血路を切開くからである。即ち攝氏の零度の時に於て、水の一容積は氷となれば、一、〇九〇八二の容積に殖える。彼の氷が水面に浮ぶのも、水の時より氷になつた場合の方が、其容積を廣げた爲めに、大さの割合の上で、幾らか輕くなつたからであります。

かやうに、一般の原則に背いた原則があるので、冬時魚類などが、水中生活にトンダお蔭を被て居る其おかげと申すのは、氷は水面に張て水底に張らぬと云ふ事實です。若しも氷が水より重い時は、ソレコソ大變でアベコベに底から張り上るに相違ない。假令底より張らずして水面に凍るとも、其度毎に段々降沈して魚類は忽ち凍死の災を被るでありませう。幸ひソレが水底に張らぬのでたとひ如何なる寒さでも氷下の水に命を失ふやうのことがありませんチ、ト大げさに聞えますが、彼の浦鹽港や旅順港の如く、氷に封鎖せられる處では、鯛や鮪など氷漬けとなつて、世界の名物とたゝへられる騒ぎを見るではありますまいか。最も我が日本に於てさへ寒國の淺水の端などには、折々小魚が氷のために胴中わたりを閉ぢ狹まれたまゝ死んで居るのを目撃いたします。

昔京都に氷魚と云ふ名高い畫工がありました。厳冬の或朝鴨川のほとりを通りかゝりました折、フト氷の間に小さい魚が狹まれて居るのを見つけ、最とけゝんな顔して眺めて居りました。ヤ、暫く過ぐる間に朝日のぬくみで氷はソロ〳〵解け出したので、魚が動き初めさうに見えました。先生瞬きもせず、ジツト見つめながら、尚其擧動を伺て居りました魚も魚ならば、先生も先生で、互に根氣くらべして氷の解けるのを待て居りましたが、魚は頓てやうやく氷搏を脱して、ピタ〳〵淺瀬をたどつて泳ぎ行きました。先生ハタと手を拍て「ア、感心〳〵。彼の氷に擒にせられて、命から〳〵の困み、何たる慘狀ぞ。然かも彼れが氣永に氷解を待つた忍耐力、たし

かに命拾ひの大成功を奏した。實に忍耐は成功の母ぞ。小事なれども、以て我が一代の戒めにせん」と。遂に其雅號を氷魚と改めたと云ふ逸話があります。御承知の通り、京都邊は一寸寒さの嚴しい所ゆゑ、ツイ魚が氷に生擒られたのでありませう。が極寒の地方と違ひ、氷も薄い、其上魚が辛抱すれば命を拾ふまでの加減があつたゆゑ、畫工先生を感服させることが出來たのでありませう。ソハ兎も角是等の事實も、矢張水の特性を證明する一端にならうと思ひます。造化の配劑は、ドコマデも絶妙に出來て居ること、云はねばなりません。

餘り永くなつたゆゑ、餘談は又緩々と述べることに致しませう。

家政學資料（つゞき）

交際の心得

磯部武者五郎

交際は男子の最も必要とする所なり、されども主婦たるもの良人に代りて來客に應對し、或は良人と共に交際場裏に出づるときは、宜しく交際に關する禮法を知らざるべからず、又家を代表して親戚知己と交際するに於ては專ら主婦たるもの丶考慮を要することなり、交際に就て、主婦の心得べき要項は左の諸點なるべし。

談話、接客、訪問、音物、書簡、吉凶諸禮、服裝、饗應、

談話の心得

談話はなか〳〵六ケ敷ことなり、客人と談話するにつきては、左の條々に注意して尤も謹むべきなり、

性急にして短氣を現はすこと、

談話の議論に渉ること、

他人の談話を妨ぐること、

他人の談話に過誤失言あるを表立ていふこと、

私事或は一身一家内に關する談話を爲すと、

他人の談話の調子が關はざるに注意すること、

首尾不整の話しを爲すこと、

目前に在る人の癖を取りて己れ又は他人に比擬すること、
衆人會合せる席に於て己れの職業又は臨席の人と餘り知らざる談話を爲すこと、
高聲を發し談話を爲すこと、
容易に理會すべき事柄を反復談話し又は聽直すこと、
他人の前にても人の行狀に關し不敬の談話を爲すこと、
野鄙なる言語又は賤劣なる談話を爲すこと、
談話の際みだりに外國の言語を交ふること、
衆人の中にて或る一人に對し他の人々の知らざる事を永々しく談話すること、
衆人の中にて或る一人に對し密談すること、
席に連ならざる人の噂を爲すこと、
貴族の眞似を爲し又は名士の後胤たる如き狀態を爲すこと、
失言ありて之を蔽はんが爲に辯疏を爲すこと、
自己の家族の賞賛に渉る言語を爲すこと、
衆人の席にて政治宗教の事を論ずること、
餘り遠慮に過ぎ獨り一隅に座を占め他人の來るを待ちて之と談話すること、
物の價値利潤に係る談話を爲すこと、
某は何故に結婚せざるか等の談話を爲すこと、
他人の氏名はなるべく呼捨てにすべからず、
衆人の席にて謎語、隱語を用ひて談話すると、
他人の解せざる方言にて話を爲すこと、
親戚朋友にあらざる人に自己の安否職業に關する話を爲すこと、
横又は下を向きて談話すること、

以上は談話の際、注意して忘るべからざることなり、これらの注意は我邦の禮式にても、西洋の禮式にても同じことなり。

尙音聲は高からず低からず、澁り滯りなく語りつゝけ、常に對手の人の顏を見るが如くにして爲すを要すされば、なか／＼困難のことなるべし。

接客の心得

客人に接する時の心得を述ぶれば大略左の如し。
來客には直に應接すべし久しく待たすべからず
客に接するときは顏色を和げ優美丁寧なる語を用ひて挨拶すべし、
客の去らんとする時は家人に耳語又は指さしすべからず、
客の去らんとするとき必ず玄關まで送るべし、門を出づる迄内に入らぬを禮とす、
來客の容貌服裝は決して品評すべからず、
良人と共に客に接するときは良人の意を酌みてよき程にもてなし良人をさし置きて出過ぎたる擧動をなすべからず、
良人に代りて客に應接するときは良人不在のことを丁寧に謝して客の歡心を失はざる樣にすべし、
遠方より訪問の來客には飲食を供すべし、
數人の訪問者には同一の取扱ひを爲すべし、
冬季には西洋室煖爐の火の絕えぬ樣にすべし。

訪問

他人を訪問することは交誼上缺くべからざることなり、故に今和洋の禮式を折衷して其の心得べきことどもを左に列記すべし、
訪問は早朝夜間に爲すべからず、
訪問して談話する時間は三十分間位たるべし、
座席に着くときはなるべく遜りて下席につくべし、
先方の家に病人其の他取込の樣子あらば速に歸るべし、
又饗宴の所なりせば重ねて來るべき由をいひて直に歸るべし、
病氣見舞に往きたるときは取次の者に其の容體を聞き速に歸るべし、強ひて病人に面會を求むべからず、
女子は故なくして獨身の男子を訪問すべからず
訪問するときに小兒又は動物を携へて往くべか

らず、

訪問中他の訪問人あるときは其の新に來りたる人の席定り主客落付きたるを見て、靜に立ちて主婦に別を告げ又來客にも挨拶して退くべし、

夜間已を得ず訪問するときは午後九時より遲くなるべからず、

訪問の節必ず名刺を携へ往くべし、

男子の名刺には姓名宿所を記し職業官位を記せず、職務官用にて訪問するときは職業官位を記すべし、

地方へ發足の節贈るべき名刺には左側の下端に告別の文字を記し郵便にて送るべし、

歸鄕せるときは宿所と在宅の日とを名刺に記して送るべし、

病氣見舞に贈る名刺は見舞の口演を記し添ふべし、

不幸の報知あるときは直に其の家に名刺を送るべし、

喪にある婦人他を訪問する要ありとも憚りて訪問を缺き之に代ふるに喪中の名刺を送るべし、

男子のみの家には婦人は名刺を遣すべからず、

自ら訪問したるときは名刺の端を折返しておくべし、

友人の紹介狀を得て人を訪問するときは己れの名刺と紹介狀とをさし置き直に歸るを禮とす、

其の家の主人紹介狀を得て直に招待狀を認めて被紹介者に送り日を定めて其の訪問を受くるものとす、

訪問のとき室內を見廻すべからず、

食事時刻込居るべからず、

勸を待たずしてピアノを弄ぶべからず、

室內の什具飾付に手を觸るべからず、

己の時計を出して時刻を計るべからず、

對話盡きても尙長座すべからず、

西洋室にては戶を叩かずして猥に室內に入るべからず、

一婦人は一人にて男子を訪問すべからず、

一帽子又は携帯品を家具の上に置くべからず、

刺繡

上村百世子

百合花肉入れ搓糸縫ひ

是は肉入れに致します、初め木綿の三子糸にて、第一圖に有る如く花瓣を縫ひます、肉を入れます時は、上縫ひの反對に縫ひます、一度肉を入れますのは、反對に縫ふのですけれども、二度入れます時は、上は縫ひのなびきの通りに縫ひまして、其上に反對に致します、第二圖に有る樣に縫ひます、縫ひますには、初めのは形よりも、五厘程中側を縫ひ、次のを其上に縫ひますから、形よりもすこし、小さく成りまして、上は縫ひを致します時は、次第は中眞に參りますにつきて、高く成る樣に見る爲めで有りますから、少し中側を縫ひますやうに注意して致します、花瓣の後に附て居ります二瓣は肉を入れなくてよろしいので有ります、莟と圖に示したるだけの花瓣四とを二重に肉を入れます、葉は一度圖に有る如きなびきにして、肉を入れます、是は青か又は茶の木綿三子糸なので有ります、花を縫ひますには、白かま(細口なれば四本合せ)太口三本を半分に割り合せ、下搓十ばかり致しまして、上搓り十一二にして(廿より)肉の反對に第三圖に有る如く中眞を殘こして縫ひます、第一圖の通りに全體を縫ひます、糸の搓りがそろひませんと、見にくきもので有りますから、成る可く注意してよるので有ります、次に葉を縫ひます、之も花を縫ひました糸の太さと同じ事でよろしいので、小なる葉は淡き草色を用ひ、大なるは濃きものを用ひます、第一圖に示したる肉の入れ方と反對に成る樣に縫ひます、針目は餘り短く無樣注意して、裏葉は淡色を用ひて縫ひます、次に枝に紙搓りを入れます、上部は二本に致しまして、下部は三本にて致しましてもよろしう御座いますし、又小搓

第一図



第二図



第三図



第四図



小撚り入レ方

第五図



第六図



第七図





りを太くして二本で致してもよいので有ります、入れ方は第四圖に有ります、此縫ひ方は草色を出し合せにて、すこし甘撚りにし(左より)小撚りを成る可くくるむ樣にして、左縫ひに致します、次に花瓣の中眞に極細き小撚りを三本入れます、第五圖に有る樣に眞中に綴じますのは、長く兩端しのはすこし短くして綴じます、蕾みにも矢張り入れます、是は白かま一本で是も撚りをくるむ樣にして、六圖に示したる樣に丁寧にけば立たぬ樣に致します、蕾みのをすこし草色かゝつたものを用ひます、次に斑點を花瓣に入れます、是を赤かま二すが白かま二すがをたづな撚りにして第七に示したる如く菱に掛まして、其上に圖に示したる如く赤かまの一本にて斑を入れます、大小有る樣に縫ひます、次ににほひを縫ひます、是は長さには小撚り一本を入れ、淡草色にて縫ひ、後のは白かま割り合せにからくより、細く綴じまして、茶糸で花粉を付けます、是はかま一本で三針程いたしますればよろしう御座います。

四季の臺所

中川雪枝

本號より餘白の割愛を乞ひしものには、餅の皮を剝くなる贅澤なるものにもあらねば、飯蛸の菊の飯てふ氣取たるものにもあらず、朝夕の臺所にこれはといふもの調ふるにもあらぬに、首ひねりたまふ人たちも少からねば、いさゝか聞覺えしことに、はた心つきしことを料理してものすることゝしたりき、拙き筆の、さら〱と箸の運ぶが如くあらぬぞはづかし。

八月

飯

世の中はいつも月夜に米の飯、といふ俚諺もありて麥飯は其見た所の美しからぬとゝもに、厭ふ人もあれど消化の極めてよきために、却つて下ざまならぬ分限に炊がるゝやうになれり、四季の何れを撰ぶべきにあらねど、夏はこと更よし。

『麥飯』　麥飯は丸麥、引割、潰し飯の三通りありて、丸麥は精げたる大麥を粒をはぜるまで煠で、粘液とゝもに米に混ぜて炊ぐ、その粘液に滋養分を有するなり、また引割と潰し麥は、そのまゝ米と共に炊ぐべし、其の割合は人々にて異るやうなり。

『粥』　水加減は飯の二倍半にし、鹽を和して炊ぎ普通の飯の如く薪を引きて熟せしむべし。

△菜粥　菜を細く刻みて薪の引際に入るべし。

△藷粥　甘藷を賽の目に切りて菜飯の如くす

『さば飯』　裙帶豆を薄く小口切にし、沸湯をかけ燒鹽を加へて、釜ませにするなり。

野菜

この期に多く且つ價廉し、その中最も收穫多き茄子南瓜、其他二三の料理を左に記さん。

注意　煮燒するに、鰹魚、干鰯等にて第一の味をつけ、砂糖又は味淋等にて第二の味をつくることは、單に醬油のみを用ふるにまさること云ふまでもなければ、すべて醬油又は酢を用ふる塲合に、この味をつけることは、一々記さぬことにすべし。

『茄子』　其のいろつや美しく、料理ごゝろよきものなり。

その大なるものは

△鼈の甲燒　二つ切にし、其切目に縱横に庖丁目を入れ、恰も鼈の甲の如くし、金網の上に乘せ、胡麻の油を塗りて燒く。そを皿に仰向けて置き、其上に牛肉または魚類などを切り、人參慈姑など細く刻みたるをまじへて、程よく煮たるを、汁のまゝ掛け、山葵、生薑など加へて食す。

△神樂燒　蔕のまゝ火の中に埋め置き、よきほどに燒けたるを取出し、細くさき生薑のすりたるをあしらひ、醬油にて食す。

△鴫燒　三分位の厚みに輪切にし、そを串にさし、胡麻油を表裏にぬりつけ、兩面を燒き、これに黑胡麻の炒りてすりたるに、味噌をよく交ぜて摺り第二の味をつけたるをぬりつけ、細火にてほんのりと燒く、客に出す時に南天などしけば見榮あり。

△鍋鴫燒　四分程の輪切にし、暫時水に浸し鍋に胡麻を少し入れ、上下に搖廻し、暫時鍋の蓋をなして、蒸されたる時、味噌を入れて、またよく混ぜるなり。

△煎出し　二つに切り、胡麻の油にて揚げ、昆布煮汁に醬油加減の汁をかけ、おろし大根をあしらひて食す。

△さし身　二片に割り、庖丁目を入れて柔かに煠で、俎板の上にて杓子にて押平め、水氣を去りて器に入れ、芥子酢味噌又は山椒味噌を添ふ。

△浸しもの　皮のまゝザッと湯煮し、これを細かく切り、よく水を絞り黑胡麻のすりたるをふりかけ、醬油にて食す。

△風呂ふき　丸のまゝ煠でよく、和かになりたる時椀に盛り、生薑味噌を上へ置き、食する時箸にてよき程に切り、味噌にて食す。

△胡麻煮　二つ又は三つに切り、よく湯煮し置き、さて黑胡麻に味をつけたるを味噌を加へ、湯煮したる鍋の中に入れ、二三十分間煮つむ。

△胡麻汁　白にても黑にても胡麻味噌にて汁をとゝのへ、輪切にしたる茄子を入れて煮る。

△あんかけ　葛粉を水にてとき。砂糖醤油にて煮、味付けて煮たる茄子に加ふ。
以上すべて皮を剝きて用ひる方よし、その小なるものは。
△旨煮　皮のまゝ、丸のまゝにて、菊の花の如く細かに庖丁目を入れ、水につけ置き、之に蒲鉾、生麩など加へて煮出す。
△金柑煮　丸のまゝ湯煮して、湯を流し、砂糖醤油にて煮つめ、更に飴を加へて煮つむ。
△たぬき汁　うどん粉(玉子を加へば更によし)に包み、胡麻油にてあげ、味噌汁に入る。
△雑居汁　芋、人参、蓮根など、油にて一度いためたるを、汁の中に入れる。
『南瓜』　女子五好物の一となれる、滑稽の姿したる野菜なり、茄子より形大きなるだけありて、料理の趣味も亦かはりてをかし。
『酢づけ』　皮をとり、臓を去り、堅き所を二三分短冊の如くに切り、二三時間冷水にてひやし置き、水を切りたるを、鯛又は鱸などをつくりて、酢にしたしたるを加ふ。
『田楽』　厚さ巾、適宜に切りて串にさし、木の芽味噌をぬり、遠火にて程よく焼くべし。
『胡麻あへ』　五分位の賽の目に切り、ザッと湯煮し、胡麻味噌にて食ふ。
『天麩羅』　麦粉を水にて溶き、醤油を少し入れ、南瓜にぬりて、胡麻油にてあげるなり、紅焼などあしらへば妙。
『丸むし』　蔕の所を小皿の大きさにえぐり、中の臓を取出し、其中へ鶏肉又は魚肉に、蓮根、椎茸、い、きくらげなど煮たるを入れて蓋をなし、蓋は前に切取りたるものを用ゆれば更に妙なり、その蓋したるを蒸籠にて蒸し、客に出す時はそのまゝ大皿に入れ、座中にて切り、小皿に除分くれば趣味あり。
季節の野菜一々料理法を記さんは紙面の許す所にあらざれば、左に一つ二つ其の附合せを。
『白瓜の葛引』　白瓜の皮を剝き、二つに割り、中

子を出して小口切にし、味をつけて葛粉を引く。

『胡瓜のざく〳〵』 皮を剝き、二つに割り中子を出してざく〳〵と刻み、能く鹽にて揉み、二杯酢にす、これには章魚、縮緬ざこ、油揚豆腐いづれにてもまじゆ。

肉類

時を撰ばず腐敗したるものゝわしきはいふまでもなけれど、この期にはわけて注意すべし、こゝには先づ不良の肉の鑑定法をかゝげむ。

『獸』 肉の色の桃、茶褐、暗褐、暗紅、暗紫の色を呈したるは病死したるもの、黄色なるは黄疸にかゝりたるもの光澤なきは古きものなり。

『鳥』 眼玉水液を吟みて嘴の中に粘液ありて、色變り、惡臭を發し、羽毛拔易くして、羽莖の間に脂肪附着するものはわし。

『魚』 固有の腥さ氣の外に、異なる臭氣を發し眼玉に白色を帶び、腮の色茶褐色に變じ、手を觸るれば鱗落ち、截りて光澤なきものは不良なり。

刺身

『生のもの』 鯛、魴鮄、鰹、鯉、鮒、鮑、等

『湯がきたるもの』 鱧、鰹、魴鮄、鱶、赤貂魚等にて、つまには片、獨活、椎茸揚豆腐等よし。

あげもの

此期にはあまり用ひぬ方よし、其材料は

『魚類』 鱧、鱸、ゑそ、鮎、鱚、黄貂魚、等

『準魚』 蛸、飯蛸、藻蝦、等

『野菜』 蓮根、午蒡、紫蘇、烏芋、慈姑、茄子、裙帶豆、新薑、虎耳草、等

酒の下物

蝦と枝豆、三杯酢、萵苣の芥酢、冬瓜もみ、茄子の鹽酢、胡瓜の酢もみ、茄子の酢味噌、水蛸、鮑の水貝鱸の蓼酢味噌、鯛の玉子酢、南瓜の胡麻和、ずいき和小茄子の卵の花和、新百合とひじきの經山寺和、蛸の胡麻味噌和、午蒡の山椒味噌和、等よかるべし、其調理法の一つ二つを左に記さむ。

『南瓜の胡麻和』 青き南瓜の皮を剝き、五分四方

の角切にし、よく煠で、それに黒胡麻のすりたるに砂糖酢を加味したるものをかけて食ふ。

『ずいき和』　芋莖の皮を剝き、一寸程に切り、暫時水に浸し、煠で丶よく絞り、これに煠でたる枝豆の豆ばかりを取りて交ぜ、白胡麻のすりて砂糖醤油に酢を加へたる中に入れ、よくまぶして皿に盛るなり。

『小茄子の卯の花和』　小茄子を湯煮し、これに味をつけ、胡桃を湯煮し、之に味をつけたる二品を、豆腐殻をよくすりて、酒と鹽にてカラ〳〵に煎りたるものに加ふるなり。

『新百合とひじきの經山寺和』　新百合をへがしこれを鹽湯煮し、ひじきに味付けたるを加へて、經山寺味噌に和へるなり。

飲料

この期は殊に喉乾きて飲料ほしく、氷屋の繁昌も暑くるしきほどなれど、麥湯の冷したるなどにて辛抱して置きたきもの、殊更に造るとならば、左の二三品は病人にも適すれば、其の製法をも記すべし。

『林檎水』　西洋林檎の色緑にして、水分多く香氣高きものを選び、皮を剝きて四つに切り、林檎二個に五合の割にて水を入れ、鍋の中に心と丶もに煮、林檎の煮崩る丶を待ちて布にて絞り、其汁に砂糖を加へて飲料とするなり。

『ジユリ水』　ジユリ水はカルランド菓にて製し、何れの藥店にも廉價のものなり。大匙一ぱいに水一合の割合に解き、氷を加ふれば、冷やかにて猶よし。

『亞麻仁レモン』　麻の實をピッチャーの中に入れて、熱湯を上より注ぎ三時間程浸し置き、レモンの汁に砂糖をまぜたるものを加ふ、其割合は、麻の實の丸のま丶を小匙一ぱいに、熱湯五合、レモン二個の汁、砂糖一合あらばよし。

『牛乳パンチ』　最上の牛乳を砂糖にて適度の甘味をつくり、ブランデー酒を混じ、氷を入れて飲む。

献立の一例

この期に於ける献立の一例を左に記さむ。

『汁』 白胡麻汁に中茄の丸剝を入れ、それに鶏卵を落し、紫蘇の葉を刻み入る。

『平』 炙目を付けたる小鯛に、割芋茎を添え、青柚を擦りかく。

『茶碗』 鯷の酢煎に擦山葵をわしらふ。

ゝゝゝゝ

『手塩』 かみなりぼしになた豆。

『猪口』 煮梅に氷おろしの砂糖をかける。

『中皿』 鰹のさし身、もみ瓜、蘘荷、紫蘇、からし味噌、

『引肴』 鰻のかば燒、煎どうふ。

『茶』 新茶。

夏の豚料理

△照燒 豚の赤身を薄く切り（太きければ竪横一寸位づゝに庖丁目を入る）醬油に八九時間漬け置きたる後火にかけて、充分に火の透りたる頃、味淋に砂糖を和し、煮詰めたる汁を鳥の羽根のやうなものにて兩三度附け火に炙りて照を出すなり。

△味噌燒 豚肉を薄く切り（大きければ竪横一寸位づゝに庖丁を入る）。味淋にて溶きたる擂味噌の中へ七八時間漬け置きて、後網又は鍋にて燒く。

△胡麻燒 豚肉を大きく切り、醬油と味淋と砂糖とを和したる汁の中へ十時間以上漬け置きたる後、薄く切りて、其切口の兩面へ煎胡麻を附けて鍋にて燒くべし。

△うま煮 豚の赤身を大切りにして、四五時間湯煮にし、餅の如く柔かになりしを、長方形に切り、別に里芋、蓮根、隱元などを湯煮にし、椎茸などを加へて、醬油、味淋、砂糖にて煮上ぐべし、鹽豚なれば、鹽出しを爲して、用ゆるを宜しとす。

△味噌煮 豚肉を小さく切り、擂味噌へ醬油、味淋砂糖を和したる汁にて煮上ぐ。

△芥子酢 鹽豚の鹽出しを爲し（生肉なれば鹽水にて煮上ぐ）薄く切り芥子酢を造りて、之に漬け置くべし。

△酢の物　豚肉を鹽水にて煮上げ（鹽豚なれば鹽出しをする）小さく切りて、三杯酢に漬け置くべし。

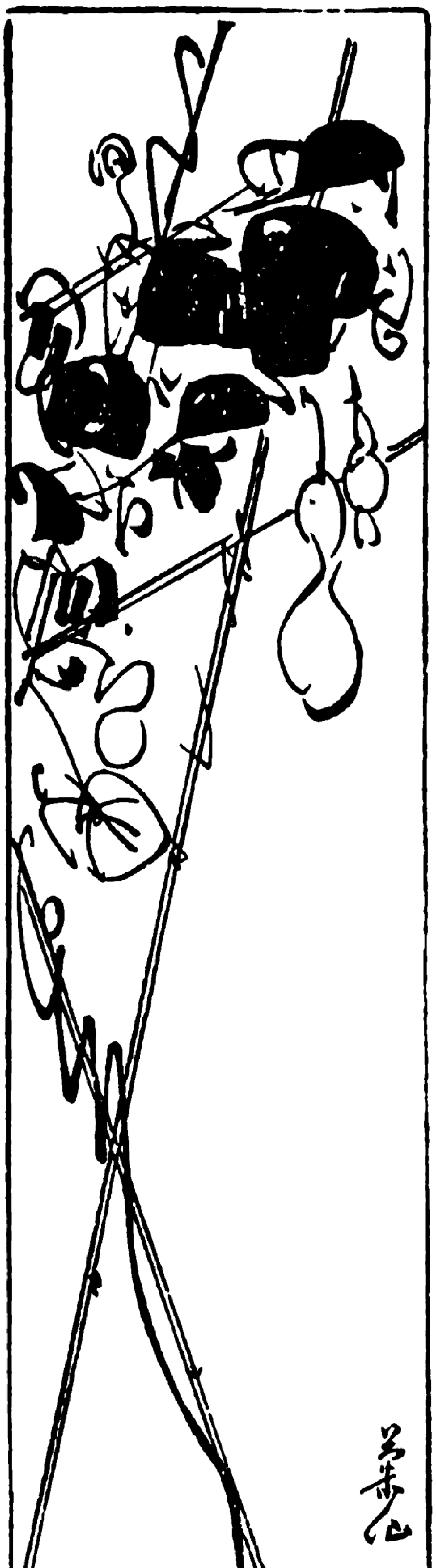
△煎肉　豚の赤身を小さく切り、蒟蒻、蓮根、牛蒡などをよろしき程に切り、胡麻の油にて煎り、醬油味淋、砂糖にて煮上ぐ。

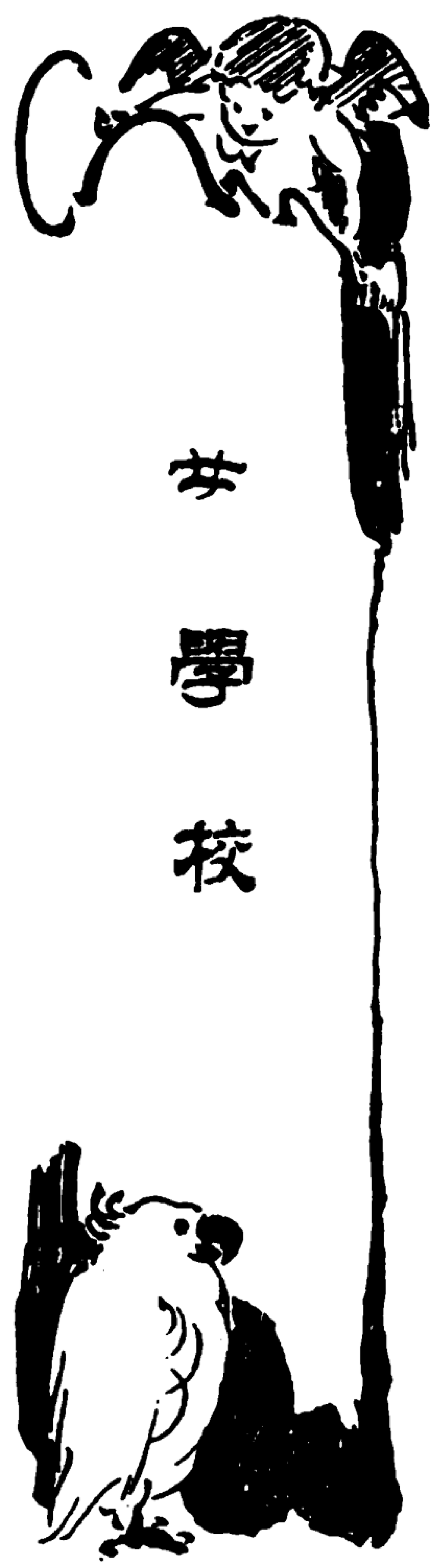
△刺身　豚肉を適宜に切り、湯煮を為し、又は之を蒸し上げて刺身のやうに切り、酢味噌其他蓼酢、芥子酢など添へて出す。

△天麩羅　豚赤身を賽の目に切り、饂飩粉を水にて溶き、鶏卵を入れ、胡麻油にて揚げ、かき揚と為すべし。

△吸物　豚の赤身を、細に敲き、團子位の大さに圓め、胡麻油にて揚げ、之に野菜を添へたる煮出し汁の中に入れて吸物とすべし、鹽豚なれば鹽出を為し小さく切りて用ゆ。

△薩摩汁　生肉又は鹽肉（鹽肉なれば鹽出しを為す）を小さく切りて椎茸、大根、人參、里芋其他種々の野菜を入れて味噌汁に仕立つべし。





私立日本女子美術學校所見

記者

耳に近き松籟は琴を奏づるかとも疑はれ、眼に入る幽邃は優に萬丈の紅塵を避くるに足る、天眞自然の美術的仙境とも謂ふべき芝公園地に設けられた私立日本女子美術學校は、其場所に於て頗る位地を撰定し得たものと思ふ。

斯の幽邃閑雅なる同校の所在地は、是が市制上の稱呼は芝區芝公園第十一號地三番であつて、即ち芝の大門内の舊安養院の家屋である。

近來美術の發展が女子社會に迨ぼして、其美術と名乘を揚げて居るもの、若しくは美術奬勵の目的の下に存立して居る學校塾舍を算へたならば、府下のみにて尠くとも十數種は下るまい。

同校は其中尤も創立の新らしきものであつて、近く昨三十六年四月の設立に係り、未だ僅に一年有半にも足らぬのであるから、隨つて特書すべき程の、美術上の歷史を有て居ないにも拘らず、成績はよろしい方であるのである。

同校の校長は島田友春と云ふ人で、舍監は内藤喜代

子女史が其任して居られる、この外の職員は

伊藤壽々子　堀口千代子　島居芳子
吉岡男成　田口茂一郎　山本靜家
伏見藤三郎　佐口美都子　三浦篤子
森川忠次郎

の諸氏で、尙校長の島田、舍監の内藤二氏も敎職を兼ね、都合十二人の職員は、各自專門の任務に敎鞭を執つて居る、此職員の他に囑托の講師がある、开は即ち左の諸氏である。

石川　光明（東京美術學校敎授）　井上善右衛門（華族女學校敎授）
飯田　與三（攻玉社中學校敎授）　長谷川岩吉（實踐女學校敎員）
高村　高雲（東京美術學校敎授）　黑田　眞洞（淑德女學校々長）
荒木　寛畝（東京美術學校敎授）

而して前記十二名の職員が擔當して居る任務の學科は、如何なる種類であるかと言へば、

繪畫（日本、西洋）、彫刻（木、牙、金、及び塑造）、刺繍（和洋風、花鳥、山水、動物）造花（花、葉、枝、蕾、果實、摘細工）、裁縫（和洋服、古代服、袋物、組糸法）、編物（綿糸、毛糸、絹糸、レース、雛形等）等で、この他に各種の藝術に關する、假令ば繪畫にては美術史、審美學、彫刻では彫刻史、動物形態學裁縫では風俗史、數學など、夫々必要の學科をも敎授するのである。

是等の詳細は同校の校則に在るから紹介を省くとして、其校則を打ち見た處では、頗る完全に近い樣に思はれるが、併し其校の創立の日が淺いので、此完全なる學科を未だ悉く授くる運びに至らない、否授けんと欲するも、受るべき生徒が無いのである、爲めに其學則に列記された講師の如きも、殆んど形式的に過ぎないのである。

目下同校に收容して居る生徒の數は、凡そ七十名ほどであつて、就中裁縫の生徒が過半を占めて居る、其他は刺繍、造花、繪畫、等を合せて、僅に三十名許りであるとの事。

前掲學科の他に割烹科がある、これは各科の生徒が大低此科の附屬的、餘興的に修めて居るので、一週間に三回（乃ち三日）位學習する事になつて居る、で同科の種類は、西洋料理と、日本の精進料理及び菓子とである。

活花も料理科と同じく設けてはあるが、矢張り餘興

的の如き觀があつて、是も隨意科としてある、造花科の生徒は參考の必要上大抵は活花を兼修して居る。
音樂は美術工藝部として、校の學則に揭げられてはあるが、其實一人も學習して居るものはない、併し樂器だけは備へてあるゆえ、生徒中の多少心得のあるもの、或は嗜好を有して居るものは、學科の餘暇に隨意に弄んで居るが、是等は規則的に教授するの外、妄りに翫弄せしめぬ方が校紀を保つ上に於て宜かと思はれる。
造花と云ひ、刺繡と云ひ、若しくは編物など、生徒の製作に係る品は都て之れを日本橋の白木屋吳服店へ出品陳列して、販賣する事になつて居るとのことであるが、是は或一面から一寸考へると、營利主義の如くに思はるゝが、決して然でない、陳列した製作品が購ひ去らるゝ塲合には、多少の儲けもあるであらうが、之れと同時に物品の名譽も幾分か伴ふ譯で、製作者は之によりて少からず滿足を博する譯で勢ひ藝術奬勵の一端にもなると云ふものである。

予は內藤舍監に乞ふて、生徒の製作品を一覽したが前にも言ふ如く、校の創立日尙ほ淺きにも拘らず、其作品は槪して良好である、勿論品に依りて巧拙はあるが、各種作品の中、造花と刺繡とは最も發達して居る樣に見受けられた、尤も裁縫は見ず、編物もないから、一槪に是非の評語を下す事が出來ぬが、前記造花、刺繡の二種丈は最も研鑽の蹟が顯はれて居る。
予が觀た中で、精秀と認めたのは、造花では、牡丹と「櫻」で、何れも活花用としての作品である、其花瓣、葉、莖などの姿勢活々として、今剪り取つた實物の夫と孰が優劣あるか、殆んど見分け難い程であつた。
又、刺繡では、森若榮と云ふ二年生の作に係る「花籠の額面」である、是は未成品であつたが、精致巧妙と云ふ點に於て、多く其比を見易からぬ作で、是等は美術展覽會に出品するとも、優に銅牌以上の褒賞を得るものであらうと思はれた。

此他に西洋の枕掛（縮緬地に野菊の刺繍）も、ナカナカの佳作であつた、寫眞挿みに至つては、唯だ華麗と云ふのみにて、是ぞと取立てゝ賞する程の作品はない。

造花科に屬する「摘工細」もの、即ち巾着の飾りとか脊守りとか、袋もの、偖は翠の瓜入、その他、動物花鳥等の飾物様の細工物は、在來の所謂「押繪」と一般にて、唯々器用に出來て居ると云ふに過ぎないので、殆んど勸工塲的のものと相擇ばぬものである。

轉じて繪畫に至つては、造花、刺繍の二者に比しては、聊か見劣りがせらるゝ、學則には日本畫、西洋の二種ともに設けてあれど、洋畫科の生徒は一人もない、總て日本畫を習つて居る者ばかりである。

内藤舎監の話には、繪が出來上ると生徒は自分の畫た畫を各自の宅へ持歸るので、生憎、今お目に懸けるのが無いとの事で、僅かに人物、花卉の未成品を一二種把出して示めされた。

過般、某方より活た實物の鷹を持ち來つて、生徒は爭

ふて熱心に寫生したが、何れも頗る上出來であつたと、舎監は得意然と話さるゝのであつた。

繪畫に於ける生徒が手腕の如何は、其作品の多くを見ない予には、容易に是非の評斷は出來ぬが、生徒の熱心に至つては大に稱すべき點がある。

生徒に奬勵の一策として、年二回、校内に於て各科生徒の製作品展覽會を催すと云ふ事である、が是れ唯蒐集陳列すると云ふに止まりて、別段審査評定して授賞を行ふとの規則も設けて無いのは、聊か物足らぬ感がする。

彼の毎年上野公園に開會さるゝ、日本女子美術展覽會の檜舞臺へ出品して、弘く社會の批評を仰ぐまでの下試驗的に、校内の展覽會にも充分奬勵の道を開くが宜いと思ふ。

予が打ち見たる所では、同校は孰かと言へば、美術文學よりは、美術工藝に向つて、熱心の樣であるから、此熱心を何處までも成功せしむべく、方針を把るに就ては、ドシ〳〵製作品を各種の美術展覽會、

若しくは共進會等へ出品するのが必要である、僅か一商店の店頭に陳列して、少部分の顧客の需用を充すに滿足せず、飽くまでも大々的に、弘く普く社會に紹介して、生徒が手腕の程、併せて私立日本女子美術學校の眞價をも示したが宜かろう、是れ同校の爲め、否、女子美術なるものゝ爲めに、予は切に希望する。

以上は予が始めて外容を一見したる私立日本女子美術學校に就ての、思つた所と見た所とを聊か記したまでに過ぎないのである、若し夫れ仔細に其内容を究め、其校の抱負をも窺ふたならば、又如何なる興味を記事に添ふるやも知らぬのである。

兎も角場所はといへば、東都十丈の紅塵中に在つて、幽閑なる上野の丘と併稱されて居る芝公園内で精致巧妙なる德川氏の靈廟を直ぐに眼前に控へて居るのも、だうやら美術には緣がある樣に思はるゝから將來の發達も察せらるゝのである、予は切に此校の盛大に赴くのを希望する。

演壇

澤柳局長の戰時の女學校を讀みて

阿多廣介

普通教育の目的は、人間の心身を普通に發達せしめて、成長の後其の分に應じ、獨立獨行の素要を達するに在ることは、元より論ずるまでもないのである、而しながら人間の境遇、社會の狀態、國家の運命の如きは、常に變化するものであるから、其變化に際して、機敏に事を處するの素養がない時は、一生を誤るものである、社會國家の如きも亦た然り治に居ては亂を思ひ亂に處しては治を考へなくてはならぬ、故に普通教育は、心身を平等に發達せしめるのみならず其の修養したる處のものは、常に機會に應じて、機敏に應用し得るの修練をしなくてはならぬ譯であります。

今日我國の中等以上の教育方法を考ふるに、形式に拘泥するが如き傾がある、例へば學科目の如きも十數科に分れて、夫れ〳〵其の分科に付いては專門の教師をして教授せしむるが如き外見は立派でありますけれども、よく其の實際を觀察する時は、各科の間に連絡統一がなくて勢力ある優良の教員の擔任せる學科は、著しく生徒の興味を有して注意を牽引することあるも、他の學科は冷淡に附するが如き傾ありて、平等普通の教育が充分に實行されてないのみならず、多くの教員は片輪であつて世事に通せず、所謂融通のきかない方でありますから、無理もない事と存じます、殊に修身科は尤も

重要なる學科なるに係はらず、一定の教科書によりて、恰も讀書と同様なる教授をなすが爲めに、恰も茲ぢに膠するが如く彼等が子弟としての境遇に於て、實行すべき機會を與へざるのみならず、他日成人しても、學校に於て學びたる處のものを、應用すべき丈けの素養をなし得ざるものと認められる、從つて其の他の學科の如きも、形式の上に於ては、或は數學、或は理學、或は音樂等と設けあれども徒らに多くの事項を授くるに馳せ習熟の時期を與へざる爲め、實際上に之れを應用する道なく、云はゞ學校は單に卒業證書を與へると云ふのみに止まりて、其の卒業證書が看板になり、職業を求め、或は婚姻の道具たるに過ぎないもの丶やうに思はれる、如此は普通教育とは云ふもの丶、看板教育と名づけても差支はないことでは有ませんか、之は畢竟學校教育が形式に流れて、普通教育を實際に應用し得るやうに教育をなさない處の、今日我が國の學校狀態である、然れば當局者は常に社會の狀態國家の進運を鑑みて、彼等が家庭に於ても、世に立つ場合に際しても之を應用し得るやうに、教育せなくてはならぬ譯である、澤柳氏の戰時の女學校を閲するに、教育は戰時と雖も、泰然自若、平時の如く愼重に其の職務を盡さねばならぬと云ふ事に就いては、御尤の次第でありまするが、私の考では平常よりも一層勤勉しなくてはならぬのみならず、戰時の如き國家多端の際に當つては、個人としても社會としても、其の境遇の變動と云ふものは、實に烈しいものであつて、或は父を亡ひ、夫に離れ或は兄を失ひ弟と別れ、或る職業は沈衰し、或る職業は多忙になり、或ものは負傷し、或ものは捕虜となり、或は卑怯者を生じ、或は勇猛なるものあり、萬事萬端國民の生存上に於て、千種萬様の變化を目前に認むる次第でありまするに依つて、此の際に當つて 如此境遇の變化を利用して、教育する時は、他日彼等が社會に出で丶獨立するに當り、運用の妙を習熟するに至るは、實に此の機會にあること丶信じます、從つて女子が繃帶を卷くとか、手製品を献納するとか、出

征軍人の遺族に弔意を表するとか、又は天道は正理に歸るとか、原因あれば決果ありとか、慈悲深は同情を得るの基とか、或は皇室の仁德厚き事や一致共同の必要とかを今日の實例により、敎授する時は平常には縱令口舌の間に苦心して敎育するとても、其の効果を奏すること六ケ敷き事柄にても今日の如き際は多くの苦心と時間とを要せずして、實地敎育すること左程困難ではないと思はれます、私は嘗て沖繩師範學校の敎頭を務めて居りましたが彼等に愛國心を養生するのは平常は迚も駄目と斷念して居りましたに日淸戰役に當て義勇軍を組織し種々の手段を講じましたが、確に其時の事は腦底に浸潤せりとて今に噂さをされております、斯くて平常機會に際して修養をなすときは、不時に會して恐惶するが如き事なきに至る者であります一例を上ますれば、私の少時かの西南の役に當つて、腕白少年の群と共に、鹿島より出身したる朝廷の名士の家屋を破壞し、遺族を懲すの擧に加はつたことが有ました、其の際は十五歲を隊長として、我々十歲の腕白盛りのもの斗りで、何心なく暴擧をした次第でありますが、其の際、今の松方伯爵家の破壞に從ひしが如何なる譯なりしか、中途にして中止して仕舞つた、後で聞いて見たれば、伯爵夫人の態度が餘り立派で有つた爲め腕白小僧も其の擧動に感じ、一指も下さなかつたのであると云ふ次第でした、之は即ち伯爵夫人の平生修養の結果を奏したもので有らうとおもひます、近頃また新聞によれば、上村中將の留守宅に不禮を加ふるものが有つたとの事であるが、中將夫人は此の時如何なる態度を取られたかは知りませんけれど、世間此種の境遇に際することは、婦人と雖も少なからざるべく、且つ今後は我國民は大に海外に澎張せざるべからざることは、常に我輩が唱道することにして、婦人も今後は海外に夫と共に經營に從事しなくてはならぬ次第で有りまするが、淸韓國の如き半野蠻國に於いては、恰も戰時に於けるが如き不慮の災害にかゝることなしとも限らない、されば女子と雖も時局に際しては、熱心の同情を以て、軍國女子

たる本分を年齢並に身分相當に盡さしめて、ます〳〵普通教育の本義を貫きたいものと、我輩は考へて居ることであります、終りに望んで澤柳氏の述べられましたる、女子の華美の弊風を警戒し、併せて輕便なる服装を改良し、體力の層進を發達せしめるが如き教育をなさんとするとの希望は軍國多事の今日殊に萬幅の同意を表する次第であります。それで戰時の女學校に就て我輩の意見を約して申しますれば戰局に對して學生を熱狂せしむるの必要はないけれども、今日は生たる教育材料が日々發起されてあるから、能く之を利用して、他日彼等が社會に立ち一家を經營するに際し、機敏に運命せる處するの工夫をこらすの好機會であるから、學校に於ては單に學科を教授すれば學校の職分を奏せりと云が如き、看板教育を改良せねばならぬ、且つ體育と服装改良を實行したいのであります、又澤柳氏はナイチンゲールの如き女傑を模範とすべきに非ずとの樣に云はれましたが、之れは又我輩は別に意見がありますが、他日申上げる事にしましよう。

戰爭と家庭教育（島津家々庭教師ハウアート孃）

△自然の準備　今回の戰爭に日本が著々好結果を得つゝあるは、日々學校及び家庭にて教訓しつゝあることが、自然に此の好結果を得る準備となつて居たのです、故にイザ國家の大難といふ場合に遭遇しても格別慌てることも騷ぐこともなく、則ち好結果を得るのも畢竟之が爲めでありませう。

△目前の教訓　今回の戰爭に付いて、小供を教訓するには、日本は正義であるから勝つのであるといふことを説明し、如何なる場合でも、正義が必ず勝つといふ感念を小供の腦中に吹込むのが最も大切である、戰爭は悲慘なものであるが、目前に國民的教育の材料を供給し、國民の品性を高くするものであります。

△感情と活動　大災難にも大幸福にも日本人は飽くまで沈著な態度を守つて、叫び狂ひ廻るもの丶ないのは、感情の表示に謹んで居るのと、一つは如何に一生懸命に力を濺いで居るか、といふとが解ると思います。



蒙古の通信

河原操子

左の書簡は内蒙古カラチン府より我が女子高等師範學校教授篠田利英氏に寄せられたる河原操女史の書簡なり

一筆申上候御尊宅皆々樣には御さはりもなく入らせられ候か遙々御案じ申上居候、次に私事御かげ樣にて、其後心身ともに實に工合よろしく、至極樂しう過し居り候間、憚ながら御休神下されたく候、扨御地の昨今は嘸かしと御推し申上候、當地は滿洲と境を接し居り候らへども、格別のことも御座なく呑氣に過し居り申候、されど萬々一死ねばならぬ場合に立ち至り候はゞ、立派に死ぬる心組に御座候、其の折の私の死骸は、定めて微笑を含み居るならむと存申候、右樣の事は決して〳〵御座なき事とは存候へ共萬々一を考へ、上海の領事館にも公使館にもよく〳〵依賴し、私なき後に親に不自由させ申樣なることのなき樣致しおき申候、如何なる事の御座候とも犬死は決して致し申まじく、況や病の爲に斃るる樣のこと御座候ては殘念の至りに候まゝ、身體に

つき候ては充分の注意を致し居り申候、如何に些少のことゝても、身體のためによろしからずと存候ことは、決して致し申さず、實に我ながらこれにては、病のとりつく隙間なしと存候位に候、生命の大切に有之ことは今更わかりたる次第には御座なく候得共一昨年來殊に今日此頃は如何なることにも打ち勝ち針の先程にても不養生のこと致し申さず、こゝに至りつら〳〵其の大切のほど感じ居申候、其後ますます工合よう此頃にては王府は勿論當地方の人々に、上下擧つて眞心もて遇され、實に木石に迄悅びむかへらるゝ樣なる心地致し、何事も非常の悅びを以つて用ゐられ、思ふまゝに相成候まゝ、何卒御安心下されたく候、昨十二月着直に王、王妃に御すゝめ致し女學堂を設けたる次第に御座候、其始め御すゝめ致し候ひし折には、贊成は得候へども、開堂は舊二月頃になりそうなる樣子に御座候ひしも、私も折角蒙古まで出かけ參り、一日に一時間やそこら王、王妃の御稽古をなし、あと悉く自分の勉强時間にとり候は、如何にも惜しきものと存候上に、教室におつべき建物はいくらも御座候こと、生徒の募集とても後宮のみにても數十人の女子の居り候こと、何も何も決して困難には御座なく、兎に角、始めおかば必ず結果よろしからむと存、善は急げと再三御すゝめ致し候、規則を編纂致し候やら、何かと目をまはし候ほどの忙がはしき思致し萬事とりまとめ申候。

陽曆三十日には當地守正學堂に居り候日本語の出來る姚と申南清邊の人、當地出發のよし申候まゝ此人をおきて他に通辯を賴む人は一人も御座なく、よりて十二月廿八日即ち舊曆十一月十日に盛なる開堂式をあげ申候、當日は王府太福晋（支那にては親王、郡王の妃を福晋と申候）を始め殘らず、其外當地方の紳士貴婦人各學校の職員生徒、三百餘名の集りに御座候ひき、式は左の次第にて行はれ申候、

毓正女學堂開堂禮式

一　聞レ鈴學生齊集ニ講堂一就レ座

二　聞レ鈴　王爺福晋　升ニ講堂一學生起立行ニ鞠躬禮一

三聞レ鈴總敎習升二講堂一學生起立行二鞠躬禮一
四福晋演説
五總敎習演説
六來賓演説
七聞レ鈴總敎習下二講堂一學生起立行二鞠躬禮一以送
八聞レ鈴王爺福晋下二講堂一學生亦起立行二鞠躬禮一以送
九學生均起立分二兩行一對立行二鞠躬禮一以盡二同學之道一
十禮畢下レ堂

右の次第で福晋の御話の次が私で、先づ正面のまばゆきばかり立派に飾りたてられたる一段高き場所の眞中に立ち、一方には喀喇沁王一方には前述の守正學堂敎習姚誠君が居られ申候、私の話は始めに姚君により官話に譯され次に王によつて蒙古の話に譯され申候、かくて三十分餘に渡り申候、諸人の感じ入りて聽き居られしは、全く立派なる通譯の御陰により候こと丶存申候、式の全く終り候は、(午後一時より始まり)三時に近き頃にて、三時に福晋 私 生徒

一同撮影致し申候、生徒は現今三十名、過半は後宮の年少女兒他は當王府附近在住の官吏の女兒に御座候、王妃の御話は次の如くに御座候、(記者いふ王妃の話は女子敎育の必要を説きたるものなり)

翌二十九日は休み三十日より相始め候ひしが、今迄家中にのみありて、同じ年配の人々と一緒に學び或は遊びたることのなき女兒等には、如何に樂しく感じ候ものか宛然夢中の有樣にて勉强致し居り申候、始め考へ候は私は蒙古語が出來ず、彼等は北京語を解し申さぬこと故少しく困る場合も御座候はんかと存候しも、幸に太福晋(六十餘の方)福晋(肅親王の令妹三十二三)の北京の方の爲め後宮に居り候ものは、字は一字も相見え申さず候へども、耳だけは開き居り候故、話には少しの差支も御座なく候、よりて北京語のよくわかり候ものに通辯致させ申候、一寸まだるき致方の樣に御座候へども、實際まことに工合よく、一寸の呼吸にて非常に愉快に樂しき〳〵中に日々過し居り申候、學生等はさながら私を神の如くに思ひ、如

何なる事も申通りに致し候まゝ、進歩も早く開堂以來日の淺きにもかゝはらず、成蹟までとに宜敷、王も王妃も一方ならず御滿足の御樣子に御座候、開堂前に王より今回學堂を開くにより、娘を出すやうにと當王府の官吏達に御話御座候ひし折には、女兒を人中に出すことには、外國婦人より敎を受けさするとなどはと申樣子にて、澁々顏に御座候ひし由、然るに開堂後半月も立ちぬ内に、其澁々顏なりし親達は學校の有がたさを感じ、親戚知己の間をふれまはり候よしにて、昨今は女兒を持ち居る人々は、何卒來年から（十二月二十日より一月二十日各期休業）我娘も願ひ度し、我兒は少し幼なれど學堂の片隅になり遊ばせおき呉れよと日々申込み御座候よしにて、來春は五六十名の學生を得るならむと、王、王妃共非常に悅び居られ申候、何分急の開堂にて手も揃ひ申さず、舊年中は私一人にて致し居り候ひし次第、それ故規則通りに參らず日本文、日本語、唱歌、體操、習字、支那語の初步これ丈を致し居り申候、改年には蒙古文を始めることに相成り居り候へども、男子は一步も踏み込むことを許ざずと申風にて、敎習も是非女子でなければならず、爲めに然るべき蒙古敎師を得るに困難を感じ申候、學生の中に王の令妹が（當年十七才）居られ候へども、實に恐しき程明瞭なる頭腦をもち居られ候、私を此上なきものゝやうに思はれ、言行一々學び居られ申候、此方はすでに巴林（同しく内蒙古にて當地より滿洲によりたる部落）の王に嫁せらるゝやう定まり候よし、先方にては直にも結婚式あげたしと申され候との事なれど、當王のかゝる無敎育の者いかで、王夫人として遣はさるべき、少し敎育してとのことにて、一切私にまかせられし次第、私も實にうれしく覺え申候、なほ此外華族の媛さん達の年頃の人々は他部落の王族等に、それ〳〵定まり居られ候樣子、兩三年の後には喀喇沁の外に、多く日本びいきの部落を得候ことゝうれしう覺え申候、蒙古地方の人々は何を申候ても未だうぶなるもの加ふるに西洋人を好まず、支那人をも外國人視して非常に嫌ひ居り申候、獨り日本の

みは宜敷ものとみえ、殊に此の頃は一も日本二も日本と申風に御座候まゝ、今後當地方に入り込み候日本人にして諸種の方面に於て、其方法よろしきを得ば、將來日本の爲めに、餘程面白き結果の顯はれはせぬかと私かに存居申候、とにかく腰掛の心組にては致方なく墓を此地に造る心組にあらざれば致方なくと存申候、こゝに至りつく／＼英國人等のどしどし未開地に入り込みて殖民をなす其方法の緒のわかりたるやうなる心地致し申候、當地は蒙古の最南に位し、かつ土地肥沃のため農業は早くより開け牧畜は第二に位致し申候、とにかく私在勤中は全力に赤誠込めて充分に日本の爲め、蒙古の爲め東洋の爲めに相謀し申べく、其後は誰ぞ家族引きつれて入り込まれ、墓を作る位の考にて盡力し下さる方もがなと存居申候、

（以下次號）

戰爭教と女性

池元吻鹿

一

私はイスラム教の信者でないから、敎會に籍を置いて居ると云ふでもなく、洗禮を受けたと云ふでも無く、左ればとてメッカに巡禮し、昔アブラハムが踏むだと申す黑色の靈石をガーバー堂に拜したと云ふのでも無い。が、イスラムの內には輕視する可からざる眞理があるので、恒にイスラム教の法典たるアール、コーランを繙いては、此の眞理に浴せむことを希ひてゐるのである。

イスラム教の開祖は、夫の有名なるマホメットである、マホメットと聞くならば、世界の温好なる人々は直ちに顰蹙せらるゝであらう、殊に質素を貴み穩和を愛せらるゝ女子を第一の讀者として居る此の『女鑑』には、尠からず不快を感せらるゝかも知れない。然れども、マホメットにも亦た優しいところが

ある、彼の人格は世間で疑問として居る程に疑問とす可きではない、その天眞流露的の風姿と、眞摯なる情緒と、これ等は宛然として、未だ何等の琢磨を經ず自然の儘に光澤を放ちてゐる未製品の珠玉を見るが如しである。總ての偉人に必要の最大條件は、眞摯なる氣風の供はらざる可からざるに在り、マホメットの言行には常人が見て以て破格突飛とする點が多いに係らず。彼が此の破格事を敢てするに眞摯であつたことの一事は、何人も感心せずには居られまいと思ふ。

私は、此の優しき『女鑑』紙上を借りて、戰爭敎の開祖たるマホメットを論ぜむとするのでは無いからこれ等に就いては默するとするが。偖て目下は世界の平和が破れて、恐怖すべき戰爭の幕が開かれてゐるのである、恰かもマホメットがコレーシユ族や猶太人やシリア人と戰つたごとくに、我日本人はスラヴ人と戰つて居るのである、敎祖なるマホメットの言は我天神の子孫なる日本人によつて大に實行されてゐるのである。この時に當つて、世界の戰爭敎とも云ふべきイスラムの開祖マホメットが視たる女性を研究するも、決して無趣味ではあるまい。

マホメットが視たる女性、イスラム敎中に現はれたる女性、頗る變なコントラストでは無いか。然れども、これ戰國時代には好き讀みものである。

二

幾多の書物にも記されてゐるが、マホメットの美貌は、最も有名なるもの丶一であつたらしい。燕色にして淡紅色を含める顏面に、星のやうなる眼光は炯々として、四邊を射り、長くして光澤ある髮は房々として、その風姿婉然たる名流の血統なるを示して居た。特に額上に龍起せる血脈は、これこそハシエム家の特相を現はせるのであつた。その資性の豪放にして、信力威力ともに壓すべからざるものがあつたことは、彼が歷史の證するところであつたが、彼の容姿は寧ろ却て貴公子然たるものであつた。故に彼が天地を獨占して高踏せるときには、何人もこ

れを非常なる天才とせずには居られなかつたのである。人は彼を呼むでアラブソールと云つた、アラブソールとは亞剌比亞魂と云ふの義であつて、亞剌比亞、精華即ちこれマホメットと敬稱したのである。彼が最初の妻カデヂヤアは、荒野から歸つて來る彼の風姿の、俗流を卓越せるのを見て、結婚を申し込むだのであつた。

亞剌比亞は一夫多婦の國習がある、これは獨り亞剌比亞のみでなく、熱帶地方では概して、惡慣習があるので、熱帶地民からして視たる一夫多婦は、毫末も惡習ではない不德でもないのである、慣習は天性との諺もあるが如く、これは如何ともすべきでない。千古の大聖人たる釋迦牟尼佛の如きに在ても、慣習は遂に一夫多婦の實行者たらしめた、これは歷史が記して居るところで、釋迦には、耶輸陁羅、密利加闍、憍曇彌の三人の妻があつたと云ふ、佛者は盛んにこれを打ち消して居るけれども印度が一夫多婦の慣習を有して居たことが事實であるのを以て見れば、釋迦も一時は此の惡習を實行して居たものであらうと思はるゝ。

マホメット最初の妻をガテヂヤアと云つた、これは寡婦であつたのだが、マホメットが荒野から歸つて來る風姿の凡ならざるを眺めて、結婚を申し込むだのである。彼がヘエラ山中に靜坐默考し居たときに、恒に其の傍に侍つて、彼を慰藉して居たのは彼女である、彼女はマホメット敎の第一の信者であつた、天使ガブリエルがマホメットの耳邊に天神の使命を囁いた際に、それは神のさゝやきなりと云つてマホメットの信念を堅めさしたも彼女であつた、故にマホメットは彼女より以上の愛すべきものを有しなかつたのである。彼が次ぎの妻をアエシヤと云ふ、ガデヂヤアはその年マホメットに過ぎて居たが、此のアエシヤは妙齡にして容貌甚だ美、若き熱き血は彼女を濃紅色にして、恰かも花の樣であつた。そこでアエシヤ一日マホメットに言ふ樣『妾はガデヂヤアに優らずや、彼女は身寡婦なるに加へ

て、今や老いて色褪せたり、郎の妾を愛することと頗る優らずや』と、彼は頭をふつて此う云つたのである『否々然らず、天下何人も未だ我を信ぜざる時に、我を最初に信じたものは彼女である、世界に唯だ一人の友あり、そは即ち彼女である』と。

一夫多婦は久しき間、熱帶地方の總ての人種の慣習であるので、彼も敢てこれを憎まなかつたけれども、その弊に到つては到底彼が默認し得る所ではなかつた。故に彼は彼の法典中に左の如く記して居るのである。



『神は汝等に此く告げつゝあり、多くの女に對し、妻として一樣に遇することの出來ざるを恐るるものは、汝の好む他の女の、二人三人四人までは、結婚することを得。』

一夫多婦は絕對には否定せぬが、然れども四人以上の妻を有することは出來ないと云つたのである。四人以上の妻、これだにも甚だしき惡德であるけれども當時の亞剌比亞に於いて少しく有勢なるものは、孰れも八人九人十人の妻を有して居たのであるから、四人以下に限ることだにも、非常なる禁壓に價したのであつた。

『若し妻を離緣せむと欲せば、四ヶ月間考ふ可し。若し妻を離緣せぬ樣ならば、神は惠み深し、

若し離縁に決せば神はこれを知る。離縁されし女は、天水三度あるまでは待つ可し、女は之を隱す勿れ。若し仲直せば、神は正しく受けむ。』

『汝は妻を三度まで離縁し得、若し再び婚するときも、和を旨とし、若し去る時も人情親切を以てせよ。』

『若し三度去る時は、夫は其の婦が今一度他人の妻となり去るに非ざれば、婚し得ず。』

日本人の眼より見るときには、隨分婦女子を蔑視した沙汰であるが、然れども、當時の亞剌比亞の慣習より見るときには、彼あつて初めて婦女子を重ずるの風習を作成したことになつて居る。

此してマホメットは一夫一婦説を勸めた。

『汝若し多くの婦に對して公平なる能はざれば、唯だ一人の女と婚せよ、汝の得たる婢と婚せよ』

三

妻とは如何なるものぞ、彼は說いて曰く『妻と夫とは互にコンフオートして、彼等は爾に向ての衣裳也、汝は彼等に向ての衣裳なり』と。

此くして彼は『女を愛せよ、汝女より生れし故に』と云へり。

既に女を愛す、彼は如何にして之を愛せざる可からざる乎を說けり。

『妻を愛せよ、好き衣着せよ、親切に彼女と語れ、孤女を驗し能く宗敎に從ふ樣に育成せよ、而して婚姻期まで（即ち十五歲より十八歲に至る迄を亞剌比亞に於ける女の婚姻期とせり）彼等を處理し得るに至らば、彼等に多くの好きものを供給して浪費なき樣彼等を監督せよ、また或は親族の死せしとき遺物は男女共に之を受く、然れども女は男の二倍なり』

『汝死する時などは、妻に一ヶ年の生計の用意をせよ』

此くの如くして婦女を愛せねばならぬのである。

彼は徹頭徹尾男女同權論を否定して居た、其の根本を耶蘇に置いて居るところのイスラム敎が、男女同

権論を否認することは、甚だ不可思議であるが、經文には左の如く記してある。

『妻は夫が能くする如し、夫に對して能く身持ちせよ、左れど男子は婦に對して恒に上權を有す。』

『男は女より勝れり、神は實に此く作れるなり。』

と、神は實に此く作れるなりの一語を以て、これを斷定し去つた。

私通、姦淫、これは男女の大罪惡である、若もこれを許したならば人類は他の動物と毫も異ならぬ。マホメットがこれを禁壓した聲は甚だ强かつた。曰く、

『女若し姦淫、或は私通するときは、四人の證人にて證し、獄に繋ぎ、死する迄存せしむ。』

『偶像を信ずる勿れ、淨き女を姦する勿れ、孤子の產を破る勿れ、父母に不順なる勿れ。』

四人の證人にて證し、獄に繋ぎ、死する迄獄屋に存せしむと云ひ、淨き女を姦する勿れと云ふ、女子の私通、男子の姦淫、罪これより大なるは無いからである。

亞剌比亞の惡習として、その夫死すれば、親族は其の婦を得るの權利ありと爲されてあつた。故に此の塲合には、その婦が如何なる意思を有して居るにも係らず、親族は强制的に彼女と結婚をなし、而してその財產をも取るのであつた。誠に野蠻極まる惡習で、今でも南洋諸島などを探檢すれば、此かる惡習を不德とも思はずに行つて居るところがある。マホメットはこれを禁壓した。曰く、

『眞の信者よ、彼女の意思に違て、女の後繼ぎとなる勿れ、また彼女が他に婚するを妨ぐる勿れ、唯だ親切にして彼女を去らしめよ。』

と云ふのである。マホメットはまた左の如く誡めた。

『正直の女は、從順にして夫の留守中も能く注意せり、何となれば神は女を男の保護の下におきて保護せしむるを以てなり、若し女頑固にして不順のときは、打ち訓め得ざれば、然る可き書を與ふ

る勿れ、若し女從順なるときは爭ひの緒を求むる勿れ、神は高大なり、若し不和あらば相方の親族より人を選み判せよ。』

四

此の世の女は、マホメットが餘り重きを置くところに非ず、然れども、未來界の樂園の女は、彼が理想の女である。

『汝等善行を爲せ、來世は樂園に於いて、自由に果物を食ひ得、また貞節堅備の妻と樂むを得む。』

『信仰深きものは、園ありて水流れ、そこに永久暮し、淸淨の妻と樂しみ、神の愛を受く。』

イスラム敎を信じ、預言者を貴むものには、未來界に於いて淸淨の妻と樂しむを得ると云ふのである。

更にマホメットは云つた。

『極樂はマダムの追はれところとは異なり、世上には無し、第七天の上に在り（中略）水の多きことは極樂の樂しきこと、極樂には絶えず自然の賜た

る淸き水流れつゝあり、此の水、此の川の水は、或は水、或は乳、或は酒、蜜等に自在に化す、汝が欲する儘に自在に化す、皆なツゥバア樹より出づ、また生命の河なり、その他小泉あり、小流あり……以上のもの美は即ち美なりと云へども、其の美は他の美の爲めに光を奪はる、樂園の美女也此の女黑き眼あり、此の女と共に生活するは信者の最大の快樂なり、此の女は人間の如く土塊より成らず、全く女性の純なるものなり、人樂園に至るや、美少年走りて未來界の定まれる妻に報ず、二天使來り、樂園の花を與ふ、また指環を與ふ、指環は其の記號なり。』

『未來界に於ける幸福は、望みしに過ぐ、最も小なるものすら八萬の奴隷、七十二の妻、樂園の女等あり。』

『樂園は花やかなり、酒香みても頭を害せず、理を亂さず、果實、鳥肉、望みの儘なり、且つ樂園の處女、側に侍す、これ現在善行の報酬なり、

女は直に處女となる、樹には蘚なし、而して樹蔭の流より、果實稔る。」

マホメットは此くの如く、樂園の女を、殆むど理想の女として居たのである。

この外、マホメットが女性に關して説いたところは、頗る多いがソハまた他日に讓るとする。マホメットの樣なる戰爭主義者によつて見られたる女性をこの際に見るのも、穴勝ち無趣味なることではあるまい。

南島と北海の女子

東川楊舟

一　大島紬と大島の女子

大島紬は我が織物界の珍として内外に重ぜられ、美術技藝日進月歩の今日、尙ほ超然として他に敵なき所以のものは、抑も何によつて然るか、余は斯道に於ては何等の智識なきものなれども、嘗て大島に遊び實地を目擊し、且つ土人より直接耳にせしこともあれば、聊か讀者の參考までに其の概要を述んとす。

大島紬が該島の物產として世に知られたるは、近世の事なれども、此の織物の起因は年代頗る舊きものゝ如し、最初は其の材料たる眞綿の購入自由ならざりしを以て、僅に本國藩主等への貢獻用に製するに過ぎざりしも、漸次其の効用の顯はるゝと共に、他動的に斯業の繁昌を見るに至れり。されど、該島の土人は男女共に遲鈍にして且つ無慾なれば、事業の進步增大を圖る等の希望あるにあらず、所謂る蠢蠢乎として動き、蟄々乎として息ふの狀態なれば、其の事業の如きも依然として吳下の阿蒙たり。されど、其の遲鈍且つ無慾にして、自ら吳下の阿蒙に安如たるもの、是れ大島紬が古今其の色を變せず、超然として他に敵なき唯一の原因たる所以なるは、奇といふべし。

若し大島の土人をして智と慾とあらしめば、某々

地の名產の如く、原料を貶し勞力を省きて其の聲價を落すに至りしならんも、該地の土人は唯だ無智にして無慾なり、故に事業の進步を圖ることを知らざる代りに、亦「ごまかし」を爲すことも知らざるが爲めに、依然其の特色を保留して、益々大方の好評を博する所以なり。現に鹿兒島の實業家中には、大島の婦女を雇傭して斯業の擴張に努めし者あるも、收支相償ひ難きが爲めに廢止して、全く斷念するに至りしと云ふ。此の一事に徵するも、智と慾とある者の到底企て起すべき事業にあらざることを知るに足らん。

余嘗て該島に於て、婦女の斯業に從事する實況を目擊せしに、眞綿をつむぎて之を機に掛けるまでにも、二人以上の手を以て殆ど二三ケ月を要するに、尙ほ之を織るに當ては、一梭毎に篠を以て一々條目を分つの煩ありて、又二三人の手を以て五分乃至十分間を要す。故に一反の紬を織り上げるには少なくも半年以上を要すべし。加之ならず、紬用の絲を染るには泥染と木染との二種ありて、泥染とは田圃の泥に數週間つけて染むると云ひ、木染とは或る木の葉を煎て、其の汁を以て染むるを云ふなり。大島紬の黑色なるは前者に屬するものにして、黃色なるは後者に屬するものなり、兩者とも眞乎の艶を生じ、永久其の特色を變ぜざるまでには少くも半年以上を要すべしとのことなり。斯の如きは複雜なる要務を控へ、剰へ利害得失の觀念を有する內地人などの到底爲し能ふべき事業にあらず、何となれば收支到底相償ふべきものにあらざればなり。該地の婦女は資性特に優柔にして悠長なり。男女共に粗食に慣れて贅澤の何物たるを知らず、是れ某々地名產の日に其聲價を落すにも拘はらず、大島紬の獨り其の名を擅にする所以也。

二　大島の山草と千島の欵冬

山草は一名「うらしろ」と稱し、正月の七五三かざりに用ゐる草にして、春芽を生じて秋枯死するを常

態とす、然るに大島の山草は、大に其の趣を異にし、年一年増殖して嘗て枯死することなく、十數年の久しきを積むに及んで、終に一幹木となるに至る最初は青色なるも數條相扶殖して長大となり、眞黒色と變じ、大なるは三四尺圍、小なるも亦一二尺圍を下らず、前者は少なきも後者は到る所に於て之を見る。故に土人は多く之を門柱に用ゐ、内地人は看板又は額などに用ゐるものあり。思ふに該島は臺灣にも讓らざる熱帶地にして、四時嘗て霜雪を見ざるを以て、斯くは繁茂して枯死することを知らざるならん。薩摩芋の如きも同じく自然の生にして、四時絶ゆることなきなり。

是れと相對すべき奇觀は、北千島の欵冬なり、秋田の欵冬は世人の以て大なりとする所なるが、該島の欵冬に比すれば、猶ほ其の足元にも及ばざるべし郡司大尉等の移住せる占守島附近の二三の島に至れば、數丁にわたれる欵冬林珍らしからず、中にも或る一島の如きは、谷間より河岸に沿ふて方一里餘の欵冬林ありて、一面蓁々として宛も老竹を以て蔽ふはれたる千里の長林に髣髴たるものあり。其の長けは孰れも一丈四五尺以上を有し、其の莖はビール瓶よりも大に、其の葉は蛇の目の傘を擴げたるよりも大なり。而して其の味は頗る良好にして、該島に出獵する者は、皆之を漬物又は乾物となして航海中の副食物とせり。是れ亦北千島奇觀中の最なるもの也。

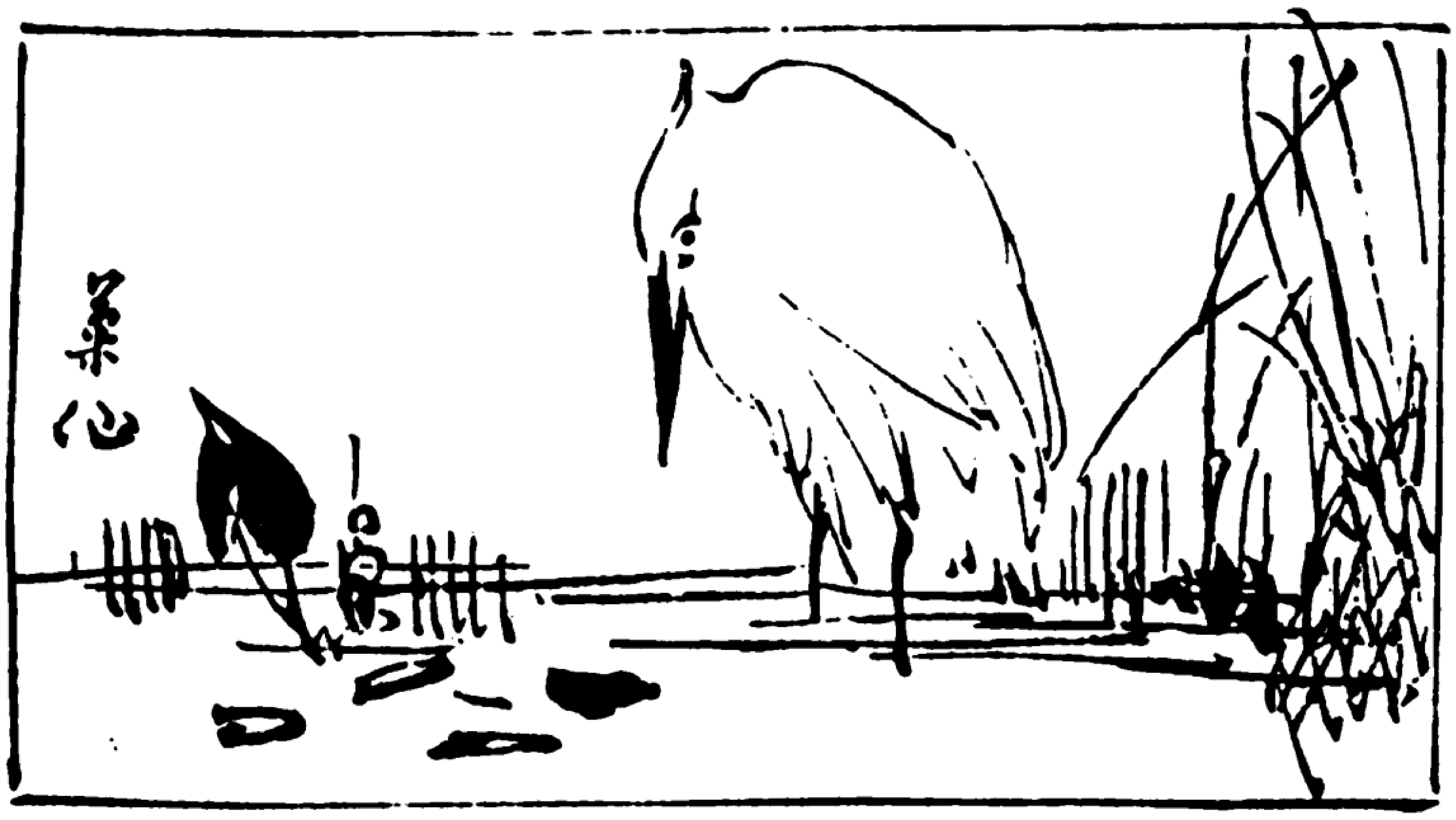
三　アイヌの夫婦

「アイヌ」に南方「アイヌ」と北方「アイヌ」とありて、北方「アイヌ」は醜なるも、南方「アイヌ」特に其の女子の美にして艶なるは、一たび該地に遊びて實見したる人の齊しく知る所なり。

近來は眼に一丁字なき内地出稼人の爲めに蹂躪せられて、殆ど古色の徴すべきものなきも、舊時に於ける女子の品行、及び其の夫婦間の情好は頗る歎稱すべきものありき。尤も自然的の成長にして、何等

指導啓發するものなければ、一夫多妻の習慣は自ら免かれざりしと雖も、內地人の或る者の如く一夫一婦の名の下に於て妾を蓄へ、一家の風波絶え間なき殺風景あるに反し、彼等の妻妾の間に在ては、些の嫉妬反目の痕なく、よく相和して其の所天を幇助するは特筆するに足るなり。

尤も平素は妻と妾とは家を異にし、妻は夫と同居し妾は別居して、各自に其の生業を營むと雖も。たま〳〵途中又は他家等にて相逢ふときは、嬉々然として握手の禮を施し、宛も同胞の如き觀あり。一朝夫家有事のときは、妻は妾を同居せしめ事每に相謀りて其の難に當り、排て功を爭ひ愛を競ふ等のことなし。是等は自然性に基くものあらんかなれど、亦習慣に因るものなるべし。古來該地の婦女は、貞節を守り所天を幇助するを以て、唯



一の名譽となせり、從て夫婦の情好は、頗る濃厚にして漆膠啻だならざるものあり。

就中未婚の男女は、十二三歲以後より同室は勿論、猥りに言葉を交ゆることだに自由なるざりしかば、男女の間は頗る儼格なりしと雖も、明治八九年頃より內地漁夫等の出稼ぎ多きを加ふるに從つて、斯の美風は何時しか破られて、反動的に一種の狂風全島を披靡するに至りしは、返す〳〵も慨歎に堪へず。

アイヌ婚姻の年齡は、男子は概して二十三四、女子は十八九歲にして、血統を有する親族間の者と婚姻するの風あり。蓋し血統の斷絶を豫防する趣旨に基くならんと云ふ。而して其の儀式は婚姻の約調ふるや、先づ夫家より結納として物品を贈り、婦家亦之に對する返贈をなし、黃道吉日を

撰んで華燭の宴を擧げるを例とす。而して其の當日は新夫婦、媒妁人及び双方の兩親は勿論、親戚一同の者亦盛装して其の席に列す。而して列席者は祝儀として錫及び他の寶物を新夫婦に贈るを以て禮とす、尤も近年は總ての儀式方法等、國風に染み、內地人と大差なきに至れり。

米國だより

サンフランシスコにて
うまのかみ

クロニクル新聞社と日米新聞社との電話での問答

予が日米新聞社の編輯局に居ました時、恰もちりんちりんと電話が何處からか懸つて來ましたので、編輯員は應對する爲めに電話口に立ちました。先方の詞に申しますには

『ハロー(もしもし)ヂス、イズ、ザ、クロニクル(此方はクロニクル社です)イズ、ゼール、ザ、ジヤプニース、アメリカン(そちらは日米新聞社ですか)』日米社員が答へます『イエス、スル(然り、貴君)』以下は原語を改めて日本語だけで書きます。

クロニクル『では一寸御伺申上たいのですが……今日横濱から當地へ着きました汽船で貴國(日本)の貴女が御出に成りましたが御存ですか』

日米『左樣ですか、先刻私の社の人も船場へ參りましたが貴女の渡米と云ふ事はまだ報告して參りませぬが……』

クロニクル『それは不思議ですな、一人や二人ではないですよ、二三十人の大勢ですよ、それが御わかりにならないとは……』

日米『一寸お待ちなさい、他の社員に問ひて見ますから』

折しもあたりには馬の頭一人で他に誰も居ませんでした、そこで再び電話の口に寄つて編輯員

日米『若し〳〵、只今其貴女の渡來の事に就て知つて居る社員が不在ですが』

クロニクル『それでは止むを得ません、併しね、貴國の大勢の貴女がたの御來訪で、マツヤー孃が貴國に歡迎された事も聞いて居ますから私共も早速歡迎會でも開きまして航中長々の御退屈を慰め申たいと思つて居ますのです、で、其身分職掌及渡來の目的杯も御伺ひ申たいと思つて居ますのです』

日米『其貴女たちの名前が貴社で御調べ濟みになりましたか、若し其名前でも分りますれば私も本國では少々貴女間に知り合ひも御座いますから其身分など大抵は御答へ申す事が出來ませうと思ひます、下田さんとは仰しやいませぬか、津田さんとは仰しやいませぬか』

クロニクル『そんな御名前は御一人も有りませぬやうです、ミス、ワイ、タカハシ、ミス、ケー、ヨシノ。ミス、エフ、サヽキ……などですよ』

日米『どうも分りませんな、』

クロニクル『在留の貴國婦人は皆米國婦人同樣の服裝をして居ますが今回見えました貴女たちはお揃ひのジヤパニス、キモノを着て居ますので我等米人の目には甚だ珍らしう御座います上のコートは黑い縮緬に三つ白い星を入れたのです、下のスカーツは蝦茶色の褶襞の澤山あるものです』

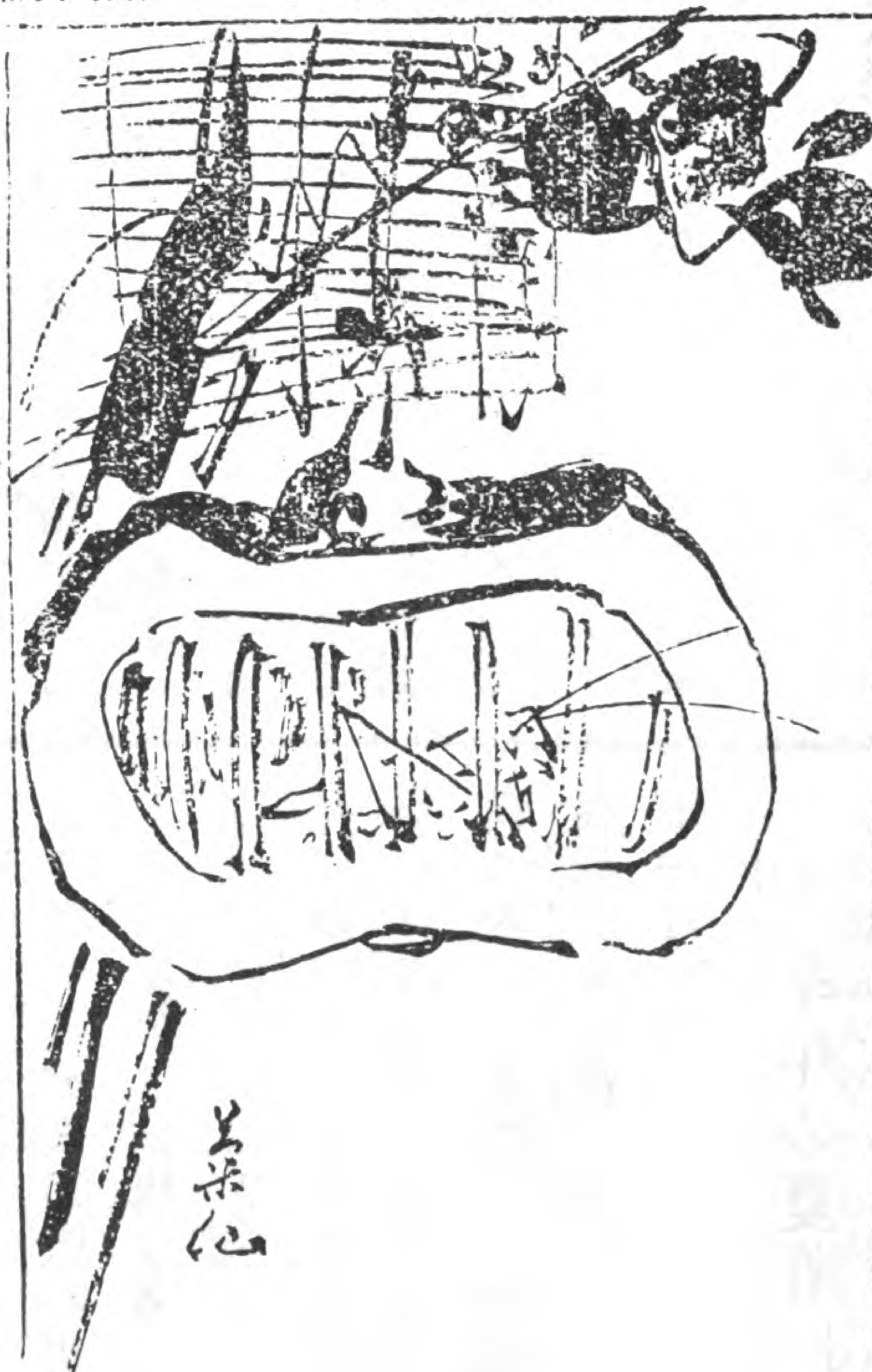
日米『はゝあ、黑縮緬の三紋付にゑび茶袴の出立ちですな、日本の女學生は只今大抵其通りの服裝をして居ます、』

クロニクル『中々立派な者ですな、そして第一服裝のみならず顏かたちが奇麗で思はず人をして尊敬の念を起させます、東京に宗教家の大會の時に或る宗教家が演說して、ロシヤ人は白い皮を冠つた黃人で日本人は黃い皮かぶつた白人だと云つたと電報で知らせて來ましたが、今回の貴女たちは全く白い皮かぶつた日本人で巴里美人の粹を拔いた樣な感じが致しますよ、毎度布哇から轉じて來まする婦人は皆勞働者の妻女ばかりと見えまして栗色な顏をして居ますが今回の貴女たちは確かに身分が違ひます……君、あの貴女たちは明治館と

云ふ日本人の旅館に宿つたさうですが其明治館に問ひ合してくださるまいか』

日米『左樣ですか、畏りました、左樣致しませう』

編輯員はクロニクル社との話を止めて明治館へ電話で問ひ合せやうとして居ました所へ船塲受持の記者が丁度よく明治館で一切の事情を當人等(貴女たち)より聞き取つて手帳に控へて持つて來た所でありました予はクロニクル社との電話問答の次第を編輯員から聞きまして驚いて居ました所へ探訪記者が明治館から聞いて來ました所の實際を聞きまして二度びつくり致しました讀者諸孃もさぞ聞いてお呆れになるで御座いませう其實際は此う云ふわけです、探訪記者の詞



『今回着米しました女子は主に新橋柳橋其他は下谷牛込赤坂の藝妓どもの一行で、つや子筆助、〆〆吉等を筆頭として惣勢三十三人です彼等はセントルイスへ日本の手踊りを出品する爲めに農商務外務兩省の許可を得て來たので米人に純粋の日本の美趣を味はせる爲めに衣服なども態々洋服を着ずに蝦茶袴の女學生風を粧うて居るのです』

予は『おや、おや、情けないこと』と叫んだ。

記者『どう致しまして、彼等は中々の大氣焔を吐いて居ます、彼等の藝當は都踊りと申しまして高尚優美なるダンシングです又謡曲師匠中村霞楓と云ふ人も一行中に交つて居まして古雅なる能樂も致

します又岡田某女は劍舞の達人で戰勝國女子の腕前を見せるとの大抱負です』

右聞取つて編輯員はクロニクル社へ電話をかけて何か通知してやりましたが、此時予は別室へ離れましてそれを聞きませんでした、併し眞實の事情を知らせてやりましたならば、早速クロニクルは其紙上にゲイシヤ、ガール攻擊論を出すか攻擊まで行かずとも嘲弄の記事位は揭げるので有りましたらう、然るに編輯員の如才なき通知と、そして此際米國人一般に日本に同情を寄せて居まする最中ですから其ためでせう、一言半句も翌日の新聞にゲイシヤ、ガールの事を記載して有りませんでした、これは五月の末日の話です。

日本女子が大學に入る

と云ふ標題でコールと云ふ英字新聞が書きました、それは日本女子が米國の大學へ入つたと云ふのでは御座いません、日本女子の程度が、其入つて學ぶべき大學を要する迄に達したと云ふ意味で御座いまして、日本女子大學校敎頭麻生正藏氏の來米を報道したので御座いました、コール何は曰く麻生氏は米國の女子敎育の視察を終へて英國へも渡つて歸朝するさうだが氏が米國風の男女共學に就て大に興味を感じて居るのは結構な事だ敎育は是非亞米利加風にしなければならぬと云ひました。

是に就て予は日米新聞紙上で論評致しまして男女共學の日本に於ては不得策である事を述べ併せて麻生氏に對して米國から佛國へ渡つた方が男女共學の得失研究に利益が多いだらうと勸告しました。（五月二十一日）

今年の夏着にはどんな柄に

しやうかと云ふのが米國交際社會に翺翔する貴孃たち今日此頃の心の中です紐育よりの報知によれば此夏着は全く日本風の模樣と日本風の色合ひを十人が十人百人が百人申合はしたやうに注文するのは日本

の戰勝の影響だ恐ろしい勢ひだと申して來ました。

(ブルチン新聞抄譯)

全く日本服を日本商人から買つて着る貴孃も有ります(勿論寢室内で)其貴孃たちの撰む所を見ますると普通の日本服ではありませぬ大抵彼の裲襠でその或者は芝居で女形の着るやうな者です。(六月四日)

『米國婦人だから

酒を飲むのだ』と云ふ一句を聞いて不審に思ひます方が多いでせう桑港スタクトン街の日本人旅館帝國館と云ふ所に珍らしく止宿して居る米國婦人が有ます此婦人日本人に就て日本語を學ぶは殊勝の事と感じられるが去るにても酒をのむのはどうも怪いと或人が申しましたら之を辯護致しまする米國通の詞に『米國婦人だから酒をのむのだ何も怪む譯もない』と申しました怪みました人は尚は怪みまして腑に落ちない顔付きでした之に就ての詳細の説明は略する方が花です。

今日は予が米國の地を踏んでから滿一ヶ年に當る日であります。(六月十七日)



小說

影膳

三宅青軒

（上）

某師團に其人ありと知られた大佐香島秋芳は、實に幸福な人である、學問もあり手腕もあり容易ならぬ人傑なので、年齢はまだ四十に至らぬ三十七歳と言ふに早くも大佐に進むで、此度の日露戰爭第○軍に重要なる人として、三月に出陣し、五月の九連城攻撃に大功を樹てた。

幸福は夫れのみで無い、其家庭の甘く美しく、清いことは、平生から同僚又は朋友等に羨まれて居る、妻の靜子は二十六歳の美人で、海軍中將大高貞義の娘である、海陸の違ひはあるが、同じ軍人仲間のことゝて互に交際の親しいところから、いつしか相思の中となつて、赤繩の結ばつたのは今より六年の前だ。

品行方正でしかも忠義の心金鐵の如き大佐、温良貞淑で、しかも慈愛の心春の如き靜子、加ふるに兩人の間に美くしい戀が燃て居てそして今年四歳になる初ちやん即ち初子といふ可愛らしい蕾が此中に笑つて居る、大佐の家は市ケ谷の近邊だが、歸つて來る大佐の馬の蹄の音がコポ〳〵と聞えると、美くしい靜子と愛らしい初ちやんとが直ぐ玄關へ迎へに出る、門內、常磐の松陰から、大佐の八字髯威あつて猛からぬ顏があら

はれると、『父ちやま、お歸り遊ばちえ』と、先づ初ちやんの鶯『はゝはゝ、初ちやん、怜悧だねえ』と笑ひながら上る。脱ぐ軍帽を持つのは初ちやんの役で、舌の廻らぬ話しに、ホ、ホ、ハ、ハ、丸で春風に吹れるやうな心地で居間へ通るのが毎日の生活。

書生の時田も好い少年なり、女中のお光も正直者なり、小さき天國は此香島家と言つても過當ではあるまい。

ところで、昨年からの露國との葛藤、樽俎の間に此折衝は難づかしいと見て取た香島大佐は、心に夫れと決するところありて、師團の勤務に忙がはしく、晝夜を分たぬ勉强に、あはれ此淸く美くしい家庭の甘味を樂しむ隙も無つたが、二月になつて愈々開戰、動員令は下る、軍務は急に繁くなる、國家の大事に私宅の事は全く忘れて居た。

偖て三月の初旬に出陣することになつた、其前日に、いつもと違ひ大佐は儼然として『靜子、お前も大高中將の娘、斯く言ふ香島大佐の妻だ、平生から覺悟はあるであらうが、今日限りわたしを世に無いものと思ふて呉れ、あの二十七八年の日淸戰爭、これもなか／＼豪いことではあつたが、併し此度の露國との戰爭とは段が違ふ、世界に類の無い日本魂、我軍の負ける心配は決して無い、特に軍職に居るわたしの信ずるところでは、兵士の訓練、器械の精鋭、之れを露國に比べて、確かに我國は優つて居る、必勝は十二分と受合ふて好いけれど、夫れは我軍全體から言ふことで、わたし一身にして見ると、彈丸の雨の中へ飛込むで働くことだ、生て還る望みは先づ無いと思はねばならぬ、だから其積りで、初子の養育を賴む。初ちやん、お前も大人しくしてね、お徒をして母ちやんを困らすで無いよ、ハ、ハ、、怜悧だねえ』と初ちやんのお芥子を撫て、ニコ／＼笑ひながら膝の上へ上り來る顏を眺めつゝ、さすがの大佐も暗涙を含むだ。

母の萎れし顏と大佐の元氣の無い顏とを等分に見て、溢面作つて泣出しさうにする初ちやんを確かり抱て『初ちやん、何ですねえ、變な顏して、ホヽホヽ』と靜子は苦しき作り笑ひ『光や、お馬を見せて遣てお呉れ、澤山お馬が通るでせう』とすかして、女中に負はせて出して、『仰せまでも御座んせぬ父が第○艦隊の司令官で出陣致しました時に、よく〳〵言聞されまして、十分覺悟は致して居ります、お心置なく勇むで御出陣遊ばしませ、初子はあの通り健康で何の病もなく生長して參りますから、決して御心配遊ばさ無いように、ハイ、仰せの通り鐵砲丸の中へお越しになる御身、どんな事が起るやら分つたものでは御座んせぬけれど、併し御病氣をお煩ひ遊ばさぬやう、是れのみはわたくしの命を賭けて神樣へ祈ります』と言切て、ほろ〳〵と涙をこぼした。

『ウム、さすがはお前だ、其健氣な覺悟を聞てわたしも安心した、ナニ、露兵を粉な微塵にして、天晴日本魂を見せて遣る、お父さんの海軍の方は素晴らしい働をして世界中を驚かして居るに、陸軍が負けてなるものか、ハヽヽ、ヽヽヽ、愉快々々、十年磨し來つた腕試しだ、面白い報知を聞せるぞ』と、香島大佐はいつもの元氣に返つて、美髯を捻つて呲笑一番。

（中）

其あくる夜の九時といふと、大佐は一部の兵を率ゐて出發することになつた、『見送るなどゝ、そんな事はするな』と止めたけれど、靜子も初ちやんも書生の時田も女中のお光も密かに新橋まで送つて往ッた。

敵愾心に充滿た我國民の意氣は實にすさまじいもので、麻布から赤阪芝を經て新橋へ至る道々の光景と言ッたら非常なものだ。

『何町有志者』、『何々組合』『何々團體』などゝ、思ひ〳〵に新しくこしらへた、高張提灯又は旗幟を押立て

此處の町、彼處の辻、何處から來るともなく次第々々に見送る人數が殖えて來る。最も、女も老人も小兒も、貴賤貧富・何と云ふ差別は無い。ぞろ〳〵と附て步行て、馴染の兵士と話しながら行くものもある、若い娘と兵士と語りつゝ行くのは、あはれ戀の夢を繰返すのではあるまいか、老爺のクド〳〵と物語るのは、夜の鶴の子ゆゑに迷ふ情けではあるまいか。『萬歲、々々』と、道々の兩側から家々の門から或は內から二階から、男女聲を合せて呼ぶ響の鯨波の中を、肅々として進行する軍隊は、實に壯烈の極みである。

新橋近くなると見送り人は一層其數を增して來る、イヤ增すばかりでない、處々に提灯や旗を押し立て屯して居て、『見送り陣』とでも言ふべきものが、五陣も七陣も待構へて居て、一齊に『萬歲』を叫ぶ聲は、實に天地を震はすばかりでいかにもすさまじい。

此物すさまじい光景と『萬歲』の鯨波に氣付られて、俄かに銀座通から馳けて來る『見送り陣』の二隊三隊もあつて、さしもに廣い新橋停車場前の空地も、殆んど立錐の餘地無きまでに人を以て埋められる。

偖て軍隊出發の爲めに新たに設けられた東方のプラットホームへ進行する香島大佐の一隊は、此多くの見送り陣に、取卷れ、『萬歲』の叫びの中に醉はされつゝ何思ふ隙も無く丸で夢中で列車へ乘込せられた、イヤ見送り人に押込れたと言つても好い。

此送らるゝ軍人、送る男女、其人物を仔細に觀察したならば、親子、夫婦、兄弟、ラブアー、親戚、朋友など、種々の品に分れて、其惜別の淚も自ら多少のあるは知れて居るが、併しいづれ哀しい別れにあらざるは無きが中に、誰を見ても一滴の淚を灑ぐものは無い、耳に萬歲の聲、眼に旗幟の色と提灯の光、此『聲色光』の無形のものに勇められて何の事は無い、心が興奮の極度に昇つて一種の狂態を呈して居る

のだ。誠に結構な狂者と言はねばならぬ。密かに見送りに來た香島大佐の家族も、此狂者の仲間になつて自分で自分が分らず人波に押されつゝ今しも列車近く寄つて來た。

『父さまは何處に居らつしやるだらうね』と、靜子はさすがにおろ〳〵聲、女中のお光に負はれて居る初ちやんを見返りつゝ、其處をきよろきよろ眺めて居ると、『萬歳――』と場内さながら割るゝ計りの叫び聲起つて、提燈の一隊が雪崩の如く押し寄せて來た、蹈倒されては大變とはつと逃げ退くとたんに、『アラ父ちやま』と、初ちやんが可愛らしい聲を揚げる。

『エ、何處に』、『孃さま、何處に居らつしやるんですよ』と負ふた子に敎へらるゝ靜子とお光は夢中であ る彼處だよ』と小さい手を出して指し示すに、『さうだ、彼處だ、孃さんは豪い、奥さん、あの提灯の陰に居らつしやいます』と、書生の時田が見つけ出した。

『ハア、さう〳〵、光や、今御同僚とお話しなすつて居らつしやるよ』と、靜子も漸くに夫の大佐を認めたが、偕て見送るなと止められて居る身の、會ふて別れを告げるとは出來難く、只外ながらの暇乞の物足らぬ心地本意なくて、責めて此子でも見つけて呉れ、よしや言葉は交せずとも、夫れと眼顔で別れを告げんや、もう發車の時刻であらう、エ、自烈たい、此方ら向てと、靜子はやきもき氣も半亂でうろ〳〵する。

愈々發車の時刻は來た、軍隊の總ては乘車した、送る人、送らるゝ人、互に別を告げて何やら話して居ることの羨ましくて、いかに強いが軍人とて、夫の心は强過ぎると、靜子は怨めしさうに大佐の後姿を眺めて居ると、大佐は悠々と列車に乘た、窓から外を見ては居るが、平生に變らぬ落つきすました容貌態度一心國家の事のみあつて、家族の事などは毫も其念頭に置かぬらしい。まして蔭ながらでも見送りに來て

居ようとは、全く思ひ設けぬらしい。

列車はそろ〳〵と進行し出す、『萬歳――』と百雷の落るが如き一聲が響くと、『父ちやま、萬歳――』と初ちやんが美くしい聲を揚げた。丁度其時は大佐の列車が眞向ふへ進行して來た刹那で、其美くしい聲の『萬歳――』は百雷の聲の『萬歳――』の絶間であつた。

初ちやんの『萬聲――』は、確かに大佐の耳へ感じたらしい。佶と此方らを眺めると、群集を押分けて家族：いゝがずらりと並んで居る。初ちやんは大佐を見て莞爾笑つて『父ちやま、萬歳――』と再び言つた。大佐は點頭て莞爾笑つたが、妻の靜子が千萬無量の思を込めてぢつと眺める眼を見ると、其まゝくるり横へ向て仕舞た。

又々起る『萬歳』の聲と、大浪を打つ見送り人のゴタ〳〵の中に、汽車は勇ましく駈け出して往つた。殘る煙は見送り人の心を曇らす雲であらう。

(下)

萬死を期して出陣した夫の事を思ふと、雄々しけれどもさすがは女の、靜子もつく〴〵哀しくはなるが、素より軍人の娘軍人の妻、豫ての覺悟は胸に在る、夫れは、大高中將の娘香島大佐の妻程あると人にも言はれるやうにと、外へ出ては某婦人會の綳帶卷、兵士の家族の慰問などに身を勞し、内に在りては初子の養育、家の始末に心を使ひ、夫の家に在る時よりも殊更掃除を綺麗にして、床には夫の寫眞を懸け、朝晝夕の影膳に、好きなお菜を選むで供へ、初子と共に、朝は『お早う御座ります』、夜は『お休み遊ばせ』と、寫眞に辭儀する行ひには、書生も女中も感心して居る。

何の頑是も無い初ちやん、父の留主なのは珍らしく無いことだから、一向平氣で遊んで居る。大佐が花好

きで、其居間には年中挿花の絶え無つたことを知て居るから、抑も梅から初まつて、椿だの櫻だの山吹だの何だの箇だのと、色々の花を庭で採て來て『父ちやま、花々、綺麗でせう』と言ひつゝ寫眞に供へる。

書生や女中につれられて外へ遊びに出ると、どんな花でもお土産として是非採て歸らねば承知せぬ、嚮へ草花でも甘く見つからない時には、わざ〳〵花屋へ往つて買て歸らねばならぬ。

『初がお花を持て歸るのをお寫眞の父ちやまが待て居らッしやるのよ』と駄々を捏て、





どうしても花を持せ無くては承知しないに困らされることが屢々ある。

來る人も來る人も戰爭の話し新聞も戰爭、號外素より戰爭、日本いつも大勝利といふに、初ちやんは『戰爭』といふ言葉を覺えて、何だか合點の往かぬ風で、『母ちやま、戰爭て何』と豪い問を發した、『軍の事』『軍て何』、『鐵砲を擊合ふ事』と辛くも逃げたが、『父ちやま、戰爭にいらしたの、鐵砲擊つの、誰を擊つの』と問詰められて、『露西亞と云ふ國の兵隊を擊つの』と　答へつゝ、靜子は此質問に餘程困らされた。

困らされたは是れのみで無い、三度の御飯の初穗を影膳として大佐の寫眞へ供へるのを不思議がつて、『お寫眞の父ちやま、御飯を上らないよ、何故上げるの』と言ふ問には、何と答へて好いか、靜子は實に閉口して、色々と言ッた末、『お留守の時は影膳と言ッて、上らないでも上げるものなの』と斷じて仕舞た。

『影膳、影膳て云ふの』と幾度か繰返して、初ちやんは『影膳』と言ふことをも覺えた。

五月に入て陸軍の大勝利、特に香島大佐が大功を樹てたといふ報知に、親類又は同僚の家族等が祝ひに來て、留守ながらも香島家は大賑ひである、靜子も衣服を更める、初ちやんも美くしい着物を着る、大佐の寫眞へは、特に丁寧なる御馳走澤山の影膳が供へられる。

平生になく家は賑やかで、好きな大高のお祖母さまも來て居る、そして御馳走があつて、自分は美くしい着物を着て居るから、初ちやん今日は大元氣だ、櫻散らしの品の好い友禪縮緬の振袖を着て、黑い絹絲のやうなお芥子の髮を房々と風に搖せて、圓顏のほんのり櫻色の美くしい頰に笑ひの春の波を寄せ、光りのある美くしい双瞼眼をくる〳〵させ、小さく可愛い口で、『父ちやま、戰爭にいらしたの、露西亞と云ふ國の兵隊を擊たの』と、頻りに吹聽しつゝ、大きなカステラの一片を大高のお祖母さんに貰つて、夫れを翫物の庖丁で切て、翫物のお皿へ丁寧に盛て、翫物のお膳へ幾個もならべて、そして恭しく大佐の寫眞へ供

へた。

靜子や大高のお祖母さんや其他の人々が夫れを見て、『初ちやん、どうしたの、夫れは何なの』と問ふと、

『ハイ、これはね、初の影膳で御座いまちゆ』

（完）

君が影

從軍記者　園田紅村

一

朝鮮國咸鏡道に在る露西亞兵は、次第に南下して、元山を襲ふとの報知があつたので、橘中尉は、部下の兵十騎を率ゐて、文川方面へ偵察に赴いた。

いづれ劣らぬ忠勇の武夫、佩劍鏘々、威風堂々、鬼をひしがんず勢にて、駒の足搔を早めつゝ、鬱蒼たる綠の林を縫ひて、北へ北へと進んだ、道の程凡そ十里ばかりも行けば、此處は茫漠たる廣野原、見渡す限り、青芒、眞茅など、時を得顏に生ひ繁つて居る。

前面！　四千米突の前面に、黃塵を漲せつゝ、馳せ來るものは、正しく敵兵！　然も名にし負ふ敵の哥薩克兵、其勢凡三十騎ばかり、我兵の少數なるを侮つてか、駒の手綱を搔い繰つて、此方を目がけて、猛地に駈けて來るのである。

愉快！・萬歲！　我兵は之を眺めて、勇氣日頃に百倍した。次第に近寄りて、今は相互の距離、僅か一千米突、先づ切つて放つたは、露兵の小銃、ピユー、シユー、彈丸は、我兵の肌を掠めて、飛び交ふので

ある。

「エヘヽ笑はせやがらー　露助の玉なんかに中てられて、堪るもんか」

とは、彼等が相顧みて放つた冷笑の語であつた、彈丸雨中を勇敢に進みつゝ、凡そ五百米突に接近したと思ふ途端、

「討て！」

と一聲高く叫んだのは、中尉の號令！

嗚呼何たる見事な手際だらう、見る〳〵敵兵の十騎がほどは、射て落した。多勢を恃める露西亞兵も此勢に辟易して、浮足立つたのである、これを見て取つたる橘中尉

「突貫！」

勇猛なる我兵は、轡を并べて、眞一文字、群る敵中へ割つて入り、右往左往に薙ぎ立てた。

「露助！　日本刀の斬れ味がわかつたか」

七八騎は、時を移さず、討ち取つたのである。

殘る敵兵は、敵はじと思つたのか、尻に帆掛けて、一目散！

橘中尉は、鐙踏ん張り、大音聲！

「逃るとは、卑怯な奴ぢや、それ討ち取れ」

露兵は、戰友の屍骸をも遺棄して、秋の木の葉の如に逃げ失せた。息をも繼がせず、敵を追ひ行くこと五六里、不圖さし掛つたのは、嶮しき山路！　しかも、右手は、劍を併べたらんが如き斷巖絕壁、左手は、幾千仞の深谷幽谿。

窮鼠の如くに逐ひつめられた敵兵の運命は、實に瞬刻に迫つたのである。
「それ逃すな、遣つ付けろ」
ところが大變！　何だらう？
「逆襲！」　左樣　敵はまさしく、逆襲して來たのである。彼が新手の五十騎を加へて。
「生意氣なッ」
中尉は、大刀を眞甲に振り翳して、眞先に突進した。此一刹那、敵彈飛び來つて、見事乘馬の胸部を射貫いた、馬は一聲高く悲鳴を上げて、躍り上つたが、あはれや、主諸共に、左手の谷間へ、眞逆樣に落ちこんだのである。

二

「君！　確つかりし賜へ、オーイ、キ、君！」
と呼ぶのは、四十恰好の身には黃褐色の獵服を着けたる一人の紳士、
紳士は、今日早朝より山又山に分け入りつゝ、二頭の獵犬を伴ひて、野獸を驅りながら、淸澄たる谿流、苔むす岩石を洗ふ所へ來掛つたのに、一人の靑年士官、半身を水に浸して、うち斃れて居るのを介抱しつゝあるのである。
「キ、君、こ、これ、確つかりし玉へ」
と再び呼びながら、水を含みて、其口へと注いだ。天運未だ盡きないのか、士官は次第に息を吹き歸して來たのである。だん〱に五體も動き始めた、
「これ、もう大丈夫だ、オイ君！」

士官は實に蘇生した、口も動いて、眼も開いた、されど、精神錯亂して恰ほ狂人の體。

「ア、アツ、苦しい、コン畜生！　露助、」

と怒鳴つて居たが、急に生氣付いて、紳士の胸倉を執らへ

「ウヌ憎つくき、露助！　神州男子の腕前を見ろ！」

と拳固を堅めて、打ち掛つて來た。

「君、早り玉ふな、僕も神州男子ぢや、日本人ぢや、これ」

青年士官は、ヂッと眼を据へて紳士の顏を瞬めた、

「オ、あなたは、日本人！　ど、どうして、此處に！」

紳士は喜んだ

「ヤ、嬉しい、全く生氣付きましたか、それにしてもなぜ、あなたは、此處へ落ち込んだのです」

と紳士はせき込んで問ふた。

士官は、眉間の打撲傷を撫でながら、我は元山守備隊の中尉橘好春と云ふものなること、今日敵を打ち敗り長驅して此上の山道に及んだ時、敵騎の逆襲に遭ひ敵彈に馬を射られて、此處へ落ち込んだことなど、詳しく物語つた。

紳士は、奇遇を喜んで、吾は元と熊本縣の士族にして中山晋と云ふものであるが、十年以前、此下流の村落へ家族を提げて移住し、大に牧畜の業を營みつゝ、數萬の身代を作り上げしことなどを物語り、恰ほ士官に向つて

「お傷も、中々重い樣ですから、私が脊負つてお連れ申しますから、兎も角も、僕の家まで、お出でな

さい、暫く御養生なさつたら、其内に元氣も回復しませうから」
といと心切に世話して、我が家へ連れ歸つた。

三

橘中尉は、數十丈の絶壁を墜落したのであるから、其傷は中々の重傷である、中尉が此家に逗留してから丁度三日目の晝頃であつた、この家の細君藤子は、中尉の脱ぎ置いたシャツが、紅の血潮に染つて居るのを見て、洗濯をしやうと思つて、不圖其シャツを取り上げた、胸の衣嚢に何物か入れてある、取出して見れば、紫縮緬の一包、其紋はまさしく我が親家岩井家の定紋劍かたばみ！

藤子は、ハッと胸を轟かして、小首を傾けた、

「ハテな、不思議なことも、あればあるものよ、このふくさは、我が二十歳の其折りに、母なる人より戴き、幾久しう、肌身を離さゞりしが、十年以前、良人に伴れて、此韓國にまゐる時、わが妹へ取らしたものに相違なし」

藤子は、不審の念に驅られつゝ、何とはなしに其包みを開き見た、

嗚呼不思議！　こは抑も如何にこは如何に、中より顯はれ出でしは、二八の春か二九から ぬ世にも稀な美人の寫眞！

眼元の涼しくして、鼻脈の通りたる、口の引締りて、襟元の美しきたとへがたなきに、何か情を含みし風情の愛らしきに、藤子は女ながらも、暫し見惚て居たのであるが、よく〳〵見れば、嗚呼何事ぞや、取りも直さず、現在血を分けた、我が妹、花子の忘れ形見のこの寫眞！

藤子は思はす獨語した、

「まあ、花ちやん、好く映つたことね」

されど、思ひ掛けなき中尉の、これを所有せるは、合點ゆかずと、眉をひそめて、其裏を見れば、

「東京九段阪上長谷川寫眞店」

とあり、をかしき女の手にて

「お懷しき好春樣へ、二月十日、花子より」

尙ほ其後に男の筆蹟、

「花子の寫眞に題す」

とありて、一首の和歌、

「取りかはす、心の深く映ればや、物云ふばかり、影の見ゆらん、好春　記す」

と書いてある、

藤子は淚ぐんで、好春の室へと駆け込んだ。

四

「橘さん！」

と慌しく呼んだのは、藤子であつた、何か物案じつゝ、肱を枕にして、床に就いて居た橘中尉は、吃驚して振向いた。

「橘さん、なぜあなたはこんな物をお持ちですか」

と花子の寫眞を其前に差し出した。一目見て中尉は顏を赧めて

「エヽ」

と云つた儘、首を垂れた、
「橘さん、隱さず、おつしやつて下さい、妾も聽くことがありますから」
中尉は無言である。
「橘さん、可いぢやありませんか聽して下すつても」
と云ふ聲もうるんで居るのである、中尉はやつと顏を上げた。
「何ねに、唯、立つ時に、もらつたのです」
と中尉は耻し相に云つた。
「イヽエ、何か仔細があるのでせう、橘さん實は、これは妾の妹なんですよ」
中尉は驚いた、
「エ、それはあの、お妹！」
「エー、妾の實際の妹なんで厶います」
「ア、さうですか、それはどうも！」
と中尉は奇異の感に打たれて居るのである、
「それじや、お話し致しますが、實はこれは、僕の云ひなづけの妻なんです」
と中尉の話を聽いて、今度は藤子が驚くのである。
「呀！　さうですか」
「エ、實は僕は、岩井さんに書生に這入つて居て、永く御厄介に預つて居ましたが、とう〳〵士官學校へ這入つて、軍人になりました、處が今度愈々出征する樣になりましたが、岩井さんの奧さんが、是非

花は、あなたに面倒を見て戴きたいから、とおつしやつたのです、けれども僕はまだ年も若いし、それに戰場では、何時死ないとも限りませんから、これだけは御互のために、御免を蒙りましようと申し上げたのです」

藤子は、熱心聽いて居るのである。

「處が奥さんは、中々御承知なさらないで、生命は時の運だから仕方がない、年來花子は、是非あなたに貰つて戴きたいと思つて居ましたし、それに又良人も花も、軍人が大好きだ、男子と生れたからは、軍人として御國に盡すのが、一等尊いと申して居ますから、後生だから、嫌でもあらうが、こればかり是非うんと云つて下さい、と無理におつしやるのです」

「あ、そうですか」

と藤子は中尉の顔を打ちまもつて居るのである、

「昔の武士は、妻子を殺したり、又は離縁をしたりして、戰場に行つたものもあるさうですから、出征に臨んで、新しく妻帶の事などを取りきめて置いては、實戰の場合に、大刀先の鈍ぶる樣なことがありはしまいかと、思ひましたけれど、岩井樣御夫婦も餘程なお年でもあるし、その上一方ならぬ御恩に預つて居るのですから、お心に反いても、罪深いことゝ思ひまして、實は承諾した次第であります」

藤子は、中尉の義氣に深く感動した樣子であつたが、急に何か思ひ出したかのやうに、悲哀の念に打たれて、熱き涙をポロ／＼と其膝の上に滴した。

五

すゝりなきをしながら、藤子は、しばし默然として居たが、後ち顔を上げて、いと力なげに、

「花子は　ねー」
と云つたが、又涙を流して居る、中尉は目を輝やかして、藤子の顏をながめながら、左の手で疵口を押さへて居るのである。
「花子は、どうしたんです」
と中尉は、せき込んだ調子。
「はい、その花子は、亡くなつたので厶います」
と藤子の眼には涙が一ぱい。中尉は
「エッ！」
と云つた儘、驚きの餘り、俄かに血色を失つた。
「ど、どうして、亡くなつたのです」
「それがあなた、電報だものですから、よく解らないので厶いますよ、何んでも腦膜炎とかで、急に亡くなつた相で厶います」
「それは、何時のことですか」
「電報がまゐりましたのは、一昨日あなたが、丁度お怪俄なさいました日で厶いますよ」
中尉は嘆息した、
「もう、僕も世に望みはありません、いつそ戰場の土となつた方がましです」
藤子は首を垂れて、無言である。
此時俄に起る銃聲は、正しく日露兵の衝突！　中尉は、花子の寫眞を懷中へ投げ込むやうに入れた、そし

て側なる軍刀をおつ取つて、起ち立つた其様は、古武士を目の前に歴々と見るやうである。藤子は慌たゞしく中尉の手に縋つた

「あなたは、其御様子で、何方へお出でなさいます、さ、お止しなさい」

中尉は目を怒らした、

「討ち死は、豫ての覺悟です、さ離して下さい」

と云ひさま、手を振り離して、飛び出した、身に重傷ありとも覺えぬ風情。

「あれ、あなた、お待ちなさい、あれ」

と藤子は、頻りに呼んだけれども、もう中尉の姿は見えぬ。

◌　◌　◌　◌　◌　◌　◌　◌

後で聞けば、橘中尉は、跣足の儘、敵中へ駈け込み、右往左往に渡り合つて、敵兵十騎を斬り落したが、敵の彈丸に其胸部を貫かれて、見事名譽の戰死を遂げたとのこと。

衣を解いて、疵口を檢めた人の話によれば、彈丸は懷なる寫眞の胸部を射貫き、更に中尉の胸部を貫通して居たとのことである。

（終）



國光社出版圖書目録

- 宮内默藏著　◎王學指掌　菊判總クロース　定價一圓　郵税十一錢
- 栗田文學博士著　◎天朝正學　菊判洋裝　定價卅五錢　郵税四錢
- 吉丸文學士著　◎名家修養談叢　菊半洋裝　定價卅六錢　郵税八錢
- 高瀬眞卿述　◎學校家庭修身一夕話　上製　菊判總クロース　定價六十錢　郵税八錢
- 三輪田眞佐子著　◎女子之本分　菊判大和綴　定價廿五錢　郵税六錢
- 杉谷正隆編纂　◎修身百首　菊判洋裝　定價廿錢　郵税四錢
- 三輪田眞佐子著　◎女子處世論　菊判大和綴　定價二十錢　郵税四錢
- 文學士寺内淳二郎譯　◎奢侈亡國論　菊半切洋裝　定價郵税共廿二錢
- 安部正人編　◎泥舟遺稿　菊判大和綴　定價四十五錢　郵税八錢

- 甲紫州著　◎徳川の孔明　袖珍美本　定價郵税共十九錢
- 弘田正郎著　◎豪吟集　菊判半切　定價八錢　郵税二錢
- 堀内新泉著　◎家庭の鑑　菊判洋裝　定價十八錢　郵税四錢
- 遠藤隆吉著　◎公民心得　菊判大和綴　定價卅五錢　郵税四錢
- 棚橋絢子著　◎女道叢話　菊判大和綴　定價卅錢　郵税六錢
- 内務大臣官房編纂　◎明治國民龜鑑　菊判大和綴　定價貳圓　郵税十五錢
- 清藤正輔編　◎皇后陛下御略記坤徳　菊判大和綴　定價廿五錢郵税四錢　特製卅五錢郵税四錢
- 藤野天城著　◎女子小觀　四六判洋裝　定價廿錢　郵税四錢
- 山崎忠和著　◎日露の英雄　四六判洋裝　定價郵税共廿二錢

島田三郎序　小畠幾次郎著

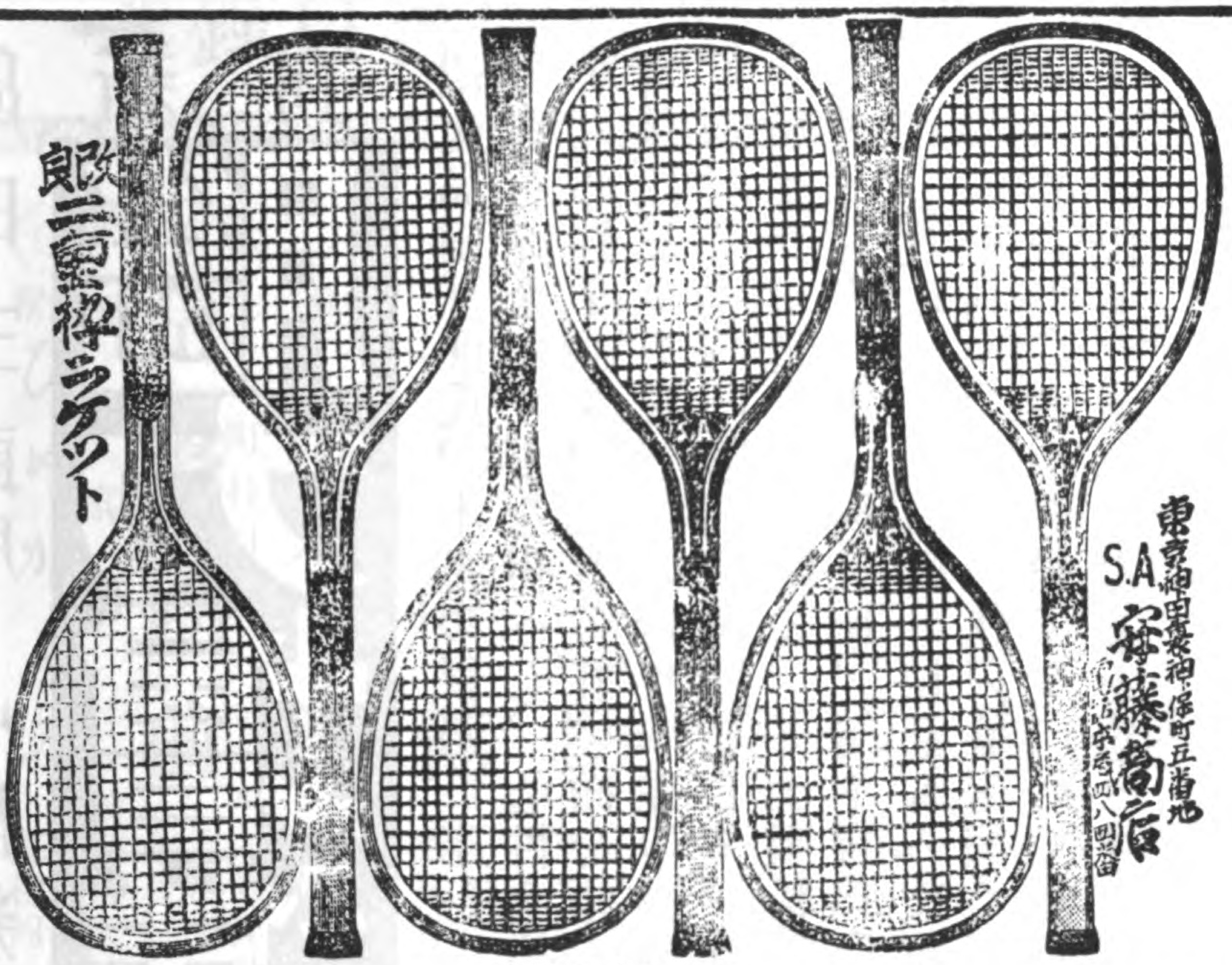
新刊

腦力増進論

菊判洋裝美本
定價　卅五錢
郵税　六錢

沼南島田三郎氏、本書の冒頭に序して曰く、心身の二者を保養して、人初めて其發育を完全にするを得べし、心性を措て、偏へに自体を説き、身体を外にして、專ら心性を論す、二者各其半面を語る者にして、全局を蓋ふの見解に非すと、著者茲に見るあり、世の青年學生の腦病に罹る者多きを嘆し、研究を積み、推考を重ね、廣く專門諸名家を歷訪して、其の所説を聞き、大に悟るところありて此書を爲せり、賀古耳科院長、井上眼科院長、中濱回生院長、此木ドクトル、三浦大學教授、岩佐告成堂病院長、鈴木胃腸病院長等の卓見高論は著者の實驗及び古今に渉れる實地談と共に輕妙快活なる文章によりて描寫され、一讀の下精神の頓に壯快なるを覺ゆ、今や三伏の盛暑熾くが如し、若し此書を繙いて靜かに熟讀し來らば、心身の二者を保養するに於て極めて必要なるのみならす、又以て清凉劑を服するに優ることと萬々なるを感せすんば非さるべし。

發兌元　東京京橋區築地二丁目　國光社



諸學校用 体操器械

登録商標

S.A

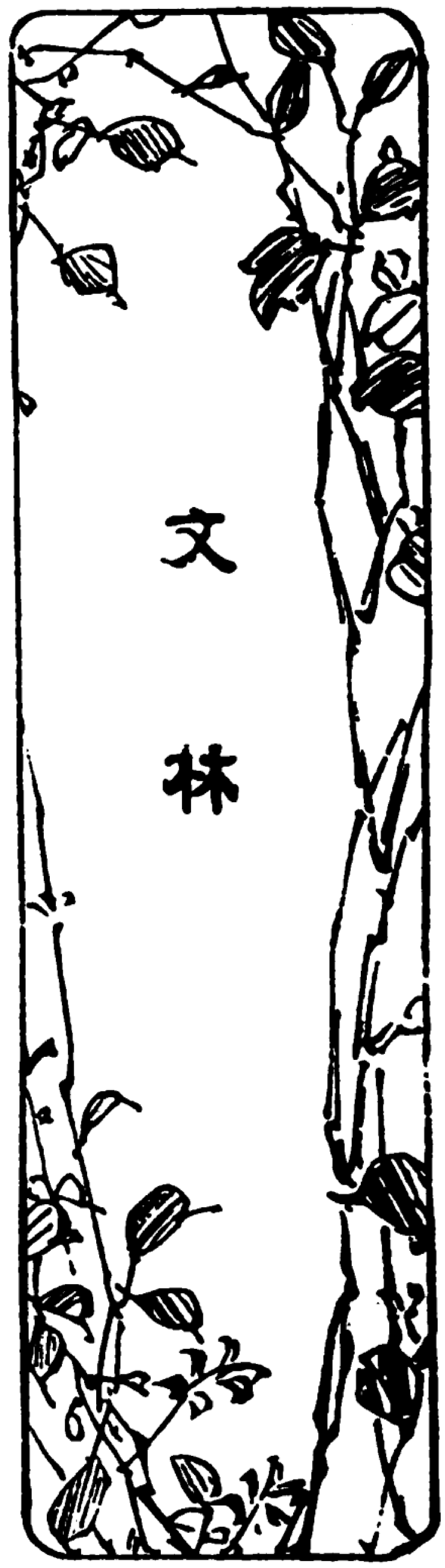
安藤商店

改良一重枠ラケット		
一號	四本	一三、五〇
二號	四本	一二、五〇
三號	四本	一〇、三〇
四號	四本	八、二〇
五號	四本	七、二〇
六號	四本	六、二〇
七號	四本	五、二五
普通二重枠ラケット		
一號	四本	一三、〇〇
二號	四本	一一、二〇
三號	四本	九、八〇
四號	四本	七、四〇
五號	四本	六、七〇
六號	四本	五、七〇
七號	四本	四、七五

テニスネット			
一號	長四間半	巾三尺五寸	一、七五
二號	長五間半	巾三尺五寸	二、二五
三號	長六間	巾三尺五寸	二、四五
四號	長七間	巾三尺五寸	二、九五
網張棒			
上等	四點付		二、九〇
並等	三點付		一、五〇
最新形室内テニス			
ラケット二本 ボール四ケ ネット一張 網張棒一本	壹箱入		一、四五

S.A 電本四八四 体操器械 遊戯品一切 東京神田 安藤商店

S.A 電本四八四 体操器械 遊戯品一切 東京神田 安藤商店



文林

納涼

下田春興

ゆふだちはとくはれゆきて
日をさふるはひろくまがし
ほづえにはかぜこそそよげ
しづえにはつゆこそやどれ
そのつゆにころもでぬらし
そのかぜにあつさはらひて
木のもとにすゞみしをれは
なつとしもなし。

河納涼

なつの夜のつきをさやけみ
みやびをのすゞみすらしも
まかゞやくこがねのいらか
たかとのゝにぬりののきば
生ひしげる木だちのうちゆ
ほの見ゆるむかひのきしに
しづまきの小ふねをうかべ
たまゝきのをかぢしゞぬき
つまごとのしらべをのせて
つきかげのふくるもしらに
よもすがらすゞみてあかす
あけのそぼふね。

海邊納涼

にはよけくなぎたるうみのいはどこにつりたるゝひとまつかげにかひひろふひとつりたるゝひとはわれどもかひひろふひとはわれどもこのいそをうらくはしみとすゞみとるひとのこゝろはひとしかるらむ。

船子

山本細柳

くだれ船子よ心なく
うれしき歌をうたひつゝ
流れのまゝの世なりせば
うき世に浪はたゝざらむ

月夜の笛にさも似たる
うれしやなれがこゑきけば
まことうき世をしらずがほ
しらぬがほどや神ならむ

うらみにあつき世をさけて
河風ゆるきみをづたひ
なに心なく行く見れば
見ざりけらしな世の罪を

葦邊にやとる白鷺は
つばさの露をはらひつゝ
白きうなじをふりたれて
うれしきふしをきゝぬらむ

見よや汀の白百合も
玉のおもわをかをらせて

なれがゆくてにふりかへり
名殘をしげのうれひがほ

木の葉に似たる若鮎は
淸けき鰭をひらめかし
なれがなさけのその棹の
すゞしき露を吸ふらむか

てりそふ月におくられて
さわぐ千鳥に招かれて
またもやうたへひとふしを
底の藻屑もをどるらむ

くだれ船子よ心なく
うれしき歌をうたひつゝ
流れのまゝの世なりせば
うき世に浪はたゝざらむ

池樓

同

さてもうき世のさみしさに
うるみがちなるわがまみを
しらじな君は夢にだに

腕は絲よりほそれども
世の花園をけがすなる
鬼をつんざく響あり

なさけの神よ見そなはせ
うき世の罪を淸めむと
とくさゝげてしいのちぞや

夕ぐれさみし池樓に
亂れし髮をかゝぐれば
無心の雲も騷ぐかな

決死隊

林壽祐

瑞穂の國に稱えけり
花は櫻に人は武士
花と散るとも徒らに
瓦全を愧づる武士の意地
正義の爲に死する身は
譽とこそは思ふなれ
見よや日露の開戰に
敵の死守せる旅順口
波さへ荒ぶる沖つ風
明晴迷はす探海燈
打出す彈丸雨霰
何んぞひるまん腕ふりて
死地に乘り入る決死隊
獰虎の齒牙まで猛進し
噪がで閉づる鰐の口
悶ける敵の亂擊を
笑つて漕ぎ拔くやよ端艇
生きて還るぞ不思議なれ
天祐あるとはまことかや
天祐あるとはまことかや

述懐

かさき

何時までか忍ぶが浦の
かぢまくら浪の浮寢に
そでしぼるべき

偶感

大かたの人の心に
似たるかな降み降らずみ
さみだれのそら

教の庭

八月一日彙題

正三位子爵黒田清綱先生選

（代選菊池武則先生）

夏海

天

わらかねの土さへさけて照りし日も
しられぬ海の夏そすゝしき
三重縣津市西新丁　神田みよし子

地

わつさをもわら井の磯による波の
おときくときそ夏は涼しき
東京赤坂區青山北町六丁目四十五番地　岩谷梓子

人

清見潟なつは涼しく見ゆるかな
富士のしらゆきかけのうつりて
麻布區東町四十七番地　林環子

甲

海士小舟真帆ふく風の涼しさにあつさもしらぬ波の上かな　肥後　千知波橘子

村人かうちつどひてそひくあみのこへいさましや魚のむれいる　神田　荒井満武子

和田の原ふなちすゝしきなみかせにしはしあつさもわすれはてつゝ　神田　荒井あさ子

網引する濱への夏の夕くれはすゝみかてらに人やいのらむ　埼玉　横田音羽子

をちこちも見え分ぬまで濱たてゝ涼しさあふるなつのうなはら　長野　山本甚子

思ふどち手を取りかはし磯つたひうしほあみつゝ遊ぶたのしさ　上村某女

乙

きよみかた三保の海原はれわたりすゝしく見ゆるなみの上の不二　長野　小泉たつじ子

もやきえて眺めはてなきいつの海の八重の汐路もなつめきにけり　水戸　細谷波留子

まほかたほ行かふ影もすゝしきに夏しらなみのよするうみつら　熊本　日高かず子

きりはまた霞はれて島山は夏のすがたとなりにけるかな　神田　山田婦美子

ますらをがくにのためとてあら海にいかにいまさんこのなつの日に
下野　林　季子

くろがねもとかすばかりの日のなかにあつさわするゝ夏のうみかな
下野　林　季子

かぎりなき青海原の行たへて月かげきよくみづにうつらふ
上野　ち　か子

波のまに夕ひのかげはいりはてゝみゐめすゝしき沖のいさりひ
長野　田島みよ子

夏さればたこのうらなみしゝけゝてそこにもふしのたかねをそみる
東京　山本茂子

こぎ出てゝ夏のみなとやはなれけん千頃のなみちはあきかせのふく
東京　岩谷淺子

煙立てはしる濱間のふなびとはなつをも知らぬうみの中みち
長野　山本直枝子

三保のうら松によせくる白なみのちるかけすゞし夏のうなばら
長野　小治みつじ子

ときならぬ卯花つゆにそてぬれてなつなほさむきはまの夕風
麹町　石川馨子

よさの海やゆふたち雲のすゑはれてにしのたつみゆ天のはしたて
福井　平田そう子

打ちよする濱にも夏はしられけりみとりすゞしきちぬの海はら
和泉　福原菫子

たへかねし暑さは波にあらはれておきおもほゆる浦のまつかせ
下谷　岡田春子

あまの子もみやこの人もうちまちりいとにぎはしき夏のうみかな
本郷　青木たま子

日本橋　神戸すゑ子

朝なぎにいさこきいてんあまをふれ夏おもしろきなみのうへかな
北海道　小山かく子

少女子が浴衣の袖にそと觸れて潮の香贈る夕なぎの海
埼玉　田中花子

むぎはらの帽子ひとむれまつにいりてゆふへしつかに海くれゆく
下野　井上滋子

月かげをめなみをなみのうちよせてゝたけてすゝし夏のよの海
よみびと不知

思ふどちうちはかた手にいそづたひほたるとみれは沖のいさりひ
日本橋　牛山米子

松風のおとそへてうついそなみのくだけてさらに涼しかりけり
肥後　德永と州子

朝日影沖のしらほのかげきよくうつるもすゞしなつのうなばら
美濃　吉田淑子

さみだれのはれしゝはしらもやたちてゆく船みえず北のうなばら
愛媛　高橋波子

きそひつゝ波きゐわさをはけむ子の聲にゝきわふ夏の海はら
長野　中村佐浪子

浦風にたもとふかれて江の島のしほあむおりは夏としもなし
肥後　德永滿壽子

夕月夜海原とほきなつのそらすゞしくかへるあまのつりふね
肥後　德永旅子

夏の日のあつさわすれて此のゆふへあかしの海にふれあそびせり
東京　荒井幾久子

出て見れは青うなはらのゆふなきにすなとる魚火のこゑそいさまし
北見　中川伊代子

云ひしらす涼しかりけりなつの海の沖へにみゆるしら帆三つ四つ
埼玉　横田やな子

磯つたひかへるゆふへにすゞしくもみゆるや沖の海士がいさり火

秋田　細谷はる子

ひのまるのはたのひかりの影そひてなみのはなさくなつのうなはら
秋田　伊東よし子

なつの海に輝やきわたるあさひかけそこのもくつも見えそめにけり
相州　三好珍子

安らかに汐あしあみつゝもいくさふれたゝかふ海を思ひやるかな
三河　榊原てる子

二つ三つあまかいさり火ほの見へてゆふ風すゝし夏のうなはら
三河　きく子

松かれにすゞみつゝなるに子供らのなよくなみては音もたよかん
肥後　佐々有鄰子

海原を帆かけてはしる大ふねにのりてわするゝなつのあつさを
神田　荒井千代子

見度せばいつこになつやすぎぬらん浪もしつかにふれぞたゝよふ
神田　荒井幸子

年毎にみなれしうみもおのづからかはるけしきも戰ふおもへば
埼玉　横田秋子

がまくらの海原わたる夕立に長谷のあたりは夏なかりけり
陸前　前田河千年子

大君の治めましけるやしまにはなみかせたゝぬなつのうなはら
三河　白井よし子

あらいその波もいつしかしづまりて月さしのぼるかげぞすゞしき
陸前　前田河千年子

浦かせにあまの少女のひるがへすたもと涼しきなつのうなはら
薩摩　松原みれ子

あだふれのあらしゝ洋にたつ風は夏なほさむくみにぞしみぬる
熊本　猪原みさを子

さゝろなき人もすゝしな天小舟三四かへるなつのゆふぐれ
横須賀　岩橋花子

夕すゝみあかしの浦にきてみればなみのうへふくかせの涼しさ
肥後　秋吉輝尾子

たへかれし夏のあつさもしら浪のたもとすゞしき沖のしほかぜ
東京　田中とし子

夕すゝみともへの海の紅にながめそへけりいそのしまやま
大和　栗山俊子

たつなみのもゆるけしきに光りげりけさのあつさのせとの海はら
大和　栗山たか子

かせもなく浪もたゝればしばしとていこへは涼しおきのしまやた
呉　和住千鶴子

舟うけて松のはこしにいそやまのつきうちかへす波のすゞしさ
肥後　佐々小琴子

とびかける鷗島の海みわたせばなつふきはらふかせのすゝしさ
神田　金原玉城子

おほ舟のしらほすゝしく風うけて夏ともしらずゆくうみぢかな
北豐島　松本松子

うな原の月に出てゆあさるらむなつのよすからあまのこゑする
本郷　山口琴子

空の星も底にうつりてはる／＼とみとりもふかしなつのうなはら
下谷　椎野秀子

つとめなばはなほはけむらん夏のひのてるうな原に舟いくさして
磐城　三森須磨子

いそ洗ふ浪の音にもおとらじとこらうちつどひ萬歳のこゑ
麻布　林艶子

夏ながらあまの蚊遣の棚引てゝきおほろなり志賀の海はら
大阪　池田英子

みやこなる學びの友はしらさらむなみまかくれに見ゆるしか山
大阪　黒田代音子

言のはもふでもおよばぬながめかな夕たちすきし沖のしまやま

真帆あげて行かふふれに風見えていともすゞしきなつの海はら
本郷　深見愛子

しつみてしあたのいくさもおもはれて夏なほさむきもろこしの海
山梨　樋武子

述懐

天

よの河のいく愛瀬をかわたりけん　しはしやすらふ橋もなくして
東京赤坂區青山北町六丁目四十五番地　岩谷浅子

地

みかきなは玉となるへき心をも　みかゝてやみし我や何なり
秋田縣本庄町谷山小路　細谷はる子

人

よの中にたえて願ひのなかりせば　たのしきこともわらましものを
薩摩國伊佐郡山野村字布計　松原みね子

甲

いたつらにうき年月をすこしつゝ世をやおくらんはつかしのみそ
神田　荒井あさ子

年つきのすぐるもさらになしまじなたゝ露水にまかせゆく身は
肥後　千知波橋子

今更にくゆともすへもなすことのならてすくしゝみをいかにせん
三重　神田みよし子

なにことをなすとはなしに春秋をむかへおくりて身のみふりつゝ
本郷　青木たま子

なしまれてすつる月日を徒に遊ひて暮らすわか身なになり
相州　三好参子

我人もおつるところは一とすちに勝りをれかふ心にそある
神田　荒井千代子

思ふましおもひしとても神わさにもならぬこの身はおろかなるかな
同　荒井こう子

水にいり火にもやかれてつかへなん君のためにも親のためにも
肥後　佐々有郷子

うき事のきこえぬ山の奥にすむひとのこゝろやのとけかるらん
大和　栗山たか子

大御代はおろかなる身も人なみにこゝろ安けくよをおくるかな
肥後　徳永廣子

日に月にすゝみゆくよに何ひとつおくれかちなる身をいかにせん
肥後　徳永多瑠子

このなつはみいくさ人の身のうへをまもらせたまへ伊勢の大神
陸前　前田河千年子

敷島の歌の山をわけかれてふもとにまよふ身をいかにせん
長野　中村佐寿子

世の中をうしとも更にいはしみつくまはこゝろのすまさらめやは
東京　岩谷梓子

おみなとてみ國を思ふまこゝろはますらたけをに劣るべきやは
前橋　竹野ふし子

何事も口をなかはにきゝぬればこゝろのおくそしられさりける
埼玉　横田秋子

乙

長野　海沼ふみ子

いまもなほ殘りありける五月雨もあをばかしたのつゆとなるらん

三河　榊原てる子

たまさかにむすふ夢さへこの頃はたゝみいくさの外なかりけり

三河　きく子

なほ深くまなひの道をはけみなほかくもをろかて過さゝりしを

神田　荒井滿武子

年月は早くすぐれど我心おくれがちなるぞかなしき

同

ふりかへり見れとも見へぬ年月をなかはゝゆめとすきしくやしさ

日本橋　牛山案子

分まよふことはの林しけゝればたゝいたつらに思ひみたれつ

神田　荒井幾久子

かへり見ればいともはつかしわか學ひ今年もなかばすきにしものを

埼玉　横田やな子

いたつらにしひことの葉のともすれば數まさるまで老にけるか那

秋田　伊東よし子

うき身をは幸なるみそとおもふとちひとの心そはかりかたなき

熊本　指原みさを子

ゆふくれの蛙のこゑはいかはかり背の人もゝのおもひけん

呉市　和住千鶴子

あちきなくなをもうきよに有明の月かけともに消えもはてなん

埼玉　横田音羽子

數しまのみちのまことも末の世はいつはりおほく成まさりけり

下野　井上游子

いたつらに過きこし方をみかへればよろつの事のあやまちてけり

横須賀　岩橋花子

なにはえのよしあし茂きよなりともまことこゝろの道は迷はし

肥後　佐々小夢子

今日よりは文のはやしの奥ふかくいりでながめん花にもみぢに

東京　田中とし子

かくてなほ人のこの世の心地すとかはつもろとも夕くれなきぬ

大和　栗山俊子

おいし身のことわりなりとかそふれはすきにしとしの違くもあるか

東京　神戸すゑ子

我なからうきとしつきを一とすしにおもへはぬらすそてのしつくと

陸前　前田河みさを子

ふく風も御軍ひとのおとつれとおもへは夏もすゝしかりけり

北海道　小山かく子

夢に見し理想や消えて幻に殘るうつし世忍ぶはかなさ

京都　鈴木きく子

亡き姉かめてにし園のあとゝへはあを葉かくれにはつ蟬のこゑ

三河　白井よし子

なき君の古き寫眞をなかめてに一人かなしくなきくらすなり

肥後　德永萬壽子

よを海の蟹ならねともうきしつみはかなきよをはかこちぬる哉

肥後　秋吉輝尾子

よの中に絕てうきことなかりせは人の心はいかゝなさまし

福岡　蠏岡美津野子

曲りたるこゝろはもたしやれかまのときすましたるひかりなくとも

埼玉　田中花子

君ましゝこそ忍へとやすまのうらゆふはまふかくなみにむつるゝ

美濃　吉田澄子

なくさむる人にそむきてをりをりは那き子のとしの數へられつゝ

山形　香澄露子

よを渡るみちは千すちに繁ければはちまたまたにふみ迷ふかな

神田　山田婦美子

よにいれぬ身は捨小舟ふくまゝの風にまかせてなかれゆくこそ

下谷 岡田春子

これもせんかれもなさんと思へともやまひある身をいかにしてまし

福井 平田さう子

みしかよのよはにも物を學ふかな云ひのこしつるをやのことはを

和泉 福原蕗子

しき島の大和こゝろはをみなとてますら武雄におくるへしやは

東京 山本茂子

ひらけゆく世にもひらけぬ人ありとひとにいはれむおいくちしみは

長野 田島みよ子

さなきたに露けきそてのさみたれにぬれまさりつゝかはくまそなき

長野 小泉みつじ子

果敢なくもよせてはかへすあらなみの下々にくたくる我思ひかな

長野 山本なほ子

國のためおもふこゝろの一すしにいとたゆみなき賤の女のわさ

長野 小泉たつじ子

治まれる御代の恵にうるほひてうれしかりける身にこそありけれ

水戸 細谷波留子

子こゝろのまたうせぬまにとし經て子供そたつるみになりぬとは

熊本 日高かず子

をみなとてなになけくへき家の爲つくすは國につくすなりけり

上野 ちか子

おみなとてなどかへたてのあるへきや勉めはけめよ國のみ爲に

長野 山本基子

國を思ふこゝろはつねにたえねともおこたり多き身をいかにせん

愛媛 高橋茂子

すゝむ世に學ぶよしなき山さとを只うしとのみかこちこそすれ

麻布 林艶子

はかなしやあたに過しゝ年月を思ひかへしてなけくわか身は

しづ子

ほとゝぎすなく音もかなしみいくさの空のみ思もふけふのあけくれ

下野 井上なほ子

時雨ふるころとやいはんこの頃の人のことばのかはりやすきは

本郷 深見愛子

數ならぬ身もますらをと生れなば君のみたてとならましものを

長野 時村静枝

あまのはらくもなきゆふべ野に立ちてつきの光りに城を見るかな

東京 敷島うた子

晴もせすくもりもはてぬこの頃のそらによくにし吾こゝろかな

山梨 標武子

よしや世にうとまるゝとも女とて只いたつらにかゝろへしやは

大阪 黒田代音子

たちよらむかげあら濱やおのがみになみに漂よふ小舟なりけり

大坂 池田英子

こその夏かたみに袖をしぼりつゝわかれし夜半のしのばるゝ哉

磐城 三森須磨子

父母もなくはらからとてもなきみには一つにおもふなはのめぐみを

神田 金原玉城子

ことならばよもぎか島に住かへて浮みるとらぬあまとならばや

麻布 林環子

たけゝとてかひはあらしな月花にうかれし春はすぎにしものを

下谷 椎野秀子

人なくは玉もこがれもなにかせんみやまのおくのもりの下かけ

丹後 ひで子

をろかなる己が心をあらためて眞の道にいるぞうれしき

追加

夏海

東京 敷島うた子

おきつなみまたきに秋のよせ来らん潮風すゝしいそのまつはら　　和歌山　白蘭女史

塵のよと波さゝやけはてる月もあさけりがほの夏のうみつら　　長野　依田靜子

乙女子かたのしく濱邊に貝ひらふくだくる波に袖をぬらしつ　　熊本　田代艶子

あまならて汐あむ人の多けれは夏のうみのへいとゞにきはふ　　同　田代綾子

あまか子も都の人もしほあみていよゝにきはふ夏のうみかな　　松山　上原のふ子

汐あみにすゝみかてらの鍋ふれになつの海こそにきはひにけれ　　松山　田村多豆子

吹わたる風もすゝしきなつのうみいかたにのりて暑さのかれむ　　山口　村上操子

なり〱に来るも涼しき夏の日を海にくらせるあまもありけり

述懐

夏ながら一人さひしく山里のよむ書の外にたよる友なく　　長野　依田靜子

よの中のよしあし草をかきわけて正しきみちにたとり行かはや　　熊本　田代綾子

あつさゆみひきかへされぬ月日をは何とてひとのおしまさるらん　　熊本　田代艶子

さはかりに富も祝かはぬこゝろにはまつしきも又うれへさりけり　　松山　上原のふ子

皇軍にいてたゝましをいかなれはをのこには我うまれさりけむ　　松山　田村多豆子

名をあくるわさはある物をみなとていたつらにやは世を過すへきゝ　　山口　村上操子

新刊略評

◎男女の研究　大島居弃三 澤田順次郎 合著　生物、生理、心理及び社會的方面より男女の性質を研究したるものにして男の男たり女の女たる所以を明にしたれば熟讀反覆して各其天分を辨知するに於て頗る必要なるべし惜むらくは紙數僅かに百五十頁に過ぎざるを以て猶論じ盡さゞるの憾みあることなり但し其の概要を知るに於ては餘あり（定價五十錢神田區神保町光風館發行）

◎家庭週報　日本女子大學卒業生を以て組織せる櫻楓會より發行せるものなり女子の事業として發刊する新聞雜誌は吾國に於ては本誌を以て嚆矢とすべし希くに將來完全なる發達を遂げて家庭改良上の有力なる新誌ならんことを但し當分は隔週一回の發刊なり（定價一部三錢小石川區日向臺女子大學校内櫻楓會發行）

◎學校衛生（第二卷第一號）　内外大家博士の衛生に關する學說や議論を掲載し附錄には今村醫學士の學校衛生學、學校傳染病、並に獨逸ライプチヒ大學教授ヘトッユンベル氏の教育病理學をも載せたれば學校衛生に關係ある人々はいふに及ばす心ある生徒父兄の購讀すべき月刊の好雜誌なり（定價一冊十六錢下谷區上野櫻木町學校衛生研究會）

◎家庭のしるべ（第一號）　裁縫指南、室內裝飾、流行案內、料理法、素人醫者などをはじめ小說をも掲げたる美麗なる雜誌なり吳服物販賣を以て有名なる白木屋吳服店の機關雜誌として三井吳服店の『時好』と對立して將來益々發達するを見ん（定價一冊十二錢神田區裏神保町富山房發行）

華族女學校教授 井上頼圀先生撰

盂良盆の日祖先の墓に詣てゝ

天

麹町三番町 石川馨子

けふは盂良盆の事とて夕つ方より父君姉君と祖先の奥津城詣にと出行く、一石橋を渡りて彼方木立僅かに隔てたる遙か小高き丘古木の下陰こそ我祖先の在ます御座なれや、苔付きし大石峨々たるは祖父母君の御墓稍々新敷は……新しきは母君小さきは兄上、思へばさすがに胸つぶれ更に夢現をもわき難し、やがて近邊の塵打拂ひつ香花清水手向け參らせ暫時墓前にぬかづきぬ冷かなる墓石の下に眠り給ふ我祖先、御座は苔むしつ刻まれし文字は消れぬ嵐の夜雨の夕如何に〳〵淋敷在すらめ思ひ廻らせば十三年の昔別れ參らせし母君の温き面影朧に現はれ出つゝ、祖先の君兄君に面影は知るよしもなく只父君に依て祖父母君の面影描かれつ、茫々たる荒草の中幾百の墳墓を見つ悄然張立して弔悼の情骨に徹す、見渡せば若き母の愛子の墓前に咽ぶ樣、稚子の母の墳墓と知らで數多燈火の光物珍しげに打見やり喜ぶ樣など又なく憐深く見ぬ人とも思ほへず涙溢るゝになむ、思ひは走せて知友故人に至り古を懷ふて低徊去る能はざること少時悲傷の光景夕陽に映じ一入哀催さしめぬ。

地

薩摩 松原みね子

おや〳〵のみたまの。かへりきまさむてふ。盂良盆とて。はる〳〵故里へかへり。花などゝのへて。菩提寺なる奥都城へと詣てぬ。梢の蟬草葉の虫昔を語り顔にすだくも。あはれにつゆけし。幣目正しく。見

るから清らかにはきなされたる、我が日頃ねがひを空しうせられぬ、あるじの情のみなさけ嬉し。花のいき〳〵しき、ゆかりある人の忘れ給はぬ、心ありがたし、さて、菓子など、とり〴〵に供へ、香花を手向け水をまつりて、伏し拝みぬ。あはれ祖先のたまよ、常にはとひもせぬ、不孝のつみゆるさせ給へ。西に東にさすらひても、家の名あげんことにのみ、つとめつゝあれば、あしくなとり給ひぞと、口に誦しながら目には涙の雨しげしく昔をしのぶほどに、入相の鐘近くひゞきて、あたりの燈籠にも、みあかしの影、三つ二つ見え初めければ、おのれもたてまつりて、寺へたちもどり、法丈の君にもあつく禮のべて、宿へといそぎぬ。

人

肥後菊池郡城北村　德永廣子

光陰は矢のごとし、現にはや盂良盆の日とはなりぬ。たらちねの母君にしたがひ、祖先の御墓に詣ぬるは日もはやかたぶきしころなりき。御墓前に白砂しきたるいとすがすがし。手向の水に桔梗女郎花白菊の花のうつろふ色香もゆかし。線香の煙のたちのぼるにおのづと古へのしのばれて、御墓のふるびやかなる數々も貴しや。かゝる故人の面かげさへしらぬ身は、傳聞ことのみなれど、地下に眠り給ふ御靈屋に詣ぬるをいかに草葉のかげに見そなはすらんかし。開ゆく御世に生れて、見るもきくもなすわざも。進みし大代御の光に。あふさへ。いと幸なるを。まして世渡る道に安かれと。のこしたまひし業のかずかず。皆祖先の御恵ならぬはなく、かくも子孫に繁昌をたもたせたまひし古へ事にくらき身に一世をすぐさせ給ひしこそしのび奉もかしこき事なれと、母君のかたらせ給ひしかば、ひたすらなつかしくて奥津城の前にぬかづき奉て、御恵にむくひまつらん言の葉にも、更にこたふるものもなく。入相つぐる鐘いつしか音たえて、山の端いづる月影いときよく、遠近に鳴虫のねもをりにふれていとしみじみとあはれ深く感じぬ。をりしもいざと父君の御言葉に家路をたとりぬ。

北海道　小山かく子

今日は盂蘭盆の事とて、例の如く世上に作はれ我等兄妹三人祖先代々の墓參に半日を費してたち歸れば、既に午餐の準備あり、家族六名樂しく打ち集ふて食卓を圍む。

食事しつゝ父の語り給ふをきけば、……そも此家の祖先は武人なりき然も義を泰山の重きに比し、生命を鴻毛の輕きに見たる關東武士の一人なりき。身は讒者の舌に君公の御前を遠げられゝ、君恩の厚き倘忘れ難くやおもりけん、其後兩刀を棄てゝ城下に程遠からぬ此地に隱れ只管開拓に志し田園生活に平和の生涯を送りし人なりき。臨終の際枕邊近く子孫を集めて「鋭刀をふりかざして君公の馬前に死するも、鋤鍬を手にして國産を豐かならしむるも甲乙なき働きなり。世にははでなる事に力を致さんと希ふ者のみ多し。汝等愼しみて我志を繼ぎ永くじみなる農業に安じて君公のため勉めよや」と繰返しく固く誡めて瞑目せりとなん、

父は更に膝を正して、我祖先の遺訓は今の時局に深く味ふべき言なり幾十の勇士が遼東の野に屍を晒すとき、留りて内を守るべき國民の心掛け宜しく此の如くならざるべからずと語り給ひき。あゝ此言語の如何に莊重にして謹嚴なりしよ。

佛壇に立てならべし線香の煙、細く長く立ち登りてうなづくが如く、つりさげし燈籠の風に動くさま舞ふが如く見ゆ。午後一時なりき。

小石川　松川ちよ子

青葉にかよふ涼風の、いと淸げなる夕つかた、しげき夏草ふみわけて亡き人のおくつきを、とふらふ。折しも盂蘭盆なりければ、道のほど人々の晴衣よそほひ、いつになく賑ひ、そこゝの軒に、紙燈籠、提灯さげ並べたるもいとゆかし。やがて思ふところに、ゆきつきぬ。松ふく風はそゞろ心にしみて、いづれの人のなき跡ぞや、苔むせる墳の名もしらぬ草にうづもれ、文字さへさだかならぬ、いと哀なり。志すおくつきに至り、とゝのへ來にし花手向け、水進めなどしつゝ、名なのみ遺せる石塔に、うち對ひつゝぬかづきて、回向に時をぞ移しぬ。無量の思ひ胸にあまりてやるかたもなく、懷舊の情のみぞ、いやまさる。まいて、子よりも孫こそ、とていつくしみ給ひしは、未だ、きのふの如き心地すなるを、なき數に入らせ給ひてより、早二とせの、花や紅葉の、散りすぎにしこそ、うたてけれ。わきいづる思ひと共につきせぬ涙になん、なく鳥の聲は、さらなり、松風の音も、たゞ悲しさの響きとばかりきこえ、そのあはれさ、いふばかりなしや。さてもなき魂、今いづこの空におはすらむ。思ひあまりて我にかへれば、空晴うして、たゞ香の煙りの細やかに立ち昇れるのみ。なほ慕はしくて、呼びまつれども、いらへだになし。

あゝ、誰か、人の世を、無常なりと言はざらん。

山梨　標武子

今日しも、盆の十四日なれば、代々の墓詣でばやと、日盛の暑さ恐れて、日やう／＼山端に入らんとする頃、金色の夕日を、背におびつゝ細道傳ひたどり入りければ、見れば春の野の、土筆の如く、立てる墓じるしの、中にも、ことに目立ちて見ゆる、我祖先の墓、ときめきさし昔もいとゞ忍ばれて、榮えにし春の平和は、最早夢と消えはてゝ、夏來り秋去り冬枯れにし庭にも似て、いよ／＼淋しさまさらんとする、我家運、身の行末も思はれて、去年の秋紅葉と散り給ひける、たらちねの、此かたばかりの、墓じるしと並べては、せきくる涙止めあへず、手向めと持ち來たる、桔梗女郎花、一本宛、筒にさし參らせ、いでや母君にもと、生前いたく、愛でたまひしなれば、殘りをみな、供へ參らせんと見れば、未だ枯れやらぬ靑筒には、心ありげに露重げ、打そゝぐひさげの、水かさまさりぬ。あはれ浮世とは、誰しにか云ひけん、今更思ひあたる、節のみ多くて、しばし佇みいざ歸らんと、傍らを見れば、丈なす草は、墓のしるしの、名さへ埋めて、生ひ茂れる。あはれ祭るべき人は、何地に行きけん、葬られし時は、穴を圍みて、淚そゝぎし人々も、ありしならんを、など、我身にくらべては、浮世の味氣無さぞおもはれける。

いざ急がんとすれば、日ははやくれて、寺々のかねの音、餘韻をひいて小田の蛙の聲に和し、哀れは一入増り、浮雲に、つゝまれたる、月影、雲をかすめて、なくほとゝぎす、とりどり忍びがたき、心地せられてなん

柴　利住千鶴子

けふしもうら盆とて、亡きたまよぶなる日ときくからに、遠つみおやのおくつきに詣でぬ。立ち出づる野邊の道路さだかならぬまで夏草茂るあたりわけゆきて、やうやう山邊に至りぬれば、昔ながらの常盤木の、いよゝ榮ゆるに、見ぬ世の事ども思ひ出でゝ忍ばし。しばし木影に立ちよりて衣つくろひ、御墓に詣でみれば、ふるしの文字も苔むしてさだかならず、靡きかゝれる青柳の吹く風にそよぎて、あはれ亡き魂いまいづくにやいますらむ。思ひ出れば、その昔、世は村雲の立ちまよひ日影もくらく聞ゆるものは砲の響、やさけびの聲、見る物とては砦の火影、荒野の屍のみにて人々生くらん心地もせざりしを我遠つみをやの君は、いや進みに進み戰ひて勳を表しけるが後たふとき司を賜ひけるとぞ其より幾春秋の御祭たえず孫ひこの姿らが世となりぬれど、榮ゆる御代にうら安く日を過すは皆遠つみおやの恭さだめしみ惠なり。されば吾等も家の風を守り德を磨きて御名を汚さゞるべしと契ひぬ。さる程にあたりは、いつしか暗うなりて夕月ほのかに山の端に匂ひ出たるが葉末の露にきらめきて、玉をぬきたるさまを打ち眺めつ家路をたどりぬ。

肥後　秋吉輝尾子

七月十五日の今日は盂蘭盆にて一年一度の祖先を弔日なり、朝とく母君にしたがひ片山寺なる、祖先の墓になん詣づ。日頃おもひ出ぬにはあられど、程とほき都の空にはなれ參りし。身は一年一度の墓參さへおこたりがちなるを、あはれ久々の此御墓よと、まづさしぐまるゝは泪なり。淋しく苔むして、あまた立てる石ぶみの中、ひとしほめにとまりてなづかしきは、祖母君の御墓になん。晴まなく降しく雨の。つれづれなるまにまに數日前ゆくりなく反古紙の中より取出し水莖のはしも、是祖母君の心づくしの御ことの葉にてあなりき。あはれ祖母君よ花の朝月の夕はともともに、庭園に青葉そよぎ夕月清き夏のよなよなすずみ臺のしづかなる所に樂しくながめまゐらせ。避暑の休業をへぬれば、都にのぼる時いつも停車場までおくらせたまひて、また來ん休業のまたるゝなど、笑みたはふれたまひしは、今なほ耳底をはなれず。あはれ其時つゆおとろへますべき樣には見えたまはざりしに、あないたはしき祖母君よ、夜半の嵐のおとすごかりし秋の夕葬此世のをはりに取たまひし御筆跡おもひつゞけては、いやまし懐舊の心堪がたくなりぬ。せめてめでられし草花を手むけば雨の名殘にほらほらと散こそあはれなれ。香炉の煙冷やかに立のぼりて、すべなく母君にせき立られて夕暮家にはかへりつきぬ、

東京　岡田ちか子

あはれこひしきに、なき數に入りにし人なりけり。實にはかなきは人の命にて、昨日まで、健かなりし人も、今日には、葉末の露のいともろし死出の旅路に向ふかひなさ。あゝ、我、祖母君も、この旅人のひとりならんとは。

今日こそは、盂蘭盆なる上、其、忌日にも相當しければ、母に伴はれて墓詣でなしぬ。日頃草花をめでさせ給ふがまゝ、墓前に供へまつらんと、撫子、さては、夏菊など、手折りゆきて捧げまつりぬ。かすかにのぼる香の煙につゝまれて、やさしくたてる花の姿はいふ計りなく淋し。思へば、なつかしの祖母君よ、御惠ふかきこの君よ、樂しき家の礎を定められしもこの君よ、春は花に、秋は紅葉と、なりなりに、遊びつゝ、教へつゝ、はぐみそだてられしも、君がみ情に外ならぬを、などゝ其かみ忍ばるゝ折しも、白煙と共に、たちいで給ひしは、まがふかたなき祖母君なりき「アヽ」とさけぶもかひなくて、いつしか影はかくれけり。かたへを見廻らせば、母君は尙御墓を打ち守らせ給ひて、人しれず涙をし拭ひ給ひしが、思ふ所やおはしけん、いざゆかん、いつまでたちわぶるとも、なき人の影だに見參らせぬなど、諫めらるゝに、進まぬ歩み運ばせて、家路につきぬ、噫、めゝしき我心よ、いかにして我は、かくあぢきなき心にひかれぬるかと、恥しさのみ、いや勝りゆきぬ。折しも、

圓の方を打ち見やれば、日頃めでさせ給ひにし老松は、常磐の操うち守りつゝ、夕露に濡るにつけ、淋しさのみはいやまさりゆきぬ。

東京　田中とし子

あらがねの土もやくらし、暑き日の風すゞしく吹き初たるにて、漸心地善くなりぬ。身を清め祖父の君と共に先祖のみ墓に詣づ。姿かたちもれのおくつきにとなりしておごそかに立てるみすがたこそげに神々しくいと〳〵なつかし。參拜をなして眺むるに前には平家代六代のやんごとなき御方にましますず君の奧津城存在す。後へには松ぼう〳〵と繁りて晝尙暗く物すごし。おくつきにはこけむしてほりし眞字いつかきへはてし如くになり。たゞ古びし面影をのこすのみになむ。我祖先の君には伊豆の國田宇郡より出させ給ひて。北條氏の家民たりしと。祖父君の種々宣べ給ふに。時の歷史はたゞちに腦の中に數々浮み出でしばし〳〵くして立ち、つくす、日は彼方の山に落ちむすれど、なつかしさ一しほにまさりて、奧津城の許さりたうもなかりし。

肥後　千知波橋子

今日は世になき人々の御たまを招ぎすといふ、盂蘭會の日にしあれば。例年のごとく遙さみおやの、奧つきに詣侍りて。あだし野の草葉に置ける白露と消にしひとの上よりも空そみの我身のはてもいかならんと、おもふものから、時ならぬしぐれさへ、袖にふりかゝり侍るも、親思ひのこころのほどを神靈もあはれとうけたまはん。

山形　香澄露子

常は夏草に路は埋れて行く人もかれ〳〵なる奧津城は今日しも盂蘭盆とて夜とは云ひながら誰も〳〵亡き靈を訪ふとて行きかふ人多かりけり、そこら墓の立ち給ぬる内に一墓の標のみは荒む風雨の日も足らさるにはあらざれど、さまでも蘚苔未だ滑かならで折り〳〵音づる阿伽の水の手向もあり、色香失せたる樒の枝の捧けし跡もありぬあゝそは父上の御墓なりあはれ父上は次弟にて分家をなし給ひし御身なれば常々の給はく吾は軍人たり殊に先祖ともなるべき者なれば世**に其名をのこし子孫をしてよき先祖を持ちたりと思はしめむとの給**

ひしと母上より聞き及びぬ世のあはれはさるものにて猛き武士も九泉の供となる御身とも神ならぬに知り給はで十年前に勇氣凛々として九連城に沸りては彌高き芳名を天下に輝かさむものと銃を枕に野に伏して遠く夢を故鄉の天に遊ばせあらゆる辛苦を嘗め給へども鐵をもとくる夏の日に、ふとしたる病よりあはれ諸行無情なるかなうらみをのむであの世の人となり給ひぬる事のはかなしや、生者必滅は人生の常とは云ひながら葉末の露の碎けて色凋るゝ朝顏の賴りなさ萬胸に迫りて感慨解くる術もなき折しも父上樣どんなにか日露開戰に付いてもさぞくやしくありましようかどうぞ待つて下さい僕が成長して軍人になりてきつと御志を續きますよと人目なしのばて云ふに驚かされぬ、あゝ弟も妾と同しく追懷の情堪へ難く闇路に迷ふ心の苦しさよ、折から森陰に血に鳴く時鳥に驚きてふと見あぐれば今迄澄みたる月も雲路に入りて妾等の心を思ひてや雨も折り落つるに一しほ淋しう思はるゝに墓前さり難き母上にうながされて家路につきぬ。

熊本　猪原みさを子

暑烈しけれど、盂蘭盆なればとて、正午過ぐるころ、先祖の墓に詣ふでぬ。墓はいつよりも奇麗なれは、あれうれしとて、携へ來たりし香華を供へ、水をまつりて累代の墓碑を弔ふうち、彼方には法師誦經の聲、此方はトーカミの鈴の音、近く又遠く、物の悲しくあはれに聞へて、吾も埋るゝばかりにて、其心細さいはかたなし。憶へは七年の昔、吾八の年まて、朝となく晚となく、世にまたなき玉の如く、吾黑髮を撫擦り、愛で玉ひし祖母は、其春の央より、假初の病にて終にかへらぬ人となりて、今は苔むす此塚の主となりて、とこしへに、靜かに眠りましますとおもへは、識らず一聲、かゝゝと呼ひぬるも、いかで答のあるべき。盆には亡靈の來まずと雖、現世のはれ〳〵は其姿は知べくもあらじに僅人生五十年、縱し百年の長壽を有つも、誰か一度は此石碑の主とならざるものはあらし。將墓の駒を立てたる樣に、目にあまる此墓碑の靈たるも、花の如き容貌にて、世に時めき玉ひつらむ、又東西に奔走**して、驚天動地の說をなし、世を益し、人を救ひしもおほからんも、そ**

れとて今後知るよしも、なく虫の音か松風の、颯々たる聲より、外におろことなし。人間萬事此石碑を得んと、朝夕にあせるのみと、身を起して生ける人に云ふ如く、明日また詣てませうと涙をおさへて、墓前を去り、進まぬ足をすゝめつゝ、日没に家に還りぬ

肥後　佐々有隣子

今日は盂蘭盆の日なれば親族集て、祖先從四位下侍從佐々陸奥守成政朝臣の御墓は攝津國尼ヶ崎の法園寺に在と承る、成政公の嗣少左衛門尉成義君が、寛永九年十月細川忠利公、肥後移封の時、隨從して菊池郡城野郷に領地を賜へて居邸をかまへられき。寛永十五年二月肥前有馬の舊城に賊徒が籠城せしを、攻落して勳功をあらはし給ひぬ。成義君身まかりたまひぬれば成義君の嗣、次郎右衛門尉家友君は領地の黒蛇山の頂をはらひきよめて厳しく埋葬なしたまひぬ。明治の御代の今日にいたるまで墓詣は式のごとく祖先より歴代の定例によれるなり。家友君の嗣を豐隆君といひ君の家督となりたまひてよりは、大きに墓詣式を改良なしたまひぬといふ。成政公の御墳墓の法園寺に在をも此の黒蛇山より遥拜なすべく大石碑をぞ建たまひける。豐隆君の嗣を豐重君といふ。細川侯の奉行職となりたまひて、國政に參與せられしとぞ、御石碑いと大きなり豐重君の嗣豐信君ば國侯の鐵砲頭を勤仕せらる。豐信君の嗣は政信君の嗣豐友君政滿君豐次君政陵君にいたりぬ。君は妾が祖父君にて維新の際には、南關戍兵隊長をつとめらける。七十餘歳のよはひかされたまひて身まかりたまひぬ。おないかめしき祖先の君たちの奥都城かも。いとなつかしき祖父君の御墳墓なるかな榊一枝供來て、かくなむ。

出征軍人の家族を慰問する文

地

下谷區御徒町三ノ三三　岡田柳子

暑さとみに加はり候折柄、かぞいろの君を初め、皆々様御障りもおはしまさず候や、御良人様遠征の途にのぼらせ給ひてより、早や廿日あまりにもなり侍りぬ、國の爲君の爲、仇なす敵を打なびけ給はんと、勇み進みて出でたゝせ給ひし御俤、今も目に見ゆる心地いたし候を、まいて御許様の御心の中や如何におはすらん、そも軍人のならひとて、一度戰場へ赴き給ひし上は、元より生還期すべからざるを、思ひくみ給ひては、明けやすき夏の夜も斷腸の思ひせさせ給ふ事もや候半、まいて年老いませる父母君かつは幼きみ子達の上など思ひつゞけ給ひては一入御心いため給ふ事ならんとげに申上げん言の葉もわかずなん。さりながら此度の戰ひは歐洲に强國の名高き露西亞と干戈相見ゆるにしあれば、實に我國の運命のわかるゝと

ころとや申すべき、幸にも我將卒の忠勇なる、よく彼を挫きて、み國の稜威は、朝日の上る如く、輝き候事いとゞ嬉しく、日本男子と生れ給ひて、かゝる未曾有の戰ひに臨ませ給ふ御ほまれ、此上の事や候べき殊に御心をゝしくましませば、天晴れ目まざしき御はたらきぶりのやがては承り及び候ならんと、指をりかゞなへ待ち居り候、あはれ君よ、幸に御心慰さめ給ひて、御家の業、専一に勉めさせ給はむ事を。

人

吳市愛宕町八七六控田方
和住千鶴子

富士のねの雪さへ消ゆる此の頃のあつさに、いかゞはおはしますらむ。こゝもと皆恙なう侍れば御心やすめ給ひてよ。さても、こたびのみいくさは、げに千載一遇の事とて上は竹の園生の公達より、下は薪こる賤の男に至る迄、御國の爲に身を捨てゝ仇なすゑびす討つときくに、せの君には先たちて勇ましう首途し給ひしとなん。主のおはせぬ御宿もりいかにさびしくやおはしますらむ、推し量り參らせ候。さし過したるやうには侍れど、君國の一大事に侍れば、御心をゝしくせの君に後顧の憂を殘さしめ給はざらんやう願はしうなむ。連勝のみいくさなれば、やがて目出度まちつけて、勇ましき御物語をこそ聞き給ふべかめれ。今頃はいかにますらむ、夜風つめたき滿州の荒野原に、しこ草わきて露營の夢をぞ結び給ふらむ。かくもをゝしきせの君のおはす君、いと／＼羨み聞え侍る。此の折の物、松の葉とかや、しるしばかりになん。笑ひ納め給ひてよ。なをも、せの君の幸をば神かけて祈りたまへや。あなかしこ

薩摩 松原みれ子

御兄上様御事、過ろ何日いよ／＼御出征の途に上らせられ候由、御首途のありさま、御細々との御文にていと／＼御勇ましう拜し參らせ候千古未曾有の此度の戰爭に、殊にも御名譽なる御任務を帶びさせられての御出發、あの世におはす父上の御滿足、さこそと嬉し涙に咽れ申候。是と申すもみな母上日夜の御丹精父上の御志つがせ給ひて、雄々敷御教育遊ばし候結果、み國のため御家の爲めに、うるはしき大和心の花咲きしに外ならず候。されば晴れの戰場に、高きいさほをあげさせられむは、いかばかり母上の御心を滿足し參らすべくとは存候へども、御男子とては只御一人の御兄上の御事なれば、折には異境の空の

つゝの音、つるぎの光りも御夢に入らせられ候半かと、おしはかり參らせ候つれ〴〵御孝心深き御許樣の御事なれば、申上るまでもおはさず候得共御留守中一層御孝養盡くさせられ。目出度御凱旋の時を御まち遊ばさるべく候。當地名產のかつを節あまり少々にておはづかしく候得共勝ちを祈りての心御目にかけ申候。別に近頃出版されしとて都の妹より送り越し候、此書なかには面白きふしもおはし候得ば、母上御つれ〴〵の折の御なぐさみにもと、御送り申上候。猶兄上より御便りもおはし候へば、御もらし下され度まち上まいらせ候　かしこ

肥後　徳永廣子

御兄君の御出征の後は、をりをり御尋申さまほしく思ひしも、事しげきがまゝに心にもなく、今日と暮れ、明日とすごし、うちたえがちなるをあしからずおぼさせ給ひてよ。ざるを御留守居の御さはりだになきは、こよなき事とぞんじ奉る。日ごろ愛國心にとませ給ふ御家におはしませば、御兩親樣はじめ皆樣のいさゞよき御かくごのほど、諸人のかんじ侍るを、如是あつさはげしく侍れば、御兩親樣は申までもなく、御妹の情としていかばかり御心をなやませ給ふらんと、御心のほどしのばれ侍ることになん。さりとて海陸とも勝利うちつゞき、四海にとゞろく大日本軍人中にも、御兄君の御氣象として、御書狀の面にあらはれ侍る。かの南山の陸戰などには、いざゞよくはたらき給ひしよしに侍れど、露負傷だも受け給はぬは神の守護のおはしましけんと、あつぱれなる御ふるまひ、げにげに大日本勇士のやまとだましひ、光輝くことゝ御うれしくぞんじ侍る。かくも御心はやらせ給ふ御心には、ひきつゞく皇軍に、勳功をたて給ひ、君國のため海陸のたゝかひこそあれ、彼の廣瀨中佐を鑑にて、軍神と崇め祭られ。御凱陣のをりには、旭旗のもとにきらめく金鵄勳章かざらせ給ふらん。國のほまれ、御家の名譽、いかばかりをしはかり奉る。かゝるいさましき軍人を、兄君に持せ給ふ御身は、いとゞ御羨やましくこそ覺えはべれ。かへすかへすも御留守中、御すこやかにて、をりをりの御玉章まちいり奉るになん。あなかしこ

肥後　佐々有隣子

陸軍少尉猿木眞藏夫の君は。海路遙けき波濤を渡りて。砲煙にむせび彈雨におびて。朝夕晝夜の別ちなく。その率ゐ給ふ分隊をはげまして。わが大君に忠義をつくしたまふその御心の中はいかならん。ましていはんや、家族の人々の心つくしぢの空に、家庭を守りて國家の爲につくしますらんとおもひ侍れば。妾ごときの賤山住の身にも、心の栃をつきたてて、夏の照日さかりなも、征露軍人のはたらきをおもひまゐらすれば、なか〳〵のれぶりすべき時日ならねば。山住の伏庵を立いでて猿木少尉君の御館を訪ひ奉りて御消息を伺ひ奉るになん、あなかしこ。

前橋　竹野ふじ子

家に在す事稀なる父君の暇ありとて、今日は我留守居なすべければ、好む所へ行けかしとのたまふまゝ、何處やよしとゝつおいつ、遂に叔母君の許訪ひ侍らんとて出でける。杖柱共賴む我子の出征せし後嘸や淋しく思すらん、いたつきはあらせられずや等煩ひつゝ道すがら好み給ふ物、聊か調へて、急ぎ行く、叔母君は早や迎へ給ひて、よくこそ來つれいざ上りませと心弱き樣はいさゝかもなく、何かと語り續け給ひて、傍を指し是ぞ彼の子に送らんものと、先頃より縫初めし襯衣なるよと示し給ふ、さらば心置きなく續け給へ、妾も手傳ひ侍らんにと申すを、など去る事のいるべき、さらば我は始めむ程にくつろぎてよと云はれつゝ、針運び給ふ、そが傍に、新紙ひろげてよみ參らせつゝ、又折々は針に糸通しなどしまゐらすに、いたく喜び給ひぬ、やがて日も西に傾きければ、又來ん時を約して辭し去りぬ、あはれ天津日の本に生れし國民は若き老たる、はた女迄心を合せ、大君の邊にこそ死なめと、許す心の健さよ、かくてこそ後に、心を殘すなく、天晴れ功を立て、譽を千代に殘し得るなれ、げに賴もしき限りにこそ。

東京　石川馨子

御文承りぬ、炎暑の折柄、御許樣御變りもあらせられず、御壯健に渡らせられ、御目出度御祝申上候、さ候得ば御主人樣には、暑さ障りもなう

御勇敢某山の激戰の折には目ざま敷御戰ひ遊ばされ、身に一彈の跡もなく、御無事に某山占領遊ばされ候由、御愉快如何斗と皆々御噂さ申上、目出度存參らせ候、此後とも御身恙なく益々御成功の程祈上候、御留守御一人にてさぞ淋敷御出遊ばすならむと存參らせ候、されど旦那樣の御務めの程思ひ玉はらば、淋敷などゝは申も御恥しき事に候、能く〳〵御身御大事に遊ばし、やがて戰勳いや高く歸り來まさむ日を樂しみに御待ち遊ばしたく候、たゞ〳〵御身御大事に御留守遊ばしの樣祈りまゐらせ候。こなた相變らず一同無事に候まゝ乍憚御安心被下度恐々可祝

肥後　秋吉輝尾子

あら金の土さへさくといふ此頃のあつさを、御一家樣にはいかに御しのぎ遊ばし候にや。其後はたえて御無音のみにうちすごし候へども何卒廣き御心の中に御用捨なし下され度候。先日よりは、夫君御名譽の征露の途につかせたまひ候よし、此頃の陣營はいかに御くらし給ふにや、さためし炎天近く攻めよせたまひしならん、日頃の御勇氣にいやましたまふ御事と存上候軍人のならひなれば、かゝる遠征に困みたまふべき事のあるべきやと思ひまゐらせ候へども、御留守中は御元樣の御一人にて御子樣の御教育かれこれさぞかし御心づかひのほどゝ察し上候。かれて貞妻賢母のほまれ高き御事と、御兒樣方の御成績すぐれさせ給ふと承り感入候。申上にも及ばず候へども時候がら御身體の御保養祈上候、拙筆にて御伺申上候かしこ。

東京　松澤まつ子

未だ一度も御目もじ致さねに、いと失禮なれど文さゝげ參らせ候、扨此頃新聞紙上にて承知致候へば、御主人樣此度の召集に應じて出征し給ひし御後には年老ひ給ひし御双親や、幼き御子達のおはすを、あなた樣には雄々しくも身をくだかれて家業を勵まれ、親御を養ひ御子達を敎育し給ふとの御事、深く〳〵感じ入參らせて、今更に我國の武士につれそはるゝ內君の世にも節操高きを悟り申候。ことばざにも苦は樂の種と申事の候へば、やがて美しき花咲く春に逢ひ給ふはうたがひもなく候へば、皆々樣には時節柄御身いとはせられいやが上にも御心つよく御主人をして內顧の憂ひなからしむるやう、つとめ給はむ事を神かけ念んじ上參らせ候。

次に此品はいとあやしけれど、御子達の御料にと手づからつくり候まゝ、なめげをもかへり見ず御めにかけ候。かまへて御心にかけ給はで御納め下され候はゞ此上なき幸に御座候。何れ其內に伺ひて、いろいろ慰め申度候へ共取あへず斯くなむ。

北海道　小山かく子

○○樣御遠征後、御家族御一同樣の御淋しき噂かしと御察し申すになん。されど自ら千軍萬馬の間を馳驅する身となりては、他所目程の苦しみにてはよも非じ、あるは思ひ及ばぬ愉快もあるべし。殊に○○樣は大の負け嫌ひなれば目ざましき武功の新聞紙上に歌はるゝ名聲を耳にするの日も遠からじに。

御留守中み國のためと思召されてか、去年にまして田畑の蒔きつけにもみ心を掛けさせられ、さしも廣らかなるみ園に芽生ひ草の一本だに見えぬ迄、潔き美しのみ心もて留守し給ふ奧方こそ床しけれと傍へきゝにし我まで人ごとゝも覺えず涙ぐめば、傍に居給へし父も「かくてこそ大和武士の妻なりけれ」と微笑れ申候。

あはれ雄々しの君よ、滿州の野に銃とる人のやがては皈りこん晴れの日まで、すべてを攝理の神のみ手に委ねて、變りなき日々の業にいそしみ給ひてよ。

肥後　千知波楢子

こたび第○師團に召集せられて、出征の首途につきたまひし將士は誠にめでたきことのかぎりなりかし。されば皇軍のむかふところは一つとして、連戰連勝の快報に接せぬはなくうれしき事のかぎりならずや。たとへ夫君は、名譽の負傷をかふぶりたまうとも、家族の人々は、いさゝかもうれひたまはで只一筋に老幼の人たちをいたはりはぐくみて平和の局を結ぶまで、いそしみはげみ、松のときはの色かへず、みさほを守て、おはしなば、我天皇のみいつ輝やく、朝日の御旗をばウラルの

山の頂にひろがへしつゝ、皆ともに萬歳の聲にさはしく、凱歌を唱へてかへりたまはん日も遠きにはあらざるべし。あないさましき家族たちの心のほど、たのもしくおもひ侍りぬ。

肥後　猪原みさを子

荒鷲の上みぬ振舞は何れの國人も、悪まぬはなけれども、別して我親愛なる隣國の支那朝鮮を蹂躙して、剰へ我帝國を輕蔑するは、誠に堪忍も用捨もなりがたく候處、愈つ頃、征露の大勅下りしより、雲霞の勇士出征相成、海陸共に豫想外の連戰連勝にて、戰ふ方面悉く相成候につきては〇〇樣も御出征の由、一人子の御事なれば御名殘りも左こそと推量り參らせ候へども、大君の爲め御國の爲めには何をか厭ふべき、實に今日の軍人は國家安危の大任を有せられて候事に候へば其家族の御名譽申すまでも無之唯〻、終極の目的を達して、目出度御凱旋待被爲候樣乍失禮精々御注念の程祈り〻かしこ

大阪　黒田代音子

雨後の月かげ波にくだくる絶景を見るにつけ、涼しく通ふ磯の松風の音につけ、そゞろ偲ばるゝは萬里遠征の人々の上にこそ、腥き風面を拂ひ、血汐の雨征衣をぬらす戰場にあるみいくさ人が、太刀を枕の光景を思ひうかべては胸むすぼれて、安らけく起き伏しさへ心のまゝなる身のいとゞ恥しく夜すがられもあへず、明せし夜半もいくたびか圓滿なる家庭の中心たる兄上樣御出征の後はさぞなみな〳〵樣御心淋しう思召さむさりながら世には大君の深き惠の露に生ひ立ちながら、そが萬一をだに報ひまつらで、甲斐なき人生を終る人だにあるものを、朝日に匂ふ敷島の香り床しき國家の干城となり給ひて、倭君子國の威風を外つ國に發輝せしめ給ふみいくさ人の貴さよ。げにこの度のほまれある御出征は、遠き神武の帝より絶へてためしなき御軍とや朝日の御旗靡かへる處なびき伏さゞらむ民草もなく、いかなる荒野の大鷲も、昔ながらの神の勢に打ち向ふ術なく、兄上樣にもやがて金鵄の光りまばゆく御凱旋あらむと期してまち侍るになん。かれて申參らせし如く叔母にしたがひ此浦に移りてより、はや二週松はみどりに砂しろく、浪間に見ゆる島山のいかに樂しき眺めなりけん　あはれ御心結ばれし時一日の清遊を試み給はずや。かしこ

東京　瀬々方　とし子

大命を蒙りいと勇しく御出征なされ侍りし後は、いかばかりさびしさいやまし、心もとなく朝夕を御身の健やかに、大君のみ恵に報じかりにも病などながらまほしと神佛に祈りまつるなど、み心の安まり給ふ時とては、かの短かきあしのふしの間もあらむや。まして彼の地は氣候惡しく、土地いと異なり侍れば、み心の中さこそと御察し申上まゐらす、かゝる國家の一大事にのぞみては、勇ましく從軍致され、銃の音劍の先きを事ともせず、偏へに大君には忠を盡し、外國には大和武夫の功績を輝かし勇ましく御凱旋遊ばさるゝは如何に目出度御事には候はずや。たゞ〳〵御子樣方のいませば御身御大切に御いたつきなどいたさぬやう千萬祈るになん。あなかしこ

埼玉　田中花子

薄き十三夜の月は、今し松をはなれて、門の鬼瓦にはかなう影を轉じ候。今夕珍らしう澄子の君渡らせ給ひ、御物語の末、始めて其由承給はりつ。

御もと樣にはまたしても去ぬる夕べより、伏戸にこもらせ給ふとか、俊雄樣御留守、さぞや萬つ御心遣の程推し參らせ候、殊には昨今の暑さに御氣分障らせ給へるも御尤には、雨後の暑熱のはげしさは、松杉に圍まれたる淋しさ吾家にてすら、九十度を越え候へば

俊雄樣三十里堡より御差出しの御手紙、月出る頃入手致し候、いつもながら御勇ましの御言葉、添へて御封入の繪端書、南山攻擊中の御自分とやら太刀拔きかざして指揮したまふ御姿凛々しくも雄々しとも、言葉には盡しがたく候十年振の田舍住ひ、何かと面白う珍らしきがまゝに、日々着せし此日記何の風情も候はねど、御こもり居の御慰さめにもやと、御恥かしさ忍びて、御送申上候又此菓子おかしげなるが田舍の名物とやら、名は松の月となむ申す由、御笑味下されたう。

夜風や立し小窓に輕う筵ずれの音、何とぞ御胸の思ひ、此花人も分た

せ給はらば、いか斗嬉しかるべきにあなかしこ

伯耆　山崎國子

今や征露の戰、いよ〳〵酣なるの時、さきに御召集の榮を得られ給ひし御主人樣には、此度び出征の途に御のぼり遊ばし候由、皆々樣の御心配さこそと御察し申上げ、日々の號外の聲を聞かるゝごとに、御胸のとゞろかせ給ふらんと、眞に〳〵御同情に堪へ得ず候、さりながら御承知の如く、もとより正義公道を以てせらるゝ此戰、畏くも大元帥陛下の御稜威と忠勇義烈なる將卒とによりて、連戰連勝向ふ所に敵なきの有樣に候へば、多くの大々的快報に接するの日の遠からざるべく存じ候、されば此際敵地に入りて勇猛なるはたらきをなさるゝ御良人樣は啻に御一人の御名譽のみには止まり申さず御家族御一同樣のこよなき御名譽たるは勿論の御事に候

たゞ此上は御凱旋の日の一日も早からん事を希ふのみに御座候、先は拙筆ながらもてかくは申上げ候かしこ

短文

噫此の思ひ

愛媛縣　和氣勝子

五月雨のしとしとと降り出でて、杜鵑血に啼く今日此頃さらぬだに旅の宿はわびしきを、ましてや思ひ出多き此の身一入悲しさのいや增して、思はず涙の落ちくるこそ是非なけれ、あゝ言うてかへらぬことゝ思うてかひなきことなれど、兄君征途に上り給ひしより、間もなく我が懷かしの母君は五十有二を一期として、哀れ果敢なくも空しく露と消へ給ひしに兄の君には斯かる事露知り給はず、門田の守に餘念なく其の日其の日を恙なう送り給ふとや思召さるらん、もしや運強くおはしましてめでたく勳功を立て歸り來まさん時かくと聞かれなば、如何に驚き悲嘆の淵にや沈み給ふらむ、嗚呼其の事を思へば腸も斷たるゝ思す、いでや、こをつぶさに知らせまゐらせんか、否、折角勇氣滿ち滿ちて出で立たせ給へるものを、誰れしも人情の自然、我母の失せにし由を聞きては、悲しまざる者やあるべき、今斯かる事知らせまつりなば爲め勇氣を幾分にても削ぎまつらんは心ならじ、のふ兄君よ家の事は少しも御心にかけさせ給ふな、父君は六十路の坂を越え給へど我れも大和の女郎花、力のあらんかぎり、家の業を助けまゐらせん、進み給へや君の爲め盡し給へや國の爲め、あゝ言はで忍べる心の苦しさあゝ如何にせん此の思を

初夏日記の一ふし

石川縣　齋藤三枝子

朝

とく起き出でゝ見れば昨日のしめりがちなりし天氣にひきかへ日はきら〳〵として大屋根などてらし雀はチウ〳〵とさへづり隣の家にては早や讀經の聲きこゆ内に入り蠶はいかにと見ればうれしや今日は皆まゆをつくり居たり去年もよくは出來たれど今年はひとしほ糸の性質をよくせんと母君とわらはと苦心したるなりあはれ蠶よ宜くなれかし

昨日まで道行く人は黑地絣の衣をつけ居たりしがけふは早や白地の單衣とはなりぬげに月日のたつ程はやきものはあらじ去年の夏は妹を連れ共に手をとりかはし濱邊など涼しき風に誘はれつゝそゞろ歩みに樂しき事々語らひさまよひしをあゝ今はいろも香もなき苔の下にことしは淋びしくも此夏を過す事のはかなさよいろ〳〵の思ひはゆられつる折から親しき友の君來給ひてまたも憂ひは嬉しき方へとかたむきぬ

夜

日もはや暮れ果てゝ鳥のなく聲林の中よりかすかにもる庭の葉櫻の梢より淡く出でし月もやうやうかゞやきわたりしなりもあれ杜鵑の一聲高く名乗りすてゝ何處をさしてかとび去りぬ日の暮るゝを待ち兼れて螢狩にうかれ遊びし戀しの妹愛らしのいもうと今はいつこに如何なる夢をやむすぶらん扨てもいみじき思ひにのみふけりしおろかさよさはさりながら戰地におはす我が良夫や今宵はいかに過させ給らん

五分間の寫眞

北海道　小山かく子

空には薄墨で一はけ撫でた樣な雲が、南から北へ段々と廣がり、南風がそよそよと吹くので、筋向ふの風呂場の煙筒から吹き出す煙は、煤けた布を急流にでも晒すが如く、靡き乍ら次第に其尻が消えてゆくシグナルが下ると、男女數十名の乘客は、我勝ちにプラットホームに出掛けて、不規則な行列を作ると、間もなく滊車が着いたので、乘る者降りる者、西に、東に、大混雜をやつてる最中に『山形屋で御座い！』『旭館で御座い』の聲が『旦那御都合迄お召しなさい！』の聲と合してサ乍ら混戰の有樣である。

不意に合同の滊笛がピーと響いたので、滊車は靜に運轉を始めたが、客にあぶれた車夫の四五名は、力なさ相に、手ン手の車に再び尻を落ちつける。これが停車場前に於ける五分間の寫實である。

途上研究

麹町　石川綮子

洒落した單衣の愛らしい六七歲の稚子二人土手に草を摘み居る「妾が採たのを貴郎が取るんだもの貴君が先に御免なさいと言ふもんだわ妾も言つてよ」大人げな口振男の子は事もなげに「御免なさい」小女も「エヽ宜ッてよ御免なさい」男子は無心につまり五月蠅げに草を摘みつのべつに言續けるので小女は焦氣となり互に五六回繰り返されつ「モー宜！」小女の焦氣に反し男の子の一向無心に言放つ樣のおかしさ思はず微笑れつ後振り返りし時二人は既に草摘に餘念なし、今日我は男女性質の異なる點を研究した

さらば

下野　井上滋子

腕のなるを押ふるくるしさよ、我心は、戰地のあるほとりを、さ迷ふなど口くせにし給ひし叔父君の常にまさりて一しほ威風を添ふる茜のズボン、うでをまく幾重の筋、

我大君のいくさ人の其一人の雄々しき騎兵姿、

昨夜の夢の眞になりて、今朝召集の命を手にし、明日八時入隊の都合、愉快、コサック何のその、皆々健在なれ、云ひ終らぬに軍帽右手に庭石つたひ、ふみゆく靴音いさまし、

こゑさへ高く、勢よく、垣根の外より、さらば、いざさらば、

七夕祭の記

肥後　佐々有鄰子

今日は七夕祭の日なれば、師のきみの教子ども數多つどひて每年のためしにしたがひて式場をととのへぬ、かしこの林より葉竹の大なる根こし來て、下枝には梶の葉にねがひの言葉を記てかけわたし、上枝には、あかるたへ、てるたへ、荒妙、にぎ妙、なとりどり結つけて奉り、中枝には大和心の色ふかく染いでし糸を、いやかけにとりしでたるにさとふきくる風に、きらめく天漢の光目をいりてうるはし、床の間には、やとりの机を置て、神酒神饌を供奉り。かたへには種々の樂器を供ふる師の君は詞をほがらかに宣たまひ、をへつれば。各次に玉串を奉り再拜す。直會の御酒をたまはりて面ほてり、征露軍人の戰勝をほこりかに語る人もあれば、軍歌を調子おもしろく、風琴にかきならす女子もあり。年長の娘たちは、神前に供へありし、筑紫琴を取出て、天下泰平の表組の調子によりて、爪音たかく聲うるはしく、「天下太平長久に治まる御代の松風。ひな鶴は千年ふる。谷の流に龜あそぶ」夜更るをもわすれて宴席に侍りぬ。

短歌

時鳥　安藝　田坂迅子
ゆふ月のかげしにほへる栄のとになのりてゆくか山ほとゝぎす

山家　愛媛　和氣務子
君が代は深山の奥に住む人も戰のたよりきかぬ日はなし

伊勢國岩戸神社にて　長野悅子
ち早ふる神よのむかししのはれて此みやしろのあやにかしこき

友の女子美術學校に入學せしとき丶て　山梨　標武子
うるはしきこゝろの舟にさほさして爲しまの浦にあそふ君かな

二十三歳になれる人の南山にて名譽の戰死をとげさせ給ひければ　同　同
かくばしき香をは殘していさぎよくちりにし花の暮くもあるかな

潮下　大阪　池田英子
野に山に花みるよりもさくら貝ひろふしほひぞ樂しかりける

撫子　長野　せつ子
けさみれは庭のなでしこ咲にけりひと枝たをりてともにおくらん

都の友をおもふ　下野　井上滋子
なのしれぬ花はさけともしたはしき君のみ姿みぬそつれなき

山吹
つけきふれ浮ふ小川の岡きしのこかれにうもるゝやまふきのはな

いくさ　大和　栗山俊子
日のもとのいせのかみ風いまやふくすゝめや〳〵やまとますらを

かわず　東京　田中とし子
おぼろ月おぼろかすけき夕戸出にかわすの聲のたゝ何にとなく

操
うつろはぬ松の緑そ人の世にみさをし守るわかかゝみなる

遠征をおもふ　大和　栗山高子
みちもなきみちをわけてやすゝむらん仇をうたむのこゝろひとつそ

原なでし子
あはれにもつゆもちなからさきにけりあしたのはらのなでしこの花

ある聯隊にて鐵條網をはりて演習なすよしきゝて　相州　三好珍子
くろかねのあみのとりても時の間にうちやふられむ君かみ腕に

贈從一位北條時宗公　肥後　佐藤直子
いかならん海のみいくさきくむれも血しほなみたつ北の海はら

窓螢　肥後　鶴田貞子
きしふとき時宗きみかいくさには怨必烈もおのゝきにけん
しけりあふ若葉かくれの山窓は螢のかげも青くみえけり

社頭新竹　肥後　坂本豊子
夏ふかくなりにけらしも大神のゆには日にましゝける新竹

明治三十七年五月鎌倉圓覺寺の正五位下相模守北條時宗朝臣の墳墓に勅使參向ありて從一位を贈らせたまひしよし承りて　肥後　佐々有鄰子
あた船をくつかへしたる神風はやまとたけをかいふきなるらん

暑中友の許に　北海道　小山かく子

ハンモツクに身を横たへて詩集繙に心はいつかみそは近くに

贈從一位北條時宗公、　肥後　千知波橘子

黒船を濱にしづめしもの〻ふのいさをはいまそあらはれにける

雨中新竹　肥後　早田俊子

とひかはす人なきやどの五月雨に庭のわか竹ともとこそなれ

雨中早苗　肥後　秋吉輝尾子

さみだれにみとしろ小田は水深し早苗もわかすなりにけるかな

軍人　近江　阿部みさ子

ますら男かつくす心は美よしの〻其香も高きすめらぎの花

早苗　埼玉　町田喜子

千町田もうゑつくしけん野田山田あまた早苗のみちにすてたる

衣　東京　敷島うた子

たらちねの母か手縫のふゆころも重ねてあつきなさけをそしる

○

すや〳〵とうまひの中に笑ふ子の夢やいつこをたとりゆくらん

螢　埼玉　戸田折香

草ふかきいさゝ小川のせゝらぎに影をうつしてとふ螢かな

蚊遣火

賤の女かたくかやりひの立ちのほり月の光もかくろはかりに

螢　埼玉　川向章子

夕立の晴れたる後に日はくれてすたく螢の影のすゝしさ

ぬは王のくらきやみぢもたとれるはたよる螢のあれはなりけり

夕立すぎて　山崎女苑

つゆふくむ夏の日白く雨晴れて庭の青葉の風かほるなり

戰塲に於て創を負し人の讀める

さらは君されともおぼせ世のかきり東に出つる雲に我ありと

夏の海

もゆる如き夏のあつさのわすらるゝ淡路の雲の峯は雪ならむ

折にふれて

弟と父とをのせてろをとりてこの夏こゝの濱にすまはむ

ちぎれ雲

なやましき人狂ほしききみ手あらききても御歌のおもひあたりき

かげ二つ

思ひあまり月にぬひゆく松なみき追ひて濱邊に今二人なく

月かわらす

夢にねて歌の集よむ花のうてなくしき光にこまくらの暗

湖邊の夏

ゆたかなる比叡の頂日はてりて琵琶のみづうみ夕立すさぶ

海邊にものしてよめる歌のうちに　美濃　吉田澄子

濱しろくあしろ木こえてうちよ〻れる露にすゝしきなつの日さかり

日さかりをたな〻し小舟こぎよせて島のあふちの花をりにけり

友とりと母もろともに打むれて小貝ひろひし今日のたのしさ　長野　山本民年子

五雨月

夏木立しけれるやまの下いほにあなさみたれのふりにふりつゝ

未聞杜鵑

月影のかたふくまてにはし居してまてと來なかぬ山ほとゝきす

夏の月　長野　田島みよ子

人ことに秋におもひをよすめれとおとらましやは夏の夜の月

今様

花あやめ

あれたる庭の古る池に
とひよる人のすそを染
時しきぬれば咲いでゝ
むらさき匂ふ花あやめ

下野　井上滋子

夏の夕

玉の簾に月さえて
賤が伏家は風なくて
琴の音涼しく聞ゆれど
蚊遣の煙に少女なく

水戸　細谷波留子

舞子の濱

千歳かはらぬひめ松の
白き眞砂子路かへり行く
梢にかゝるゆふ月は
あまが姿をてらしつゝ

京都　鈴木菫子

螢

夕すゞ風の吹渡り
あはれちりしと眺れば
草葉にやどる白玉の
露にはあらでとぶ螢

東京　竹好郁子

鑛夫

堅のさきを鶴嘴を
黄金、銀、わき出て
絶へず打振る様見れば
身に不自由もなかるべし

北海道　小山かく子

悔改めよ

星のきらめく苗代田の
心ひかれておもふ哉
なくかわすこそ一しほに
放蕩の君は今いかに

東京　田中とし子

麹町　繁子

君ゆるしませわが罪を
未明のいのりさゝぐ時
我はなんぢにつらかりき
サタンのまよひ夢醒ぬ

杜鵑

一聲高しほとゝぎす
雲間を出し夏の月
窓おしあけて見あぐれば
文の林に影入ぬ

東京　郁子

愛一夜

ながめ靜けきゆふ空を
流星とほくきえうせて
なきますらをの　ならん
ふきくる風に蛙なく

山梨　標武子

述懐

相生の　松に契りの
末までも　變らぬ中に
引うくる　今日の子の日の
かなしけれ　ふりかへしては
明け暮に　いもせの中は
一とせ三つ　身にふる川の
幾千々の　年なかされて
袖ひちて　あはれはかなき
富士の嶺に　積れる雪に
おくそこは　いつしかとくる
玉の緒を　長くもかなと
なぐさめの　たれともなれと
かづく／＼を　みまへほしさに
我せこを　力とたのむ
とにかくに　よしや世にふる
ふみわけて　かしこき君と
數島の道

深みとり　幾萬代の
君いはふ　千代のためしに
ひめ小松　茂らぬ園ぞ
人しれず　袂をしぼる
へたてなく　契りし年は
ふりいにし　なほこのうへに
ふりつもる　雪や時雨に
身のうさを　おもひするがの
ことならず　深きこゝろの
日もながく　おしからざりし
いのりつゝ　せめてこゝろを
朝　夕に　三十一文字の
ながらへて　杖はしらとも
ちりの身を　思ひやりてや
かひあらば　敷島のみち
もろともに　いざやふみゝん

三十路にも今一とせとなるみ潟おのはによする波のかずかな

常陸　栗原はま子



○皇孫殿下の御近狀

鍋島侯爵夫人迪宮淳宮兩皇孫殿下の御機嫌伺はんとて麻布狸穴なる川村伯邸に參向せられけるに兩御方は御機嫌斜ならず夫人に向はせられて「喧嘩しやう〳〵……鍋島捕虜になれ」と仰せあり、喧嘩とは戰爭の事を意味し給へるなり夫人は「イクサを致しますれば容易に捕虜にはなりませぬ、アナタ樣先づ大將にお成り遊ばせ」と、申上たるに「大將は嫌ひだ兵隊になる」との仰に「ナゼで厶いますか」と尋ね上れば「兵隊でなければ働らくことが出來ぬ」と仰せありし由まだいたいけなき御年ばい乍ら畏くも有難き御心掛に夫人も思はず感涙に咽びけるとなん

○内親王殿下紀念旗を御覽はせ給ふ

仁德いや高く渡らせ給ふ常宮周宮兩殿下が曩さに芝區三田君塚町外十四ヶ町の町民へ御下賜金あらせられしかば町民等は此上なき榮譽とし是れを以て各町一個の軍旗を模造し長く町中の紀念品としたるが兩殿下は此事を聞し召して其旗を御覽遊ばされたき旨仰せ出され近侍の方より御旨を町民總代に傳へしかば一同は益々有難き御仁旨を體して過日重立てる者二百餘名禮服着用して君塚町に勢揃ひを爲し新調の軍旗を眞先に立て高輪御殿に參候せしに兩殿下に

は親しく御玄關まで出御遊ばされ御機嫌殊に麗はしく寺内陸相の揮毫せしてふ君塚町の軍旗より順次御覽遊ばされ一同の者に健康にして各々職務に勵む可き樣御令旨ありしかば一同感泣にむせびつゝ音樂隊は君が代を吹奏し町民は等しく兩陛下及び兩殿下の萬歲を三唱し奉り了て裏門より順次退出し華頂宮殿下の御邸に至り同宮殿下の萬歲を祝し奉りたりと云ふ申すも恐れ多き事乍ら何時もながら有難き兩宮殿下の御心にこそ

○寄附の腹卷六千三百枚　先に大山侯爵夫人を始め女子英學塾長津田梅子、新渡戶博士夫人等の發起にて出征軍人に衞生用毛糸腹卷を贈與するの企をなし大いに內外女流の賛同を得て彼の米國公使グリスカム夫人の如きも馬車の中にて自ら之を編まるゝに至り又全國女學校生徒よりも多分の寄附ありたれば總數豫定よりも超過して實に六千三百枚に上りぬ而して他に二千五百個の寶丹を寄附する者ありたるをもて之を有丈け腹卷に縫附け五千五百枚を陸軍省恤兵部へ百枚を病傷者用として旣に夫々献納の手續に及びたりと云ふ戰地に在る貔貅の如何に嬉しく人人の情を汲むやらんと思へば爽々しき心地ぞする

○戰爭と婦人團體　開戰以來我國婦人の直接間接に軍國の爲め斡旋盡力する實に驚くべきものあり中にも愛國婦人會の如きは日を經るに從ひ愈々盛大を來し成績も亦良好なるにぞ總裁閑院宮妃殿下にも殊の外御滿足に思召されかくては同會當初の希望の如く婦人界の赤十字社たる實を擧げ得るに至るべしとて更に擴張を企圖しつゝありとのことなるが啻に同會のみならず各種の婦人團體も同樣の好成績を呈し居ると云ふ

○大阪の篤志看護婦　大阪の重なる官吏富豪等の夫人令孃が百八人組合を拵へて看護法を學べるもの即ち日本赤十字社篤志看護婦人會大阪支會であつて夫は無論傷病戰士に同情を寄せんが爲である、退役軍醫好本忠璋氏を講師として五月六日に業を始め六月二十九日迄隔日に丁度二十八回の學習で一通りの

終了を告げた、會員は十七八の壯い人から六十を越えた老夫人に至れるが皆中々熱心で雨でも風でも委細構はずに出席し、其上此頃では梅田通過の將士の綳帶交換にも出たり豫備病院を訪問したり尙戰死者の葬式を送つたりするから其忙しさは尋常で無い、中には殆ど家事を顧みずに奔走する有樣ぢやさうな國家の爲とは言ひながら實に感ずべきである、綳帶の交換抔は時に臭氣もあれば不潔もあるが今は頓着なしに親しく其患者に接觸して居る、兵士の中には後から彼が知事、市長の奥さんぢや住友、鴻池の御寮人ぢやと聞いて喜ぶさうなが如何にも尤もの次第である、講師の好本氏は明治七年征臺の役から引續き各所の戰爭に出たが二十七八年の役北白川宮妃殿下總裁の下に同地篤志看護婦人會の組立てられた時講師となつた人で、今は醫を廢め神戸の別墅に閑遊して居るのを奮つて此任を引受けたものなさうな講義は生理、解剖、衞生の學、藥品の使用、綳帶卷等で會員の學力に不平均があるから成る丈通俗に話し又綳帶卷の實習には少年六名を連れて來て其用に供するのである、會員中には二十七八年の當時既に篤志看護婦となつた人もあり又始めて世間へ顔を出す人もあるが今度の學習で總體に餘程社交の人となつたとのことである、第二回の學習は七月十日からで結局五回計五百人を造る見込であるさうな

○ウヲールトン夫人の同情　麻布區一本松町十九番地に住へる英國人ウヲールトン夫人は四年程前故ありて夫ウヲールトン步兵大尉と別れて本邦に渡來して今の處に寓居を卜したる以來常に心を慈善事業に用て此種の事に少からぬ金品を義捐したるもの一にして足らざりしが殊に今回の時局に關しては滿腹の同情を出征將士の上に寄せ其身も東京豫備病院に篤志看護婦として出席し日々綳帶卷の練習を怠らざるは云ふ迄もなく目下澁谷三宅坂飯田町の各豫備院に在院せる負傷者に何か贈品して其鬱情を慰藉せんと思立ち知合の日本人にも相談したる上同じくは何か珍らしき物をと心掛けて遂に亞米利加オレンジ

を贈る事に決し態々横濱に赴きて食料品商レーンクロフオールドに尋ね合したる處到底早急に千五百個は手に入り難しとの事ゆゑ直に亞米利加に注文せしめたるもの丶其着荷までは早くも六週間の日子を費して如何にも待遠しければと更に檸檬をも注文せしめたれど是とて三週間を要すとの事に取敢へず龜屋に夏蜜柑三千個を注文したる上去月第一の月曜日に先づビスケット二千包を贈り火曜日に前記の夏蜜柑三千個と砂糖百斤を贈り夫より二週間後には檸檬三千個砂糖二百六十六斤、其又三週間後には亞米利加オレンジ千五百個カステーラ千五百包を寄贈する筈なるよし

○マッギー夫人の書翰

廣島豫備病院に勤務するマッギー夫人は左の意味の書翰を松方赤十字社長に寄せたりと

肅啓愈々御淸適奉賀候偖私共の愉快なりし廣島への道中最も興味ある現今宿舍の狀況病院執務の開始などにつき小澤男爵より委細御報告申上候同男爵より御通知これあり候ひしが其後次の二件に分別して異狀なく勤務致し候まゝ御安心被下度候

一　十號室勤務のケメル孃は手術室常務となりしこと

二　五號室に於ける勤務時間を變更せしこと

午後一時より翌朝六時迄米國看護婦一人、日本看護婦一人

朝六時より午後四時迄米國看護婦一人、日本看護婦三人

朝八時より午後八時迄米國看護婦一人、日本看護婦二人

第二項は私共の申出により五號室に限り試驗的に實行致し居り候ものにて午後一時間休憩ある外他はかひがひしく立働き居り申候

病院船宇品着港の節藤田軍醫部長の深切なる案內によりくわしく拜見仕候處萬事よく行屆き居り實に感服の外無之候歸宅後看護婦達に申聞かせ候處何れも是非同船に於ての勤務を致し度など申出で候就ては甚だ唐突の義に候へ共若し缺員も出來候へば次の條件のものに御許諾被下度御願ひ申上候

一　食事共に日本看護婦と同樣にてよろしき事

二　一同一人にて一二航海の外他の者と交迭して全員に行渡る樣なすこと

尤もこれは私共よりの無遠慮の申出でに候へば若し事情上甚だ御困難の點もおはし候へば御遠慮なく御斷り被下度候毎日病院を見舞ひ候が軍醫の手術の巧みなることは驚くの外なく一行のものに對しても種々の便宜を與へられ看護婦人達の御親切なる此に一同の深く謝する所に御座候閣下御來廣も近くこれある趣一同鶴首御まち申居候

尚森川孃も親切に通譯の勞を執られ一瀨控訴院長も非常に懇切にして巧みに佛語を以て語られ若し病院並に赤十字の事に關し何等御申出でがあらば御取次申べくなど語り呉れ種々便宜を得申候まづは右まで餘は後便に申述べく候敬具

○軍人家族救護事業（內務省調査）

◎近世救濟制度の理想

窮民救濟制度の如何は國

民生活の發達に至大の關係を有す是れ泰西各國が其利害を攻究して已まざる所以にして既に市俄古に於て慈惠事業に關する萬國會議の開設せらるゝや救濟の業は其本職業と教育にあることを反復唱導し竟に其報告の冒頭に於て之を特筆するに至れり救貧制度中最近の美制と稱せられたる獨國エルベルフエルド市の考案は一の受救者なからしむるを以て都市救濟行政の理想と爲し貧民査察制度なるものを新設し篤志家を以て名譽職査察員とし各戶に就て親しく勞働貯蓄其他家事衛生の事を敎へしめ救助を受くるに先ち之を自營の良民に善導するの法を盡せり刻下我國の急務たる軍人家族救濟の如き亦最も深く之れに顧みる所なくんばあるべからず

◎佐賀縣に於ける女子義勇團

救濟の要は主として生業を授くるの一事に在り然れども其方法に至りては各地狀勢の異なる各人生計の同じからざる固より一律を以て之に擬すべきにあらず其事業の舉否繫りて一に當局其人に存す今之を現時の事業に求めて佐賀縣佐賀市に木山定生其人を得たり氏は一向宗の僧侶たり曾て日清の戰役に從ふ偶々一兵士の貧ふして且老母を家に殘せる者踣跙逡巡の狀あるを見て諭すに闔國の民舉つて後援と爲るあり又後顧の要なきを以てす兵士之を聞き欣然陣頭に立て猛進せり定生之を見て深く出征軍人家族救濟の忽諸に付すべからざるを悟り日露端を開くや卒先立て佐賀女子義勇團なるものを創設し軍人家族の女子をして襯衣袴下の作製に從事せしめ傍ら市中の空瓶、襤褸及提灯の蠟よりして卷煙草の吸口に至る迄集めて之を商人に鬻ぎ又軍衙に請ひ秘密書類を銷却せる硫酸の溶液を讓り受け以て其利用の方法を講ずるに至れり目下團員三千餘人勞役に從事する軍人家族六十餘人に及び曾て一般家庭の副業を賤める同縣の風習亦爲に一洗せられんとすと云ふ木山氏の業を起すや佛敎西敎各宗派の人に謀り公平坦懷以て事に當りしを以て一般の敬愛を受くる殊に深きものあり而して此團體は一切施與的寄附を受けず其利益の以て恤兵資金に貢献す

るの美擧ありと云ふ

〇群馬縣に於ける潛德巡耕隊　土地に都市村落の別あるに伴ひ之が救濟の方法に於て其趣を異にするを得ざるは固と其所農村にありて農業勞務の補助を與ふるが如きは殊に必要の擧たりとす群馬縣群馬郡中川村に於ける潛德巡耕隊の如き蓋し其顯著の一事例なり隊は居住の農民を以て組織し各自農務の一半を割て軍人家族の耕地を巡視し播種耕耘の時期なるも未だ耒耨の施さゝるものに對し協力耕鋤を努むるを目的とす且其業は專ら陰德の旨趣に基けるを以て家人不知の間に於て代て耕作を行ひ誓て家族の饗應を受け若は自から勞功を誇稱するが如き所爲なきを期せり其事業の執行に付ては農務の緩急に應じて部屬を定め本年四月以來之を實施せり

〇東京府下の生業扶助　農に於て耕耘補助の施設を要すると同く都市にありては亦自から特異の設備なくんばあるべからず東京市京橋區に於ける出征軍人幼兒保育所 並 麻布區に於ける家族授産婦人會の如き蓋し其一なりとす出征軍人幼兒保育所は軍人家族にして幼兒あるが爲め勞役に就く能はざるもの丶爲めに勞務時間中幼兒を預り若し又其家族にして生業を見出す能はざるものある時は尙ほ其紹介をも與ふるにありて朝勞働に赴くの際に於て幼兒を預り區內有志は其妻女又は下婢をして往て其保護の務を執らしむ此施設たる千八百四十四年佛人マルボーが勞働者の生業に便利を與へんが爲め創設したる幼兒監置制度に酷似し我國に於ては實に創始の業たり又夫の家族授産婦人會は時局の爲め軍人家族救助の目的を以て起り卒先生業扶助の主義を乘り軍人の留守婦女子をして師團より請負ふ衣服裁縫の業務に從事せしめ其賃銀を給與し以て衣食の費を得せしむと云ふ

〇備後福山に於ける義倉　終りに望んで特筆すべきは廣島縣深安郡福山町に於ける財團法人義倉の一事なりとす該義倉は寬政八年深津村石井武右衞門の將に死せんとするや遺產を擧げて千田村河相周兵衞なる者に托し國家有益事業を企て之に供すべきこと

を遺言せしに基因す同氏は該遺金を基礎とし數名の賛同を得文化元年に至りて福山藩に特別の保護を仰ぎ爾來備後五郡に於ける窮民救助を行ひ教育殖産の業を補助し來りたるものにして先年法人と爲りしものなり現今の義倉社長石井氏夙に祖父の志を繼ぎ溫厚眞摯最令望わり今や出征軍人の家族にして生活に困難するもの尠からざるを以て專ら其救護の任に當れり昔者凶荒に備ふるの義倉今は軍國に處するの義倉と爲れりと

◎公私救濟事業の統一　猶ほ茲に一言せざるを得ざるものわり即ち救濟事業統一聯絡の施設是なり大凡そ慈善に四大變遷わり個人的慈善は一轉して宗教的慈善と爲り再轉して市邑的慈善を發し三轉して國家的慈善を生ず而して今や此數種の慈善は相並立して互に錯綜紛亂す若し其統一と聯絡とを缺くに於ては獨り其効果を收むること能はざるのみならず亦實に徒勞と浪費とに終らざるを得ず第十八世紀の末に當り英國蘇格蘭の山中に博士チヤマールなる者起り時弊に視る所わり慈善事業の統一を唱導し自家の理想を先づ北教區のセントジョンの貧民部落に應用し著大の効果を奏せり是に於て彼の所論は大に時論を聳動し千八百六十九年に至り竟に博愛家デニソンの功に依りて倫敦に聯合慈善協會設立せられ始めて創業の盛を見るに至れり今回に於ける軍人家族の救護失業者の扶助の如き我國救濟制度に於ける一大創始の制なるが故に將來に向て其範を貽すは只だ此時を然りと爲す是れ其統一聯絡の事に鑑みざるべからざる所以也

○佐賀の女子義勇團　內務省地方局にては軍人家族救護の模範として佐賀市に於ける女子義勇團の設立を擧げたり同團の目的等に就いて聞くに陸海軍戰役中の家族及び戰死者の遺族を保護救濟するを目的とし其事業は市中に家屋を借入れて工場と稱し出征軍人家族の女子及有志の女子をして襯衣袴下等の作製に從事せしめ賃銀として每日其出征軍人遺族の女子に金十五錢宛を與へ而して其賃銀及工場費に充

つる爲め前記仕事以外に何ほ市中の空瓶、硝子片、襤褸を集め又各戸の提燈を掃除して蠟を集め或は卷煙草の吸口を貰ひ受け是等を相當の方法に依りて其收益を得るに在り、本部を佐賀市に置き支部を神崎郡に設け工塲の如きも已に分工塲を置き逐日盛大の狀况に在り目下工塲一ケ所に勞働せる出征軍人家族の女子凡そ三十餘名分工塲に於て從事せるもの又三十餘名何れも熱心に其業を執り事務員も亦極めて眞率に指揮し周旋の勞を執り着々成効の途に向へり而して其製する所の襯衣袴下等には皆義勇の二字を印す市民並に軍人子女は悅んで之を求むと云ふ本團各種の事業に依て生ずる收益中より賃銀及び諸雜費を控除して剩餘あるときは之を市の救護費に寄與するものとす本團の出來は佐賀市に一向宗の僧侶木山定生なるものあり甞て日淸の戰役に從ふ偶々一兵士來り告げて曰く余に多大の負債あり而して老母を家に殘せり恐らくは隣人の之を扶くるものなからん之れを思ふに氣怯れ進むことを得ずと之を聞き勵すに全國の民擧て後援となり決して出征軍人に後顧の憂なからしむるを以てす請ふ這般憂慮を爲すこと勿れと兵士欣然陣頭に進み猛鬪せり彼目前に其事を見て深く出征軍人家族救助の忽諸に付すべからざるを悟り本年の日露戰を啓くや卒先して佐賀女子義勇團なる本團を創設し之れを組織するに當りて自己の一宗派に關するの故を以て素志の遂行に妨げあらんことを慮り頭髮及髯を蓄へ勸奬誘說各宗派を糾合し遂に本團體の設立を見るに至りたり團員目下二千餘人なりといふ

○星野少佐と米國婦人　過般天顏に咫尺し奉りて天渡丸遭難の狀况を奏上したる星野工兵少佐は特に陛下幷に皇后陛下より御饌の御下を下し賜はりしに己れ獨り此恩寵を叨りにするに忍びずとて之を氷詰めとなし遭難者一同の收容地に持還りたるが少佐は新橋發の列車にて征途に上り恩賜の諸品は之を緩急車に託することをなさずして客車內に置き始終身邊を離さゞりき然るに其容量の甚だ尨大なるより恰も

同乘せる三名の外國婦人は斯るものを車内に持込むは鐵道規則に反し第一同乘者の迷惑なりと流石に口には出さゞれども其素振の確にそれと察せられしかば同少佐を見送りたる木下作業局旅客掛長は右婦人に對して少佐の事幷に携帶品の說明を爲し暫しその窮屈を忍ばれんことを乞ひしに婦人等は大に驚き斯る名譽の將校と同乘せるは此上もなき仕合せなりとて直に同掛長を介して少佐に握手を求め且つ佐渡丸事件に付き多數の非戰闘員に充分なる退去時間を與へず又相當の避難方法をも講じやらずして直に撃沈したる露艦の行動を非難し大に遭難者に同情を表し一行聯合の上自製の靴下を少佐及び其同僚に寄贈したしと申出でしかば少佐も厚く其懇情を感謝し其旨遭難者一同に傳へんことを約したるよし尙は此婦人は米國紐育州ボーター夫人、デラノ夫人及び神戸在住カマーシャ夫人にして本國にも其趣を通知し同志者製作の靴下を取集めて送附すべければ何とぞ遭難者へ轉送せられたき旨右掛長に依賴したりといふ

○將校夫人の美擧　第一師團附陸軍砲兵少尉古鄕榮吉氏の夫人スヱ子は少尉出征後横濱西戸部に寓居し戸部小學校の裁縫教師を勤め居れるが今回出征者の遺族の爲めに無賃にて衣類の調製に應ずる事とし一昨日來同校三四年生徒を指揮し川本多吉氏より出征者遺族に贈る浴衣二十四枚の調製に從事しつゝありとは感ずべき心掛けといふべし

○女丈夫の龜鑑　南山激戰にて戰死したる歩兵第十八聯隊第九中隊にて忠勇無双と呼ばれたる三河國渥美郡牟呂村出身歩兵一等卒大木萬太郎の母イシ(七十七)は五月上旬より病床にありければ萬太郎の實兄市三郎は母イシが屢々萬太郎の安否に付問ふ處あるも其戰死をば固く秘し居たるに何時しか夫れと感付き或日市三郎に向つて何も心配に及ばぬ故事實を聞かして呉れと云ふにぞ市三郎も今は包むに由なく萬太郎の所屬せる中隊長の書面扨ては小隊長の書面又戰友よりの書面等を取出し讀み聞かしたるに

イシは勢能く病床を起ち萬太郎の寫眞をば佛壇に安置し香花を供へ容を正ふして禮拜し扨云ふやう「俺の産んだ男の子も三人あるが今度の戰に一人も出られぬ樣の事では耻かしい事だと思つて居たに幸にお前が一人出て呉れたので喜んで居つた聞けばお前は天晴なる武夫の働きをして天子樣の御役に立つたソーダ之れでこそお前を産んだ甲斐がある結構な事だぞ立派な事だぞ」と繰返し〳〵て更に未練らしき行ひもなさゞりしかば此隣傳へて美談と爲し今政岡と呼びつゝありといふ

○感ずべき下婢の熱誠

山形縣山形市上町荒屋千五郎二女おやす(三十)は性質温順にして家に在りし際は克く兩親に事へ黑くなつて生活を助け居たるも一昨年より同町の久野知義方へ下女奉公に住込み主人大事と立働きしより同家にても又なきものと目を掛けしが本人の生家は極めて貧困なる爲め給金は殆んど兩親に貢ぎ僅か許りの小使錢を殘し置きたるものを少しも浪費せず貯へし金は漸く積もつて十六圓に達したれば嫁入仕度の足しにも爲さんと考へ居りし折柄去る三十日主人及び令孃の供をなし同地方を遊説中の愛國婦人會々員の野中彌知子の講話を聞き女史が愛國の熱誠に深く感じ軍國多事の際假令下婢なりとて國の爲めに盡す道は一なり此際帶などを購ひ居る場合にあらずと右の貯金を悉皆同會へ即納し特別會員に入會せりとは感ずべき志といふべし

○艦敵長夫人の問合

本年三月十日旅順港外の海戰に於て我が驅逐艦漣等が敵驅逐艦と舷々相摩して激戰し遂にステレクスチー號を擊沈したる事は已に其頃の公報等に見えて皆能く人の知る所なるが玆に同艦長セルゲーフ大尉の夫人は當時露都に在りて病褥に就き居たるに圖らずも此戰報を聞きて良人の身上氣遣しく一日も早く其消息の知りたけれど只生死不明とのみにて更に要領を得ざれば日夜悲嘆の涙に掻暮れ居たる折柄偶々東鄉司令長官よりの公報に同艦の乘組員中にて捕虜

となりたる者ありとの事見えたれば若しや良人も其中にあらんかと太く打驚び此程遙々我海軍大臣へ佛語にて認めたる左の書狀を寄せて其安否を問合せ來れり

閣下よ妾は悲しみに打たれ苦しみに沈みつゝある不幸の賤女を哀み直ちに佐世保病院に其の實否を御問合せられんことを希ふ

余が夫ステレグスチー號艦長大尉セルゲーフは去る二月二十六日旅順口の戰に從事せしがステレグスチーは破壞せられたりと聞けりわが夫の生死は如何にや

東鄕大將は驅逐艦隊がステレグスチーの全乘組員を救助せりとの報告を致せることも聞けり又其後佐世保病院よりの報告には其の乘組員は軍醫の熟練なる治療によりて皆全癒せりとも聞けり

此等の報道を聞ける余が喜びは如何許りなりしぞ余は直に佛國大使を經て電報を以てわが夫の安否を知らむとせしも大使は假令ひ日本に打電するも必ず日本政府は之を拒絕すべきを口實としわが願を斥けたりき

されど余は信ず日本人は決して愛情も知らざる殘酷者にあらざることを且つ日本人は捕虜を優遇し其負傷者と同じく治療するを見ても其仁心深きことを知らるゝなや余はかく思ひて遂に此書を呈するに至りぬあゝ余は煩悶心勞の二月を過しぬ閣下よ此の哀れなる賤女の衷情を察し給ひ一片の返答を贈り給へ

夫健全ならば文通は許し給へ若し捕虜との文通許されずとならば余は誓ひて文通はせじ只我夫の恙なく歸國し給はむことを一日千秋の思にて待たんのみ

敬虔なる閣下よ必ず一片の返答を賜はれよ

左れば海軍大臣も深く同夫人の心情を察し早速秘書官をして左の如く露國文を以て回答せしめたるよし

露曆四月廿九日附當海軍大臣閣下宛御問合せの件に關し左の件々御通知致候

三月十日旅順口の海戰に於て我驅逐艦隊はステレグスチーの逆遇自由を失へるを見て之に近寄りたるは同艦乘組員中生存者は極めて僅少なりしが此等も多くは海中に飛入り逃亡を圖りしを以て連は砲臺等よりの砲火を冒して其救助に全力を盡し稍や水雷下士ユリーユフ機關兵ノーウイコフ焚火兵ツシーニン及びヒーリンスキー丈けを收容することを得候尙ほ連はステレグスチーを曳行かんとせるも後者の破損に依り浸水甚し且つ露國軍艦の攻擊し來りたる等の爲め遂に之を放棄するの已むを得ざるに立ち到候

其他の艦員に就ては戰死致され候ことゝ想像致たるも戰鬪中の事とて事情充分明かならず其中には或は貴國軍艦の爲に救助せられたるものも可有之と存居候

セルゲーフ大尉の消息に就ては當方に於ては明かならざるものあるに付目下松山に收容中なる前記四名の者に俘虜情報局を經て問合はせ候處左の事實を得候ノーウイコフ、ツシーニン、ヒーリンスキーの陳ぶる所に依れば三月十日ステレグスチーは旅順口に近きたるに日本驅逐艦に其退路を扼せられ艇長セルゲー大尉は負傷者の先頭にして膝以下に砲創を負ひて倒れ第二彈を頭部に受け即死す屍體は艇中に殘留せりと又ユーリエフの陳ぶる所に依ればセルゲーフ大尉は同開戰の初期旣に足部膝下に砲彈を受け甲板に倒れ居たるも當時激戰中なるが爲め之を扶援すること能はず唯半眼を閉ぢ氣息奄々たる狀を實見せり自分は其後砲彈に中り海中に投ぜられ以上目擊の外艇長の消息を知らず想ふに艇長以下甲板上に倒れ居たる將校は皆艇と共に沈沒せしならん何となれば當時露國軍艦は遠方に在り且つ將校以上は身に救命浮帶を着けざるを以て到底露國軍艦又は日本軍艦に收容せらるゝことなきを信ずと

當方に於ては前記以上の報道を得る能はず依て尙ほ貴國軍事當局

者に御問合はせ被下候樣致度存候

前記下士以下の陳述は信實なるものと被存候付ては(當方に於ては之を信實なりと認むるの外無之候)小官は茲にステレグスチーの艦員が我優勢なる艦隊と戰うて顯はしたる勇悍に對し深く同情を表し殊に貴下に對しては祖國の爲めとは云ひながら其最愛の人を失はれたることに就て最も深厚なる哀悼の意を表し候　右御回答迄如此に御座候敬具

海軍大臣秘書官　井出謙治

○不幸なる橋立副長の令孃

帝國軍艦橋立號副長として目下出征中なる上村海軍中佐の令孃某子(四つ)と云ふは大阪府知事高崎親章氏の孫女に當る由なるが先月一日晩景家人が令孃を沐浴せしめんとて熱湯を行水盥に汲み置かれしにまだ頑是なき少女の何心なく其熱湯に入りたれば何條堪まらん悲鳴を揚げつゝ外にも脫れ得ずして此盥の中に苦悶し居らるゝにぞ家族の人々大ひに驚愕し直に之を助け出されしも最早腰部以下は眞赤に煮え爛れ居りしかば取敢へず居宅附近の日本赤十字病院に送り厚く手當を加へられたれど此可憐なる令孃は同夜深更に及び腦膜炎を惹起して遂に死去されたる趣なるが身を君國に捧げて遠く征途に在る父君の此凶報に接せられなば其悲歎如何許りならん乎と推測られて同情の念に堪えず兎に角追々極暑に向ひつゝある今日なれば小兒を養育する世間多數の父母達は深く留意すべき事にこそあれ

○驚く可き悲劇

(男裝せる女兵)

國の東西を問はず時の古今を論せず長しへに變りなきは實に男女の戀なりけり戀に焦れて血腥き風の吹き荒ぶ修羅の街に彷徨よひ來つ身を變へて男の群に入り我が戀人の傍に侍き朝な夕なに誠を盡せし心根今の時にはいと稀有の事とや謂ふ可からん茲に露軍が金城鐵壁と賴む旅順港に數多守備せる兵士ある中に殊に慓悍の聞えある西比利亞聯隊に屬して或る若き士官の從卒と爲りいと忠實々々しく又温順しく仕ゆる一人の兵士あり名をリヤトニコッフと呼びて年の頃はやう／＼二九許り花にも紛ふ容色は猛き武士の其には似もやらで一たび朱唇を開けば瓠の種を並べたらん樣の齒眞白くホヽと笑む顏に幾層の媚あり

て人に向ふ眼に深き情の色を籠めたり主なる士官は世に又とあるまじき可愛き者に覺えて一も二も汝ならではと言ふやうの有樣なりしが或る日何等かの用を帶びて外出しける途中誤ちて石に躓づき膝の邊を痛く打ち挫きければ此は捨て置く可きにあらず直に病院に赴きて治療を乞ふこそ然る可しと人々に勸められ初めは然程の痛とも覺えねば其儘に措かれてと拒みしも遂には其切なる諭しに何時迄も爭ひ兼ねいと憂ひ困じたる樣なりしが何と思ひけむ懷中より竊に小刀を取り出し我れと我が左手の動脈を切斷してければ人々は今更の如く打ち驚き是は狂氣せしか如何にせし事ぞと騷ぎ合ひたる末病院に連れゆけば醫師は頓ら手當せんとて着たる衣服を取り脫せしに是は如何に雪の肌に豐くりと肥へし乳房は正しく女性の身と並み居し人々は呆れ惑ひて何の故とも知らざれど纖弱き少女の身を以つて大膽にも姿を男に變へ人の恐るゝ此の戰塲には紛れ來し事ぞと口々に罵り騷ぎしが動脈よりの出血止め難く哀れリヤトニコッフは三日餘り經て遂に歸らぬ旅路へと赴き了んぬ斯くと聞きたる彼の士官は是迄友なる人々より彼の少女リヤトニコッフが何處で己れを見染めけん忍ぶ戀路に身を焦して遙々と我を此地に尋ね來り戀の叶はねば責めては思ふ人の下に侍き心の誠を盡さんとする優しき振舞を我に哀れと見よと勸められしを外に聞き流し只上官として部下に對する心をもて過ぎ來りしが斯く迄に情の深からんとは今初めて悟りぬ我とて何ぞ木石ならんや慕ひ〳〵て來し甲斐も無く朝夕仕ゆる間も我は一言だにやさしき言葉を掛けずして見す〳〵はかなき最後を遂げさせしこそいと不憫至極なれ我とて明日をも知らぬ身の上何時か一度は死ぬ可き命ならば戀がるゝ人の跡を追ふて共に未來の苦樂を語らん然なりさなりと遂に心を定めつ或る夜人の寢靜まりし後舍營の床に起き上り短銃を腦に當て自殺を遂げたりとぞ右はチーリー、テレグラフの巴里通信員が齎らせし報道なるが聞くだにいと哀れの物語りと其意味を譯し取りて扨は斯くぞ物しつ

新刊書目

六合雜誌	（第二六二、三號）	三田四國町日本ゆにてりあん弘道會	
中央公論	（第十四年第五、六號）	本郷區西片町	反省社
慶應義塾學報	（第七十八九號）	芝區三田四國町	同發行所
平民新聞	（毎號）	麹町區有樂町	同新聞社
婦女新聞	（毎號）	牛込區東五軒町	同新聞社
東京經濟雜誌	（毎號）	京橋區彌左衛門町	同雜誌社
女子之友	（第一五四號）	牛込區市谷田町	文友社
東京感化院月報	（第三十三號）	豊多摩郡澁谷村	東京感化院
商家の友	（第二十七八號）	京橋區南鍋町	時事新報社
時好	（辰の六號）	同市日本橋區駿河町	三井呉服店
學校衛生	（第十三四號）	同市下谷區櫻木町	同研究會
日本婦人	（第五十五六號）	豊多摩郡澁谷村	帝國婦人協會
裏錦	（第百卅九四十號）	神田區北甲賀町	尙絅社
なゝな	（第四卷七號）	麹町區下二番町	大日本女學會
中學科講議錄	（第二學年第三號）		大日本國民中學會
東洋哲學	（第十一編第六）	小石川區原町	東洋哲學會
婦人と子供	（第四卷第六號）	本郷區湯島	フレーベル會
愛國婦人	（毎號）	麹町區上二番町	同發行所
國學院雜誌	（第五、六、七號）	麹町區飯田町	國學院
新聲	（毎號）	東京市神田區錦町	同社
婦人世界	（第卅四、五號）	大坂市南區末吉橋	浪華婦人會
大八洲雜誌	（卷之二百十五六）	神田區三崎町	大八洲館
大日本婦人教育會雜誌	（第二六五六號）	麹町區永田町	同教育會
ふでのはな	（第二〇三集）	神田區山本町	若葉會

定價
一冊 前金貳拾錢
三冊三ヶ月分 前金五拾七錢
六冊半年分 前金壹圓拾錢
拾貳冊一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料
五號活字二十三字詰一行 金參拾錢
一頁三十二行 金八圓
半頁六拾四行 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規程
一切前金の事（但郵券代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附ありたし

明治三十七年七月卅一日印刷
明治三十七年八月一日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 渡邊素一
印刷人 東京市京橋區築地二丁目二十番地 河本龜之助

發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 株式會社國光社
（電話新橋二一六九三番）
（電話 新橋 特八八番）

次號豫告

新人生觀　成瀨仁藏
文明夫人行狀　青山勇
小説ノートブック　幸田露作

兼題豫告

	歌	文
九月	初秋月 閑居	夏季休業中の事を記す 志を述べて親しき友に贈る文
十月	山家霧 雁信	仲秋月を觀ざるの記 出陣中の父君(若くは兄弟)に贈る文
十一月	風前紅葉 畑	天長節 秋季運動會
十二月	歳暮 杖	家庭日記(三日間) 歳の暮に故郷の母君に贈る文

兼題投稿心得

一　**投稿歌文は**　女子は何人にても隨意投稿することを得べし

一　**投稿用紙は**　文は半紙又は半紙二ツ折和歌は同上又は端書を用ふべし但題異りたるときは必ず別紙に認むべし

一　**題目の下**　には必ず住所姓名を明記すべし

一　**文字は**　必ず楷書にて句讀點を施し鮮明を主とすべし若し二葉に渉るときは必ず紙捻にて綴り置くべし

一　**文は**　題毎に用紙を別にし一行十五字詰に認め三十行を越ゆべからず

一　**歌は**　一人一首若くは二首を限りとし上下句中二音の漢字三字を入れ其他は悉く平假名にて認むべし

一　**投稿宛名は**　國光社女鑑編輯局とすべし

一　**總て以上所記の規定に違ひたるもの及び〆切期限に後れたるもの**は採用せず

一　**原稿〆切期日は**　雜誌發行日の廿日前則ち九月分は八月十日十月分は九月十日とす

一　**當撰者には**　文は一圓(天)五十錢(地)三十錢(人)歌は其半數に當る計算を以て各代價相當の書籍を呈す

國光社出版圖書目錄

◎四季物語　幸田露伴編　袖珍總クロース　定價五十錢　郵税四錢

◎女樂師　堀内新泉著　菊判洋裝　定價卅五錢　郵税六錢

◎小牧合戰　塚原澁柿著　菊判洋裝　定價五十錢　郵税十錢

◎少女讀本（雪、月、花の卷）　堀内新泉著　菊判洋裝各三冊　定價十八錢　郵税四錢

◎文久物語　山崎忠和著　菊判洋裝　定價廿八錢　郵税六錢

◎獄の花　紅塵庵俗禪譯　菊判總クロース　定價五十錢　郵税八錢

◎狂人譚　宮崎滔天著　四六版洋裝　定價廿五錢　郵税四錢

◎三十三年之夢　宮崎滔天著　菊判洋裝　定價卅三錢　郵税八錢

◎國語聲音學　平野秀吉著　菊判總クロース　定價六十錢　郵税八錢

◎國語假名遣ひ一覽　華族女學校編纂　菊三切折本　定價十二錢　郵税二錢

◎慶長以來國學家略傳　小澤政胤著　菊判總クロース　定價一圓廿錢　郵税十二錢

◎土佐日記燈　故富士谷御杖述　菊判大和綴帙入　定價一圓五十錢　郵税十五錢

◎雅文消息集　生田目經德著　菊判洋裝　定價廿五錢　郵税四錢

◎中等日本文典　大宮兵馬著　菊判總クロース　定價五十五錢　郵税八錢

◎國語漢文假名遣ひ法　大宮兵馬著　菊判大和綴　定價十八錢　郵税二錢

◎中等國文學史　大林弘一郎著　菊判總クロース　定價六十錢　郵税八錢

◎女子文章軌範　指原乙子編纂　菊判大和綴　定價卅錢　郵税四錢

國光社出版圖書目錄

◎臺風雜記 佐倉孫三著 菊判大和綴 定價卅錢 郵稅四錢

◎筑前誌 福本日南著 總クロース金文字入 定價一圓卅錢 郵稅十錢

◎萬國女子風俗 澁谷愛著 四六版洋裝 定價廿五錢 郵稅四錢

◎北海道殖民圖解 北海道廳拓殖課編纂 菊判洋裝 定價八錢 郵稅四錢

◎第五回內國勸業博覽會重要物產案內 國光社編纂 菊判洋裝 定價六十錢 郵稅十五錢

◎水產製造論 石田鏆郎著 菊判總クロース 定價一圓廿錢 郵稅十錢

◎澁澤男爵最近實業談 高瀨魁介編 上菊判總クロース七十錢 並菊判洋裝六十錢 郵稅各十錢

◎列國干涉論 西澤之助著 菊判洋裝 定價卅錢 郵稅四錢

◎家計簿記學 磯部武者五郎著 菊判半切厚表紙 定價十五錢 郵稅二錢

◎銀行簿記學 中村佐平著 菊判總クロース 定價五十錢 郵稅六錢

◎銀行利用法 須田毎六著 菊判洋裝 定價四十錢 郵稅六錢

◎信用組合提要 平田東助著 菊判洋裝 定價十五錢 郵稅二錢

◎商工經濟論 平田東助、平塚湯次郎、湯川寛吉共著 菊判總クロース 定價一圓半錢 郵稅十五錢

◎第五回內國勸業博覽會授賞人名錄 第五回內國勸業博覽會事務局編纂 菊判總クロース 定價一圓廿錢 郵稅十五錢

◎日本米穀の將來 岡勇次郎著 菊判洋裝 定價三十錢 郵稅六錢

◎財政と國力 濱口吉右衛門著 菊判洋裝 定價廿三錢 郵稅四錢

大日本女學會編纂

婦人寶典

和紙摺帖入全五册 頗る美本紙數一千三百頁 實價金三圓二十錢 ‖ 小包 金二十錢 郵稅

洋紙摺（總金文字クロス入）**全一册** 紙數同上 實價金二圓三十錢 ‖ 小包 金二十錢 郵稅

此書は小松宮輔子殿下の總べさせられ女學の通信教授を以て世に名高き大日本女學會に於て多年蒐集されし所の女學に關する和漢洋の諸材料中より最も婦人に適切なる部分を拔萃したるものと新たに名家の起稿されたるものとを一書にまとめ以て婦人座右の良師友たらしめんが爲に編輯されしものにて殊に其學藝諸科目は何れも專門大家の擔任に係り實に世に類なき婦人寶典なり其目次並に諸述者左の如し

本文

- ○女子修身　女子高等師範學校教授　佐方鎭子
- ○禮法　同上
- ○家庭教育　三輪田高等女學校長　三輪田眞佐子
- ○家事管理　女子高等師範學校教諭　後閑菊野子
- ○家事經濟　同上
- ○家事衛生　東京帝國大學名譽教授醫學博士　三宅秀
- △衣服　同上
- △飲食物　同上
- △住居　同上
- △動評　同上
- △育兒　同上
- △婦人衛生　同上
- △看護　東京帝國大學教授醫學博士　吳秀三
- ○裁縫　東京裁縫女學校長故　渡邊辰五郎
- ○割烹　田邊和氣子
- ○挿花　同上
- ○點茶　同上
- ○作文　今泉定介
- ○作歌　御歌所寄人　坂正臣
- ○習字　御歌所參候　大口鯛二
- ○畫學　女子美術學校教授　武村千佐子

鼇頭

○音樂（明治音樂會幹事東儀季治）○刺繡（共立女子職業學校刺繡主任教師木村仲子）○造花（同校造花主任教師金子文江子）○編物（同校編物主任教師豐原繁尾子）○組絲（同上）○兒童心理（日本女子大學校教授高嶋平三郎）○なりむすび○食品分析表○歌書式○歌御會始預撰歌集○婦人名歌集○交際の栞○泰西禮法一斑○家庭遊戲○各地特殊の料理○法制大意○經濟大意○女訓○和書解題○漢書解題

挿畫

○上古、天平、藤原、鎌倉、足利、德川、今代各婦人服裝の彩色畫（村田丹陵筆）○光明皇后、紫式部、承香殿女御、小大君、平政子、山內一豐夫人、各筆跡寫眞）明治貴婦人筆蹟寫眞○明治閨秀筆蹟寫眞（以上口繪）此他卷中の挿畫數百個

◎本書は內容の有益多趣なるのみならず外形をも體裁優美に裝飾せるものにて進物贈品等に極めて適當なり◎本書は各特約書肆に發賣を託しあり御便宜の場所にて御購求を乞ふ◎本書の見本御入用の御方は往復はがきにて御申込次第進呈すべし

發行所東京京橋區柳町五番地郁文舍（電話本局三〇〇〇）大阪東區南本町四丁目積文社（電話東三八四）

◎右の書籍發行につき本會事務所に於て購讀者の便宜を計り次の特別割引を以て本會々員會友並に「をんな」愛國婦人讀者達へ送本方取扱ひ候●和裝割引代價金貳圓九拾錢●洋裝同金壹圓九拾九錢（但し小包郵便料前揭の通り貳拾錢を要し候尤も東京市內は郵送料を要せず候）

東京麴町區下二番町三十七

大日本女學會事務所（電話番町一三三〇）

第五回內國勸業博覽會

銅牌并に褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

五二會品評會功勞銅牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入
壽美禮おしろい



壽美禮おしろい

● ねり製（定價 大罎二十錢・小罎十二錢）・水製（定價 大罎二十五錢・小罎十五錢）

ヴワイオレツト水



錫枠附乳白硝子罎入

すみれ白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟體等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顏肌等の色を白變せしめきめをこまやかに、にきび、そばかす、わせも等を生ぜす御肌へを淸々しく天然の白色きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁長、保つが故宴會祝席雜踏の場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ人心氣を淸爽快活ならしめ衞生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして其意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京橫濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

● 皮膚艶白劑壽美禮あらい粉 ●

罐詰 綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入三錢 六錢五厘 袋入 壹錢

● 弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を淸々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

● 常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔ろ病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のねばりを取り油あかふけ等を生ぜす又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

● 使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

登錄商標

洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE.
WASHLNG IOWDER.

壽美禮わらい粉



製造本舖

東京東兩國
（兩國橋際）元町

伊勢吉壽美禮堂謹製

賣販所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

明治三十七年八月一日發行　毎月一回一日發行　第拾四年第九號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

山葉製風琴ハ第五回内國勸業博覽會ニ於テ第壹等賞牌ヲ受領セリ

●山葉製風琴





壹號形	金拾六圓五拾錢
貳號形	金廿六圓五拾錢
三號形	金參拾七圓
四號形	金四拾參圓
五號形	金四拾八圓
六號形	金五拾五圓
七號形	金六拾五圓
八號形	金七拾五圓
九號形	金百圓
十號形	金百貳拾圓
メーソンモデル	
第壹號	金百參拾圓
同第貳號	金百五拾圓
同第三號	金貳百圓
新形一號	金八拾圓
同　二號	金四拾五圓
足折形一號	金廿五圓
同　二號	金參十五圓

●山葉製洋琴　參百五拾圓以上。各種

●舶來洋琴　參百圓以上參千圓。各種

●舶來風琴　百圓以上千五百圓。各種

●鈴木製ヴアイオリン　五圓以上五十圓迄各種　其他弓箱附屬品等各種

●舶來ヴアイオリン　各種

●樂隊用陸軍々樂用吹奏樂器新着品　各種



右の外手風琴ハーモニカブラジヨーレツト各樂器附屬品各種

郵券貳錢御送付あらば美麗なる目録進呈す

共益商社編（文部省檢定濟）

●唱歌教科書

郵稅一冊に就き各金四錢

教師用全四冊（第一卷定價金參拾錢　第二卷定價金參拾錢　第三卷定價金參拾錢　第四卷定價金參拾錢）

生徒用全四冊（第一卷定價金拾五錢　第二卷定價金拾五錢　第三卷定價金拾八錢　第四卷定價金拾八錢）

唱歌　空前の唱歌良教科書（檢定濟教師用生徒用完備唱歌教科書の嚆矢）

小山作之助先生編　**輪唱歌集**　全一册　壹部　定價金三十五錢　郵稅金四錢

共益商社編　高等女學**音樂教科書**　全四册卷一既刊二、三、四近刊　壹部　定價金四十五錢　郵稅金八錢

共益商社編　師範教育**音樂教科書**　全四册卷一既刊二、三、四近刊　壹部　定價金三十五錢　郵稅金六錢

共益商社編　中學**唱歌教科書**　全三册卷一既刊二、三近刊　壹部　定價金三十五錢　郵稅金六錢

石川喜三郎先生譯　**音樂と詩歌**　全壹册　壹部　洋裝美本　定價金三十五錢　郵稅金六錢

比留間賢八先生編　**マンドリン教科書**　全壹册　洋裝大形美本　定價金四十錢　郵說金六錢

琴曲大家山登萬和先生作曲　箏曲**地久節**　全一册　大形美本　定價金五十錢　郵稅金六錢

諸大家作歌曲　討露軍歌**かちどき**　第一壹册　美本　定價金五錢　郵稅金二錢

東京市京橋區竹川町十三番地　**共益商社樂器店**　電話新橋五二九　電信略號キヨ

東京築地株式會社國光社印刷